浅野誠沖縄論シリーズ

3. 沖縄の歴史・民俗

２００３－２０１３

これは、２００３年から２０１３年にかけて、沖縄の歴史・民俗にかかわって、ホームページ、ブログに書きつづってきたことを整理集約したものだ。

本格的なもの専門的なものというよりも、個人的関心でもって綴ってきたものだ。

目次

※　各項目タイトルの後の（　　）内は、ブログ掲載年月日

３０．概観　6

沖縄史・沖縄教育史研究のための基礎作業

西原町史執筆関連記事

松島泰勝「沖縄島嶼経済史」（藤原書店２００２年）を読む

鹿児島＝薩摩からの沖縄の見方

石川市史（改訂版　１９８８年石川市発行）を読む

南城市地域の共通性の探求　「南城市史総合版（通史）」を読む

３１．先史時代　２４

高宮広土「島の先史学」（ボーダーインク社２００５年）を読む
『琉球縄文時代の謎』シンポジウム
自然　遺跡　三千数百年前　南城市史３
漁撈と交易　二千年～千数百年前ころ　南城市史４
約２０００年前の沖縄史の大胆な仮説の連続　木村政昭本を読む
高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹「沖縄文化はどこから来たか」（森話社２００９年）を読む
岡谷公二『原始の神社をもとめて　日本・琉球・済州島』を読む
アマミキヨが複数・多数いる、という見方
来間泰男「稲作の起源・伝承と“海上の道”」を読む

３２．グスク時代　３４

刺激的な新説の提案－－－安里進「琉球の王権とグスク」山川出版社２００６年を読む
安里進「グスク・共同体・村」を読む
７，８世紀にはグスク的遺跡が登場したという新説
吉成直樹・福寛美『琉球王国誕生――奄美諸島史から』を読む
田中史生「越境の古代史」（２００９年ちくま新書）を読む
谷川健一編『日琉交易の黎明』（２００８年森話社）を読む
グスク時代の人々　集落とグスク　兵士と農業　子育てと教育
吉成直樹「琉球の成立―移住と交易の歴史」を読む
グスク時代の中城湾岸　「西原町史第一巻通史編」を読む
玉城の史跡－－－玉城ユンタク第四回での話
久米島文化財巡りツアー
内田晶子ほか「アジアの海の古琉球」（榕樹書林２００９年）を読む
上里隆史「琉球古道」（河出書房新社）を読む

３３．近世　６０

沖大地域研究所編「薩摩藩の奄美琉球侵攻四百年再考」
久米島文化財巡りツアー（近世）
ペリー艦隊乗組員が新原玉城仲栄真にきていた
オモロ　あきみよ　ペリー艦隊　新原　ジュゴン　南城市史

３４．近代　６３

沖縄近代史と沖縄おこし・人生おこし　「沖縄県史近代」を読む

階層ごとの行動特徴　「沖縄県史近代」を読む
明治期の「沖縄おこし」と公同会運動　「沖縄県史近代」を読む
旧士族層以外と沖縄おこしのからみ　「沖縄県史近代」を読む
上杉・岩村県令期の教育政策の揺れ　「沖縄県史近代」を読む
士族・地方役人層・就学　「沖縄県史近代」を読む
明治期「エリートたち」　「沖縄県史近代」を読む
教育界と教育会　「沖縄県史近代」を読む
婦人会と女性教員　「沖縄県史近代」を読む
戦前の教育労働者組合　「沖縄県史近代」を読む
大事件――戦前玉城の分教場設置問題
人口爆発　「沖縄県史近代」を読む
近代沖縄における人口概況と移民・移住、暮らし、産育・教育など
昭和初期のソテツ地獄への対応策　「沖縄県史近代」を読む
『日常の食糧』としてのソテツ　ソテツの復権　「沖縄県史近代」を読む
米不足　労働力の供出　国家総動員　「沖縄県史近代」を読む
たまぐすくの民話
戦争とユタ　火葬場　西原町史

３５．沖縄・日本・同化教育・・・　８２

国民統合と「異法域」、そして教育　「沖縄県史近代」を読む
同化　皇民化　沖縄おこし　「沖縄県史近代」を読む
同化論　太田朝敷　「沖縄県史近代」を読む
伊波月城と沖縄教育界　「沖縄県史近代」を読む
屋嘉比収『＜近代沖縄＞の知識人　島袋全発の軌跡』を読む
戦前における『郷土研究』　「沖縄県史近代」を読む
照屋信治『「沖縄方言論争」と『沖縄教育』誌上の「標準語」教育論――「混用」という可能性――」を読む
１９７０～８０年代の私の沖縄教育論を思い出させる照屋諸論
南島研究と沖縄学　方言論争　「沖縄県史近代」を読む

※　３４，３５で扱った教育関係記事については、続編「４　沖縄の教育」にも関連記事がある。参照してほしい。

３６．移民　１０９

移民の原因・背景　人口過剰と経済　「沖縄県史近代」を読む

移民と出稼ぎ　「沖縄県史近代」を読む
移民　海外雄飛　「沖縄県史近代」を読む
移民　土地整理　徴兵忌避など　「沖縄県史近代」を読む
戦前の移民　西原町史
移民　土地整理　徴兵忌避など　「沖縄県史近代」を読む
シマ共同体と市民社会組織　コンパニー　「沖縄県史近代」を読む
小林茂子「『国民国家』日本と移民の軌跡―沖縄・フィリピン移民教育史―」を読む
教育　台湾移民　「沖縄県史近代」を読む
職種と沖縄人集落　台湾移民　「沖縄県史近代」を読む
満州移民　「沖縄県史近代」を読む
満州移民　教育界・教育の関与　「沖縄県史近代」を読む

３７．軍事・戦争　１３５

徴兵忌避と沖縄戦以外は、軍事記述が少ない　「沖縄県史近代」を読む
「近代沖縄の軍備―軍事施設を中心に」　「沖縄県史近代」を読む
中城湾臨時要塞・船浮臨時要塞　「沖縄県史近代」を読む
「惨劇」を準備した日本軍作戦　「沖縄県史近代」を読む
「沖縄住民不信の日本軍部」　「沖縄県史近代」を読む
軍と沖縄県民　西原町史
沖縄・沖縄県民を道具化する日本軍と米軍　西原町史
石原昌家「沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕」集英社２０００年を読む

３８．戦後　１４３

石川での戦争直後の学校つくり　石川市史を読む
戦後沖縄教育の歩みと「伊波常雄教育資料」展
戦後移民　沖縄おこし　西原町史
古波蔵剛さんの琉米文化会館論文を読む
数十年前の沖縄のシマの暮らしの再現――「聞き書き」を読む
「米軍支配と大衆運動のダイナミズム」　与那国暹著書を読む１
沖縄における近代化をめぐって――与那国暹著書を読む２

３９．民俗―沖縄の精神・神々―　１５１

神々・自然との対し方、アイヌ・沖縄人・古代日本人

沖縄と神々

南島地名研究センター「地名を歩く　増補改訂　奄美・沖縄の人・神・自然」ボーダーインク２００６年を読む

渡邊欣雄『世界のなかの沖縄文化』（沖縄タイムス社）を読む

外間守善「海を渡る神々」（１９９９年角川書店）を読む

外間守善本２　伊江島　ポリネシア　ノロとユタ　海神と稲作

外間守善本３　竜宮　斎場御嶽　アラ神

神々をめぐる、支配の争い　「神々の琉球処分」

オー　アーマン　「沖縄文化」本４（余談）

中山史へのヒント――仲松弥秀「神と村」（梟社１９９０年）

オソイとクサテ「神と村」本２

首里王府支配と「神と村」――「神と村」本３

太陽・テダ・オボツカグラ――「神と村」本４

殿　神アシャゲ――「神と村」本５

門中と村落　火の神――「神と村」本６

藪薩御嶽と「ヤブサ」

母たちの神――比嘉康雄展

ユタ史研究への期待　浜崎盛康編著「ユタとスピリチュアルケア――沖縄の民間信仰と
スピリチュアルな現実をめぐって――」ボーダーインク 2011 年

風俗改良運動　ユタ　洗骨　改姓　「沖縄県史近代」を読む

門中　家　ユタ　儒教　「沖縄法律事情」を読む

３０．概観

沖縄史・沖縄教育史研究のための基礎作業（２００７年ごろのメモ）

１）西暦１０００年以前の沖縄　沖縄移住（推理）

★３００００前～１００００前

旧石器人　　北から南から（スンダ人）　　人口推定　１００～２００人

集落数推定　　１０

★１００００前

縄文人　　人口推定　１０００～２０００人

集落数推定　　２０

★紀元前５００頃～

弥生系　九州交易民　　人口推定　３０００～５０００人

焼き畑農耕あり　　貝塚の形成　　集落数推定　　５０

海外交易－－－東アジア圏交流に対応　銭の出土

★西暦１０００年ころ

九州などからの大量移住　　人口爆発　　人口推定　　５万人

「アマミキヨ」族　　水稲耕作者　　集落数推定　　５００

移住者が従来居住者を圧倒（支配）　権力者流入・成立

海外交易（専業も存在か）

★西暦１２００年ころ

大量移住続く　　人口推定　　１０万人

城塞的グスク成立　　集落数推定　　８００

専業的交易関係者増大　数千人規模か

小島瓔禮「琉球学の視角」柏書房１９８３年　　Ｐ１６

「中国の史書に琉球の名がはじめて登場するのは『隋書』流求国伝である。（中略）流求進攻によって、中国は東夷の中に流求国なる窓口を設け、ちょうど来合わせた小野妹子らの遣隋使が、その流求を「夷邪久国」と認識したことは、重大な意味がある。この直後、七世紀初期には、掖玖人は大和朝廷を訪れ、朝廷は掖玖に使者を派遣している。これが、宮廷の史書に南西諸島が現れる最初であり、その後も、八世紀中葉までは琉球諸島の地名が散見するが、大隅諸島が多彌島の名で政治的に統合されたころから、黒潮本流以南の島々の住民との交渉が、史書から消えてゆく。このあたりが大和朝廷の南島経営の限界だったのであろう。やがて、中国によって、琉球諸島に琉球国が公認されるようになる基盤は、このころから胎動しはじめていたのかもしれない。遣唐使の南島

航路は、琉球諸島と中国とが直接交渉を持つきっかけになったであろう。中国における琉球国の確立が、大和朝廷から隔絶した琉球諸島に、新しい政治的統一の力を保証したのである」

Ｐ３３　『日本書紀』　６１６年　掖玖人登場　「これが、宮廷の史書における南島諸島に比定される地名の初見である。」「ヤクは南西諸島の汎称のようにつかわれていた時代があったようである。」

Ｐ３４～５　舒明天皇元年（６２９年）４月に、田部連を掖玖に遣わすとあり、翌２年９月に田部連らが掖玖から着いたとある。田部とは、各地に置かれた大和朝廷の直轄地である屯倉の耕作に従う部民で、その田部を管轄するのが田部連である。掖玖へ田部連が派遣されたのは、経済基盤の視察や開発の目的が含まれていたのかもしれない。田部連が帰った翌年（中略）掖玖人が来朝している。これは、直接、朝廷の方策に呼応しての入朝であろう。七世紀初葉、掖玖は、大和朝廷の体制下にあったのである。これが史書に見えた第一次南西諸島経営期で、掖玖時代と呼ぶべきものである。

７１４年　「太朝臣遠建治たちが、南島の奄美、信覚、球美などの島人五十二人をひきいて南島から来たとある。直後の（中略）７１５年（中略）の朝賀のときには、南島の奄美、夜久、度感、信覚、球美などが来朝し、方物をたてまつったとある。（中略）７１３年（中略）には、（中略）大隅国が置かれたことと関連すると思われる隼人の反乱の終わったことが見えている。（７１４年）の南島の朝貢も、これと一連の施策の結果かもしれない。

７０１年公布「大宝令」の注釈書　『古記』（７３８年ころ）　Ｐ１４
「夷人雑類とは、毛人、肥人、阿麻弥人などの類をいうとある」
「阿麻弥人は、奄美群島ないしは大島を中心にした南西諸島の島民にちがいない。海見島の名は、すでに６５７年に見え、八世紀にはいると奄美という文字に定着するアマミである」

Ｐ６２　「肥人ないしは隼人との間に、言語の差があり、「奄美」がそれを代表しているのは、上代において、すでに、大島の北で黒潮に分断されていることが、その南にさらに異なった文化の世界を生み出していた証拠である。琉球神話の創造神アマミチュは、語形上、阿麻弥人に当たる。琉球方言で、昔の世を意味するアマンユもあまみ世だとすると、奄美支配の時代ということになり、阿麻弥人の時代をしのばせるものがある」

Ｐ１５「隼人神話と琉球諸島の習俗との比較から、隼人文化と琉球文化とが、かって同質的であったことを想定している」「琉球文化の独自性は、まずは、隼人－琉球文化の独自性にさかのぼるのである。」

井上秀雄　「玉城村史第八巻上文献資料編」（２００６年）Ｐ５
「隋書によると、村に烏了師（うらしい）がおり、その上に小王がいて、さらに師という者がいて、その上に王がいたと記されている。階級関係があったということがわかる。「賦歛なく、事あれば均しく税ぐ」と記され

ていることから、ある程度の納税制度があったことと、生産手段の私有があるいは存在していたかも知れないということも言える。そういったことを考慮に入れて小国家群立の時代を想定した。（中略）沖縄における国家組織生成の端緒を五～六世紀にもとめ、長い間の群立時代を経て、十二世紀にようやくにして統一国家形成への時代に入ったのではあるまいかという意見である」

２）アマミキヨ　　沖縄の創世神話

湧上元雄（「たまぐすくの民話」Ｐ１～１３）

・沖縄人の他界観　１）「東に向かった方角で、太陽が上がるとこが太陽崇拝のニライカナイで、昔はその東の方に太陽崇拝の聖地のウフアガリジマという聖なる島があって、そこから台風も来るし、何でも来るという伝承がありました。」

２）「歴史的に見た場合は先祖が北の方から来たというので、北にある本土の聖なる島をアマミヤ、シネリヤとも、アマミ、シネミヤとも言いました。このアマミはやっぱり例のアマベとかアマメ、アズ、アズミに通じます。」

・「浜比嘉にもアマミキヨ伝承があって、百名に来たアマミキヨ、シネリキヨは浜比嘉から来たという説もありますし、ウフアガリジマから直接来たという話もあって両説あります。」

・「ヤハラというのは、和らぐという意味ですね。（中略）ヤハラは柔らかいという意味で、何を和らげるのかというと、荒い波を静めることです。ツカサというのは、（中略）神様を言うんですね。だから、ヤハラヅカサというのはこの波を静める神、神霊がヤハラヅカサらしいですがね。」

・潮花司（しおばなづかさ）　「潮花とは波がぼわーっと上がるでしょう。その岩礁に潮が飛び散る様を神霊とみて、海水の霊力を敬って潮花司と言っているんです。この潮花司というのは方々にありますよ。」

・「アマミキヨというのは、アマミ、アマベ、アツミとかアズミですから、この連中たちは中国では白水郎と言う海の漂泊民族で、出身はどうも東シナ文化圏というか、中国南部辺りにいた連中が本土に定着した人たちです。彼らは稲を作るけれども、しょっちゅう魚を追っているから学問的には水稲栽培漁撈民と言っている。」

・「垣花樋川の坂を下りる左側に上里森という御嶽には鍛冶場の跡があるんです。そこでは玉城按司の弟のカニマンが鍛冶屋をやっていたと言う古い伝承がございます」

・「ナデルワはグスク時代以前、斎場が王権神話の舞台になる以前は、村をマキヨ、サト、ウラと言っていました。その農耕以前の漁撈がある所の各村の守護霊の祭祀場じゃないかと思いますね。だから、玉城村の御嶽とか、鍛冶屋の御嶽には、ナデルワとかウラオソイとかいう言葉出るのは、そういう古い祭祀遺跡だったからじゃないかと私は思います。」

・「アマミキヨは文化神であると言いますが、仲村渠部落の伝承では、鍛冶とか稲作とかの技術を持った連中が来て文化を高めたと言うんです。だから、アマミキヨは個人じゃなくて、むしろ一つの集団で考えることができます」

・「百名も仲村渠も古い高地性集落で、その南斜面の下を降りて行くと藪薩御嶽の崖です。その崖の斜面は崖葬古墓群になっておって、仲村渠側を仲村渠クルクと言い、ミントンのアジシーのお墓だという伝承があるから、そこは、それだけ古い墓のようです。また百名集落の下の方の場所も崖葬古墓群で、その百名側を百名クルクと

言います。（中略）百名クルクには、百名第一貝塚の遺跡がありまして、それは五千年前くらいの遺跡ですから、古くから崖下に住んでいたと言えるようです。」

・「藪薩に、百名や仲村渠の風葬地があって、これを古くは村墓とも言っていました。それで、風葬地を聖地として崇めたのが藪薩ですね。藪薩は、聖なる藪という意味のヤボサの変化だろうと思っております。（中略）このヤボサツについて谷川健一さんじゃなかったかなあ。ヤブサ、ヤボサは九州の西海岸の鹿児島から北上して熊本や壱岐島まである屋敷神が祀られ拝まれている聖地の藪ではないかと言っています。そこは入っちゃいけないという聖地で、沖縄の御嶽なんかも入っちゃいけない、木を切っちゃいけないというところが聖地ですから、同じような場所を言っているんです。ここの藪薩の名は、ヤブサ、ヤボサという屋敷神を信仰する九州から来た連中が持って来た信仰だと思います。」

・「喜名の殿の喜名と言うのは焼き畑のことを言います。喜名だけでなく、知念村の知念という言葉も焼き畑から来とる名と言いますから、古くはこのあたりでは焼き畑をやっていたんじゃないですかね。」「和名垣花は佐敷側と焼き畑を盛んに奪いあったが垣花は佐敷側との戦に負けて、目をくり抜かれて死んで野に干されたということで、そこを目抜が一原というようになったという地名伝承があります」

・「新しい太陽をワカティダといいますが、そのワカティダという言葉を古くは、スントゥン、スントノといったんじゃないかと思っています。このソントノ、スントゥノ、スントゥンは本土では太陽を言う言い方のテントウが訛ってできた言葉と思われます。（中略）ワカティダとは、どうも海から上がったばかりの太陽のことを言っとるんですねえ。（中略）上がって来る霊力のある太陽は拝むけども、沈むのは拝まないという信仰が強かったんじゃないですかねえ。そこから、ワカティダ、すなわち、スントゥンが信仰されて、それが若按司の呼び方になったと考えています。」

３）沖縄の文字　１３、１４世紀の支配者は文字使用をどうしていたのか。

　　浦添には寺院があった　　経典はどうしていたのか

４）集落の歴史

玉城の現在に連なる集落のスタートは、１３００年代

高台集落　東アジア交流の増大　鉄の必要

１５世紀後半　首里王府による集落の中央統制

１８世紀半ば　首里王府による集落再編・移動　　例　中山の玉城からの分離

１９世紀半ば以降　屋取集落の展開

湧上元雄（「たまぐすくの民話」Ｐ３０～３２）

・玉城の集落は大体、以前は東の海岸の砂丘集落ですね。それから上に登って集落を作るようになりまして、マキョ時代からグスク時代にかけて高地性集落が発達した。（中略）昔は、互いに部落同士がいがみ合っていますからね、昔は高い所に作らんと危ないですから、そこに高地性集落ができたんですね。だから古くはねえ、グスク時代前後の高地性集落は砦を持って集落を守ってます。

・石灰岩台地っていうのは、三メーター下がると石灰層が水を受ける盤になっていて水が出る所があるんです。
・グスク時代に入ってから、鉄の農具が普及してきたんですからね、それ以前は鉄の鍬っていうのはまだ十分に普及していませんので、石鍬か木鍬を使っていて、水稲栽培というよりは、山や原野を全部焼き払って、そして植える焼き畑が主で、そこに粟、麦、トウナチンとかね、黍を植えるんですね。稗はあまりないですね。そういう作物が一般的でした。下のジャーガル層は重粘土層ですからね、そこは鉄の鍬が出てこないと開墾できないからわりに開発が遅いんですね。
・南部の高い所は島尻マージといいまして、非常に水はけがいいんですよね。いわば本土でいう竪穴住居のように古くは簡単に小屋掛けして住めましたからね。地面に穴を開けて茅を並べて敷き詰めて住んだような形跡があります。そのころ玉城村では低いところは湿気があったんで家が作れなかったんです。だから、玉城では、古い伝承を聞くと、千年ぐらい前からね、石灰岩台地に、仲村渠、垣花、玉城、糸数、船越の高地性集落が出来て各グスクを築いて按司が出現したんですけどね。
・知念とここの玉城は水が豊富で、寒波の影響もあまりないから、二期作をやっていて、一期のは税として出すけれども、二期作の分は個人の私有にしていたんです。もっとも二期作は昔はですね。ひこばえみたいなのが多いから、あまり収入ないですよ。

糸数兼治　「玉城村史第八巻上文献資料編」（２００６年）Ｐ４５～６
「東は百名・垣花から中央部の玉城、西の糸数・船越に至る丘陵台地に早く古い集落が形成されたものと見られる。時代背景を考慮に入れると、その集落の核たる垣花グスク・玉城グスク・糸数グスク・船越グスクなどがこの時期海外との交易をおこなっていたことは、ほとんど疑う余地がない。その港湾は雄樋川の河口湊川であろう。」

５）交易・交流の歴史　１０００年以前
　交易を生業とする集団はあったのか

６）　仏教・神社

小島瓔禮「琉球学の視角」柏書房１９８３年　Ｐ１２５～１３４
「琉球諸島には、本土の村の鎮守神（氏神、産土神）に相当する聖地として御嶽がある。ところが、沖縄には、少数ながら、本土の勘請神の神社そのままの神社もある。それが、真言宗の寺院の形をとる後世の琉球八社である。」　　金峰山観音寺を除くと７社
「これらの七社が、本地垂じゃく説による権現信仰の栄えた中世神道の影響によって成り立っていることは、想像にかたくない。ことにそのうち六社が熊野権現を勧請した社であるのは、琉球の神社信仰が熊野信仰によって導かれていたことを示しているが、そこで注意すべきは、本土の勧請神も、しばしば、古くからの聖地に、名神を迎えまつっていたごとく、これらの熊野権現も、古来の信仰の拠点に勧請されていたのではないかと思われることである。それは洞窟を聖地とする信仰とのかかわりである。」
「私は沖縄のテラ信仰は、日本の仏教史の中で位置づけてみることができると思っている。テラ信仰を概括して、

第一にあげなければならない特色は、神体が霊石であるということである。」
「沖縄のテラの勧請譚の基幹は、古代日本の仏の発現説話と共通しているのである。」
「テラ信仰の第二の特色は、祭地が洞窟であることである。」
「自然に近い水準にたてば、霊石も洞窟も、立派な仏教信仰のよりどころであった。テラという語も、こうした用例の範囲では、仏教とともに琉球諸島に伝わったとみるのが、自然である。」

７）音楽
小島瓔禮「琉球学の視角」柏書房１９８３年　Ｐ２５９
「日本の三味線の歴史の中で、琉球の歌三味線が特殊なのは、それが遊芸人の技術ではなく、士人の教養であったということである。ところが、この福建の事実にしたがえば、教養としての三絃という習慣は、三絃の渡来とともに琉球に引き継がれた作法であることがわかる」

８）近代の人口

	沖縄	玉城	中山	
廃藩置県当時	２０万	３０００	１００	多産小死へ　人口爆発へ　　海外移民へ
明治末	５０万	５０００	２００	ソテツ地獄へ　本土移民へ
昭和戦前期	６０万弱	７０００	２５０	戦争
戦争直後	３３万	３０００	１００	帰郷　ベビーブーム
１９５０年	６０万弱	６０００	２００	軍雇用
１９６０年代	８０万	９０００	３００	離農　都市への移動
１９７０年代	１００万	１００００	２５０	「公共事業」体制
１９８０年代	１１０万	１００００	２４０	「企業社会」へ
１９９０年代	１２０万	１００００	２３０	「観光産業」比重高まる
２０００年代	１３０万	１００００	２２０	

９）移民　「玉城村史　第７巻　移民編」（２００５年玉城村）
石川友紀「沖縄県の移民」
　外務省の移民統計によると、一八九九年（明治三十二）から一九四一年（昭和十六）までの四十三年間の累計では、沖縄県出身の移民数が七万二、二二七人を記録し、これは全国の移民累計総数六五万五、六六一人の一一パーセントにも相当し、広島県について第二位に位置する。　　Ｐ４
　一九三八年（昭和一三年）十二月十六日の第五十六回通常沖縄県会において、上間徳之助議員が県当局に移民教育の問題について、以下のような質問をしている。
　（中略）本県ノ移民ハ教養ガ足リナイ為ニ海外ニ於テ色々ノ失態ヲ演ジ、外務省ノ御手ヲ煩スコトガ数々アルト聞イテ居リマス（中略）
　この沖縄県の移民教育の問題に関し、長崎移住教養所での移民教育を県内の開洋会館で実施したらどうかとい

う提言にたいして、淵上知事は、つぎのように答弁しているが、実施したかどうかは不明である。Ｐ５～６

これ（県保安課の調査資料）をみると、一九三七年（昭和十二年）時点と思えるが、沖縄県における海外在留の移民は四万四〇六人であり、二世を加えると約一二万人にも達するという。また、海外移民の送金額は銀行や郵便局を経由するもので三五六万七、〇〇〇円にものぼるが、これは帰国者の携帯金まで含めると七一三万円の巨額に達すると指摘する。　Ｐ７

沖縄県沖縄史料編集所『沖縄県史料』近代Ｉ、昭和一八年知事事務引継書類（一九七八年）をみると、沖縄県の移植民に関する項目が若干記載されている。　（中略）沖縄県内政部農務課移植民係の文書　「本県移植民事業に就テ」

これをみると、海外在住の沖縄県の移植民は、進取の気性に富み、あらゆる困苦欠乏に耐え、堅忍持久、処女地の開拓に適していると指摘する。しかし、一面県移民は習俗を異にし、教養が低かったので、往々にして海外現地で問題をおこした事例も少なくなかった。とくに、出稼根性が強く、個人経済観念が強すぎる点などがあった。県としては、これらの短所を補い、長所を伸ばして、身心ともに優秀な人材を海外へ送出することが緊要である。そのため、県は移民訓練所の設置を要望してきたが、一九四〇年（昭和一五）度に県立拓南訓練所の設置を実現させ、目下開拓民としての青少年等の訓練に努め、所期の目的達成に邁進している、と言及している。
Ｐ７～８

１０）玉城の移民　「玉城村史　第７巻　移民編」（２００５年玉城村）

戦前玉城出身移民の分布図より　　Ｐ９

ハワイ	５１１人
ペルー	２５１
ブラジル	２３７
フィリピン	２２３
アルゼンチン	２４
メキシコ	１０
キューバ	9
北米	5
北ボルネオ	5
シンガポール	4
カナダ	3

玉城村出身植民地在住者数（１９３５年）　　Ｐ３２

南洋庁	１８６人
台湾	6
朝鮮	4
計	１９６

旧南洋群島への移民数　Ｐ５７

	日本全体	沖縄
１９２０年	３６７１	
１９２２年		７０２
１９３９年		４５７０１
１９４０年	８４４７８	

戦後旧南洋群島からの引揚者数　玉城村　６６５人　Ｐ５７

玉城村出身府県別出稼ぎ人口（１９３５年１２月末日）　Ｐ３３

大阪	３０２
東京	９６
愛知	２４
福岡	１７
京都	１７
兵庫	１６
総数	５１７

玉城村海外在留国（地域）送金額　１９３５年度　Ｐ３３

在留国	送金者数	開始時より１９３５年度までの移民送出数累計	送金額（円）
ハワイ	２８６	４５４	５４００
ペルー	１４１	１８１	１８６５０
ブラジル	９１	２４０	１２００
フィリピン	４６	５６	３２８０
アルゼンチン	１８	２１	８５０
メキシコ	５	１１	１００
合計	５８７	９６３	２９４８０

国別玉城村出身戦後移民数　Ｐ４４

ブラジル	１２１
ボリビア	１０８
アルゼンチン	２４
ペルー	１４
カナダ	３

１９５７～１９６０年に戦後移民の７３％が集中　　Ｐ４５
ボリビア移民１０８人のうち中山が２２人　　Ｐ４７

八重山移民

１９５０～５４	４
１９５５	１２
１９５６	８
１９５７	１２
計	３６

沖縄からハワイへの移民数　　Ｐ１０１～１０３

１９００年	２６人	當山久三ら
１９０３	４１	沖縄県も積極的な移民政策に転換
１９０４	２６２	
５	１２３３	
６	４４６７	
７	２５２５	
８	６７６	
９	１７６	
１０	２４１	
１１	５９６	
１２	１８７６	
１３	９３５	
１４	５３３	
１５～２４	３９０～６７６の幅で変動	
２５～２８	５０～１２０	
２９～３５	０～３６	
３６	３１１	
３７	２７５	
３８	４５１	
累計	２０１１８	

ハワイ移民の歴史的・社会的背景　　Ｐ１０５
経済的要因　　「出稼ぎ、金儲けのためにハワイに渡った」

地割制度の廃止　土地の私有化　　土地の売却で担保で渡航資金を確保
移民指導者・移民斡旋会社・移民周旋人

當山久三の「沖縄の窮状を救済するには、海外へ移民を送り出すことが最善の解決策」旅券発行要請を奈良原知事拒絶 「沖縄県民は日本語が話せないこと、風俗習慣が日本の他の地域と異なっていること、そのため沖縄県民を海外に送った場合日本を辱めること」

沖縄県系人に対する偏見と差別　　Ｐ１１１～２
　沖縄からの移民は貧困のため、沖縄で教育を受ける機会がなく、他府県からの移住者に較べて、教育程度が低く言動が粗野であったと言われている。これが内地と違う方言や風俗習慣とともに、嘲りや、いじめ、差別を惹起したと、当時ロスアンゼルス日本人社会のリーダーであった仲村権五郎はのべ、また当時『日布時報』の記者をしていた豊平良金は沖縄県人による口論事件や人身傷害事件、密造酒摘発を報道する度毎に非常に強い戸惑いを感じたという。
　１９０８年　沖縄県人向けの教育手段として二つの出版物
　　『沖縄同胞』紙　　『暁鐘』

石川友紀論文より　　Ｐ１１３
　初期沖縄移民一世の特色
初回移民は他府県より遅れたが、その後引き続き短期間に多数の移民を送り出し成功した移民であったこと。
出稼ぎ目的ではあったが、他府県に比較して、女子移民の呼び寄せが多く、帰郷者も少なかった。それが移民一世の現地での定着化を進める結果となった。
一世移民の大部分はサトウキビ耕地の農業労働者で勤勉実直でよく働いたこと＝県移民は他府県移民と比較して、相互の連帯と団結が強かったことを挙げている。

１１）仲栄真
『琉球国由来記』玉城間切関係資料「玉城村史第八巻上文献資料編」（２００６年）Ｐ２４５
中栄真の殿。同村。
稲の二祭りの時、五水八合ずつ（玉城掟）、ホウタレ十九器・神酒三つずつ（玉城村百姓中）、これを供う玉城ノロの祭祀也。
右祭りの時、玉城ノロの唄
「中森　国ノ根　ヲヒヤクメイガ／イシユヅカヘニ　ヨゝレタル」
（通釈　中森・国ノ根に大役思いの／立派なお招きを受けて神は依り降りたのだ」）

西原町史執筆関係記事

突然の西原町史執筆要請（２００９年6月１０日）

急な事情で、三人の方が来宅されて依頼された。西原はかって 13 年間住んでいた懐かしいところ。お一人は、かってお目にかかった記憶がよみがえった。もうお一人は、私の授業を受講なさったとのこと。

比嘉春潮顕彰碑（２００９年6月１２日）

西原図書館前。まだ新しい。私の沖縄教育史研究でも、彼の著作から学んだものは多い。顕彰に値する人だと思う。

西原町史執筆準備スタート（２００９年7月８日）

先日依頼された作業の準備を始めた。まずは、いただいた資料に目を通すことからだ。実は、私が執筆する箇所に直接役立つというものではないが、「西原学習」とでもいうべき作業だ。

既刊の西原町史には大変興味深いものが多いが、今それにはまりこむと、本作業ができなくなるので、まずは目を通すだけにとどめる。

西原に１３年住んではいたが、はっきり記憶していないことが多かったので、思い出すという意味もある。

私が、担当するのは、「復帰後」の教育、とくに「文教の町西原」を掲げ、琉球大学などいくつかの学校が西原に移転建築されたことに焦点を当ててほしいというものだ。

その作業展開のためのポイントをだし、必要な方にインタビューし、新たな資料収集をしなくてはならない。しばらくはそれをし、なんとか期限の１０月にまにあわせる必要がある。

中学生でも読める西原町史を（２００９年8月２日）

今日、西原町史の執筆者会議があった。そのなかで、「中学生でも読める」ものをという、かねてから決まって

いたという方針が、改めて提示された。

とてもいいことだ。これまでの市町村史は、ほぼ専門家向けのものと言っていいくらいだった。だから一般住民には程遠いものだったし、ましてや中学生には、「縁もゆかりもない」という感じだった。

問題は、執筆者がそのように書けるかどうかだ。私も、その方針に忠実になれるよう努力したい。

市町村史への提案　人口・産業・家族・子ども・教育をつなげる（２００９年８月３日）

昨日は寝付けなかった。

西原町史で、「中学生も読めるものを」という話が出て、私の担当箇所では、どのように書こうかということで、頭の中でいろいろなアイデアが勝手に飛び回り始めたからだ。

今これだというアイデアは、大人・子ども双方をふくめて、何人か架空の人物による座談会形式で、そこに重要な歴史的事実とその意味・位置などを織り込んでいくというスタイルである。そのなかに、子ども・教育を取り巻く状況の激変を、中学生にもわかる形でおりこんでいくのだ。

たとえば、社会増による西原の人口増が、西原の職業構造の激変を伴い、それは、親から子どもに対するまなざしをも激変させ、子どもと教育を軸にまわる「教育家族」を生み出していく。それが個々の家族のうちうちの世界として展開していくなかで、競争的雰囲気が強まり、子ども相互間だけでなく、大人相互間のつながりを弱体化させていく。それと並行して、従来にはなかった子どもの問題行動も広がっていく。これらに行政・学校関係者はどのようにかかわってきたのか、どんな前向きの取り組みが展開していったのか、といったことである。

こうしたことは、都市近郊の多くの市町村に共通してみられることだが、では西原ではどうだったのか、そんなことを「中学生」にもわかりやすく書いていくということだ。

こうしたことを考えていくと、これまでの市町村史の次の展開もみえてくる。たとえば、家族や子育てにかかわることは、これまで「〇〇町の民俗」という章で書かれてきた。こうしたことが書けるというのは、沖縄の強みだ。そして、それをさらに発展させて、「沖縄の民俗」で語られるような家族・子育てが戦後激変するが、そのことを書いてほしいのだ。

それにかかわってだが、16 世紀以降に限定していうと、沖縄では 3 つの人口爆発がある。17 世紀、19 世紀末から 20 世紀にかけて、そして戦後である。それがムラ・家族・子育てを激変させたはずだが、その分析は意外にされていない。そしてまた、それは産業変化と並行している。そんなことをめぐる研究を期待したい。

もうひとつ。どなたかの下書き原稿によると、19 世紀の人口は、西原・中城といった中城湾を取り巻く東海岸の村が、浦添・宜野湾といった西海岸の村よりはるかに多い。それが今では逆転している。これはいったい何なのか興味深い問題だ。

市町村史が発する「無意識のメッセージ」（２００９年９月２８日）

２７日、西原町史執筆者会議に出席する。私は、執筆予定者の個人的事情により、ピンチヒッターとして依頼をうけたので、これまでの流れに乗りにくい。２回ほど発言した。ずれた発言をしたかもしれないが、新鮮な発言をしたかもしれないと思うことにしている。

そんななか、思いついたことを並べよう。

１）私の担当箇所は、「１９７２年以後の教育」だ。仮タイトルが「琉球大学、キリスト教短大の移転」となっているが、それにこだわる必要はないと言われる。それにしても、どうして、このタイトルになったかについては、どなたからも説明がない。「その程度」の仮タイトルらしい。

タイトル設定は、この時期、つまり１９７２年以降の西原の教育をどういう言葉で代表させるかという問題でもある。この時期の資料を通覧して、町が制定した『文教のまち西原』というキャッチフレーズが適切だと判断して、これをタイトルにしてみた。

となると、「なぜ、『文教のまち西原』なのか」「『文教のまち西原』にするために、何がおこなわれたのか」「実際には、どの程度『文教のまち西原』になれたのか」といったことが焦点になる。

この『文教のまち西原』というキャッチフレーズは、大学の移転問題とからみ、移転を明るい希望と見ることから発しているが、その明暗を描くことにもなる。

２）この時期は現代史だともいえる時期だ。歴史的事実はとてもホットだ。だから、その評価も大変にsignificantでありつつも、大変微妙だ。だから、多くの現代史執筆者は、大変意欲的になるとともに、大変慎重になる。

３）そこで、できるだけ、たとえば２００９年という今現在から距離が置けるところで、執筆をとめたくなる。なにせ、当事者が現役である場合が多い。

しかし、今回、いつまでを書くのかという統一的な方針はないとのこと。章ごとにまちまちだ。

私の場合、執筆枚数が決まっているし、ピンチヒッターで、時間的限度があるという消極的理由で、１９８７、８年までということになりそうだ。付属的理由として、１９９０年３月まで西原に住んでいて、当時の西原の教育の実体験があるが、それ以降は、愛知に住んでおり、疎遠になったこともある。

４）２）で書いた「大変にsignificantでありつつも、大変微妙だ」ということにかかわってだ。多くの執筆者は、「中立的」なふりをして書くのが通常だ。「ふり」というのは、本当は「中立」になることは難しいからだ。たとえば、「小学校就学率は５５％と低く、全国平均から大きく遅れていた」という記述は中立のように見えるがそうではない。同じ数値であっても、「小学校設立から１５年というわずかの期間に、５５％までに達した」とか、「住民は子どもを学校にやる必要性を感じていないが、行政や学校教員は、就学は国家への義務だとして、強く就学督促した結果、５５％までになった」、という書き方がある。同じことを書いても、意味が大きく変化する。

５）年表にしてもそうだ。１９４５年春の年表のなかで、軍事にかかわることに、日本軍の視点で書かれているものが多く見られた点を、私は指摘した。米軍の視点、沖縄の視点、西原の視点、住民の視点で書くと、もっと異なる表現になる例が多くみられた。

６）だから、どんな立場、視点で書くのか、ということに執筆者は自覚的になる必要がある。

７）とくに教育の場合に留意したいのは、「就学率は向上し、進学率もたかまり、教育がよくなっていった」という、「単純」「中立」そうにみえる記述が無意識に多くなることである。

そういう類の数値への関心は、「近代化」を急ぐ時代にはかなり前面にでる。発展途上国などではその傾向がある。だが、今日の「先進国」ではそうした把握から卒業しつつあり、異なる把握を模索実施しているところが多い。

以上述べてきたように、しばしば陥りがちな「無意識のメッセージ」を発してしまうことに、もっともっと自覚的になり、何でもないような表現の意味するところを考えながら、市町村史執筆にあたる必要があろう。

１９７２～１９９０年の西原の教育・・・西原町史原稿完成（２００９年１０月７日）

６月に、ピンチヒッターで依頼された原稿を、今日完成させて送付した。８～９ページと、ページ数が限られているので、もっと沢山書くべきこと、書きたかったことがあったが、多くのことについて、記述を断念した。

それにしても、編集事務局の若者たちが、膨大な資料を収集送付してくださったおかげで、短期間ではあったが、まとめ上げることが出来た。なお、発行は、来年３月の予定だ。

この時期、西原のみならず、沖縄全体の教育が大きく変化した。教育制度とか教育政策において、というよりも、「子どもたちが学校教育における成功をめざし、家族がそれをささえる」という構造が成立したという点においてである。このことについて、いまなら当たり前のように思う人が多いが、ほんの３０年ほど前のできごとなのだ。そして、だれもが、「せかれるようにして」そうなってきた。それだけに、そのことの功罪についての検討がほとんどなされていない、というのが実情なのだ。

そして、そのマイナスのツケがだんだん蓄積してきているというのが、これまた実情だ。

それについては、今回ほとんど触れることができなかったので、タイムスに連載中のものをふくめて、これから何年もかけて、とりくんでいきたいとおもっている。

松島泰勝「沖縄島嶼経済史」（藤原書店２００２年）を読む（２００９年７月３１日）

私は、経済学の初心者である。特に、沖縄経済については、生活感覚での付き合いはあっても、勉強不足は著しい。地域起こしについて考え始めているので、少しは勉強しなくてはと思う。それに、８月８日に沖縄中小企業同友会の、「同友会大学」で話をすることもあって、書店で、沖縄経済についての本を見てひかれたのが、この本だ。

900 年にわたる沖縄経済史を概観できるというのにもひかれた。４５０ページにもなる大部だ。

その時代時代の経済思想にかなりのページをさいているのも特徴だ。羽地朝秀、蔡温、大田朝敷などは、私が教育史でこれまで述べてきたこととは、かなり異なる視点で書かれている点で、興味がもたれた。

本著の主要なポイントは、次のことに集約できよう。

「貿易や移民等を通じて、島嶼外部との経済関係を強化することで島嶼経済を発展させる方向と、島嶼内部の生産性を向上させて経済構造の安定化を目指す方向」P370

この二つの方向を、「二重戦略」という形で「二一世紀における沖縄経済のあり方」を提起する、というのである。

専門家ではない私の現在の力ではコメントは難しい。私にとっては、知らない情報がえられた、ということと、こうした歴史的な検討を踏まえて、これからの沖縄経済の方向を提起する作業に似たことを教育分野でしたいと思っている点で、大きな刺激がえられた、ということである。

こうした長く広い視野をもった検討が、沖縄の教育には必要だと思う。また、沖縄の教育の中心を担う人々、教育に影響を及ぼす政治家などには、そうした視野をもった仕事をしてほしい、思う。

鹿児島＝薩摩からの沖縄の見方（２０１０年１１月１７日）

鹿児島の博物館などをまわると、薩摩の視点からの沖縄の捉え方にしばしば出会う。

近世期の沖縄は薩摩の領地であることが、当たり前のこととして書かれる。欧米諸国との関係にしても、沖縄であったことがらさえも、薩摩との関係として描かれる。歴史のクールな事実としてはそうであろうが、単純明快にそう書かれると、微妙な気持ちになる。

沖縄内では、近世沖縄について独自性が大変高いものとして描くことが多いが、薩摩支配の中で、薩摩との関係で描く視点が不可欠だ。たとえば、中国系統の朱子学でさえも、薩摩の薩南学派を視野に入れてとらえる必要があろう。

いずれにしても、八重山あたりから九州西部までの連なりの中で、さらに朝鮮半島から台湾などまでも含めた連なりの中で、そして、個々の島々の相対的独自性の視点のなかで、また、支配関係構図のなかで、これらの地域をとらえる視点は不可欠だ。

１９世紀中ごろの世界史的激動期の中で、島津氏が広い視野をもって時代をとらえ把握し始めたこと、その中で、琉球王朝がどれだけの視野をどのようにもっていたのか、も興味がひかれる点だ。

さらにひいては、「幕末の志士」たちをふくめて、時代の新リーダーたちのもつ時代創造構図、それとも関連しながら、沖縄の新リーダーたちがもつ時代創造構図はどのようなものだったのか、検討してみる必要があろう。そしてそれらが、その後の 19 世紀後半から 20 世紀のかけての地域創造にどうからんでいくのか、問うてみたい。その過程で、中央と地方・地域といった問題がどう展開していくのか、も興味深い問題だろう。

あるいはまた、こんな問題もあろう。近世から明治期へ移行していく際に、住民が、「殿さま」「国王」との「付き合い」を、政治的経済的文化的精神的に、いかに変化消滅させていくのか、中央政府がそれにかかわる政策をどう展開したのか、それらの点も考えたい問題だ。

石川市史（改訂版　１９８８年石川市発行）を読む　（２０１１年１１月１０日）

現在はうるま市となっている旧石川市である。８月末に伊波常雄教育資料展に出かけた折に購入した。２０年以上前の本で、現在も販売している。

研究本というよりも、資料本という色彩が強い本である。戦争直後、沖縄にとって重要な場になった石川である、ということもあって、興味をひかれた。実際、とくに戦争直後の資料には貴重であり、興味をひく資料が多い。たとえば、

・戦後最初の学校といわれる石川学園創設事情と初期の活動についての回顧録的なもの（曽根信一、初代校長山内繁茂）

本市史を編集執筆にあたった城前小学校第２代校長伊波信光や宮森小学校第２代校長平良仁一の回顧録

・沖縄諮詢会設立前後の記録

・１９４７－４８年の区長会（市民委員会を含む）の記録

私なりの感想を個条書き風にメモしておこう。

１）資料的性格が強いと書いたが、それでもなお、研究資料になりうるものを多分に含み、研究的志向を持っている。

２）執筆者、また登場人物の多くが、地域政治関係者、教育関係者が多いことに特徴がある。１９８０年代にいたるまで、教育関係者が地域指導者的性格を濃厚にもっていたことの反映ともいえよう。

３）執筆者のほとんどが男性であり、無意識だろうが、男性的視点から書かれているものが多い。

４）戦争に象徴されるが、地域に押し付けられた［外圧］的なものに対して、いかに対処し、地域・地域生活を守ってきたか、という記述が多い。

５）そのなかで、住民自身の地域おこし的なものが［外圧］で隠されがちであったが、それがどうなってきたか、どうなっていくか、という問いを改めておこしてもよいだろう。

改めて、地域主体を育むありよう、地方自治のありようが問われてもよいだろう。

編著者の伊波信光が「あとがき」にも注目したい。

「沖縄では戦後、特にここ十数年来、各市町村が競うように市町村史（誌）を刊行するようになった。案ずに、戦前の沖縄は県主脳者を始め、中等学校の校長教師に至るまで、そのほとんどがいわゆる大和人によって占められ、外にばかり目を向けさせられて、内など顧みる余裕が無かったからであろう。なぜなら彼等は沖縄の文化を極端に低級視して、中にはその抹殺さえ企んだ為政者さえいたぐらいだからである。従って学校でも沖縄歴史を教えることはタブー視されていた。

しかし戦後は違う。この大和人という重石が取り除かれたために、今や我々はようやくのびのびと内を見る余裕が何処からともなく湧いて来たからである。されば私はこの沖縄の人々の内を見る心が市町村史（誌）編纂を

促す要因になったのではないかとひそかに思うのである。」P1154

本市史作成は 1980 年代だが、当時の沖縄教育界には、「大和人という重石」はないにしろ、むしろ「沖縄の人々」が進んで「本土に追いつけ」の流れのなかで動く流れが強力であった。その中で、大和人である私などは、沖縄の教師が自信をもって、沖縄の自主的独自的な取り組みを展開することを強調していた。それを書いたのが『沖縄教育の反省と提案』(1983 年明治図書) であった。そうしたなかで、まだ小さな力であったが、自主的な取り組みのうねりが存在した。それを示す一つが『おきなわの教育実践』誌であった。

自主的な動きは、歴史・民俗研究など文化分野では長い蓄積をもっていたが、教育分野ではその動きはなかなか表にでてきにくい状況が存在したのだ。そんななかであったからこそ、この伊波氏の「あとがき」は注目される。

南城市地域の共通性の探求　「南城市史総合版（通史）」を読む

（２０１２年1月１２日、１５日）

正式タイトルは、南城市教育委員会編「南城市史総合版（通史）」南城市教育委員会２０１０年発行であり、その改訂版第１刷２０１１年刊を手に入れて読んだ。

市町村史で初版が売り切れたという話はあまり聞かない。ハードカバーの重いものではなく、親しみやすく読みやすいものなので、再版にいたったのだろう。

いくつかコメントしていこう。

１）２００６年に町村合併によって生まれた南城市なので、それまでの四町村が編集発行してきた町村史を受けつぐ形での編集だ。そこには、多くの苦労があったことだろう。それにしてもスピーディな発刊である。市町村史では、準備だけに１０年以上かかる例があるほどのなか、驚きに近い。特に、歴史的に共通性があるとは言っても、長い間、別個の歩みをしてきた４町村を「統合」した歴史を編むのは大変だと思う。

２）そうした歴史的経過のために、これまでの沖縄史研究ならびに既刊の４町村史の成果を踏まえ、というか、それらを生かす形で編集されている。したがって、研究書という性格よりも、既存の歴史関係書を４町村地域に焦点化してまとめたという印象が強い。

そうしてまとめられた４町村地域の歴史を「統合」的に把握する本格的作業は今後の課題ということであろう。そうはいっても、すでに本書の中で、たとえば「東四間切」という形で、統合イメージを提出している個所もある。無論、「東四間切」でありながら、与那原地域は、南城市に入っていないので、除外せざるをえない。今回の市町村合併が、政府が主導する「平成の合併」政策に主導された、やや［外圧的］な性格を含んでいるので、そうならざるを得ない点を含むことはやむをえないだろう。

３）とはいっても、もともと近隣地域であるし、産業基盤や歴史的事情には共通性が多いので、一つの歴史としてまとめることが可能であろう。また、無理に「統合」的なものを押し出して、歴史事情地域事情の違いを軽視することにならない方がよいだろう。違いが豊饒さを生み出す面をもっているからだ。

４）そう考えると、歴史的に、どんな共通性と差異をもって、この地域が歩んできたのかを明らかにする作業は興味あるものとなろう。個々の旧四町村の枠では見えなかったものが、見えやすくなる、ということもあろう。

５）南城市の旧４町村の共通性ということで、想定されそうなことを挙げてみよう。

・地質　　石灰岩層と泥岩層の組み合わせ

・貝塚時代におけるイノーでの魚介類採取

・グスク時代における「神々」　　首里王府時代における神関連にかかわる重要な位置

その点では、この時期を反映した本書のなかのオモロ記述は興味深い。

・農業生産が主流の時代における農業生産

・さらに、明治期以降、今日に至るまでのなかで、どのようなものを挙げることができるか。

さらに、今日、どのようなものを想定するか

考えていくと、興味深いことが多く出そうだ。

６）差異は、旧４町村の差異というだけでなく、差異を地域個性ということで考えると、多様なレベルで存在している。では、どのようなものを差異として想定し、地域づくりを構想実践していくか。すでに地域差異に基づいて策定されている計画などがあり、本書にも掲載されているが、それが今後の足がかりになろう。

７）通史で描かれたことを、ベースにして今後、どのように展開していくか。また、紙幅の都合があろうが、おおまかなスケッチに留めている事項をいかに掘り下げていくのか。戦前の地方政治や教育に関する記述などはその例だろう。また、戦後、とくに現在に近い所ほど、行政報告的色彩が濃くなる。それは止むを得ない面があろう。

市史編集発行計画は２０年間で１０冊余りのものであり、それらに、本書がどう生かされていくか、今後の展開に期待したい。

※　付け加え　私個人にとっていうと、居住している玉城以外の旧３町村については、知らないことが多いので、学んだことは多い。このことは南城市内のどの読者についても言えそうだ。「南城市入門」として読むこともいいだろう。

３２．先史時代

高宮広土「島の先史学」（ボーダーインク社２００５年）を読む（２００５年5月２４日）

この本は、これまで私の認識であり、また沖縄史の主流のとらえ方でもあるいくつかの点について、それをくつがえす説の提起に満ちており、積極的な検討が求められよう。

１）山下原人・港川原人など旧石器時代以来、人々が琉球列島に住み続けたと把握することはできない、ということ。

時々住んではいたが、移住や絶滅によって、継続して住み続けていたわけではない、ということである。少なくとも３０００年ほど以前については、そうである。

２）現住沖縄人の直接の祖先は、稲作民であり、おおよそ９００～１３００年前に来沖した、ということ。

その人々は、縄文系とか原日本人とかではなく、弥生系であるということである。

３）狩猟採集民のほうが農耕民よりも生活が大変であった、というわけではないこと。農耕民のほうがはるかに労働時間が長く、また農耕民には社会の支配構造がともなっていたこと。時代とともに、狩猟から農耕へと「進歩」してきた、というとらえかたが妥当かどうか疑われること。

上記は仮説の段階であるが、かなり説得力があり、今後の関連研究者による論議で深められていくものであろう。それらにもとづいて、筆者の『沖縄県の教育史』も先史時代に関する手直しが求められることになるかもしれない。

また、これらの認識は、我が家の近くにあるヤハラヅカサ、浜川御嶽、受水走水などの遺跡にも深くかかわるものであり、興味津々である。

『琉球縄文時代の謎』シンポジウム

（２００８年１２月１３日、１４日）

「ヒトはいつ頃沖縄諸島に適応したか」がサブタイトル。大変面白い。

このシンポは、いうまでもなく、高宮廣土さんの大胆な問題提起に発している。そして、彼が基調講演者の一人であるということで、参加者が会場に溢れていた感じだった。私は１０分前以上に到着したが、駐車場も会場の席探しにも苦労した。こういう時は、意外に

最前席あたりがあいているもので、ちゃっかりとそこに席をとった。

問題提起者は、高宮さんの他に、三人だったが、そのうち二人は旧知の人だということも、今回の私の出席理由の一つだった。問題提起内容も、私にとっては、はじめて知る情報がたくさんだった。

いくつかコメントしよう。

１）　大変多数の方々、私の目算では２００名近いが、そうした人は決して専門家ではなく、このテーマの斬新さ、あるいは高宮さんの著書を読んで刺激を受けた人だと思う。その意味で、専門家の議論を超えた関心を呼ぶものだった。

しかし、運営スタイルは、まったく学術専門家向けだった。討論時間が一時間あったが、事前にすべての発言者は用意されていた。その意味では、それ以外の方々はまさに「聴衆」であった。また、討論がかみあわせられるというよりも、事前演出にそっていて、意外性は少なかった。といっても、内容的にきわめて興味津々なもので、聴衆にフラストレーションを与えるものではないので、それはそれでいいと思う。ただ、専門的過ぎて居眠りする人がいたことは残念だ。

私も別の学会だが、学会運営にかかわっているので、こうしたことがかなり気になる。公開で既定メンバー以外の参加を期待想定する場合の運営の仕方には工夫が必要だろう。その意味では、フォローをどうするかが気になる。

２）　私個人は、もう３０年近くなるが、こうしたテーマに関心をもっていた。といっても素人だが。拙著『沖縄県の教育史』を書いた際にも、素人なりに学習した。そのころから２０年近くたつので、研究のすごい進展のなかで、私の作業にも加筆が必要だと思う。

それにしても、今日の論議のなかでは、教育学研究はいかに関与できるのか、ということを考えていた。今日の議論でいうと、「再生産」過程が成立・発展・低下・消滅するかどうかということをめぐって論議されていたが、教育がかかわるとしたら、そこのところだろう。そんなことに踏み込んで論議できるのは、沖縄史でいうと、史料的には近世のことであり、グスク時代以前はかなり推理の世界となる。だから、琉球縄文時代などは「推理以上」かもしれない。

３）　もう一つ気になったのは、私にもその傾向からなかなか脱けきれないのだが、人々の生活は、時代とともに「良くなり」「発展してきた」とか、「同じところに住んでいれば、同じ人々の系統が住んでいるのは当たり前だ」という無意識の発想が、無意識に研究の世界に忍び込んでいるということだ。たとえば縄文時代の人々は、食料確保などで生活に大変苦労してきたが、その後農耕生活にうつり、「楽」になってきたという発想が、意外に忍び込んでいる。その結果、現代はとても「いい」時代で、生活が豊かであるという無意識の発想を生む。

こうしたことは、専門議論のときは、蔭をひそめるが、専門議論をつなぐ説明のときに「ふいに顔を出す」。今日もそうした発言をいくつか感じた。考古学の世界は、証拠をきちんと提供するとともに、意外にこうした推理で語ることが多いようだ。その推理には、現代の生活感覚が

無意識に忍び込むことに警戒することがおおいに必要だと思う。

そうした論に対して、異議申し立てをしたのが、高宮説だといえなくもない。今日の論議の旗色は高宮説には不利な感じではあったが。

たとえば、沖縄列島在住の人が、ある時期に「断絶」したのではないか、という高宮説に対して、「断絶」の前後に「つながり」的なものがあるから、断絶してはいない、というのにはやや論理飛躍があるはずだが、そこのところの追求は弱いと感じた。「断絶」説批判はそれなりにわかるのだが、では「つながり」の証拠といったら、それも弱いのである。

そのおりに、司会者だったかどうかはっきり記憶していないが、沖縄本島だけでなく、琉球列島をはじめとするネットワークで考えてみてはどうか、という提案に高宮さんが肯定的対応をしていたことが、私には注目される。

この提起は、「継続している」「移住」の二者択一ではなく、新たな視点を提供するからだ。

このシンポの主題は、沖縄に人々が定着適応したのは、今からおおよそ５０００年前の縄文後期からなのか、それ以前からなのか、ということである。

縄文後期から遺跡数が急激に増えている。その前の時期に住んでいた人々が、後期以降の人と直接つながるのかどうか、という議論が一つの焦点である。

どちらの説をとるにしても、縄文後期には、かなりの人々が定着して人口が増えたようである。

それとかかわって注目されるのは、珊瑚礁の先端にある礁嶺が、４０００年前ほどに形成され、大波を防ぐ役割をはたしてくれたお蔭で、海岸近くに集落が形成されるようになった、という河名俊男さんの提起である。かれとは４０年来の知人であるが、自然地理学では大きな業績をつくりだしている方だ。こうした人が、この分野に、調査研究をもとにして提案をすることは、大きなインパクトだろう。

もう一つ、『縄文海進』がよく話題にのぼるが、それは海面上昇というよりも、地殻変動によるものではないか、との説明があり、新鮮の印象を受けた。気候温暖化によるものではないらしい。

そして、会場にもっとも大きな衝撃を与えたのは、３４００年前に、大きな津波が沖縄本島を襲ったらしいとの説の提示であった。津堅、知名などの岩の観察などによって得られたとのこと。

それが事実であれば、当時の住人に大変な衝撃であったことは容易に推察できる。

シンポの内容は、私にとってはもともと興味あるものだが、聞けば聞くほど興味が増す。この分野の研究をしていれば、議論に分け入りたいと思わせられるだろう。残念ながら、この分野の直接の研究は全然していず、もっぱら諸説から学ぶしかないのが私である。

自然　遺跡　三千数百年前　南城市史３（２０１２年1月１９日）

記述の中で注目した点を、いくつか紹介コメントしていこう。

１）「第１章　南城市の自然」では、生活感覚の中では気付いてはいるものの、改めてはっきり教えてくれるこ

とが多い。

イワサキクサゼミ、イノーなどの地形、クチャや石灰岩などの地質、地滑り、やんばる山、ハマジンチョウ、などなど。

我が家玄関脇のオリヅルランにとまっているイワサキクサゼミの写真は、このブログで紹介したことがある。

イノーややんばる山は、すぐ近くだ。

２）「第２章　歴史のはじまり」のなかでの、遺跡の分布変化についての次の記述は興味深い。玉城・知念と大里・佐敷との違いは、合併したことで気づかされるという面があろう。

「遺跡の分布状況は、先史時代の遺跡が王城や知念に偏在し大里では僅かな分布状況を示し、佐敷にいたってば皆無である。ところがその後のグスク時代になると分布状況が変わってくる。すなわち大里や佐敷の地域でグスク時代の遺跡が増え、玉城や知念よりも多くなる。

本県における先史時代の貝塚立地をみると、先史時代遺跡のほとんどは海岸に近い石灰岩丘陵上が、その周辺縁辺部の崖下および海岸砂丘に形成されている。遺跡がこうした場所に立地するのは、前面にサンゴ礁の広がる海がひかえていることと、近くに湧水があることが大いに関係している。（以下略）」Ｐ３４～５

三千数百年前ころの南城についての次の記述は、我が家からすぐ近くのイノーややんばる山の自然に支えられた人々の暮らしを想像できる。新原・百名の貝塚も近い。

「この時代は、沖縄の貝塚人たちが大きく活動する時期であり、久高島など小さな島々にも人びとが拡散し貝塚を遺すようになる。貝塚の数は増え人口が増加していくことがわかる。発見される遺物も多種多様であり、まさに沖縄貝塚文化が華開いた感さえした。おそらく地域間の交流も活発に行われていたのであろう、（中略）

当時の食生活についてみると遺跡の前面に広がるサンゴ礁の海から採れる貝類や魚類、あるいは海草類などが食膳を賑わしたであろうし、また、山の幸を得るためイノシシも狩猟の対象になった。百名第２貝塚や熱田原貝塚などからはイノシシの骨が発見されている。沖縄本島や周辺離島ではすでにいなくなったイノシシが貝塚人たちの食料資源になっていたことを物語る資料である。」Ｐ４７

貝塚人たちが現住者の直接の祖先かどうかは不明にしろ、この場に住んだ人々のイメージがわかる。

漁撈と交易　二千年～千数百年前ころ　南城市史４　（２０１２年1月２１日）

二千年~千数百年前ころの南城について、次のような記述がある。

「山里真謝原貝塚の例でもわかるようにサンゴ礁の海を前に広大な貝塚を形成していること、また、この時代の多くの遺跡から貝製品が豊富に発見されることから、この時代はサンゴ礁の海を生業の場としつつ、長い先史時代の過程でも最も漁労活動が活発化した時代だったのではないかとみられている。

さらに九州との交流を示す資料も多くなる。当時日本は弥生時代にあたり、沖縄各地の遺跡からも弥生時代の土器が発見されていて現在では三四ヵ所の遺跡からの報告がある。（中略）

斎場御嶽整備事業を進めて行く中で三庫理地区の発掘調査が実施されることになり、調査の結果、斎場御嶽に

は、弥生時代に相当する時代と琉球王国時代の二つの遺跡が重なり合っていることがわかった。弥生時代に相当するのは、三庫理地区の下層からであり、地元でつくられた底が尖り底の土器とともに九州弥生中期の土器が発見された。弥生相当期の土には琉球王国時代のものが覆い被さり、上を壊して発掘を進めることができず詳細な調査はできなかったもののイノシシの骨が意図的に焼かれていることがつきとめられた。こうした骨焼きの行為は、「動物の送り」と「火による浄化」といった動物に関わる祭祀との関連があるとされ、当時の精神文化を示すものとして注目されている。」Ｐ４９

私が住む玉城字中山も、こうした場だったろう。漁撈と交易がキーワードになりそうだ。イノーでの漁撈、森でのいのししなどの狩猟、加えて、イノーの切れ目をとおっての交易が推察できる。船がヤハラヅカサ近くまで行きつける水路は、丘の上から見るとよく分かる。

この時代の後半については、次の記述が注目される。

「いずれにしろ、この時期には、外部からの来航者たちが交易のため沖縄の地を訪れていたことは確かであろう。こうした来航者たちの活動はしだいに増え、終末期にもなると恒常化し、やがて沖縄社会に大きな変革の時代をもたらしていくのである。（中略）

（沖縄県下の）約一割の遺跡が南城市に存在していることになり、南城市の先史時代の遺跡では数が最も多くなる時期である，遺跡が多いということは人間の活動が活発だったことを意味している。」Ｐ５０

ヤハラヅカサあたりへのアマミキヨ到着を暗示するのかもしれない。木村政昭さんの邪馬台国沖縄説も、こうしたことと関連があろう。とはいっても、「説」の段階であり、「定説」とはいいえないだろう。むしろ疑問の方が多いかもしれない。

それらとかかわって、一つ気になる記述がある。焼畑の存在を指摘する次のものである。この指摘はあまり目にしない。定説になっているのだろうか。指摘が正しければ興味深いことだ。

「太古、紀元〇年（約二〇〇〇年前）ごろ、北方からアマミキヨ族が大挙沖縄に渡来し、山地斜面や海岸段丘を利用する焼畑農法を営んだ。焼畑を「きなわ」といい、その跡地に出来た集落は「きなわ」が転訛して喜名、知名、屋慶名（焼庭）、知念などと呼ばれるようになり、知念という地名もそこから生まれたとみられる。」Ｐ３５２

約２０００年前の沖縄史の大胆な仮説の連続　木村政昭本を読む（２０１０年９月２０日）

本書のタイトルは、木村政昭「邪馬台国は沖縄だった！　卑弥呼と海底遺跡の謎を解く」（第三文明社０１０年）である。

これまでの沖縄史の「常識」とはかなり異なる、また【謎】とされていることへの大胆な仮説の連続である。

その一つが、邪馬台国は沖縄であるという仮説。また、徐福たち数千人が中国大陸から移住してきたのが、アマミク（アマミキョ）たちであるという仮説。

その他に

日本統一王朝としての畿内大和朝廷に至る歴史について、

＊前十世紀～紀元三世紀＝琉球（邪馬台国を含む）王朝時代
＊三～四世紀＝九州王朝時代（ニニギ降臨より神武東征まで）
＊四～七世紀＝畿内（大和）王朝時代（九州王朝並立）
＊七世紀以降＝日本国
という仮説を提出する。

北谷海底遺跡や与那国海底遺跡は、これらの仮説と結びつけて説明される。
今年に入って、このブログでも紹介した、ヤハラヅカサのストーンサークルもそうしたものの一つであるとのことである。その折、散歩中だった私は、偶然、木村さん一行と出会い、木村さんから説明を受けた。
本書の中で、私が興味を引いた事の一つは、最近数千年間に、大きな地殻変動、海面の大規模な上昇下降があり、それが沖縄史に決定的なインパクトを与えたという仮説だ。
ちなみに、著者は海洋地質が専門の研究者であるが、近年の歴史研究は、文献史学や考古学研究者だけでなく、多様な分野からの関わりで進行しているようだ。
本書で提起された仮説は、大変魅力的だ。と同時に、「そこまでいえるのだろうか」と感じる個所がないわけではない。
仮説にしても疑問にしても、今後多様な立場からの研究による解明を期待するしかない。そうした研究に対して、本書が強いインパクトを与えることは確かだろう。
それにしても、ここ数年の間に、従来の説・常識の変更を求める提案が続出の沖縄史である。

高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹「沖縄文化はどこから来たか」（森話社２００９年）を読む

（２００９年１０月３０日、３１日、１１月１日）

高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹「沖縄文化はどこから来たか」（森話社２００９年）を読む。サブタイトルが「グスク時代という画期」とあるように、グスク時代のイメージを大きく変える話題に満ちた本だ。専門書であり、私の専門外分野でもあるので、この本に書かれている多くの新説をどのように受け止めるかは保留して、私にとって印象的だったことを並べていこう。

１．土器を中心にした考古学的検討、「おもろさうし」の言語検討、琉球方言ｐ音の検討、ＤＮＡ検討など多岐にわたるアプローチをもって、グスク時代、とくにその開始期についての検討を行っている。
２．奄美の検討が一つの焦点になっている。朝鮮半島、対馬、壱岐、九州西部・南部、琉球列島の間の流れの視野から沖縄をとらえるが、この時期の喜界島の城久遺跡の存在が一つのキーになっている。その意味でも、従来支配的であった、沖縄本島を中心にして琉球列島を見るのとは異なる問題提起がなされている。城久遺跡について「ここを起点にして列島全域にわたって人間集団も移住している」Ｐ３３という説を提起している。
３．「喜界島の城久遺跡群で活動していた人々は『日本』の外の地域をも含む外来の渡島者と考えられる」Ｐ２３

０とされる。「喜界島の交易拠点の主体である外来の人々の一部が『高句麗人』であったことを示す」Ｐ２７６という記述もある。

このあたりには、弥生系以前、以後の双方において、朝鮮半島に住んでいた人々とその移住、また肥人（クマビト）といったひとびとの動向などが絡み合う。「日本人」「日本語」の形成ともからむ。朝鮮半島にも、多様な人々がすんでおり、たとえば、百済、高句麗は扶余族（ツングース系）で、新羅は韓族だという。

当たり前のことだが、ここ百年あまりの、同一地域には一つの言語・文化の人々が優勢を占めるという事態から推理して、ものを考えるわけにはいかないのだ。

４．それまでの在地集団がいるところに、大規模な移住がなされたことが、琉球列島のありように大変化をもたらした。その点で、「沖縄本島を中心に琉球王国形成へ向かう単一的な段階発展論」Ｐ９、「沖縄諸島の内的発展論」Ｐ１０とは異なる説を提起している。

５.「沖縄諸島以南のグスク時代が北からの大規模なヒト集団の移住によって幕を開けたこと、南琉球におけるグスク時代は渡島者によって開始され、遺伝的に渡来系弥生人の系譜を引くと考えられる人々が多くの割合を占めたこと、それに関連して南琉球が日本語と同系の仲間入りを果たしたのはグスク時代以降であったことなどの点についてはほぼ間違いないと考える。また、沖縄諸島が日本語の仲間入りをしたのも、グスク時代の開始期であった可能性が高い。その言語は、九州西部・南部、奄美諸島の一部地域から流入したものと考える」Ｐ２９２～３

６.「琉球文化の性格を決定づけているのは、やはりグスク時代に在地集団を圧倒して入ってきた集団が持っていた文化だろう」Ｐ３５と説明される。

７.「おもろさうし」は、「平安後期（十一世紀～十二世紀ころ）から室町期という時代及び、その時代の知識人の影響を大きく受けて成立した文献」Ｐ１６５だと提起している。「おもろさうし」は、「周辺諸国との接触が増えていく中で、より多くの『大和古語』が用いられるようになり、『沖縄古語』と対照的な位置に置くことで、『沖縄古語』を翻訳するような役割を果たした」Ｐ１５２という仮説を提出している。

８．これまでいわれてきた、パピ→ファフィ→ハヒという音の変化の流れではなくて、ファフィ→パピという流れがあり、そのこともあって、「琉球語が相当に古い本土語から分岐したとは考えなくてよい」Ｐ２３説が提起される。

９．日本語については「南島語を素材にしてツングース語を組織原理にした言語」とする村山七郎説をとっている。Ｐ４０

１０.「安里進や高宮広土によるこれらの仮説は、古代～中世並行期にかけてかなりの規模の人間集団の移動を予測するものであり、考古学的成果を援用した新たなる大和人『南漸論』である」Ｐ５１と書くように、この二人の説を視野に入れた論でもある。

いずれも興味深い説だ。私が沖縄史学習を始めた 1970 年代とは「様変わり」といった感さえする。私が『沖縄県の教育史』を書いた 1980 年代後半と比べてもかなり変化している。教育史としては、この時代のことをそれほど書いたわけではない。なにか資料が得られないかと思い、『おもろさうし』も読んでみたが、首尾よくいったわけではない。また、無意識に「内発的発展」で書いていた要素をもっていた。だから、人間と文化の移動だったとすれば、教育史の書き方にも変更が求められよう。

１１．大量移動の前から住んでいた人々についてもＤＮＡ分析などに基づいての推理を紹介している。「はじめて沖縄諸島で定住に成功した貝塚人は南九州のヒト集団であり、その集団がＭ７ａをもっていた集団であった可能性があるとする。Ｍ７ａの日本列島への流入時期は後期旧石器時代という古い時代が想定されているようである。そのヒト集団が、南九州から沖縄の貝塚時代に南下したとすれば、北上したＭ７ａヒト集団は琉球列島を通過し、南九州に定着したのち、その一部がふたたび沖縄に南下したということになる」Ｐ２４６

ＤＮＡ解析は面白い。だが、最近の裁判で話題になったように、しばらく前の解析のあいまいさが冤罪を生んだ。遺伝子解析も、私がこのことを最初に知った 80 年代後半とくらべれば、うんと前進したのだろう。その結果、ずいぶんと発展し、詳細になった。そして、以前の有力説は修正が求められている。その意味では、現在の説も、さらに発展させられ、多少の修正が求められることもあろう。それにしてもずいぶんと進化したことは確かだろう。

１２．南からの文化として、「南島語的な言語要素と地名、そして神話」Ｐ２５０について触れている。そして、グスク時代、それまでの人と流入してきた人々との関係にかかわって、「おもろさうし」のなかの「アマミキヨの血筋の人を生むな、シネリキヨの血筋の人を生むな」という一節について、次のように述べている。「『アマミキヨ』『シネリキヨ』とは南島語的要素の色彩の強い言語を話していた集団の象徴であり、王国を形成した人々とは文化の担い手が異なるということになる。」Ｐ２６５

それまでの居住者と、移住者とがどのようにからんできたのか、興味深い。それは、チャンプルー文化ともいわれる、沖縄文化の特性形成のありようともかかわり、現在の文化創造のありようともからむ。

岡谷公二『原始の神社をもとめて　日本・琉球・済州島』を読む（２０１０年２月８日）

平凡社新書で 2009 年刊行の新しいものだ。書店で見つけたもの。興味深い。

沖縄の御嶽のことは多少知っているが、済州島の「堂」については初めて知る。日本の神社については、明治以降の国家神道、そして古代国家以降の神社については、少し知っているが、「原始の神社」となると、無知に等しい。それだけに新鮮だ。

沖縄の御嶽、たとえば久高のものについて、王朝支配以前はどうだったのか関心をもってきたが、それらにもかかわる探求がある。朝鮮（韓）半島においては、儒教支配によって、また日本においては、天皇制支配だけでなく、仏教の影響もあり、「原始」の形がとらえにくくなっている。

沖縄の場合は、王朝支配が、「原始」のものを排除破壊するのではなく、支配に取り込む形で展開したので、変形してはいるものの「残っている」。

そうしたものについて繰り返しの現地調査から浮かびあがるものが、文献資料なども含めて、提示されている。

我が家近くのヤハラヅカサ、濱川御嶽だけでなく、藪薩御嶽も詳しく述べられている。とくに他地域のヤボサとの関連に注目しつつ検討されている点で興味深い。

また、朝鮮（韓）半島、九州西岸、トカラ列島、奄美、沖縄北部、沖縄南部などとの比較だけでなく、人々の移動・交流も含めて、それらのつながりのなかで検討されている点でも興味深い。

私はこうした分野はまったくの素人だが、ぐいぐいひきつける本だ。沖縄の精神史を考えていくうえで、示唆を含んでいるので、今後も考えていきたい。

アマミキヨが複数・多数いる、という見方　（２０１３年3月１５日）

我が家近くのヤハラヅカサは、アマミキヨ上陸地点といわれているが、いつごろ誰（達）が上陸したのかは、はっきりしているわけではない。という事もあって、私は大きな関心を寄せていた。

昨年、濱比嘉島に出かけたが、そこにはアマミチュー・シルミチューがある。他にも、そうしたところがありそうだ。ということで、私には疑問形のままだった。

最近、谷川健一・折口信夫「琉球王国の源流」（がじまるブックス３　榕樹書林２０１２年）に眼をとおしたが、そのなかに谷川さんの書いた次のような一節がある。

英祖王をうたったおもろ歌謡について、谷川コメント

「琉球神話の開闢神であるアマミキョに対して、ヤマトから鉄器を作る技術をたずさえて南島にやってきたアマミキヨがある。前者を「古渡り」のアマミキヨとすれば、後者は「今来」のアマミキョである。右の『おもろさうし』のアマミキヨは、ヤマトから築城技術をもってきた「今来」の工匠をさしている。彼ら工匠は硬い石の表面を鉄の斧で削平してグスクをきずいた。」P24-25

つまり、アマミキヨは複数・多数あり、沖縄に移住してきた時期・場所もさまざまなのだ。そうとらえると、ヤハラヅカサだけでなく、あちこちにアマミキヨ上陸地点があってもいいわけだ。もしかすると、一つのヤハラヅカサだって、時代の違いで複数のアマミキヨがいても不思議ではない。

リーフの切れ目の水路を通って、古い時代から長期にわたって、交流交易の重要な場になってきたヤハラヅカサ周辺だから、そのように理解してもいいだろう。

すぐ近くの濱川御嶽、さらにミントンやタマグスクにしても、それらをよりどころにしたのが、時代差を考慮して考えると、複数いるということはありうる話だろう。

そうなると、尚巴志時期までの数百年、あるいはそれ以上の期間の歴史が、この周辺でいろいろと累積していると見ることができよう。すぐ近くには百名貝塚があることだし。

来間泰男「稲作の起源・伝承と“海上の道”」を読む　（２０１０年9月２１日）

正式タイトルは、来間泰男『稲作の起源・伝承と”海上の道”』上下 2 冊（日本経済評論社２０１０年）だ。本書は，タイトルにある主題についてのここ 30 年余りにわたる，多くの研究者による，多様な角度からの膨大

な研究文献の抜書とそれらへのコメントによって，テーマにせまっている．

私自身は，この主題について学習をしてきたが，諸説入り乱れるし，どんどん諸説が変化発展するので，対応／理解が難しかった．その時，こういう書籍がでたので，概観と諸説の変化発展をつかみたい私には大変有用なものであった．

この主題には，考古学だけでなく，文化人類学，農学などの分野からのアプローチが，対立・同調・共鳴など，多様な関係をもっての展開があった．それが主題を複雑化するだけでなく，豊富化もしている．

最近，先に紹介した木村本は，海洋地質学からの新たな問題提起であったが，本書は農業経済学，農業史が専攻の来間氏の仕事なので，また新たな視点が提示されている点でも興味深い．

来間氏もかつてはそうであったらしいが，照葉樹林農業論が強い刺激をこの分野に与えてきたが，私もそうであった．この説についての冷静な，というか，厳しい批評が本書の特徴でもある．同様のことが，「海上の道」への対応についてもいいうるだろう．

それにしても，11 世紀以前の千年余りの時期をどう見るかは，まだ謎めいていることが多い．この点を含めて，多様な分野からのなお一層の研究の進展が望まれる．

いよいよ興味深い研究分野である．

つけたり

１）沖縄の農業(史）をとらえるうえで，多くの勉強になった本でもある．

２）確信が持てないことなので，一つのヒントとして考えたいこととして，

多様な自然農法論があるが，そのなかには，照葉樹林文化論とかかわって構想されたものがないだろうか．とすると，本書で提起された問題との関係で考えてみなくてはならない問題があるかもしれない．

３３．グスク時代

刺激的な新説の提案－－－安里進「琉球の王権とグスク」山川出版社２００６年を読む

（２００７年2月１３日）

著者は、考古学を踏まえて沖縄史に創造的な問題提起を長年にわたって続けており、私も随分学んだ。今回はこれまでの定説に対して、大胆な新説を提示している。それは私が最近考えていることにもおおいに響くものをもっている。

新説も含んで刺激を受けたいくつかについて列挙していくことにしよう。

１）同書は古琉球の琉球王国と大型グスクに焦点を絞って論じている。その古琉球の琉球王国は高良倉吉によれば、次のような性格を有しているという。

「首里城を中心にしたパレス的な機能と、那覇港を中心にしたポート的な機能を、国王が統合経営する国家であった。このような国家は、東南アジアの港と王宮の組合せにより成立する海型の国家（港市国家）を念頭においたほうがわかりやすい。」Ｐ７

この把握は、沖縄内部の内在的発展を軸として古琉球史を把握するのか、それとも東アジアとの交流・移住の発展を軸にして古琉球史を把握するのか、という問題に通じる。前者を軸にして把握し、後者は前者を媒介にして影響を与えたという把握が、これまで広くみられたものといえよう。私自身も数年前までそのような把握をしていた。しかし、このところの研究の進展は、それとは異なって、この両者のからみのなかでの把握、なかには、たとえ一時的にせよ､後者を軸にした把握が有効な時期さえあったことを示唆する研究が提出されはじめている。そんなことに私は強く刺激を受けている。そして、移住を足がかりにして王権を築いた可能性を含むものさえありうると思われる。ただ、このあたりについては私は専門家ではないので、現段階ではもっぱら学ぶ一方であるが。

しかし、この問題関心から、今後考えていくことが多くなろう。

２）ニライカナイについては、私はこれまでいい加減のことしか知らなかったが、この著書ではこれまでの諸説にもとづいて、以下のようによく整理されている。

「ニライカナイ信仰は、琉球国王を太陽神の末裔に位置づける太陽子思想と深く関係している。古琉球においては、王は「てだ」（太陽神）あるいは「てだこ」（太陽の子）と呼ばれている。王を太陽神と同一視する琉球の王権思想からすると、王が生まれ、そして死後に帰り着いてふたたび生まれ出る場所がニライカナイのてだが穴ということになる。浦添ゆうどれの空間構造を考えるうえで示唆に富む聖地が、世界遺産に登録されている斎場御嶽だ。久高島の対岸にあるこの御嶽は、久高島への遥拝所でもある。この御嶽の三庫理と呼ばれる場所は、自然のトンネルをとおって東方海上に浮かぶ久高島を遥拝する空間構造になっている。こうした空間構造は、浦添ようどれの空間構造と同一の思想で設定されている。」Ｐ５２～３

かつて、私はこれまでの諸説を参考にして、国王権力は太陽神という垂直神に依拠し、それと対照的な性格を有するものとしての水平神としてのニライカナイがあるといういい方をしてきた。しかし、この著書の説からいうと、修正が求められる。このあたりは今後、さらに深めたいと思う。その際、国王権力が登場し強大になる以前と以後とで、ニライカナイ信仰がどのように変化したのか、変化しなかったのか、という視点が重要になろう。

３）１３世紀後半の英祖王は、伝説か実在かこれまではっきりしなかったが、実在であり、浦添を拠点に王国支配を展開していた、と叙述されている。

４）王陵の立地から、次のような説が展開される

「王陵の立地を整理すると、交易港をみおろす丘陵中腹に造営された王陵が初期浦添ようどれ・佐敷ようどれ・百按司墓、眺望の悪い立地に高い石牆で囲い込んだ王陵が天山御墓・玉陵になる。見せる王陵から囲い込む王陵への変化は、第一尚氏尚巴志の天山御墓から始まったといえる。王権を対外的に誇示する方向から、王陵を囲い込むことによって王権を隔絶し神聖化するという変化があったのではないだろうか。」Ｐ８７

これは全くの私の解釈だが、海からゆうどれや大型グスクが見えるということは、島内部に支配権威を見せるだけでなく、島を来訪するものに対して、島の外側に対してを支配権威を見せる効果をもたせていたのではないか。その王陵が変化するということは、交流移住を軸にした政権から、定住農業政権へと軸足を移したこととも関係しているといえはしないだろうか。

５）従来の三山→中山統一説に対して、次のような説が提起される。

「大型グスクは、各地の寨官が独自に造営したのではなく、浦添グスクの英祖王権と政治的主従関係にあった各地の寨官たちが、浦添グスクと同型式の大型グスクを造営した結果ではないか。」Ｐ９０

「中山の英祖王権の支配領域が沖縄島全域におよんでいたとなると、中山が分裂して山北・山南王権が登場したことになる。山北王城の今帰仁グスクや山南王城の大里グスクあるいは南山グスクが、周辺に王都的施設を配置した王のグスクにまで成長していないことも、両王権が中山よりも遅く登場した王権だったことを裏付ける。」Ｐ９２

「伊波は１９０５年の論文「阿麻和利考」で、中山が三山に分裂したという『中山世鑑』の三山分裂説を否定して、沖縄島各地に発生した按司がしだいに統合されて中山・山南・山北という三小王国が形成され、さらにこれらが中山に統合されて琉球王国が成立したという三山形成説を提起した。しかし、伊波は具体的な証拠を提示したわけではない。社会進化論的にみて、諸按司の群雄割拠→三山の形成→中山による統一が理解しやすいと論じているだけだ。三山形成説の実証的根拠の欠如は現在の通説でも変わっていない。」Ｐ９３

６）王と太陽神

「南向きの正殿は、太陽に向かうことで太陽神からの霊力を受け繁栄するという思想にもとづいている。この思想では王や寨官と太陽神とは相対化されている。太陽信仰はあるが、王や寨官は太陽神そのものとは考えられていなかったように思える。大型グスクの正殿は、十四世紀代に基壇礎石正殿となり、そして西向きに変化する。

南向きから西向きへの変化は、王と太陽神が相対化された王権思想から、王と太陽神を同一視する思想への変化として説明できる。太陽神と同一化した王は、もはや、南に向かって太陽神から霊力を受ける必要がない。太陽神となった王の正殿は、太陽と同様に西を向くことになったと考えることができる。」Ｐ９４

「尚巴志王代には王を太陽神と同一視する太陽子思想が明確になる。尚巴志王代に、「見せる王陵から囲い込む王陵」に改修された第Ⅱ期浦添ようどれは、東方彼方の楽土ニライカナイにある太陽が生まれ出る穴（てだが穴）に建つ王宮、つまり死後の王宮として設計されている。」Ｐ９５

７）人々の交流

「以上の浦添ゆうどれの調査で明らかになったことは、英祖王統から第一尚氏王統の時代に、東アジアのさまざまな階層・職能の人びととのあいだに婚姻や宗教・信仰を含む交流があったことだ。こうした東アジア諸国との交流が、琉球王権思想の形成にどのように影響したのだろうか、今後の課題としたい。」Ｐ９９～１００

以上、大変興味深い提案である。この本では直接触れていないが、我が家近くのタマグスク、糸数グスクの理解についても示唆深いものである。

安里進「グスク・共同体・村」を読む　（２００８年2月２３日）

私は、１９９１年に『沖縄県の教育史』（思文閣出版）という本を出した。明治期にいたるまでの長い期間の教育史である。この仕事をして以降、沖縄教育史の仕事からほとんど離れていた。だから、この期間に出された重要な本も目を通さずにきた。その本の一つとして１９９８年に出版されたこの本がある。

私の著書でも、グスク時代以前については、安里さんの諸論文をかなり参考にさせていただいたが、この本を読んで、沖縄における人々の集落レベルでの生活・生産のありようのイメージがより鮮明に思い浮かぶことができた。教育史を描く際には、このことは不可欠なのだ。

そして、今、私が住む玉城の中山集落の７００年以上にわたる歴史を思い浮かべながら読んだ。この本が中山に触れることはないが、近くの遺跡に触れることが多く、中山の様子を推理するうえで、とても有効である。そこで、かなり克明な読書ノートを作成したのだが、専門的すぎるのが、そのことの紹介はしない。

たとえば、中山集落は、かつて、琉球石灰岩の崖の上近く、今のグスクロード近くにあったが、なぜそこに立地したのか、そしてなぜ、現在のように下の方におりてきたのか、そんなことをイメージしてきた。そして、御嶽や殿（トゥン）などの拝所、また集落の上方にあるタマグスクの歴史などもイメージしながらよんだ。

こうしたなかで、人々の生活・生産の様子のイメージがより具体的に描けるような感じがしてきた。そうした生産・生活の様子にかかわって、人々の教育にかかわる様子も描けてくるのである。

さらに、中山集落が隣の集落から分立するのは、１８世紀だが、そこにおける首里王府・薩摩・幕府の政策が見えてくるし、また、明治以降の政治、さらに沖縄戦のかかわり、そんなことと、教育とのかかわりのイメージを豊かにすることにもつながってくる。

ここ７００年余りの中山は農業集落だが、それ以前は、近隣の人々が歩き、さらにそれ以前は、漁撈にかかわる近隣の人々が歩いているところであったろう。そしていまは、農業にかかわる人よりも、集落外に通勤する人が多い。こうした大きな間隔で、人々の生活・生産をみながら、この先の歴史創造を推理・創造していきたいと思う。

７，８世紀にはグスク的遺跡が登場したという新説（２００９年８月１７日）

「別冊『環』６　琉球文化圏とは何か」（藤原書店２００３年）のなかの、安里進「考古学による琉球王国形成の新展開」には、次のような新説が提出されている。

「私は、七、八世紀以後の沖縄諸島では、各集落からヤコウガイを集めて加工し、これを鉄器などと交易して各集落に再分配する交易共同体が成立し、その首長の居館としてグスク遺跡が登場したのではないかと考えている。」

「琉球王国の形成の前史は、貝塚時代後期の交易社会の発達という形ですでに始まっていたと考えられるのである。」

従来の定説に比べて、四世紀近く早い説だ。確かに、近年の考古学の進展の中では出てきそうな説だ。

「沖縄人はどこから来たか」を含めて、一二世紀以前の沖縄の実像を描く研究は、進展に進展を重ね、「定説」「有力説」が変化していく歴史でもあるようだ。とくに、移住交流と内発的展開との絡みでの研究は、興味津々である。

吉成直樹・福寛美『琉球王国誕生――奄美諸島史から』を読む　（２００９年３月１４日）

薩摩の琉球支配開始から４００年になる。それ以降、奄美支配は複雑な経過をたどる。

しかし、沖縄側からの視点では、沖縄を中心に見て、奄美をそれにつらなるものと見て、奄美それ自体に注目して見る点が弱かったようだ。

そんななか、この本（２００７年森話社刊）は、逆に奄美の側からを沖縄・琉球を見るという視点で論を展開する。

「これまでの奄美諸島史の位置づけは、歴史学、考古学においては、沖縄・琉球史の『付け足し』程度の意味しかもっていなかったとしても過言ではない。そうした立場にたてば、沖縄中心史観を相対化する試みであると言い換えてもよい」Ｐ２９０

とものべているが、興味深く新鮮な問題提起が続出である。

論争的な提案も多いとは思うが、注目したい指摘が多い。

「日本の古代～中世初期に相当する時期において沖縄社会より奄美社会のほうがはるかに本土とのかかわりの

深かった地域だった」　Ｐ８

「鉄器の使用という点に限ってみれば、奄美社会のほうが古くから使用が始まる」Ｐ８

「十一世紀頃という時期を考えれば、沖縄島を中心とするグスク時代が、沖縄島内部の発展によって開始されたのではなく、奄美社会が膨張するなど、ひとつの画期を迎えることによって開始されたことを示唆する」Ｐ９

「本土中世人に近くなる身体的変化もまた、グスク時代の開始が沖縄島社会の内的な発展によってもたらされたのではないことを示している。そればかりか、人骨に大きな変化がみられるのであれば、そうした人々が担っていた文化の流入による新たな文化の枠組みの形成、さらにいえば琉球語の形成が、この時期に起こったとしても不思議ではないことになる」Ｐ１１

「十一世紀頃から琉球列島に流通が始まるカムィ焼（産地は徳之島）、滑石製石鍋（産地は長崎県西彼杵半島）、白磁・青磁、鉄などは、中国の江南や朝鮮半島とも交渉を持っていたと考えられる北からの勢力によってもたらされた。そして、それらの勢力はやがて沖縄諸島以南に交易拠点をつくったが、その交易拠点とかかわりを持っていたのが沖縄諸島で十三世紀頃から大型化するグスクだったのではないか。」Ｐ１２

といった具合にである。

この本の問題提起の重要な一つは、倭寇・倭寇的集団など、朝鮮・日本・中国、そして琉球列島を結ぶ人々の流れのなかに、沖縄を位置づけていることだ。

沖縄のなかに長く住みつづけてきた人々というよりも、こうした多様な人々の流れのなかで、沖縄を拠点にした人々が、沖縄での覇権を競い、琉球王国の覇権の変遷を生みだしたというわけだ。

そして、南山というが、そこには二つがあり、実質的には四つの覇権が存在してきた。四つがあるにもかかわらず、三つの枠組みで理解するのには、朝鮮半島、さらには内陸アジアの文化的影響が認められるとも述べている。

倭寇・倭寇的集団の人々について、「『倭寇』と呼ばれる存在は、日朝の海域をまたぐ地域を拠点に活動していた、日本や朝鮮という『国家』や『民俗』の枠組みから離脱した人々を含む集団だったのである」と述べる。

また、「倭寇の『受け皿』として琉球を利用したという意味は、那覇が倭寇の略奪してきた被虜人たちの『奴隷市場』であったことなどに示唆されるように、実は琉球そのものが倭寇と一体化した存在であったために、（明は－－引用者補）朝貢面で琉球を非常に優遇することで、海賊行為を抑えようとした」とも書いている。

倭寇的集団ともからんで、十一世紀ころ奄美諸島を拠点とする勢力（とくに喜界島）が有力で、それらが沖縄にも勢力を伸ばしていったという文脈で論じられていく。

そして、時代が少しくだって、倭寇そのものの活動が活発になるころの１５世紀、「第一尚氏は、奄美諸島社会を迂回しつつ、沖永良部島を足がかりに与論島、沖縄本島北部の辺戸などをへて、北から南下したと考えたい」という仮説を提出している。

第一尚氏の末期の王尚徳の神号は「八幡按司」であるが、「八幡神は倭寇の守護神である」と指摘し「尚徳その人が倭寇」である可能性にも言及している。

（玉城の富里や當山には、第一尚氏末期の人々の遺跡などがあり、また、現在「八幡」の姓を名乗る人も多い。）

また、「金丸が、今帰仁の倭寇勢力を背後に置きつつ王権を奪取したと考えることができる」というように、

「第二尚氏の成立には奄美の勢力が関与していた可能性を考えたい」とものべている。

「倭寇」というと「物騒」な雰囲気を感じるかもしれないが、そのころは、軍事的であったにせよ、平和的な交易であったにせよ、海を媒介にした広い世界の大きな交流のなかに、沖縄が存在していたのである。そうした規模が大きい世界のなかに、１６世紀まで、少なくとも１６世紀初めまでの沖縄は存在していたのである。

本書の個々の問題提起・仮説の正否を論ずる資格は、私にはないが、こうした問題提起の視点から、沖縄史を把握することは重要な意味をもっていることは確かであろう。

田中史生「越境の古代史」（２００９年ちくま新書）を読む　（２００９年４月９日）

グスク時代以前の沖縄地域の実像把握のための学習を続けている。南西諸島の北に位置する列島の実像把握も関連する。この前に紹介した奄美からの列島把握もずいぶん参考になった。

今回は、「倭」をめぐる実像把握、５世紀ころから１１世紀ころについてであり、当然のことながら、沖縄地域もかかわる。

まず、この実像把握のうえで、示唆に富む次のような指摘を紹介しよう。

「高句麗があった時代、列島には『日本』と称した国もない。にもかかわらず『日本史』は現在の国境と重なり合う形で、紀元前から一つの単位としてあったというのならば、それは古代史の客観的な研究から導き出された結論ではない。最初から近代国民国家の視点で意図的に設定された枠組みなのである。」Ｐ１１

にもかかわらず、近代的な「国民国家」的視点で、古代史を把握しようとする流れが強力に存在する、というよりも、それが支配的になって、無意識のうちに大多数の人がその把握のとりこになっているのだが、それはなぜだろうか。

「前近代の王国の時代、王権による支配の正統性は神や神話が支え、保証してくれた。まさに王権神授の世界である。しかし神や神話が力を失った近代、王から主権を奪った国民は、その一定の範囲で括られた国民だけに許される主権を、神授説とは別の方法で正統化しなければならない。（中略）近代、国民・民族は歴史的運命性のもとに、ある一定の範囲で切り取られれ束ねられた語られるものとなった。だから国民・民族を支える歴史も、まるで国民や領土のように切り取られ、主権のように排他的に占有できる対象とイメージされてしまうのだ」Ｐ９

そして、次のような把握がつくられてきた。

「『倭＝日本』を“内”とし、それをとりまく国々を“外”とする内外二層構造を基本としている。しかもここで倭と日本をイコールで結んだように、古代の倭と日本は、まるで同一身体の幼少期と青年期でもあるかのように、単線的な成長をとげる明確な一単位として扱われる。」Ｐ１２

そして、「列島の倭人社会は『倭人社会』と一括りにできないほどの多様性を持ちながら、政治・経済・文化のあらゆる面で、列島外諸地域からもたらされる資源・技術・知識に大きく依存した、いわば共通の国際交流を必要とした社会であった。」Ｐ３６と指摘されるような実像を、多様な角度と史料をもって提示するのが、この本の本体である。

こうした指摘は、ひるがえって沖縄・琉球についてもいえる。沖縄・琉球も「ずっと」同じ一つの単位として存在してきたものではないのである。１５世紀統一琉球王国が成立しても、その領域は限られていたし、伸縮していた。そして、アマミキヨなどの神話、およびそれにかかわる儀式などによって、王国は権威づけられてきた。だから、ヤハラヅカサ、斎場御嶽、イザイホーなども、その王国とのかかわりで実像把握する必要がある。王国神話として存在するのであって、少なくとも１３世紀以前の列島の実像とは距離がある、ないしは関係ないのである。

そしてまた、一連の叙述にもとづいて、また近年の奄美研究にもとづいて、次のような注目すべき指摘をする。

「近年の考古学が、沖縄本島を中心に国際社会を股にかけた“琉球国の歴史”のイメージを覆し、『日本』と地理的に近い、北の奄美諸島を軸に活発に動く一二世紀以前の奄美・沖縄諸島史をとらえたのは、琉球列島の歴史においても、異文化間の円滑な交流・交易に、政治的な管理が極めて重要な意味・役割をもったことは、もはや疑いようがない。」Ｐ２１８～９

これなどは、従来の「定説」を覆す問題提起であり、今後、論議ないしは論争が展開していくことだろう。

この本の最後には、以下のように問題提起をまとめている。

「海域を活動の舞台とし、様々な地域と関係を結んだ交易者たちが、海域と接する一国政治から解き放たれていたというわけではないし、政治的に管理された“交易港”が健在だったからといって、政治的管理が基本的に貫徹していたと判断することもできない。古代人たちは、互いをつなぐ驚くほど多様な社会的装置を持ち、それを駆使し、使い分けて、越境的なネットワークを動かし、ネットワークを変形させていた。そのネットワークは、どこの国の歴史にも専属せず、それでいて様々な国の歴史の影響をまともに受ける。しかもそのネットワークは、ある地域の社会変動をすぐさま別の地域へと運び、各地の歴史を連鎖の歴史へと導く。私たちがこのダイナミックな“つながり”に目を向けるとき、あらゆる歴史が“私たち”の前に開かれるはずだと思うのである。」Ｐ２２２～３

谷川健一編『日琉交易の黎明』（２００８年森話社）を読む　（２０１０年５月２０日）

本書に登場するキーワードをいくつかあげよう。

キカイジマ城久遺跡群　滑石製石鍋　カムィヤキ　ヤコウガイ　ヤブサ　唐房

朝鮮、西九州、（先島を含む）琉球弧、台湾に至るつらなりと、対岸の中国を含んだ交流・交易・移動移住のなかで、沖縄をとらえ直す新鮮な視点を提供する本だ。時代は主として 11～15 世紀である。

この本で私が注目した点をいくつか紹介しよう。

１）編者谷川の巻頭論文は、次のように述べる。

「東アジアの歴史の大きな流れの中に日宋貿易があったのであり、その日宋貿易の細流として日琉交易が存在した。この視点は、琉球社会が日本に従属したという狭い見地から脱却して、東アジア史の動向に大きく眼を開くことを意味する。その場合の積極的な主役は、宋の客商であり、彼らの活動舞台であった博多は、日宋貿易だけでなく、日琉交易の起点でもあった。ここにして日琉交易は博多を中心とした日宋貿易の分流あるいは補完で

あったと考えることができる。」Ｐ２５

宋の客商たちの拠点である「唐房」が西九州の海岸沿いに点々として作られていたことが、東靖晋「日宋交易」論文で指摘されている。となると、沖縄における「唐営」のさきがけ的なものも、この視点から理解する必要がでてこよう。同論文は末尾でこう締めくくる。

「博多を中心とする日宋交易の波は、ついに琉球列島をも巻き込むことになった。ヒトとモノをめぐる幾つもの渦が東シナ海をぐるぐる回っている。貝塚時代からグスク時代へ――。南島社会における劇的な転換も、そんな中から生まれてきたのである。」Ｐ５０

２）こうしたなかで、長崎産の滑石製石鍋や徳之島産のカムィヤキが、先島を含めて、沖縄全体に広がる。それは、沖縄諸島における農業生産の本格的展開と並行する。また、それまで異なる歩みをしていた先島も、沖縄本島周辺と共有する世界をもつようになる。

３）四本延宏「徳之島カムィヤキ陶器窯跡」は、カムィヤキが、高麗陶工の指導のもとにつくられていたとする諸説を紹介している。

４）最近発掘され、大発見として注目されている、キカイジマ城久遺跡群について、高梨修「城久遺跡群とキカイジマ」論文が、次のように述べる。

「城久遺跡群を形成した社会集団について、現段階では特定するに至らないが、東アジア諸国動乱の時代を背景として日本列島にとどまらない範囲で、大規模の人的交流が存在していたと考えなければならない」Ｐ１４４

「琉球弧を舞台とした南方物産交易は、城久遺跡群の出現を契機としておそらく激変したにちがいない。言い換えれば、城久遺跡群の展開時期に南方物産の大量需要が発生していたにちがいないない。古代並行段階から中世並行段階にかけて、それは外来者の移動を伴う大規模な社会変動を琉球弧に生じさせたわけである。奄美大島を中心とするヤコウガイ大量出土遺跡，喜界島の城久遺跡群、徳之島のカムィヤキ古窯跡群は、そうした社会変動の証左である。これらの遺跡をめぐる人びとの動きは、従前の琉球弧の考古学研究におけるいわゆる貝塚時代後期の停滞的社会の理解では説明がつかない。」Ｐ１４５

こうした記述を読んでいると、当時が流動の時代であっただけでなく、これまでの沖縄の歴史のとらえ方さえ、流動的になってきている印象を持たざるをえない。

ここまで述べたようなとらえ方は、15 世紀以前、あるいは 16 世紀でさえ、琉球列島において、沖縄本島中心的なとらえ方では、不適切であることを明るみにする。たとえば、以下のような指摘に注目したい。

５）１５，１６世紀の奄美について　　高橋一郎「海の古奄美」

「奄美の島々が、琉球という国家からもこぼれ出て、日本とも異なる世界としてあろうとしたことを窺わせる。そのどちらにも属し属さないような空間として、国家に組しない、むしろ国家からはみ出してしまうような位置にあったのが、古奄美という言葉で表徴する十五，十六世紀の奄美社会ではなかったろうか。」Ｐ１５３

「琉球王国に叛くことが可能な集団が存在した。しかも度重なる琉球との戦闘にこらえられる武力を持ち、自

在に移動を可能とするような集団でもあったろう、根生いの豪族と言うより、渡来の豪族とでも言えばいいか。土地に執着するのではなく、その土地を拠点に交易活動などの広がりに生きる人びとが考えられる。」Ｐ１６４

６）下地和宏「陶磁交易と宮古」は、14 世紀における宮古の遺跡急増は、「渡来した人々が定住」したことを想定し、「沖縄あるいは大和からの渡来人」がかかわる、むら建て伝説を紹介している。また、「琉球王府の版図に組み込まれる（１５００年）以前の宮古は陶磁交易を媒介しながら、琉球と対峙するかのように進んできた要素もみられる」Ｐ344 と述べる。

７）大濱永亘「八重山諸島の交易」は、まず先島の先史時代の「第一期」有土器文化（4250～3260 年前）と「第二期」無土器文化（2200～940 年前）の時代について、「その文化源流は、中国南部・台湾やフィリピンなどにあり、集団の移動や種族の交替により先島の先史文化が形成されと」Ｐ３４９と書く。そして、「第三期」のスク文化（十一～十六世紀）について、その前期における交易は「北から南進した大和文化集団が主な担い手」Ｐ３５５だと推理する。そして、「北からの渡来者によって粟・麦や稲作などの農耕が行われ、農耕社会に入った」Ｐ３６３と推察する。

また、「沖縄のグスク文化は、十四世紀後半ころから中国との朝貢・進貢貿易（公貿易）に支えられていた。一方、宮古や八重山においては民間の中国福建沿岸海商らと密貿易（私貿易）を頻繁に行って独自の文化を築いていた。」Ｐ３６７～８と書く。そして、「高価な威信財としての中国製貿易陶磁器などに欲望を掻き立てられた九州海商らが、小集団を組んで宮古や八重山の島々へ渡来し、当時の宮古や八重山の人々により、九州海商と中国福建沿岸海商らとの交易仲介がおこなわれたのではないか」Ｐ３７０という仮説を提起する。

私の家の近くに、藪薩御嶽があるが、それは九州各地の「ヤブサ」とつながるものだろう、との提起が、同書の江口司「南島交易とヤブサ」論文で行われている。

そのヤブサは、「古墓」「祖霊のいるところ」「寄り憑く霊魂」といったこととかかわるという説を紹介している。

これらの指摘は、神々、祈りの問題も、歴史的な交流交易、移動移住のなかで、とらえなくてならないことを示している。

藪薩御嶽の下にある、アマミキヨ上陸場所としての浜川御嶽とヤハラヅカサ、そして、その先のサンゴ礁の切れ目の水路を考えると、ますますその必要が浮き上がってくる。

私たちはどのような神々を継承し、どのような神々を作り出していくのだろうか。それを考える上で、示唆に富んでいる。

グスク時代の人々　集落とグスク　兵士と農業　子育てと教育　（２０１３年３月２９日）

今、當眞嗣一「琉球グスク研究」（琉球書房２０１２年）を読んでいる。興味深い。かつてグスク論争が盛んだったが、本書を読むと、軍事防御施設としての城（しろ）的性格のものとして、論争に終止符を打つ勢いを感じ

る。そのあたりについて、また、本書から学んだこと考えたことについては、改めて書きたい。

今回は、本書から触発されたことを含めて、当時の人々、民衆の暮らしはどうなっていたかについて考えたいことを並べることにする。

グスク時代、それに先立つ貝塚時代も含めて、さらには「沖縄人はどこから来たか」を含めて、関心が高く、書籍が次から次へと出されている。専門書とならんで、「読み物」風なものも多い。

それらのなかで、尚巴志など「英雄」的人物に焦点化する本も多い。私の関心は、「英雄」の後ろに在って、英雄に押しつぶされたり、英雄を押し上げたりする人々、庶民がどういう暮らしをしていたか、ということに向けられている。資料とか遺物は、「英雄」を中心に残ったり、解釈されたりしがちだが、人々の営みなしには「英雄」は存在しえない。

こうした角度から考えたい事知りたい事を並べてみよう。この世界の専門家の方で御存じの方がおられれば、お聞きしたいことでもある。

１）按司がいるようなグスク・グスク周辺には、何人の人々が住んでいたのだろうか。三山とか琉球王国と言われるようになる時期以前には、本島で言うと、１００を超す、あるいは２００を超す使用中のグスクが並存していたわけであるから、本島人口の総計が、仮に 10 万として計算すると、一つのグスク当たり５００～１０００人と言うことになる。グスク相互が提携協同もするが、対抗対立し、時には軍事的衝突があったとすると、各グスクはどのくらいの兵力を保持していたのか。かりに、１０００人の住民がいたとすると、その中で兵力になりうるのが成人男子のすべてだとしても、２００～３００人ほどだ。すると、成人男子のほとんどが、農民かつ兵士となるというイメージが生まれそうだ。いってみれば「屯田兵」のイメージだ。さらに交易交流にかかわる人、鍛冶職人などの多様な生業を兼ねる人もいそうだ。軍人専業者は少ないと思われる。

２）数十人から数百人規模の移住集団が、ある地域に来たとすると、既住者と平和的つながりを作ったのか、既住者を押しのけて居住しはじめたのか。あるいは、既住者を支配してその地域に君臨したのか。その逆もありえよう。そういう際に軍事的衝突が発生しやすいだろう。

尚巴志親子が佐敷に来た時はどのようだったろうか。

３）住民の住居は、グスクの内部だったのか、グスク隣地だったのか、グスクとは離れた所だったのか。立派なグスクでは、当時としては立派な建物の遺跡が発掘されたりしているが、一般住民の住居跡はどうなっているのか。グスクの隣地にフルジマ、ないしは集落発祥の地があったという伝えをもつところもある。さらに、全住民がグスクに住んでいる可能性も否定できず、グスクが集落跡地であるという説も全く否定はできないだろう。

４）こうした住まいのありよう、集落のありようと、子育て・教育は深く絡む。あるいは文化、文化交流ともからむ。

５）女性の役割として、神に関わることは強調されるが、住民共同生活の中で、日常的にはどのような仕事をし

ていたのだろうか。農業に従事し、かつ衣食住生活を担っていただろうが、子育て・教育にはどうからんでいたのだろうか。軍事に関与することがあったのかないのか。

関心事疑問事は広がるばかりだ。

吉成直樹「琉球の成立―移住と交易の歴史」を読む　（２０１２年５月２５日～６月１９日）

本書は、南方新社から２０１１年に出されたものだ。数回にわたって紹介・コメントするつもりだ。

１）著者は、「本書の性格をひとことでいえば、琉球弧の後期旧石器時代から琉球国形成期までの研究史の整理である。」P253 と書いている。全くその通りであろう。

沖縄史、とくに古い時代のことについては専門外である私にとって、この分野の研究を概観するうえで大変有用な書籍である。概観だけでなく、個々の時期の個々の論点、そしてそれらがどのような検討論争状況にあるかなどを知るうえで大変有用だ。事典的に読むこともできよう。かなり以前の研究から最近の研究まで網羅されている。そして、文献史学、考古学、人類学、言語学など、本テーマに関わる諸学を網羅している点でもよい。

そうした本であるから、私が知らないことだらけであるし、これまで定説に近いと思って受け入れていたものでも、認識を改めるべきものが随分あった。そうしたことをいちいち紹介していてはすごく長い連載になって大変なので、印象的ないくつかに限ることにしよう。関心ある方は、直接本書にあたってほしい。

まず貝塚時代以前についてだが、以下の記述は興味深い。

「高宮広土は、琉球弧の歴史について、島嶼世界という環境を考えた場合、世界史的にみて稀有な経験をしてきたとする。

第一に、後期旧石器時代に港川人などのヒト集団が存在したことである。島という環境にあっては、航海技術のほか、食料の獲得や人口維持など、環境への適応の問題があり、世界的にみて一握りの島しか達成しなかったという。第二に、琉球弧の島々には先史時代を通じて、採集狩猟民が継続して存在したことである。多くの島ではじめて定着が可能になるのは、農耕民の植民によってである。第三に、沖縄のように採集狩猟民から農耕民への変遷を経験した島は確認されないことである。第四に、採集狩猟民の社会組織であるバンドから「国家」のレベルまで社会組織が進化したことである。このような例はほかにないという」P241

「貝塚時代の琉球弧は、本土縄文文化の影響を強く受けながらも、さらに南方島嶼世界、ことに台湾、フィリピン、インドネシアなどを源流とする文化やヒトの影響も断続的に受けていた。その影響は、生活全般に及ぶばかりか、言語、ヒトの形質のうえにも及んだと考えられる。」P244

「沖縄人はどこから来たか」が様々な角度から関心がもたれ研究されてきたが、このように多様な移動交流のなかで展開してきた、ということ自体は広汎な共通認識になっているようだ。

それにしても、ここ 20 年余りの研究の進展はすさまじい。にもかかわらず、定説として固まってくるには、研究蓄積がもっともっと必要のようだ。

２）私が沖縄史学習を始めた１９７０年代とは異なって、グスク時代開始期における琉球弧への集団移住説が有力になっているという。

「グスク時代の開始にあたって本土地域から琉球弧へと集団の移住があったことを想定する研究がある（中略）。これは、グスク時代の開始が北（日本）からの文化的衝撃を受けた結果だとする議論をさらに発展させたものと言ってよい。」P159

そうだすると、在来者と外来者との関係が問題になる。

「在地集団と外来者の関係については、さまざまな関係を考えることができるが、外来者がイニシアチブを握りながら在地集団を統率して活動していたとするのが考えやすい形態である。

高梨の議論は、安里進や高宮広土らの北からの移住を想定する議論と同じであるが、喜界島を関与させるかどうかで大きく異なる。その一方で、琉球の言語が日本語と同系の言語になったのがグスク時代であったことを示唆する安里進の議論は、琉球弧における外来者集団の移住の強い影響を評価する点で、高梨の議論と軌を一にすると旨ってよい。　（中略）

「日本」の南の境界域に位置し、境界域の内と外を結ぶ交易拠点が拡散しながら面的に南下し、結果的に沖縄諸島以南を覆い尽くしたのである。沖縄諸島以南の「境界域化」と言い換えてもよい。グスク時代とは、この沖縄諸島以南の「境界域化」の時代を意味することになる。十三世紀頃に琉球弧の中心が沖縄島になるのは、十一世紀代からの、喜界島をはじめとする地域から沖縄島への集団移住があったことが最も大きな要因と考えられる。」P162～3

そこで近年ではこの時期の喜界島をどうみるかが研究関心の一つの焦点になっているようだ。

「喜界島が南方物産の交易拠点であり、喜界島への供給のために生産されていたことを考えれば、徳之島でのカムィ焼生産を管理していたのは喜界島ということになる。（中略）。

カムィ焼、滑石製石鍋、中国産白磁が十一世紀後半に入ってから、琉球弧全域に流通し、それまでほとんど交流の跡がみられなかった奄美・沖縄諸島と宮古・八重山諸島の間を結びつけ、琉球弧をひとつの交易（経済）圏にまとめる役割を果たすことになる。この交易圏を土台として、領域支配を南北に展開したのが琉球国であるとする見解（中略）は、これまで研究者の間で共有されてきたと思われる。」P130

そして、そうした研究には、さらに広く朝鮮半島との深いかかわりを指摘する論がある。

「琉球弧と高麗の関係を考えると、十一世紀～十二世紀に位置づけられる初期高麗青磁、高麗無相陶器が喜界島で出土し、十四世紀に沖縄島の大型グスクで象嵌青磁が大量に出土するまでの間、徳之島で生産された高麗無相陶器の系譜を引くカムィ焼が流通していたことになる。しかも、十三世紀には浦添グスクで高麗瓦が使用される。十一世紀以降のこうした動向は、琉球弧に高麗産品が流通したばかりでなく、カムィ焼の陶工や瓦工などの高麗技術者の渡来が継続していたことを示している。しかも、その過程で、十三世紀頃を画期として琉球弧の中心は、奄美群島から沖縄島へと移行する。城久遺跡群は十三世紀に衰退期を迎え、沖縄島では十三世紀後半から大型グスクが建造されるのである。こうした一連の流れは、琉球弧における中心の移行を一連の動態の中で把握しなければならないことを示唆している。単に奄美群島が衰退し、沖縄島が発展したという、個別的な理解の仕方では不十分だということである。

村井章介は、キカイガシマ海域（九州島と沖縄島の間の海域）は、本土とのはざまであると同時に、もしかするとそれ以上に、琉球と朝鮮半島とのはざまであったことを指摘しているが（中略）、高麗ものの琉球弧を南漸する様相は、境界域がキカイガシマ海域から沖縄諸島へと南下したことを示す。」P129

７００～１０００年前の壮大な現実を突きつけられている印象さえ覚える。

この時代の研究展開は、大変ドラマティックなので、おそらく多くの「研究ファン」がいることだろう。

３）かねてから関心をもっていた沖縄語の成立に関わって、以下のように私には大変新鮮な仮説が書かれている。

「グスク時代以前とグスク時代開始後の遺跡数を示した図を、ひとつの目安として見る限り、グスク時代の開始とともに、新しい集団の流入によって遺跡が急激に増加したことになる。

ただ、高宮広土は、その時期を八、九世紀～十世紀か、グスク時代直前の十～十二世紀頃を想定しているが、この時期では沖縄方言の成立の時期として言語学者の同意は得られないとしている。しかし、二、三世紀～六、七世紀に日本祖語を話す人びとが九州に存在しており、中央では言語が変化したが、周辺では変化しなかったため、変化しなかった言語を使用する人びとが九州から、八、九世紀～十、十三世紀の間に南下して、沖縄諸島に適応した可能性について言及している」P160～1

「マーハが指摘するように、日本語がピジン・クレオールによって形成された言語だとすれば、いかなる言語との間にも明確な系統的な関連を見いだせない理由を説明することができる。また、日本列島の諸方言も、日本祖語から分岐したのではなく、共通語と在地で使用されていた言語との接触によって形成されたことになる。

（中略）琉球語の語彙の中に朝鮮語やアイヌ語、インドネシア語（オーストロネシア語族）などと一致する語彙が存在するとしても、また、それらの言語が日本列島や琉球弧にいたるまで広く分布していたと考えなくとも、共通語に取り込まれた言語に、そうした語彙が含まれていたと考えれば説明することができる。

また、琉球語が本土日本語と、語彙においても文法においても見事な一致を見せる一方で、相当の隔たりが存在している事実は、琉球語の形成が共通語（九州南部方言？）の浸透による結果であることを想定させるとともに、基礎にあった言語の違いとその後の展開を強く反映した結果であるということになる。基礎にあった言語とはオーストロネシア系言語の要素を持った言語であったに違いない。

共通語が浸透したのは点的ではあるものの、喜界島に国家的な行政機関が成立した時代が嚆矢であると考えられる。」P171

このなかで、「日本列島の諸方言も、日本祖語から分岐したのではなく、共通語と在地で使用されていた言語との接触によって形成された」という個所が私には新鮮な仮説だ。と言うのは、私は、無意識に言語には祖語があり、それが分岐していろいろな言語が生まれたという考えに取りこまれていたからだ。

「共通語」が軸になりつつも、多様な言語がチャンプルーしながら沖縄語が形成されるというのは魅力的な提起だ。

まったく別のことだが、「アマミ」「アマミキヨ」「アーマン（オカヤドカリ）」などの語が関連性を持つという説が紹介されているのも、私の興味を引いた。ちょうど今は、アーマンが我が庭・畑を動きまわる時期だ。そのアーマンが沖縄の祖先や神とかかわるというのは、とても興味深い。

４）本書は、１１～１４世紀のグスク時代について、以下のように概括する。

「グスク時代は沖縄島の各地に有力者（按司）が出現した時代である。かれらが居住していた場所が、城塞化した大型グスクである。こうした有力者が現れる前段階に貝塚時代終わり頃以降の農耕社会の発展があるとする見方が有力であったが、農耕の開始は十一世紀を遡ることはなく、こうした短期間では十三世紀後半に登場する広大な浦添グスクなどの築造を説明することはできない。こうした流れの中で「農耕社会論」から、貝交易を基盤とする社会から有力者が誕生したとする「交易社会論」に転換していくことになる。しかし、弥生時代並行期以降の貝交易の過程で、沖縄諸島社会はいったん社会の複雑化に向かうが、奄美、薩南の島々が仲介者として関与することによって財の分散化が起こり、さらにヤコウガイ交易段階では奄美大島が中心的な位置を占めるに及んで、沖縄諸島社会は衰退に向かうことになる。したがって、グスク時代開始期以降の沖縄諸島社会の発展は、グスク時代以降にその要因を見出さなければならない。交易社会を形成する主体になったのは、グスク時代開始期に渡島した外来者たちである。

しかし、交易社会論によるにしても、短期間のうちに急激な財の蓄積を説明することはできても、十三世紀に野面積みの石垣構築技術が登場して間もない時期に、広大な面積を持つ浦添グスクが形成されることになる過程を説明することは難しい。グスク時代に入っても、沖縄諸島ではカムィ焼と貝塚時代終わりの平底土器が共伴するという指摘があることを考えれば、前段階的様相を残しながら突如として大型グスクが築造されたと考えざるをえない。グスク時代より前の準備段階を欠き、石垣構築技術の導入と時を同じくするように大型グスクが建造される過程を説明するためには、その背景に、多くの石工や土木技術者の渡来を想定する必要があるとともに、そうした技術者の動員を可能にした権力者の性格を考える必要がある。」P249

「グスク時代の開始を象徴するのは交易圏の拡大であった。（中略）その契機になったのは、喜界島の交易拠点をはじめとする奄美群島の北三島（喜界島、奄美大島、徳之島）の果たした役割である。（中略）この交易圏、土器文化圏の形成は喜界島の交易拠点に関与した商人を中心とする人びとが拡散し、移住したことによると考えられる。沖縄諸島以南の土器文化が一新されたことは、人びとの移住によってもたらされたと考えるほかなく、それはグスク時代開始期を前後として出土人骨が大きく変化していることによっても裏づけられる。その変化は、縄文人から弥生人への変化に匹敵する。（中略）

沖縄諸島以南のグスク時代の幕開けが喜界島の交易拠点にかかわる人びとの拡散・移住だとすれば、喜界島の台地上の居住地（城久遺跡群）と港湾という関係がモデルになったと考えられる。この関係は、後の浦添グスク―牧港、今帰仁グスク―運天、首里グスク（首里城）―那覇などの関係に継承されているように思われる。」P175-6

「グスク時代に入ると台地上に集落が形成されるのも、また貝塚時代後期後半からグスク時代初期にかけて、石灰岩台地の洞窟に遺跡が多くみられるのも（中略）、農耕適地を求めてというよりも、外来者と在地の人びととの軋轢の結果ではないかと考えられる。貝塚時代終末の、勝連グスクの近くの平敷屋トウバル遺跡から出土している金属製の武器―刀の鐔や鉄鏃―にしても、按司の出現にかかわる資料（中略）というよりは、外来者との間の戦闘を物語る資料ではなかろうか。」P184

「こうした本土様式の甲冑を身にまとった武者の存在は、本土からの影響が、グスク時代開始期以降も続いていたことを推定させる。」P184

外来者との戦闘などは、私にとっては初見であり、大変刺激的な指摘の連続である。これらの文が示すように、

１９８０年代までの有力説とは、かなり異なる把握が有力になっているようだ。

つまり、本書が扱う時期の研究は、ここ２０年余りの間に猛スピードで蓄積され、２０～３０年前の有力説の多くが、修正を加えられている。

では、その時期以降の５００年余りの時期についてはどうか。私の学習不足があるので、きちんとしたことはいえないが、その研究発展も、それ以前の時期と比べるほどでないとしても、通史枠組みには一定の変更を求めるものかもしれない。

このことを教育史にかかわっていうと、戦前に形成された有力な枠組みが、１９６０年代から１９９０年代までの研究によって一定程度修正されてきた。私の「沖縄県の教育史」は、その最後の時期に当たる。そしてそれ以降、研究の量が大きく蓄積している。それらはそろそろ全体枠組みそのものの新たな修正を求め始めていると言えよう。それには、本書が示すような教育史以外の研究成果も強い刺激を与えるだろう。

５）これまでも、グスク時代の沖縄と倭寇との関連が指摘されてきたが、本書は、そのことを重視し、端的に次のように主張する。

「(明による）琉球への優遇策が倭寇対策であることは、倭寇活動の活発化、琉球への優遇策、倭寇活動の減少（十五世紀半ば頃)、琉球への優遇策の廃止という一連の流れを考えれば一目瞭然である。」P251

このことをより詳しく、村井章介論を紹介していく。

「交易の舞台に琉球をおしだしたのが明の海禁政策――明が中国人民を海上の反権力集団（特に倭寇）から切りはなそうとして、その下海および海外渡航を禁止した――であり、その結果、中国商人はシナ海上の交易から撤退を余儀なくされ、地の利を生かしてこの空隙を埋めたのが琉球であった。そして、明側からみれば、海禁により自国商人からの入手が不可能になった海外産品を入手するために、琉球という国家を自己の体制のもとに編入した。比喩的に言えば、琉球は明の貿易商社になったのである。その根拠として、以下の四つがある。①明の福建地方から渡来した人びとが那覇の一角に久米村と呼ぶ居留地をつくり、日本以外の諸外国との外交を専掌した。『歴代宝案』はかれらのもとに伝えられる。②明初に琉球が対外交易に用いた船は、すべて明皇帝から賜与されたものであったことが『歴代宝案』第一集から知られる。③琉球の国家中枢にあって貿易に深く関与した王相・長史・典簿などの官職は、明の王相府または王府の制に拠るもので、当初は直接明から任命されていた。④明は福州に琉球専門の市舶司と公館（柔遠駅）を設けて、その使節を優遇した。しかし、これは裏を返して言えば、琉球の貿易実務上の担い手が中国人だったことを意味しており、海禁政策によって行き場を失った中国商人は、琉球の国営貿易の請負に合法的な活動の場を見いだした。それは琉球が交易を行う東南アジア諸国でも事情は同じであり、海禁政策のもとで中国商人が合法性を獲得するための一形式であった」P215～6

「明に侵攻、密輸していた倭寇を琉球に引き受けさせることによって、一三八三年（洪武十六）以降、琉球の朝貢回数が急激に増えたということになる。琉球を舞台に、倭寇の非合法的な活動を、朝貢という形式に転化させたということである。」P218

鉄についての察度の「常識」的話も、次のように書く。

「察度は鉄を買い入れ、農具をつくって農民に配ったとされる。しかし、『朝鮮王朝実録』(一四七九年）の、与那国島に漂着し、沖縄島まで見聞した金非衣らの話では、与那国で「鉄冶有り。而ども耒耜を造らず」とある

ように、鉄製の耕起具（スキ、クワ）が存在する事実を窺うことはできない。安里進は、こうした状況について、鉄が欠乏していたというよりは、耕地拡大に向かわなかったためであり、鉄は農具よりも武器に大量投入されたとする（中略）。確かに、先の『朝鮮王朝実録』の漂着記事では、沖縄島では刀剣、甲冑などが存在することが述べられている。」P238　　※耒耜とは農具の「すき」のこと

「第一尚氏の時代である十五世紀の半ばまで倭寇は活動するが、その活動が衰退していくとともに琉球に対する朝貢の優遇策が廃止されることも、倭寇の「受け皿」としての「三山時代」から倭寇的な性格を依然としてとどめる第一尚氏時代の沖縄島の勢力のあり方を示すものと言ってよい。」P252

これまでのグスク時代にかかわる有力説とはかなり異なる、これらの紹介・提起は、私にとっては大変刺激的である。これらが新たな有力説とされるなら、たとえば、次のような問いが生まれてくる。

当時の沖縄の産業別人口構成はどうなっていたのか。端的にいって、交易従事者と農業従事者との比率だ。そして、各々の従事者がどのような人々だったのか。

交易をになう組織・共同体はどのようなものだったのか。これまでは農業共同体としてイメージされていたシマ共同体は、交易とはどのような関係にあったのか。

信仰・神はどうなっていたのか。特に、農業と交易との関わりのなかで。

複数の文化が接触・交流・協同することが、何をもたらしたのか。

交易がこれだけ重要な位置にあったとするなら、複数の言語使用が求められるが、その実態はどうだったのか。そこに教育問題が浮上するが、それはどうだったのか。

このように、新たな問いかけがいくつも生まれてくる。

６）「三山」についてのこれまでの「しろうと常識」を打ち砕いて、次のように述べる。

「「三山」とは、倭寇、密貿易者などとして活動している（していた）勢力を指していると考えることができる。もちろん、倭寇の「受け皿」になる以前からの在地勢力も、その中に含まれる。」P219

さらに詳しく、次のように述べる。

「明が琉球国に朝貢を招諭してから十数年を経て、はじめて倭寇勢力を朝貢体制に取り込む「三山」の体制が「形成」されたと考えられる。しかし、山南では、山南王承察度と山南王叔汪英紫氏が山南の朝貢主体として分立しており、内紛ーあるいは在地勢力と外来勢力の間の闘争かもしれないーの絶えなかった状況を窺うことができる。また、中山王察度が山南王子承察度の送還を朝鮮に求めていること、山南王温沙道が中山王に追われ朝鮮に亡命していることなどから、中山と山南の関係においても同様の状況があったと考えられる。山北にしても、官生の派遣が認められていない―「向化」していない―ことから考えて、倭寇活動を繰り返す、中山、山南とは異質な勢力だったのではなかろうか。

明が周辺諸国に使者を送り招諭し、各国が朝貢し、一応、朝貢体制を形成した後に琉球に使者を送り招諭したのは、琉球の倭寇活動の外堀を埋め、朝貢体制に引き込むための方策だったと考えることもできる。また、琉球国が形成された後においても、明は、倭寇と結びつきかねない潜在的脅威として琉球国を認識しているが（『明実録』一四五二年）、これは第一尚氏という国家が形成されたものの、琉球には依然として倭寇としての性格を持つ勢力が存在していたことを物語る。」P230

さらに、「三山」・倭寇と明との関係だけでなく、南北朝時代の九州における対立抗争とのからみで、次のように述べる。

「征西府・南朝方豪族・南朝系倭寇という繋がりを想定し、その倭寇が琉球諸島で活動したとする見方を提示しだのが稲村賢敷（中略）である。稲村は、倭寇が菊池、松浦の軍勢と表裏をなす水軍であること、征西府の勢いと倭寇の活動の間には相関関係が認められるが、それは倭寇の朝鮮への侵入が、南朝方の軍糧確保を主な目的としていたことによると指摘する。この時期の倭寇が征西府と親密な関係にあったことは、明の洪武帝による再三の倭寇禁圧の要請にもかかわらず、これを黙殺していること、これとは逆に九州探題側は倭寇を敵視し、高麗と連携して倭寇討伐にあたっていること、南朝方の松浦氏は自らの所領を根拠地とする倭寇の活動を禁止していないことなどからも裏づけられるとする。やがて、南北朝の争乱が終息し（中略）、南朝方の勢力が衰退すると、倭寇も影を潜めなければならなくなったが、にわかに衰退したわけではなく、漸次南下し、幕府の力の及ばない琉球諸島に根拠地を定めたと推定するのである。

この稲村の倭寇論は、折口信夫の「琉球国王の出自」を歴史学の立場から裏づけたものと言ってよい。」P222

このあたりについて不勉強のままできた私には、刺激的な話の連続だ。

なお、これらの一連の叙述の最後、つまりは本書の末尾に次のような記述がある。

「琉球弧の歴史は、いつの時代を取り上げても魅力的な「難問」を突きつけてくる。それは、何ひとつ「与件」として議論することを許さないということでもある。たとえば、「琉球弧には本土ではすでに失われてしまった文化がある」という表現をしばしばみかけるが、琉球弧の文化の成立過程を考えた場合、具体的に何を指すのか、きわめて曖昧な表現であると言わざるをえない。「琉球弧には独自の文化がある」という場合もまた同じである。」P252

注目すべき指摘である。だが、「独自」とは、歴史の流れの中で形成されてきたし、いまも形成しているものであって、「もともとある」ものではない、ということに留意したい。

だから、「独自」なものがあることを否定することはできない。より正確に言えば、「もともとある独自なものはない」、ということにとどまるのではなく、『歴史のなかで独自なものが形成されてきたし、これからも独自なものが形成されていくであろう』というべきだろう。

沖縄を固定化し絶対化する「沖縄ナショナリズム」的なものに陥らないよう留意しつつ、かつ多様な世界との交流の中で、「沖縄独自」なものを形成する営みが促進されてよいだろう。

グスク時代の中城湾岸　「西原町史第一巻通史編」を読む　（２０１１年１２月８日）

私は、本書のなかの、「第四章　西原の教育　第五節「文教のまち西原」へ」を執筆した。一昨年、執筆予定者に事情が生じて急遽依頼され執筆することになった。西原に 14 年間居住したこともあり、また 1972 年以降の教育史を書くと言う、新たな作業に興味もあった。そして、資料整理をしてくれた事務局の協力もあって、無事書きあげることができた。

立派な本である。町民に親しんでもらおうという趣旨で、上下二巻を、信じがたいほどの安価で販売もなさっているそうである。

私は、執筆者ということで、贈呈していただいた。時間の合間に目を通させていただいた。上下合わせて８００ページの大判の本だ。

本書は通史編だが、その他にも何冊にも及ぶ各論や資料編がある。これらを通観するのは、なかなか大変だが、西原を知り考えるうえで、大変貴重なものだ。

これらを土台にして議論を深めていけば、「西原学」とでもいうべきものの構築へとつながっていくかもしれない。論によっては、その記述だけではもったいないものが多く、さらなる深化を期待確信させるものが多いからでもある。

このブログで紹介するのも、大変な分量で不可能なので、私が学ばされた記述をいくつか紹介しておきたい。

まず冒頭の「第一章　西原の原風景　第一節「稲作の村」から「糖業の村」へ」（安里進執筆）は、西原史の「原風景」を知るうえで、興味深かった。その一節には、次のように書かれている。

「小さな集落が、谷底低地の小規模水田の経営で細々と生計をたてていたのだろう。こうした傾向は、西原だけでなく、中城湾岸の海岸低地の水田地帯に共通する現象であり、西原をはじめ中城湾岸地域は後進地域であった。

一方、中山王国や山南王国の拠点になった浦添・糸満地域は、石灰岩台地地帯で畑作が広く展開していた。グスク時代は畑作の生産力が高かった時代で、琉球の王権は、集落数や人口規模が大きかった石灰岩台地の畑作地帯から出現した。（中略）

ところが、十五世紀になると中城湾岸地域の状況が一変する。佐敷を拠点にした思紹・尚巴志父子が三山統一を達成し、第一尚氏王統を打ちたてた。また、北山征服で功績をあげた護佐丸は、読谷の座喜味グスクから、中城湾岸を望む中城グスクに移動してきた。そして、勢力を伸ばしてきた勝連グスクの阿麻和利、中城グスクの護佐丸、首里王府の第一尚氏が三ツ巴で対立するようになる。第一尚氏時代末期の中城湾岸の豪族たちが引き起こした動乱は、おなじく、中城湾岸の西原を領地にしていた金丸（尚円）のクーデター（政変）による第二尚氏王権の樹立で幕を閉じた。

十三、四世紀にいち早く王権が誕生した地域は、沖縄島西海岸の石灰岩地帯、つまり畑作地帯の浦添・糸満だった。一方、十五世紀の琉球王国を動かした尚巴志・護佐丸・阿麻和利・金丸などの英雄は、いずれも中城湾岸を領地にしていたので、この時代を「中城湾岸の時代」とよんでもよいだろう。

なぜ、グスク時代に過疎地帯だった中城湾岸地域から、十五世紀には時代を揺るがす英雄が相次いで輩出したのだろうか。その秘密は、二期作の普及による生産力の増大にあると考えられる。

（中略）十三、四世紀のグスク時代遺跡の分布と十六、七世紀の『絵図郷村帳』の村の分布を比較すると、十

五、六世紀における中城湾岸地域での集落増加傾向が著しかったことがわかる。」P32-3

歴史の表舞台が、地域ごとの生産特性と深く結びついていることが、わかりやすく示されていると思う。

玉城の史跡－－－玉城ユンタク第四回での話　（２００７年2月１９日）

２月１６日の会では、垣花グスク、垣花樋川、ミントングスク、仲村渠樋川、タマグスク、糸数グスク、ももとふみあがりの墓などといった玉城の史跡についてユンタクの花が開いた。私の印象に残った話をいくつか記そう。

１）史跡といっても訪問者を受け入れる態勢が整っていないものが多い。「知る人ぞ知る」といったところにあるものも多い。〇〇バス停５分と書いてあっても、その場所に行き着ける可能性はゼロに近いところもある。また、史跡が私有地になっていて、所有者が訪問に迷惑を感じているところもある。国・県・市などが史跡に指定するにしても、そのあたりの態勢をつくる必要があるが、その態勢づくりに難しさを感じるところもある。

２）「本丸、二の丸」などという表現のように、グスクを本土の「お城」と同じものであるという前提での記述がガイドブックにみられることがある。グスクのなかで、本土の「お城」に似た軍事的機能地域支配的機能をもつものが多いとはいいきれない。それ以外の、たとえば聖地的な色彩が強いものも見られる。

３）玉城には、第一尚氏以前の史跡が大変多い。それらにまつわる伝説も多い。伝説には、なんらかの事実をうかがわせる場合がある。それらをどのように読み解いていくのか、興味津々である。しかし、その読み解きの一説が一人歩きして、事実であるかのように扱われることもある。とくに１３世紀以前については、まだ判然としないことが圧倒的に多い。それにしても、伝説にはなんらかの興味ある事実が反映している可能性もある。それをどのように読み解くのか、今後の研究に期待したい。

４）その際に、定住者が継承してきたという面だけでなく、多様な人々が移住し、交流してきたなかで、形成され伝播され継承されてきたという面を見なくてはならない。とくに、１３世紀以前には、かなりの移住交流があったことがうかがわれる。だから、単純に未開→文明化などという図式で把握するのではなく、文化伝播交流の視点のなかで把握することが有効なことがあることに留意したい。ヤハラヅカサとか稲作発祥伝説などには、そうした視点からの検討が求められよう。

５）タマグスクにおける雨乞いにかかわる伝説は、興味深い。

６）日本の名水に指定されている垣花樋川の水は水質上、現在は飲めないそうだ。残念である。

７）私はまだ見ていないが、仲村渠樋川には風呂が復元されているとのことだが、その風呂は大正期の様子の復元だとのことである。史跡を復元するといった場合に、いつの時期を復元するのか、ということは一つの論点である。と同時に、歴史的なものは、固定的ではなく、歴史展開とともに作り替えられていくという面をもっている。遺跡になったり、伝統保存会がつくられたりしたときには、現在－未来への生命力が弱まったことになる。沖縄民謡が生きているというのは、現在もなお創作され、未来につながっているからである。その意味で、「保存」ということ、「昔のものをそのまま残す」ということには、留意が必要である。

久米島文化財巡りツアー

（２０１１年７月２４日～８月４日）

１）伊敷策（イシキナハ、チナハ）城跡

９日午後は、ラッキーなことに、久米島博物館「久米島文化財巡りツアー」の日程があり、私たちもそれにいれてもらった。しかも、沖縄の著名な民俗研究者であり、博物館名誉館長の上江洲均さんの解説付きである。私も、かれの文には何度か触れ、いろいろと学ばせてもらった。

半日の日程で、久米島の西半分の文化財を総当たりするといった感じである。東半分はまたの機会だ。

数十名の参加者の大半は地元の人だろうが、改めて久米島発見ということであろうか。しかし、それぞれの分野での専門家といった方々が多い。

１番目は、博物館隣にある、伊敷策（イシキナハ、チナハ）城跡である。14～15 世紀に沖縄本島からきた按司がつくったとのことである。

本島の歴史のことはよく知られてきたが、離島での歴史と本島とのかかわりについては、奄美などをふくめて、興味深いことが多そうだ。久米島は「球美」と古文書に記されたこともある。交易・交流の重要な中継地点ないしは拠点だったろう。

城の裏手には、川があり、交易に利用したようだ。糸数城も、近くに雄樋川があり、交易に使ったようだ。

久米島は、島尻と関係がある話を聞くが、ここもそんな感じをさせる。

上の写真は、宇江城方向をのぞむ場だ。川は、すぐ下にあるようだ。

２）具志川城跡

右の写真は具志川城跡入り口

島の北西部の海沿いに立地。立派なグスクだ。国指定の史跡になっている。15 世紀、もしかすると 15 世紀に築かれたが、16 世紀初め首里軍にほろぼされたという。

グスクの入り口には、いまでも君南風（チンペー）が坐って、祈る場所がある。聞得大君に次ぐ重要な神女である。上左の写真。石台になっている。今でも祈っているようだ。

「おもろさうし」にも、唐や大和の船が、酒や財宝をもってきたとあるとのことだ。発掘調査でも交易品が出てくる。すぐそばの海岸は、大和泊と呼ばれている。港というほどでもないが、小さな船はいまでも接岸できそうだ。上右の写真がそうだ。

中左の写真は、城壁内部。広い。ここに何があったのだろうか。中右の写真は、一番奥の場所。今は森になっている。四方に広がる景観もよい。下左の写真は、西の方向に海を見る。海の向こうは、中国大陸。島の面積などを考えると、後で紹介する宇江城城跡と合わせた二つのグスクの規模の大きさはすごい。15 世紀における繁栄ぶりを示すものといえよう。

写真は、城壁内部のものが中心だ。下右の写真は、城壁から外に出る通路。

３）堂の比屋屋敷

堂の比屋（とーのひや　と読む）は、１４世紀後半に、中国から養蚕技術を久米島に持ち込んだといわれる人。その方の屋敷跡に拝所がある。右の写真。

その近くに面白いシーサーがあったので、おもわず撮影してしまった。左の写真

４）宇江城城跡

宇江城城跡は、海抜３１０メートルの宇江城岳の頂上に築かれたグスクの跡。右の写真は、麓から見る宇江城城跡で、随分高く見える。１５０６～１５１０年ころ、首里城軍によって、「落城」させられる。左の写真は、敷

地一帯。北山、中城などに比すというと、いいすぎかもしれないが、立派な跡だ。島全体を見渡す位置にある。

上の写真２枚は宇江城城跡から久米島全体を見渡したものだ。

内田晶子ほか「アジアの海の古琉球」（榕樹書林２００９年）を読む

（２０１０年１２月２９日）

正式タイトルは、内田昌子・高瀬恭子・池谷望子「アジアの海の古琉球―東南アジア・朝鮮・中国」である。

先日、著者たちの講演会が那覇であった。私は出なかったが、恵美子が主催者団体のメンバーであったので、本書を入手してきた。そして、恵美子の代わり？に、沖縄史に関心を持つ私が読んだというわけだ。

13 世紀後半から 17 世紀初めにかけての、沖縄とアジア各地との『国』レベルの交流史を、「歴代宝案」「明実録」「朝鮮王朝実録」などの文献史料をもとに描いた専門書である。東南アジア、朝鮮、中国の三部構成で、著者の一人ひとりが担当して執筆している。

通りいっぺんの知識しかない私にとって、おおいに学習になった。古琉球王国の存立基盤の柱であった「国家」間交易の様子が、原史料に基づいてかなり克明に描かれている。

関心のある方には、貴重な問題提起も多く含まれているようだ。美化しがちな事柄も客観的に描かれている。

この作業は、いくつかの立場を変えた史料、さらに様々な研究論文などにあたるなど、大変煩雑なものであるが、見事になさっている。とはいえ、専門外の私にはコメントすることはできない。

こうした文献をもとに、専門的研究討論が活発になされ、通説をひっくり返す、ないしは補強するような歴史像形成が進むことを期待したい。

私の専門分野の一つの沖縄教育史にかかわって言うと、この時代にこうした教育史史料はおそらく存在しないだろう。だが、他の文献を丁寧に読みこんで、間接的に教育的営みを知ることはできよう。そのほんの入り口を、拙著「沖縄県の教育史』(思文閣 1991 年)でしたのだが、いつか再作業をしなくては、と思っている。

上里隆史「琉球古道」（河出書房新社）を読む　（２０１２年7月２７日、８月２日）

１）道のない集落

２０１２年、つまり最近出版されたばかりの興味深い本だ。実際に現地を歩くガイドブックとしても使える本だが、ここでは理論的な問題提起に絞って、２か所の紹介とコメントをしよう。

まず一つ目。

「海域世界の交易拠点となった那覇港には外来者が多数居住し、国際的な様相を見せていた。那覇の港湾都市の特徴は、外来者の居留地が存在するとともに、外来宗教の施設が集中的に立地していたことである。禅宗寺院や権現社、中国の航海神である天妃宮や道教の廟などである。このような状況は当時の南西諸島のどこを探してもない。いわば沖縄の村落社会に唯一、那覇という「異国空間」が存在していたのである。

外来宗教の施設が集中するのは、それを信仰する者がいたということを示している。神様というのは突如として天から降りてくるわけではない。それらを信ずる人々がもたらしたもの、つまり那覇が外来者の居留地だったことと連動している。」P89

那覇が、こうした多様な文化宗教が共在する場であったことはよく知られている。そして、そこで展開された文化・宗教活動は、教育活動を含む。そこには、各々の文化宗教をもとにした子弟の教育、そして異文化間をつなぐ通訳をはじめとする諸文化間をつなぐ専門家の養成教育という面がある。

ところで、「沖縄の村落社会に唯一、那覇という「異国空間」」という表現は、少々気になる。それは、沖縄のほとんどが「村落社会」であって、那覇だけが「異国空間」であるとみなしているからだ。近年の沖縄史研究が明らかにしているように、１１~１５世紀というのは、東アジアの諸地域が激動状況にあるなかでの琉球列島であり、沖縄内外における交流のみならず移住が激しく行われており、沖縄の「村落社会」も、固定的継続的なものとはみなしきれない流動的な性格を色濃く持ち、さらに農耕だけでなく交易・人口移動を含む世界だったということである。そうした諸村落のなかにあって、１３~１４世紀に那覇が海外関係での比重をぐんと高めていき、１５世紀後半になると、本書が表現するような事態になった、というべきだろう。

道とは直接かかわらない「余談」になったが、私にとって驚き、というか初耳の話は、本書の次のような記述だ。長くなるので、２回に分けて紹介する。

旧親泊村と旧今帰仁村についての記述である。

「集落の屋敷囲いは複雑に入り組み、そこには集落内を移動する街路がない。まるで蜂の巣のようなつくりなのである。我々が沖縄の伝統的な集落としてイメージする竹富島や渡名喜島、備瀬の集落のように碁盤目の区画ではない。

実はこのような集落は一八世紀頃から中国の風水思想にもとづいて再編された。竹富島などの沖縄の「伝統集落」と呼ばれる集落は、歴史的に見れば「新しいもの」に分類されるものなのだ。それ以前の集落は、内部に街路がなく不規則な細胞状の構造をしていた。今帰仁グスクの城下町は一六六〇年代に海沿いに移転したので、再編前の集落のかたちを残す「タイムカプセル」なのである。」P104~5

そのことをさらに分析整理して、次のように述べる。

「こうした街路のない細胞状の集落ではどのように内部を移動するのだろうか。実は屋敷囲いの石積みには切

れ目があり、そこが門となって他の区画につながっている。移動の際には他人の敷地内をお邪魔して通過するような仕組みになっているのである。

（中略）

街路のない不整然の区画を持つ古琉球の集落跡は、沖縄島ではまず見られないが、旧今帰仁村跡以外には、南部の南城市にある糸数グスク（糸数城跡）の隣にある蔵屋敷遺跡がそれに該当する。後世に農地として改変されたので当時の姿そのままではなく、石積みが後の時代のものである可能性もあるが、不規則につながる細胞状の区画を一望できる場所である。

今帰仁グスクの獣道のようなメインストリートと街路のない古琉球の集落跡から言えるのは、当時の沖縄で「道」を設置・整備する意識が希薄であったことである。そもそも「道」とは何であろうか。ある土地を移動・輸送する用途のために特化させた場所が道であり、基本的に個人の所有にはならない。移動するための利便性が考えられ、そのスペースは障害物が置かれず、おおむね平坦なように整地される。（中略）

現代に生きる我々は道を当たり前の風景として見ているが、よく考えてみると道とは人が生活するうえで生み出した「発明」であったともいえるのではないだろうか。当時の人々にとっては、屋敷地は居住とともに移動する場所でもあり、その用途が明確に分化しておらず、「道」という概念をはっきりと持っていたかどうかもわからない。」P106~7

なるほど、と思う指摘だ。人々の生活のありようもからんで、大変示唆的なものだ。

ここで述べられている蔵屋敷遺跡は、我が家から車７，８分で行けるところだ。糸数遺跡には何度も訪問しているが、蔵屋敷遺跡は、遺跡保存作業中に近くまで行ったが、しっかりとは見ていない。見に行こうと思う。

２）風水　抱護林　馬場　道の今後

次の記述に注目したい。

「今帰仁グスクの周辺にあった旧今帰仁村・親泊村とは対照的に、移転後の今泊村は整然とした碁盤目状の区画に街路がはりめぐらされ、屋敷の向きも揃えられている。屋敷囲いにフクギの木が並び、集落の中央にはなぜか二車線の直線道路がある。フクギの並木は防風林だとの説明がよくされる。確かにそうした効果はあるのだが、この木が植えられた当初の目的はそうではない。風水のためである。

風水とは簡単にいえば、大地には「気」というエネルギーが存在しており、その気をいかに取り込み、人や村の繁栄に活かすことができるかの方法である。

大地には気が湧き出るポイントがあり、その気が水に沿って流れ、風によって飛ばされてしまうという性質を持つと考えられていた。沖縄ではこの気を集落や屋敷内に取り込むため、樹木で囲うことによって気が風で飛ばされることを防いだ。「伝統集落」のフクギ林にはそうした役目があり、防風林としての効果は副次的にもたらされたものにすぎない。樹木によって集落や屋敷を包みこみ、気を逃がさない方法は「抱護」と言われ、その樹木は抱護林と呼ばれる。」P108~9

風水について初心者である私には、「初耳」であることが多い。だが、地域に暮らしていると、風水にかかわるこのような説明に「なるほど」を思うことが多くなる。抱護林は南部各地でもあったろうが、戦争で破壊された

ためか、見ることは少ない。私が住む中山でもそうだ。

「今泊村の集落のど真ん中にある大きな直線道路は、実は王国時代には馬場だった場所である。先述のようにかつての沖縄には馬がたくさん飼育されていた。近世期の各村では農耕やサトウキビを圧搾するローラーの動力源などに馬を使ったが、馬場では「馬勝負」、すなわち競馬が娯楽としてさかんに行われた。大きな直線道路はその名残なのである。馬場は各集落に存在したが、現在確認されているだけで実に一九八ヵ所にのぼる。今泊の馬場跡の前には神アシャギという神殿と公民館が立地していて、集落の中心に馬場があったことがわかる。」P110

馬場は、中山でも、ここにあったという話を聞いた。人々が集まる場所は、集落移動もあって、かつての馬場あたりではなく、現在の公民館周辺へと移っている。

道が、自動車移動の手段化してくると、人々のつながりのあり方も変わってくる。では、今後どうなるのだろうか。今、中山集落を真っ二つに割る形で通る国道３３１号線のバイパス道路建設が進む。完成後は、どうなるだろうか。かつては、この道路で、綱引きも行われたというが、再び、そこで行われるようになると面白いだろう。もっとも現在の国道は、かつて軍道と呼ばれたものだが。旧道は、馬場があったあたりを通る。

建設中のバイパスは、字中山の聖地の真下をトンネルで通る。新道路は、こうした風水や聖地よりは効率原理が優先的だ。

こうした道の変化をたどることは、人々の暮らし・思想・信仰ともからんで興味深いことだ。

３４．近世

沖大地域研究所編「薩摩藩の奄美琉球侵攻四百年再考」　（２０１１年7月１４日）

正式の書名は、沖縄大学地域研究所編「薩摩藩の奄美琉球侵攻四百年再考」芙蓉書房２０１１年である。２００９年５月徳之島で、このテーマで開かれたシンポの報告である。色々な角度からの発言が収録されている。「侵攻」の際、徳之島で激しい戦いがあったことなど、私にとって知らないことが多々収録されている。

沖縄と薩摩という間で、「埋もれがちにされる奄美」だが、注目すべきことが多い。１４世紀以前でいえば、喜界島の動向、カムイヤキの生産流通など、南西諸島から九州にかけて重要な場であったことが、近年の研究で次々に明らかにされている。その後も、今日にいたるまで、複雑であるとともに、興味深い歴史を形成してきた島々である。

私自身は、奄美にはほんの少ししか訪問したことはない。いつか長期滞在して、いろいろと感じ考えたい地域である。そんな気持ちを促進する本である。

久米島文化財巡りツアー（近世）　（２０１１年7月２６日～２８日）

１）小港松原墓　坂井了爾墓

文化財として残りやすく、かつ見学しやすいのは石造物の墓だ。木造建築はなかなか残らないからだ。あれば、すぐに一般の観光ツアーコースに入るだろう。

今回のツアーは、かなりマニアックで、観光案内にないものが多い。その一つは、小港松原墓だ。蔡温が風水を見たということで話題性が高い（左写真）。もう一つ、当初予定にはない墓を見た（右写真）。様式が特別のものらしい。ついでに書くと、久米島には門中墓はないようだ。沖縄のなかもいろいろだ。

明治初め、士族が久米島開拓をしたが、それを支援した県職員の一人に、坂井了爾がおり、この地で亡くなるが、多くの人に慕われたのか、墓がある。西美濃出身ということだが、偶然、私の出身地と同じだ。

「大和」風の墓だ。

２）兼城御嶽・植物群落

ノロの拝所であり、航海安全祈願の場所とのこと。右写真が兼城御嶽。左写真が植物群落。神聖であるために、原生林が残っているということだ。

隣には、具志川間切蔵元跡があるが、今は雑草が茂るのみだ。

ペリー艦隊乗組員が新原玉城仲栄真にきていた

（２００７年４月８日）

このところ、玉城の歴史について学んでいる。今は、昨年刊行された玉城に関する歴史史料を見ている。いろいろとおもしろい。

そのなかに、１９世紀半ば沖縄にきたペリー艦隊の乗組員が、周辺調査のために、新原の原のガマにテントをはって滞在し、周辺住民に食糧を「押し買い」（押し売りの反対）をした記録がある。仲栄真（中山の旧称）の稲福さんからサツマイモを押し買いしたとの記録もある。

（稲福姓は、隣の字玉城居住なので、ちょっと疑問が残る）

この他、向いの奥武島には、多様な海外船舶が登場している。

すぐ近くの具体的な場所まで鮮明に記されるなど、海外関係がきわめて具体的に記されていて、大変興味深い。

この他にもいろいろと興味深いことを発見した。こんな学びをためていって、いつかなんらかの形にしたいな、と願う。

オモロ　あきみよ　ペリー艦隊　新原　ジュゴン　南城市史　（２０１２年1月２４日）

オモロには、玉城の地名がいくつも登場する。（Ｐ１０４）

そのオモロの一首に関わって、次のような記述がある。

「南城市玉城の字中山の創始者は新原の海でジュゴンをとって生活していたという伝説がのこっている。このことは知念半島から奥武島にかけては三五〇〇年前から豊かな海の幸に恵まれていたといえよう。（中略）おもろさうし巻十三にも「アキミヨ」が謡われている。「あきみよの泊、聞ゑ親泊、肝晴りゑや、やちよこ　はんたま掟　按司直り掟　うらはるの泊　やふさすの泊」とある。玉城の百名海岸のヤブサツの御嶽の下の浜から沖のリーフにのびている水路がアキ澪の泊で、そこは浦原・藪薩の泊と称していたようだ。その親なる泊にハンタマ掟という役人や、やちょこと称する女頭たちが居ならんでいる情景をうたっている。」ｐ６０－６１

我が家近辺のかなり遠い時代の様子が分かる記述だ。あきみよの水路は、タマグスクや藪薩の御嶽からはっきりと見える。

ペリー艦隊の一部が、この近くにきて、地元農民から芋の「押し買い」をした話は、玉城村史で読んで知った。その詳しい事情が本書に、以下のように以下のように記述されている。

「ペリーは、日本の開国に失敗した場合は琉球を占領する計画であった。そのこともあって、ペリー艦隊の一行は沖縄島の沿岸地帯や内陸部を詳細に調査していた。本島南部の東海岸一帯では、蒸気船の停泊地調査のため玉城間切の百名新原を拠点に久高島や知念あたりの入り江の水深などを調査した。

彼らは新原の浜のウフガマーでキャンプを張っていたが、地元住民としばしばトラブルをおこしていた。

米人らは、食料を確保するため釣り船から魚を無理やり奪ったり、斧で脅してブタを買い取ったりしていたのである。さらに、浜辺においてあったサバニを壊し薪にするなど、傍若無人な行動で地元民を困らせていた。外国人との交流は勿論、物品の売買を禁じられていたので、どうしても米大による強引な取引（押し買い）になったのである。王府の役人は、彼らの行動を監視はしていたものの、それに介入することはなく報告書にまとめて評定所へ提出するだけであった。

さすがの王府も、王城での米人の問題行動を看過するわけにはいかず、通訳をつけて意思の疎通をはかるよう方針を転換した。その後は、米人の調査隊が立ち寄る地域では、通事を立ち合わせて地元民と交流させたのでトラブルはおこらなくなった。玉城での教訓がいかされたのである。」　Ｐ１６９

こういう話は、地元の年配の人でも意外に御存じない。もっと語り継がれてもよいと思う。

３５　近代

沖縄近代史と沖縄おこし・人生おこし　「沖縄県史近代」を読む（２０１１年１１月５日）

２０１１年３月末に発刊され、正式タイトルは、財団法人沖縄県文化振興会資料編集室編「沖縄県史各論編第五巻近代」沖縄県教育委員会発行である。沖縄県史は、１９６０~７０年代の発刊以来、数十年ぶりのことだ。各論編はすでに３冊出ているとのことだが、私は未読である。

大判で６００ページ余りの大きなものなので、ゆっくりと読み進めたい。

読み始めるにあたって、私の新刊「沖縄おこし・人生おこしの教育」の問題意識を登場させたい。つまり、沖縄での「沖縄おこし」「人生おこし」は、本書が扱う近代、つまり明治期の「廃琉置県」以降、第二次大戦までにおいては、どうなっていたのだろうか、という問いを立ててみた。

それは、近代国家創設期において、沖縄ではどういう「沖縄づくり」が構想実践されたのか、そのなかで人々の「人生おこし」はどうなっていたのか、という問いでもある。

それらでは、それ以前とはかなり、というか決定的に異なる事態が否応なく作り出されていた。

「沖縄づくり」「地域づくり」という課題意識は、士族層・地方役人層には存在していた。「廃琉置県」当初は、旧来の琉球王国、および王国体制を守ることが、旧士族の課題であった。だから、それは近代国家創造という課題とは程遠いものであった。沖縄での「近代体制創設」課題は、かぎりなく１００%近くが、明治政府に独占された。そのために、それに従うかどうかが焦点となった。沖縄全体の「沖縄おこし」はこういう状態であったが、各地域では、地方役人層の独自的な動きを見ていく必要があろう。あるいはまた、屋取層の動きにも注目していかなくてはならない。

なお、王国体制末期にあって、諸外国や薩摩の動向と接触がある一群の中に、新たな動向の芽のようなものが存在していただろう。

近世の身分制下にあっての「人生おこし」は、士族・地方役人層において、それなりのものが成立していたわけだが、明治政府による教育政策による影響が、わずかずつだが出てくる。本格的には日清戦争後のことであろう。

また、下級士族や地方役人層を中心に、生活の必要上、様々な業をおこすものが出てくる。歌・舞踊などもその一つであろう。また、地方の開拓に従事する動きも出てくる。

そんななかで、例外的とも言えるのは、第２代県令の上杉による「第一回県費留学生」の派遣であろう。エリート養成的であるが、大田朝敷や謝花昇など、後の「沖縄おこし」にかかわる動きを生み出した点で、注目すべきだろう。

こうした「沖縄おこし人生おこし」のテーマが、金銭経済浸透拡大ともからんで１９世紀末から２０世紀にかけて、様々な階層で様々な形で成立浸透していく。この問題を中心に何回かにわたり、私が注目した点に絞ってコメントしていくことにしよう。

階層ごとの行動特徴　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１１月１２日）

１９世紀末から２０世紀にかけて、それまでの歴史と比べれば、激変というべき事態が、沖縄社会をおおっていく。だが、それは一様ではなく、多様である。そのなかで、旧士族上層・旧士族下層（含む屋取）・地方役人層・一般農民層・士族外の都市住民などといった階層による違いも著しい。王府時代には、身分差ともいうべきものだったが、それが、『平等』をたてまえとする社会へと移行するなかで流動化状況もでてくるが、２０世紀にはいってもなお、それ以前の歴史を背負った階層差が鮮明に存在した。

そのあたりにかかわる本書の叙述をみてみよう。置県後の統治変化によって著しい影響をこうむったのは、これらのうち、旧士族下層（含む屋取）・地方役人層である。

「士族のうち、地頭層の有禄士族は「人民ニ告諭ス」でも家禄の保証が明言され、一八七九年（明治十二）十月に「従来ノ禄高ハ不相変廩米ニテ御賜給相成候様」沖縄県から政府に申請がされ、許可されている。無禄士族は、一部はその地位によって金禄を得た者もあったが、端役の者はわずかの一時金を補償されただけであった。下級無禄士族は、「商業ヲ営マンカ運転スヘキ資ナシ。農業ヲ為サンカ耕作スベキ地ナシ。仰テ父母ヲ養フノ力ナク、俯シテ妻孥ヲ育スルノ道ナシ」という状態であり、農地を求めて中北部に移住したり、部市部下層労働者になるものも多かった。また、沖縄県による政策的な士族授産事業として、久米島開墾事業や沖縄県織工揚が設置された。

置県後も温存された旧慣統治機構は、間切の旧来の地方役人層によって占められていた。近世においては、これらの役人層は扶持を得るかたわら担税者であり、いわば被支配層を構成する一部であった。しかし、王府が消滅し、地頭層が間切の経営（支配）権を失い、地頭と間切役人の間に立って徴税事務の一端を担っていた「心付役」がいなくなると、間切役人の徴税権力が結果として増大した。このような支配形態は、一八八〇年代に入ると、担税側の農民と徴収する側の間切役人との間で、軋轢を生むことになる。」Ｐ１４９

また、謝花昇らのいわゆる沖縄の自由民権運動にかかわる次のような叙述も注目したい。

「一方、旧地方役人層、間切役人層の果たした役割にも注意が必要である。近代において彼らと屋取の両者はあるときは激しく競い合った。伊波普猷も屋取について論文を書いているが、その文脈において考えるべきものであろう。屋取士族を旧士族層と捉えると実相とはかなり違うものとなる。経済的には地方役人層のほうが裕福でありおそらく新教育を担っていたのも旧地方役人層出身であった。謝花の言動の行きづまりの原因の一つは農民と屋取士族の要求を一緒にしてしまった結果、内部の利害調整が破綻したものと考えるべきものである。諸見里、喜舎場らの屋取士族と謝花・当山らの旧農民層が一緒になった言動はそもそも利害が反したのである。」Ｐ２２５

こうしたことは、地域おこし、沖縄おこしのリーダーシップの問題ともかかわるし、日清戦争後急激に広がる

学校教育の担い手、さらには沖縄教育界の主要な担い手として、誰がなっていったかの問題とつながる。これらに関しては、１９７０年代末８０年代初めにかけての私自身の研究でも触れたことである。それらの特徴の一つは、旧地方役人層に焦点を当てたことにある。

明治期の「沖縄おこし」と公同会運動　「沖縄県史近代」を読む

（２０１１年１１月１５日）

私の最近の関心のひとつは、拙著のタイトル「沖縄おこし・人生おこしの教育」にもあるように、「沖縄おこし」の動向である。近代のスタートにあって、それはどうだったろうか。その視点から、本書を読むと、興味深い点がいくつかある。

１）まず、明治前期には、沖縄県政は、明治政府の現地代理店のような役割を果たしていたが、「沖縄おこし」に力を入れていなかったことに特徴をみることができよう。こんな記述がある。

「他府県にとって県政の優先課題は、殖産興業の推進など近代国家の内実を整えるよう、国家の要請を遂行するものであった。ところが、旧慣期の沖縄県は県治の方針に独特なものがあった。」P183

つまり旧慣温存であり、他府県にみる「殖産興業の推進」の施策は展開されなかったのだ。せいぜい旧士族への「授産」として、土地開墾推進などが行われたぐらいであった。

２）１）で述べた事態には、日清戦争後変化が起きる。そこで、奈良原知事を中心とする県庁と旧士族のなかの諸勢力と旧士族外の諸勢力などとのかかわりで、様々な動きが生まれてくる。

たとえば、そうした動きの一つである「公同会運動」の評価をめぐって、注目したい記述が本書には見られる。その一つは、次の西里喜行論の紹介に見られる。

「国民的同化の推進と士族層の社会的地位回復の願望から出発していたとはいえ、・・沖縄人の主体性回復をめざした自治運動へ発展する展望をも示していた」P245

そして、公同会運動の中心の一人太田朝敷に関わって、次のように書いている。

「尚家を世襲の知事にするのが運動の本当の“目的”ではなく運動の“象徴、方策・手段”にすぎず、新しい情勢に対して開化党を中心に沖縄「土着県民の団結」「人心の統一」を図り、その力を政府や奈良原知事ら県当局に誇示し認知させることこそが真のねらい・目的であったと考えられる。そう考えると、二度目の運動が沖縄県内の署名などに力を込めたことや新聞各紙への宣伝に比して、「請願書」提出など政府や政党・議会への直接的な働きかけがほとんどみられなかったことも理解できる。その意味では太田朝敷ら開化党にとって公同会運動は失敗ではなく、むしろ成功だったともいえよう。」P248

そして、「奈良原県政と開化党との相互利用・癒着と警戒の微妙な緊張関係」があったと書く。

また、「奈良原知事は、一八九三年（明治二六）に展開された宮古島島政改革・人頭税撤廃を求める請願運動や、一八九九年（明治三二）から翌年にかけて謝花昇ら「沖縄倶楽部」によって展開された衆議院議員選挙法の沖縄への適用を求める請願運動に対しては、露骨な妨害・弾圧を行った。しかし、公同会運動に関して奈良原は妨害・弾圧に類する行為は一切していない。（中略）

なぜ静観していたのか。この疑問を解くカギは奈良原と公同会の政治的・社会的関係を検討すること以外にないと思われる。

そもそも「親日・反清」を掲げる旧支配階級の一派である開化党の機関紙『琉球新報』は、太田朝敷自身が認めるように「我が琉球新報の如きも奈良原さんの勧諭と尽力に依り」、一九九三年（明治二六）に尚順・太田朝敷らによって創刊された。」P248~9

以上興味深い指摘である。　（次回に続く）

旧士族層以外と沖縄おこしのからみ　「沖縄県史近代」を読む

（２０１１年１１月１８日）

３）　前回の２）の引用に続いて、次のような指摘がなされる。

「太田は「今日の地方政治は、・・（中略）何れの地方でも行政の実権は外来者の手にある」と中央と地方の関係を冷静に分析し、問題は政治権力ではなく「社会的勢力」、具体的には実業界・教育界・言論界などにおける沖縄「土着県民」の勢力拡大だと強調している。

ここからは公同会運動に込められた尚順や太田朝敷らの真の目的・ねらいは、「政権奪還の試み（復権運動）」ではなく、日本政府や奈良原県政に対し民族差別的政策批判と共に、特に実業界における実権を寄留商人・鹿児島商人から「土着県民」に奪い返す意図と、そのために自らの存在感を誇示・認知させることにあったと考えられる。日本政府や奈良原らがこの運動を静観したのは、この公同会運動の真のねらいを十分認識していたこと、及び対立、警戒、緊張を含みっつも、今後の沖縄統治政策の安定的遂行にとって開化党など「土着県民」有産者勢力との相互利用・協調がなお不可欠と判断したからにほかならない。

二度目の公同会運動は、一面では民族差別批判を含む「沖縄人の主体性回復をめざした」ものともいえるが、それは実業界「社会的勢力」に限定され、沖縄「土着県民」が直面する奈良原知事の専制政治に対する批判・規制・変革のための政治的権利の主張は慎重に回避されている。この運動の歴史的意味は、日清戦争後の新情勢において、日本政府・奈良原県政と新たな「資本家」としても台頭してきた旧支配階級との間の相互関係の再調整とも言えよう。

歴史は、この公同会運動以後における両者の急速な接近・癒着を見る。特に謝花昇の民権運動に対して両者の利害は一致し、共同して敵視、弾圧したことに象徴的に表れている。」P251

私にとって示唆するところが多い指摘だ。

４）　では、これらの動向をめぐって、謝花らを含めて旧士族層外と旧士族層とのからみはどうであったろうか。その点については、次のように書かれる。

「謝花ら参政権運動を担った主体はいずれも平民、農民（多くは富農）で地方・郡部出身であったのに対し、公同会運動や『琉球新報』を拠点に活動した主体は王族や首里・那覇の旧支配階級であったこと、即ち両者の出自に封建的身分階層差があったことも周知のことである。だが同時にどちらも「内地」留学や師範学校で新知識を得た青年・知識人であったこと、運動方法も帝国議会への請願や署名、新聞や機関誌の言論手段を持ち、活用

するなど近代的な姿をとった共通点もある。しかし両者の大きな違いは、沖縄県で実際に政治権力を行使している奈良原知事ら県当局に対する沖縄「土着県民」としての距離のとりかたに明確に表れている。謝花昇らは対立してその排除や規制を求め、太田朝敷らは対立を含みつつも協力・連携の方向も保持していた。それはかつての出身階層の違いだけてなく、尚順・太田らの勢力はすでに尚家を中心として「丸一商店」「沖縄広運会社」など事業を経営する「資本家」的性格を持っており（その意味では彼らも経済界の新興勢力)、実業界の「社会的勢力」拡大のためにも官界や寄留商人ら「内地」人による沖縄人への差別は批判しても、奈良原知事ら政治権力との決定的な対立という選択肢は不可能であったと考えられる。

これらから両者の対立の歴史的性格は、日清戦争後の沖縄社会の新たな展望を、沖縄「土着県民」の自治権獲得を急速に進め、眼前に君臨する奈良原知事を排斥・規制する道に求めるのか、自治権獲得の速度はゆっくりでも奈良原知事との決定的対決は避け、「土着県民」の「社会的勢力」拡大を優先していく道を選択するのか、との違いにあったと言えよう。」P256-7

では、旧士族層以外の「沖縄おこし」へのかかわりはどうであったろうか。その点の解明に私は関心を持つ。移民もそれとかかわるテーマであろう。

私自身は、教育界、そして行政村単位での「地方政治」においては、こうした層が深くかかわると言う推理を、いくつかの論考で述べてきた。そうした点での研究の深化に期待したい。その点は、私の新刊本「沖縄おこし・人生おこしの教育」でも触れたことである。

５）　この問題と多少かかわるが、宮古島人頭税廃止運動についての本書の次の叙述も興味深いので、紹介しておこう。

「人頭税廃止運動を指導した中村十作は、単なる人情家ではなかった。真珠養殖で一攫千金を夢見て宮古島に来島したのであり、日本近代法の揺籃期に東京で法を学び資本主義の仕組みを体得した人物であり、換金作物としてのサトウキビの高い価値に着目している。また運動は、断髪運動を伴っており、『隠れたる偉人―城間正安伝―』には、天皇の名において腐敗士族を糾弾するくだりがある。すなわち、人頭税廃止運動は旧慣支配層への抵抗運動である一方で、近代的資本主義の論理と皇民化の論理が織り込まれて展開されている。人頭税廃止運動に加わった農民リーダーの多くは、後に大土地所有者に成長したことが近年明らかにされているが、リーダーたちは人頭税廃止運動に参加する中で資本主義の仕組みを学んだのではないだろうか。」P160-1

注目したい記述である。とくにその後の「沖縄おこし」の展開にかかわるからである。今後の研究の進展に期待したい。

上杉・岩村県令期の教育政策の揺れ　「沖縄県史近代」を読む

（２０１１年１１月１８日）

明治１２年から数年間の明治政府と沖縄県庁の教育施策については、私の「沖縄県の教育史」（思文閣１９９１年）の「第４章　明治前期」でかなり詳しく書いた。

本県史でも、いくつかの個所でそれに関わる記述がある。そのなかで、第２代県令上杉の教育施策が、明治政

府の方針とのずれ・対立の中で、次の岩村県令時期に修正されるのだが、それをめぐる記述もいくつかある。

たとえば、上杉施策にかかわる明治政府側の尾崎調査について、こう書かれる。

「上杉県令が学校の新設などによって農民層の向上を図ろうとしていたのに対しても尾崎は否定的だった。沖縄の教育政策においては、文部省の規則を墨守せず「琉球人民の度」に適した簡単な教育内容にし、「御教条」を皇道に適したものに変えて利用すればよいという意見であった。学校制度を旧慣に復することにより、言葉の通じない他府県人を教員として雇わずに生活の苦しい無禄の士族の職を回復することができ、一石二鳥だと考えたのである。」

尾崎調査を受ける形で、次の岩村通俊県令は、「教育政策については、四書五経、読み書き、筆算などを教えるのみというほとんど旧慣のかたちに戻した。」P126 のである。

こうした政策をめぐる変動について、

「上杉の政策は近代化推進という方向性においては明治政府とベクトルを同じにしてはいたが、中央から派遣された地方官としての手続きを踏まず、自己の判断で政策を積極的に推し進めようとしたことは見逃すことのできない問題であった。かくして門地の高さをもって沖縄住民を慰撫し従属させることを期待して送りこまれてきた華族県令は二代で終わり、県政を自己の裁量で運営することのない官僚県令へ移行することになった。」P127

と分析指摘されている。

別の執筆者は、こうも書く。

「初期県政への不服従の雰囲気や、旧慣存続の政策下にありながら、政府や県当局は教育の分野には力を注ぎ、当初は旧慣と一定の妥協をしながらも、日本の教育制度を志向した学校教育の導入と普及に努めた。（中略）

部分的だが旧慣の改革を志向した彼（上杉を指す）の県治下において、日本への同化教育重視の方針はより明確にあらわれた。」Ｐ４９０－１

「上杉の上申書は、彼の教育構想が「書信ノ往復日用ノ筆算」の基礎教育を含みながらも、言語の通同化による「愛国ノ情」の育成や「皇国」への忠誠心の培養という同化・皇民化のための教育を目的としていたことを示している。（中略）このような教育構想はたんに彼特有のものではなく、むしろその後の沖縄教育の不動の原型となるものであった。日清戦争の直前に沖縄を視察した内務書記官・一木喜徳郎が「沖縄人ノ頑迷ノ思想ヲ破リテ之ヲ内地ノ文明二同化セシムルハ教育二依ル外ナシ」と改めて確言したように、沖縄人の同化・皇民化は、とくに学校教育をつうじて鼓舞され、しばしば強制を伴いながら浸透させられていった。」Ｐ４９２

岩村が旧慣に戻した教育政策だが、しばらくすると、むしろ上杉が展開したような教育施策に戻るのだが、戻る過程についての叙述は県史にはない。そして、１８９２年に就任し、教育施策を積極的に展開した奈良原知事の施策がある程度詳しく書かれる。たとえば、

「一九〇三年（明治三六）には「勧学の歌」を自作し、文部省検定小学校唱歌として認定を受け、明治三六年一月十五日県令第三八号を以て発布され、県下の小学校で歌わせた。

この自作の唱歌には奈良原知事の教育観が現れている。一八七二年（明治五）いわゆる「学事奨励二関スル被仰出書」の太政官布告が出されて以来、学問は士族専有のものではなく、華士卒農工商婦女子にいたるまで「邑に不学の戸」が無いように指導するのが地方官の役目であるとされた。この地方官の役割を忠実に進めていこうとする姿勢はかつての上杉県令と共通する部分である。奈良原はこれに加え、今尚身分制社会の遺制を引きずり、

「宿命・忍従・諦念」にしばられた民衆に対して、貴賤貧富の違いは「生まれ」によるものではなくなり、生まれてから後の「働き」（勤勉さ・学問）によるものだとして、「身を立て名を上げやよ励めよ」という「仰げば尊し」の唱歌にも通じる歌詞で啓蒙しようとした。

このような素朴な立身出世主義による啓蒙は、「大御心の発揚」たる教育をもって県民を徳化しようとする考えに基づいていた。」P136-7

このように、初期の明治政府や沖縄県庁の施策には、揺れやずれがあり、外交軍事関係、沖縄側の対応などとのかかわりを含んで、試行錯誤的な要素を含んで進行するのだが、教育施策も一貫性があるというよりも、試行錯誤的な要素を含んでいたのだ。しかし、岩村施策後しばらくすると、積極的施策の方向に進み、奈良原期にはかなり強力に推進され、日清戦争後は、沖縄住民側も士族層も含めて順応的対応をすすめるのが大勢となるのだ。

士族・地方役人層・就学　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１１月１８日）

沖縄の士族の特徴、新設小学校への就学にかかわって、次のような指摘がなされている。

「沖縄の士族のもう一つの特徴は、その数が総人口に比して著しく多かったことである。日本の武士＝士族が総人口の数パーセントに過ぎなかったのに対して、琉球の士は四分の一強にのぼった。この膨大な数の士が置県後は旧慣に従うということで「士族」に編入された。」Ｐ４９３

「琉球の士は武ではなく文に価値を置き、王府に仕官するため「科挙」に及第すべく努めることを本分とした。その人口比と地方役人の存在を考慮すれば、琉球では近世でも男子の約二割程度は教育を受けていたものと推側される、そのことと近代初期の就学率との落差は、前述の「忠誠心の不在」によってしか説明しえないであろう。

一八八一年（明治十四）の属籍調査によれば、全国平均の士族率が五・三二％であったのに対して、沖縄の士族率は二七・四〇％であった」Ｐ４９３

「沖縄の士族が元来「武人」ではなく「文人」的性格を持った士で、しかもその人口比が極めて高かったことを考慮すれば、学資・手当を支給したり、強制したりの「例の恩威並用」で児童生徒が集められた明治一〇年代は勿論、二〇年代までの就学率は極めて低調に推移したと言わねばならない。すなわち、沖縄の士族層における日本国家への忠誠心の欠如のゆえに、政府・県庁の管轄する大和式の学校への子弟の就学率が低迷し、そして生活のために既成体制に順応する士族（開化党）が穏やかながらも増えていったことが、就学率を徐々に押し上げていく一大要因となった。その意味では、当時の士族子弟の就学率は、沖縄の士族層の日本統治への妥協の進展度を示す一つの関数だったと見なすことができるだろう。」Ｐ４９５－６

他府県、とくに都市や農業外産業が広がっていた地域での、江戸期における寺子屋就学率が、明治期の小学校就学に連なっていたことは、よく指摘される。それに比して沖縄では、王府期の諸学校と明治期小学校とは、ごく一時期を除けば、連なっていない。そして、就学要求に連なるような産業展開は、むしろ抑えられていた。

同じ士族のなかにも違いがあった。有禄士族以外は、なんらかの生計をたてるやりくり・挑戦が必要となった。屋取もそうだろうし、農業外産業への着手もそうだろう。そのあたりの事情について、間接的ながら、次のような記述がある。

「有禄士族に対する処遇は「優遇」策であったとされるが、その対象となったのは士族層のうちの数パーセントにすぎなかった。

有禄士族が置県後も優遇され生活を保障されたのに対して、他の大部分の無禄士族は、王府の解体によって仕官の機会を完全に失うなど、最も深刻な影響を受けた。地方に下った屋取士族だけでなく、首里・那覇の無禄士族もそれぞれに生活の糧を求めて模索せざるを得なかったが、もともと近代的な産業や職業が少ない上に、県庁の役人や警察、教員や商業などの主だったところを「他府県人」に独占された当時の状況下では、生活や体面を維持できるような新しい職業を見出すことは極めて困難だった。」Ｐ４９４

「新しい職業を見出すことは極めて困難だった」にせよ、明治中期にもなれば、具体的な追求が広がり、そうした層にも就学の動きが広がる。と同時に、就学を量的に支えた大規模層は、地方役人層であった。このあたりについては、1970 年代に、私も含めての研究で明らかにしてきたことである。本書では次のように記述されている。

「地方農村の環境のなかでは、教育の普及は地方役人（層）の子弟から始まった。政府・県当局の圧力を直接受ける存在だった彼等は、同時に、地方農民の中では例外的に旧来から教育の機会を持ち、一応の読み書きのできる人々でもあった。置県後の新制度の小学校は、さしあたっては旧来の教育機関の再開という形から出発し、地方では筆算稽古所や番所、置県とともに廃止された検者・下知役の居所などが当てられ、その後、漸次新設されていったが、いずれにせよ、地方でも旧来の教育機関や機会は新制度の学校に取って代わられた。そのため、「当時の小学校生徒は殆皆村吏の子弟にして多少の手当を給せられ他日村吏になるを以て其目的とせり」というのが、小禄間切出身の高良隣徳が学んだ明治十年代の農村の状況だった。（中略）

高良隣徳が「然らば如何にして学校の新築をなしたるか、如何にして就学児童を増加したるかと云ふに、此れ全く督責の厳重なるに由るなり」と述べるように、それらは県庁・役所から地方役人への督促、そして後者から一般農民への督促の厳しさによっていた。「概ね内地人」であった「学務担当」は、その任命と監督の絶大な権限を行使して「学校管理者」たる地方役人に圧力をかけ、「而して人民と〔学校〕管理者との関係は恰も管理者と学務担当との関係の如くなれば学務担当の計画したる設計は大抵之を実施するを得べし」という形で、明治二〇年代の農村での教育は、沖縄人たる地方役人を介在させた上から下への権力行使＝「督責の厳重」によって徐々に普及した。」Ｐ４９８－９

これらの叙述は、二〇年代までの実相の一端を示すものと言えよう。

明治期「エリートたち」　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１２月１０日）

本書の一つの特徴は、「第四部　黎明期沖縄の人物群像」にある。この時期の「沖縄おこし」をリードする「エリートたち」たちの思想・動向を知り検討する上で、意義ある叙述が続く。無論、沖縄おこしはエリートによって占有されるわけではないが、エリートたちがどうであるか、とくにこの時期には、政府支配の動向に対して、かれらがいかなる思想・行動を展開するかは重要な意味を持つ。

それらには、まず明治 10 年代から 20 年代にかけて東京を中心に「留学」した青年たちの動向がある。彼らは、

「沖縄青年会」などを組織する。それにかかわって、こんな叙述がなされている。

「明治二〇年代初頭の東京留学生の一団には「開化党中の急先鋒にして日本帝国の保護の下に一種の半独立国を建立せんとの希望を抱いて熱心鋭意所謂ゆる復藩論を主張」していた者もいたというが、留学生たちは亡国の故郷・沖縄の在り方を真剣に討議していたと考えられる。

このように「復藩」を主張した初期沖縄留学生らと、県当局の意見は相容れなかった。児玉喜八が学務課長時代、上京して沖縄青年会を訪れ「監督者のつもりで一場の訓話」を行った際、留学生から手ひどく反駁されたことがあったという。この出来事以来、児玉は沖縄人に高等教育を受けさせるのは国家の為にならないという考えを抱くようになったといわれていたという。また、当初、沖縄青年会は、児玉の斡旋により事務所が設置され、その費用の一部が沖縄県庁から援助されていた。しかし、その後、県からの援助は廃止され、『沖縄青年雑誌』も第四号で廃刊になった。その背景として「却って青年の自助心を薄弱ならしむるものなりとの理由に基つき断然之を拒絶」したと「沖縄青年会の沿革」では述べられているが、背景にはこのような留学生と県当局との軋轢があったのかもしれない。しかしながら日清戦争（一九九四～九五年）における日本側の勝利により、頑固党・開化党の対立に決着がつき、留学生らも以後、日本への傾斜が深まっていく。」P276

「第一回県費留学生たちの活躍を嚆矢として、様々な困難を乗り越え、故郷から遠く離れた地で勉学に励んだ近代沖縄の留学生からの多くは、やがては沖縄の為に尽くす人材となった。留学を終え、沖縄に戻った留学生たちは、政治、経済、医学等、さまざまな分野で活躍した。

たとえば、近代沖縄における新聞メディアの勃興を支えたのは、留学生たちであった。（中略）

『琉球新報』は「沖縄の進歩発達」と「国家的同化」を編集方針に掲げ、沖縄の政治・経済・教育界等で絶大な権力を握っていた外来者である寄留商人や県上層部に対抗する。一方、人頭税廃止運動や、同じく第一回県費留学生であった謝花昇らの民権運動等、沖縄内部からわき上がった旧支配層への抵抗運動に対しては、紙面で批判を行った。」P279-80

「留学を終え、帰郷する留学生が増加するに従い、東京の沖縄青年会と留学生 OB たちとの連携も図られるようになる。一九〇九年（明治四二）四月、東京にて沖縄青年会二〇周年記念祝賀会が挙行されたのちの十二月六日、沖縄青年会会友会が沖縄で組織された。翌年の一月には会友会発会式が真教寺で挙行された。

会友会メンバーの一人、太田朝敷は次のように述べている。

五十万の県民中最高の教育を受けたもので最も発達した頭脳をもつたもので且つ我沖縄に健全なる文明社会を建設する頭領の責任あるものとしなければならない吾々の責任を尚ほ具体的に云へば外は東京青年会の指導者となり保護者となり内は県民開発の先導者たり指揮者たらねばならない吾々会友が一団となつて誠心誠意県下開発の任に当たるときは何を計画して成らざるものがあらうか

太田のこの言葉は、多くの留学経験者の思いを代弁したものであった。そして、沖縄を担う新たな人材となるべく勉学に励む者にとっては、道しるべとなる言葉となったであろう。」P280-1

こうしたメンバーたちのなかで、教育界のリーダーになったものの数は少ない。おそらく、教育界の幹部になっていく道が狭かったためであろう。それは原因としても結果としても、沖縄教育界の性格ともかかわる。

そして、大正期にはいっていくと、町村レベルでは、地元出身で、教育界ないしは教育界出身者が、地域リーダー的役割を果たすことが出始め、広がっていく。

このあたりは、一つの研究課題となろう。

教育界と教育会　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１１月３０日）

「一八八六年（明治十九）に「官民の間に立ちて務めて学校施設の改善を計り、本県教育の発展を期し施政上聊か翼賛する所あらん」との目的で、学校教員、学務担当者及び賛同する有志によって、沖縄私立教育会の名称で発足した。一八九一年（明治二四）から一九〇四年（明治三七）まで、沖縄県私立教育会という名称となっていた」P203

こうして設立された沖縄県教育会は、戦前期全体にわたって、教育界のなかの重要な位置を占め続けた。たとえば、次のような記述がある。

「奈良原知事は就任後すぐに学校や役場を巡視し、八重山を含めた県内全域に小学校教育を普及させ、学校の増築新築も頻繁に行った。開校式落成式等にはどんなに遠くても悪天候でも知事の臨場をみたという。また、県庁役人、各中等学校職員、弁護士、新聞記者、医師、郡区長、区会議員、裁判所職員、実業家などにより組織された沖縄県教育会を県の諮問機関とし、総会には熱心に参加した。」P136

「本土出身教員が主導した半官製の沖縄県私立教育会の活動やその機関紙の『琉球教育』という教員向けの雑誌が、「同化教育」や同化志向の下方浸透に果たした直接的役割には重要なものがあった。」Ｐ５０３

こう書かれているのだが、教育会についてのより詳細な研究は、近年着手されはじめたようだが、まだまだ「これから」というべき状況にあるといえよう。

そこで、私なりに考えるいくつかの課題を並べておこう。

１）教育行政組織と教育会との関係

２）会の性格　職能団体(同業者組織)、研究研修啓蒙組織、「上から下へ」「下から上へ」「よこ」といった組織のありよう。

３）帝国教育会などの全国組織との関係

４）戦後へのつらなり

帝国教育会は、日本教職員組合へとつらなる面をもっているが、沖縄教育会と沖縄教職員会。沖縄県教職員組合とのつらなりはどうか

５）教育会の沖縄内での位置。組織の閉鎖性と開放性などの検討も。

６）教育会の活動。とくに末端組織（基礎組織）での日常活動のありよう。

７）教育会がつくりだし、継承されてきた体質の特質。それらのその後の状況。

８）その他

婦人会と女性教員　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年2月１８日）

戦前の女性団体などについての節が設けられているのも、本書の特質だろう。

その戦前の女性団体のリーダー的役割に、次の記述が示すように、女性教員が位置づけられたことに一つの特質があろう。

「明治末期から婦人会や処女会、母姉会等、女性たちのグループ化・組織化がはかられ、日本への「同化」のための指導は、女性組織を媒体に地元の男性有力者たちによって行われてきた。その一方で、女教員には、学校長夫人とともに地域女性への作法や裁縫の指導という役割が課せられた。」P518~9

「国頭郡でも女教員大会が開催された。一九一八年（大正七）一月二一日、名護小学校に集まった女教員六〇人による協議は、ほとんどが家庭改良についてであった。「本県家庭改良の具体的立案」「本県一般家庭に於て可能の味噌製造法及漬物漬方の実際方法」や裁縫科教授の実地方案、「婦女会の指導方法及割烹手芸裁縫講習会実施現況並に将来に於ける方案」という、およそ学校教育から離れたテーマが多く盛り込まれた。前述したように、大正末には人口の約十二パーセントが県外へ出稼ぎに行くほどの経済破綻に見舞われた国頭郡であればこそ、女教員の役割も、児童の学力向上以前に、地域や家庭指導に重点を置かざるを得なかったのである。」P520

女性の権利・地位向上ではなくて、風俗改良・近代化・同化、沖縄文化破壊・共同体改編、家庭管理の役割を担わされたことが注目される。それは、内容的にも組織形態としてもトップダウン型であった。しかし、次の引用が示すように、女性教員組織そのものが男性主導であった。女性自らがリーダーになるのには時間がかかった。

「沖縄県女教員研究会が発足してからは、会長に女子師範学校長が就き、副会長、顧問には女子師範教頭や沖縄県師範学校長、女子中等学校長、視学らすべて男性が就任するという、「女教員」とは名ばかりの男性主導の研究会となっていった。

しかし、一九一二年（大正十）十一月に設立された国頭郡処女会では、婦女会、処女会の会長を、県内ではおそらくはじめてと思われる小学校女教員から選出した。（中略）

国頭郡連合処女会、婦女会は、各村の会員の分担金のほか、郡各村組合や篤志家から寄付を募り、様々な活動を展開した。講演会を開催したり会員の談話、善行者の表彰、運動会、手芸品展覧会、音楽会、さらに風俗の改善や敬老会、児童就学出席督励、普通語の励行、服装改善など、多岐にわたるものだった。創立が浅く、誇るべき歴史がないとして、将来の計画もかかげた。急を要するものとして、処女の修養機関である女子実業補習学校を設置すること、また夏季・冬季の休業や農閑期を利用した機織・染織、裁縫・割烹、礼儀作法、育児・洗濯、養蚕の講習会の実施、生活改善への取り組みがあった。この時期、相次ぐ出稼ぎ者に対し他府県人による沖縄県人差別が憂慮されており、その対処策が講じられたことも考えられる。」P522

これらにおいて、同化＝近代化であったことも一つの特質だろう。それも、国・県→女教員→婦人会→地域・家庭へというように、上からの啓蒙主義スタイルで展開された。

「沖縄県では一九三二年（昭和七）九月十七日、各市町村長や学校長あてに、国民更生運動を徹底して行うよう通牒し、ポスターを配るなど、都市部と農村部とを分けた具体的な実施事項を提示した。とくに農村部においては、「衣服ハ質素ニ」「履物ハ可成手製品ヲ」「節酒節煙」「買物ハ現金買ヲ」など、家庭生活の細部にまで倹約を促す行政の指導が及んだ。その実施にあたって中心的担い手となったのが、婦人会や青年団、在郷軍人会などであった。それぞれの団体の会長らが「実行督励委員」となり、自分の組織に更生運動の普及徹底、実行にあたらせる役割を担ったのである。こうしたなか、十一月十八日には、美里村美東小学校区の「美東学区婦人会」の

発会式が行われた。二五歳以上六〇歳以下の婦人約四〇〇人が集まり、時間の励行や子どもに夜更かしをさせない、子どもの家庭学習に努めるなどの徹底をはかることを決議した。」P517

この時期、すでに戦時的色彩が出始め、ファシズム的要素も見え始める時期であり、その要素がにじんでいるが、それを戦時とか、ファシズムとかをそれほど意識しないで、むしろ啓蒙的・近代化的色彩をもって進められたことが一つの特質であろうか。

「県内各市町村や学区域ごとに組織された婦人会は、同年（１９３３年を指す―引用者補）十二月段階で、那覇市十、首里市一、島尻郡二二、中頭郡十三、国頭郡十、宮古郡三、八重山郡六の合計六五団体に達していた。各団体とも、生活改善や家庭教育の振興に努めてきたようだが、「社会ノ現状ハ之ヲ以テ満足スルヲ得ズ」と、婦人会の組織的活動が求められた。そして県は、「県勢振興の源は婦人の覚醒奮起と団体的活動にあるという見地から」、一九三四年（昭和九）三月三日、県下婦人会の統制機関として沖縄県連合婦人会を創設した。「凡ユル因襲ヲ打破シテ家庭ノ浄化、生活ノ改善、社会ノ福祉二寄与センコトヲ期」すと、国民更生運動を進めるうえで、沖縄県は家庭の改良にむけた取り組みを連合婦人会に委ねたのである。」P518

ところで、こうした動向は、旧来の共同体組織との関係ではどうなっていたであろうか。これは私の推理だが、旧来の共同体的なものを、かなりそのまま生かしながら、という面が強かったのではないか。

こうしたことを含め、女性組織の分析研究の深化が求められよう。同時に、それらが戦後とどうつながり、あるいはどうつながらなかったか、といったことの追究も求められるが、その点はどう展開してきたのだろうか。

戦前の教育労働者組合　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年２月２２日）

１９３０年前後に、八重山と沖縄本島に組織された労働者組合についての記述がなされている。

その活動は、賃金不払いなど、教職員が直面する経済的困難の打開を軸に展開する。国際的なつながりをもつ全国組織の中に位置づけられた組織だが、強力な弾圧によって短期間に抑え込まれる。

１９７０年代に、私も関係者への聞き取り調査をしたことがあるが、教育実践レベルでの展開ははっきりしなかった。私が関心をもつ「沖縄おこし」的な契機があったかどうかということについてもはっきりしたものは見えなかった。

東北地方の生活綴方運動には、教育労働者運動とのかかわりも持ちつつ、教育実践上の展開を見ることができるが、沖縄では、そのレベル展開以前に抑え込まれたというべきかもしれない。

戦前の教育界のなかで「沖縄おこし」的なものの本格的展開は難しいとしても、その萌芽的なものがどこにあったかの研究は重要な課題である。その点では、次節に掲載する照屋さんの研究が手がかりになりそうに思われる。

上記とは別のことだが、この教育労働者組合の叙述がある第六部には、「近代沖縄とハンセン病差別」の章がある。この分野は、全く未読の世界である私には大変勉強になった章である。

大事件――戦前玉城の分教場設置問題　（２００７年4月１１日）

玉城村史は、南城市合併のため、資料的なものの一部発刊にとどまったようだが、そのなかの「新聞集成編」に目を通す。

いろいろと興味深いが、その一つは玉城小学校の分教場設置問題である。１９３３年から１１年にわたって大事件となっていた。村中央部は、子どもに遠距離すぎるということで、東部と西部に分教場設置を求める住民に対して村当局が拒みつづけたということである。東部地区では、同盟休校から、さらには自主的学校設置までつきすすんだ。そのなかで、３００名の子どもが留年扱いされるなども生じる。警察まで出てきたり、県当局も動く事態で、結果的に分教場設置の方向にすすむが、実現したのは戦後であり、それが現在の百名小学校、船越小学校となっている。

今日も学校統廃合は地域存続の問題と重なって、しばしば大問題となる。南城市の財政事情をみるとき、こうした問題が再燃しないとは限らない。その意味でも興味ある歴史事件である。

人口爆発　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１１月８日）

Ｐ１０３に、沖縄の人口について、１８８０年の３５万人から、１９２０年の５６万９０００人へと、約３２万人６割以上の増加、を指摘する論稿（永井秀夫）の紹介がある。（※　計算があわないので、３２万人ではなくて２２万人のミスではなかろうか）そして、他府県出生者は１．６％であるから、増加のほとんどが自然増である。かなりある海外移民や国内移出を勘案するなら、この間の自然増はかなりのものである。

近代への移行において人口爆発があったことは、日本全体の動きと同様である。そして、それらが、多産多死から多産少死への移行を伴っている事を多くの研究が示している。

では、沖縄において、その過程はどういうものだったのか、その研究蓄積は浅い。この問題にかかわって、本書でも具体的な叙述があるわけではないが、間接的に示唆する記述がある。

たとえば、置県後、「農民の負担軽減策とともに、換金作物としてのサトウキビ栽培が増加し、農民の生活は相対的に向上していった」（Ｐ１４８～９）

また、沖縄本島における、元文検地（１８世紀前半）と土地整理（２０世紀初頭）の面積の違いについての記述がある。

田　　６０５５町歩　→　　６４３８町歩

畑　１５３５５町歩　→　３８３４６町歩

本書は「畑の二倍の増加を多いと見るか、少ないと見るか」（Ｐ２２１）という微妙なコメントをしている。

この期間に、食糧生産および換金作物生産がかなり増加し、この人口激増をある程度支えるものであったろう。

それにしても、いくつかの問いが生まれる。並べてみよう。

１）農業生産の増加がカバーしきれないほどの人口増加に対して、海外移民国内移出が一定の対応策であったと

みるかどうか。

２）人口増にともなう「多産少死」に関わって、人々、特に農民はどう行動していたのか。「多産少死」を歓迎していたのか。「多産少死」を生み出す行動をしていたのか。子ども数を絞り込む行動をしたのかしなかったのか。しなくてもよい事態になったのか。子どもの健康管理にかかわって、従来とは異なるものがでてきたのか。

３）「多産少死」の事態が、「生活向上」の事態と、どうかかわるのか。

４）農業生産性の上昇と耕地面積の増加、それらが、総体としての農業生産量の拡大にどうかかわっていたのか。

５）金銭経済の浸透が、これらの事態にどうかかわったのか。マクロ経済的な視点だけでなく、ミクロ経済としてどうであったか。

６）「多産少死」　「生活向上」といった事態が、地域共同体のありように、どのようなものをもたらしたか。

７）「多産少死」　「生活向上」といった事態が、家族のありように、どのようなものをもたらしたか。

８）民俗調査が対象としている生活生産のありように、どのような変化をもたらしたか。

９）これらの事態と衛生・健康管理・健康生死観とのかかわり

１０）こうした事態が、子ども観・教育観、および具体的行動に与えたもの

１１）これらの事態について、旧士族上層・旧士族下層（含む屋取）・地方役人層・一般農民層・士族外の都市住民などといった、階層ごとの実情

近代沖縄における人口概況と移民・移住、暮らし、産育・教育など

（２００７年4月１１日）

最近、玉城関係資料を読んでいる。そのなかで考え深めてみたいこととして、人口からみる人々の暮らし・産育・教育などがある。

廃藩置県当時、沖縄の人口はいろいろなデータがあるが、実のところ約２０万人であろう。そして玉城は約３０００人で、私が居住する集落の仲栄真（戦後中山と改称）レベルを推理すると、１００人ほどであろう。それが、明治末期から昭和初めには、５０～７０万人にいたり、玉城でも５０００～７０００人と著しい人口増である。

その背景を推理すれば、それまでの多産多死から多産小死への移行がうかがわれる。「衛生」とか「風俗改良」とかいったこともそれにからむであろう。また、大胆に推理すると、「門中」などの整備発展が士族以外でも進行し、墓の整備などもこの時期に進行したのではないか。現在の中山集落で使われている屋号の多くもこの時期以降に生まれたものだろう。なお、首里士族が「屋取」となって「田舎移住」するのも、首里王朝時代と並んで明治期前半に多い。

こうした人口爆発に対応する食糧増産はどうであったのだろうか。調べてみたい。また、この人口爆発は、明治後期における大量の海外移民を生みだしたと推理される。

また、これらの変化が従来のシマの慣習をどのように変化させていったのか、注目される。首里王府によるシマ管理を引き継いだ明治政府＝沖縄県庁による村落統治がどう展開していったのか。間切やシマの現場では、担

い手たる地方役人層はそのまま引き継がれたと推理される。

その統治がくいこんでいく上で、小学校設置は大きな位置を占めよう。そしてそれは、シマにおける産育のありよう、子どもへのまなざしを大きく変化させていったと推理される。

大正期後半のソテツ地獄は、若者を中心に、関西などへの本土移住者を大量に生みだす。ハワイ・南米移民が家族ぐるみであるのに対して、この本土移住は「集団就職」的なありように近く、家族単位ではない。それは、子ども・若者へのまなざし・教育に対する新たなまなざしを作らざるをえない。

また明治後期から始まる徴兵制も、シマにおける状況に大きな変化をつくりだす一つの重要な要因となろう。そして、貨幣経済の浸透が首里王府時代と比べて格段に進行したことが、いかなる変化をもたらしたのか。

次の人口激動は戦争である。

昭和初期のソテツ地獄への対応策　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年３月６日）

昭和初期の「ソテツ地獄」への対応策をめぐる動向について、次のように記述されている。

「このような窮状に沖縄内部から官民あげて沖縄経済の抜本的な体質改善をめざした議論がわき上がってきた。いわゆる「沖縄救済論」である。

これらの論議から浮かび上がってきた沖縄経済の構造的な欠陥として次のような問題点があげられた。①砂糖生産に偏ったモノカルチヤー的産業構造、②移出入のバランスを欠いた移入超過、③砂糖消費税や酒税などの国税支出の超過、④土地が狭いこと、⑤県民意識の問題、などである。対策としては、海外移民、県民意識の改革、産業構造の改善、国税負担の軽減、生産力の増進、国の積極的な産業政策、などが提起されている。」P594

「内務省管下に「沖縄県振興計画調査会」が設置され、調査・審議の結果、県案・内務省案が閣議決定され、一九三三年度（昭和八）から予算化されることになった。それまで「後進県沖縄」という蔑称のまま放置してきた沖縄の産業振興に政府が本格的に取り組む姿勢をみせたのは置県以来これが初めてのことだった。（中略）

沖縄振興計画の総予算約六八四六万円は、じつは一九二八年（昭和三）までの過去十年間に沖縄県が納めた国税の超過分に相当する額であった。つまり、沖縄経済の疲弊の原因が「国（国税）の苛斂誅求」によるものであるとする沖縄救済論の批判に応えて、過去に沖縄県から取りすぎた国税の分を十五年間で還元するという意味が含まれていたと思われる。」P595

「慢性的な不況で沈滞しきった県下の農村に島おこしの新風を吹きこんだのが自力更生運動であった。政府は一九三二年（昭和七）から全国的な農村恐慌の対策として農山漁村経済更生運動を推進した。政府の事業としては、米価対策、負債整理対策、時局匡救事業の三本立てであったが、時局匡救事業は農村住民の自主的な更生運動によって目的を達成するように県や町村を指導した。（中略）

自力更生運動には、農山漁村の経済的疲弊を救済する経済運動としての側面と並行して、戦争遂行の国策を支える農村民の精神作興というもう一つの性格があった。経済更生計画にもとづいて、町村役場、農会、産業組合、学校が一体となって町村民を国民精神総動員運動（中略）へ駆りたて、愛国思想と戦意高揚を煽りたてたのである。」P596

いくつかコメントしよう。

これら一連の策の実施は、戦争への道と並行し、戦争動員としては成功したかもしれないが、沖縄振興としては、どれだけのことが実現したのだろうか。

「ソテツ地獄」への対応としての沖縄振興計画を、戦後の「復帰」後の振興計画と比較研究してみたくなる。そのあたりの研究がおそらくあるだろうから、読んでみたいと思う。

引用にある「砂糖生産に偏ったモノカルチヤー的産業構造」ということは、発展途上国型ないしは植民地型経済にかかわるものだろう。そうしたものは、今日の基地経済・補助金経済・観光経済といったもので、そこからどれだけ「卒業」できているのだろうか。そうした構図は、教育にも陰をおとしているように思われるが、いかがだろうか。

全体的に見て、近代沖縄に対しての政府の施策は、「沖縄を利用していく」という発想が強く、沖縄自体を発展させていくという視点が希薄だ。象徴的にいうと「捨石」作戦的性格が濃厚なのだ。

そうしたことは、明治初期政策（１２年～１７年ごろ）や、戦後初期の米軍政策にもあらわれている。また、旧慣保存施策にも、そういう形での新たな支配を構築するという面があり、「沖縄の自立」ということがいわれながらも、実はその追求を弱める施策が繰り返されているように見えるが、いかがだろうか。

そういう施策に対して、沖縄内部にあっても、「迎合」的動向と、「自立」志向との複雑な絡み合いの中で、近現代の１５０年が経過してきたように思われる。そうしたことから抜け出る動きも強く存在しているのだが。

『日常の食糧』としてのソテツ　ソテツの復権　「沖縄県史近代」を読む

（２０１２年2月２５日）

コラム欄に、つぎのような記事がある。

「ソテツは（中略）死ぬよりましだと思い詰め命を賭けて食するようなものではなく、農村の日常の食生活を支えた身近な存在だった（中略）。琉球王国時代からソテツは救荒食糧として植え付けが奨励され管理されてきており、間切で一人当たりの植付本数を定めた例や、植付を怠った者に対する罰則の例も古文書に残る。」Ｐ５６６

「ソテツと農村生活の関わりについて、近年では民俗学の分野で研究成果が蓄積され、ソテツは『日常の食糧』であり、『命をつなぐ食糧』」だったことが再確認されている。（中略）「子どもの頃、米を食べるのは年に何回よ。普段はイモです。今でも自分はイモ食よ。イモのない人はソテツ。あれで育ったのよ。今の人に言ってもわからんが、ソテツは自分らの恩人だからね」Ｐ５６７

「水溶性のソテツの毒は充分な時間をかけて水漬けすれば安全だというのに、その判断も鈍るほど逼迫した当時の状況が伝わってくる。しかしこの地獄を招来したものは当局の無策であって、ソテツ自体が悪なのではない。

（中略）

ソテツの復権を訴えた農学博士の西田孝太郎は、ソテツは「天が恵んだ最も大切な尊重すべき植物である」と言い、その十一の効用（中略）を挙げて、ソテツの活用は大島や沖縄の「自力更生上重要な役割を演ずるものと

信ずる」と講演会で述べた（中略）。ソテツ地獄とはとんでもない話だ、というわけである。思うに、ソテツ地獄という言葉は、戦後米軍占領期に喧伝された「イモ・ハダシ」論と同様に、沖縄にかけられた強力な呪文のようなものー沖縄はいつも貧困と飢餓の瀬戸際に立つ非力な存在だという―かもしれない。しかし、このような地獄は極楽へ転換できるのだという西田の希望を分有することも、現在の私たちには可能ではなかろうか。」Ｐ５６７

興味深い。ソテツ・ソテツ地獄をめぐるステレオタイプな認識は卒業しなくてはならない。

とはいえ、現在、ソテツを食べた経験者はどれくらいいるだろうか。『昔話』になりつつある。時にはソテツを食べるイベントがあってもよさそうなものだ。

我が庭にも植えているが、「救荒食糧」としてではなく、美観のためだ。苗を買ってきたわけではなく、以前からあったものを、場所を選んで植えた。元気がいい植物で、大きくなると脇から子どもがたくさんでてくる。

米不足　労働力の供出　国家総動員　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年3月１５日）

「国家総動員体制」に関わる章節で、いくつか関心をひいた叙述がある。

その一つは、次である。

「中でも飯米の不足はとくに深刻で、沖縄県の年間米穀消費高は食糧米約三六万石、酒造用米約二万石余、計三八万石であるが、これに対応できる県内生産高は約十三万石にすぎず、不足分の約二五万石は台湾を中心とする県外からの移入に頼らざるを得なかった。沖縄県は恒常的な主食移入県であった。」P608

王朝時代までは、基本的に主食自給体制にあっただろうが、明治以降、とくに土地整理以降、自給体制がくずれてきただろうが、それが、この時期「深刻」になったのだろう。それは、戦後も続く構造的なものになってきたのだろう。

近年、食糧、とくに主食穀類の自給率議論が盛んだが、沖縄の自給率は、日本全体よりはるかに低いだろう。だが、自給率議論は、それほど聞かない。このあたりについての論議や研究は行われているのだろうから、少し勉強してみなくてはなるまい。

もう一つは、次の叙述だ。

「国家総動員法の労働力版といわれる「労務動員計画」が全国的に実施されるのは、一九三九年（昭和十四）七月の国民徴用令が施行されてからである。沖縄県からの徴用は一九四〇年（昭和十五）十二月からはじまり、一九四三年（昭和十八）までに四〇〇〇人以上を本土の軍需工場等へ送り出していたが、太平洋戦争後半期になると国民登録の拡大、女子挺身隊令などによって、さらなる労働力の供出が要請されてきた。

沖縄県から第一次女子勤労挺身隊が送り出されたのは一九四四年（昭和十九）二月であった。その後、本土の工業地帯への派遣は数次に及んだ。各郡の国民動員署から村役場に人数の割り当てがあって、各部落から一人ずつの割り当てで強制的な徴集であった。」P612

この叙述も、勉強不足の私は注目しないわけにはいかない。労働力供給元として沖縄が見なされてきたのは、戦後も続く。これらの際、労働力としてどうみなされていたのか、ということにも注目しないわけにはいかない。単純労働力としてなのか、それとも一定の技能技術保持者としてなのか。それと教育がどうかかわるのか。また、

労賃はどうなのか。検討しなくてはならないことは多い。

たまぐすくの民話

（２００７年4月２日）

中山の集落センターから借りた本、玉城教育委員会『たまぐすくの民話』（２００２年）に目を通す。玉城在住の方々から聴き取りをした話が満載の分厚く大きい本で、一部しか目を通していないが、興味津々の話が多い。

１）沖縄・玉城・各集落・門中スタートの話はおもしろい。『神話』も含まれている。この地域の歴史が透けてみえてくる。おおよそ７００年ほど以上前の状況がみえてくる。たとえば、かねてからの疑問であった、中山集落などがかっては丘の上にすんでいて、徐々に下におりてくる歴史の一つの理由がわかる。丘の上は島尻マージだが、下の海岸近くはジャーガルで、鉄製農機具でないと「歯がたたない」ということがあり、鉄製農機具の普及が集落立地に関係があるということ。

２）中山という地名は、もともとは仲栄真であったが、第二次大戦の戦後中山となったこと。しかも、集落の人々が相談して工夫してそうなったというよりは、当時の行政担当者が、三文字では面倒なので、「便利さ」を考えてそうしたということであり、中山住民はそれを受け入れるしかなかったということ。

３）集落間のケンカとか、「こんなこと書いていいのか」という話もある。

４）近隣の知っている方も話者として何人か登場している。明治末から昭和初期生まれの話者の方々が、昔話を通して、地域をみつめる目が興味深い。

５）近代以降の行政支配については、間接的な形ではみえるかもしれないが、主に、それ以前のありようが反映している点で興味深い。その意味では、沖縄戦の聴き取りと対照させて検討することも一つのアプローチとなろう。

６）沖縄の人々の生き方に強い影響を及ぼしたものとして、１８世紀の朱子学イデオロギー、１９世紀に大きく広がった家族イデオロギー（門中、トートーメーなども含む）、１９世紀末からの教育施策を通してのイデオロギーといったものをくぐったものとくぐっていないものとを読み分けて検討していくと、興味深いことになろう。

戦争とユタ　火葬場　西原町史

（２０１１年１２月１２日）

琉球王府時代からユタは統制抑圧されてきた。長年にわたって、時の政権は、政治的軍事的な支配を貫くことには、民衆の精神的宗教的支配が不可欠だと考えてきた。

太平洋戦争末期においても同様であり、そのターゲットの一つがユタであった。それについて、次のように記述されている。

「琉球処分（一八七九年＝明治十二年）後は、政府が推奨する国家神道の普及を妨害する淫祠邪宗として警察の弾圧の的にされたが、戦時体制になるとさらに取り締まりが厳しくなってきた。海外で戦死した兵士の遺家族

に対して「戦死者のマブイ（霊魂）が迷っている」などとハンジ（判断事）がでて、あちらこちらでウガン（御願）をしてまわるようになる。戦況が悪化するとともにこのようなユタの活動が目立つようになり、官憲（役人。とくに警官）としては戦意高揚の観点からみても無視するわけにいかず、思想取り締まりを管掌する特別高等警察（特高）が日常的にユタの活動を監視して取り締まった。

一九三八年（昭和十三）には、ユタ一人に賞金二円の懸賞をかけて密告を奨励し、ときには一挙に二百数十人を検挙するなどの弾圧がおこなわれた。しかし、いかなる強権をもってしても夫や息子を失った女性たちの心の中まで取り締まることは不可能であった。戦争末期まで官憲に隠れてユタを買う習慣は続いて、遺家族のカウンセラーの役割をはたした。建前では英霊顕彰の公的儀式にしたがいながら、本音ではユタに頼らざるを得ないところに精勤運動の限界があった。戦争末期まで官憲に隠れてユタが暗躍したことは、沖縄民衆のささやかな抵抗というべきであろう。」P319

ユタだけでなく、火葬場設置にも同様の問題があらわれる。

「神社や鳥居に象徴される国家神道の普及は、国民の精神統合の面からも、戦没兵士の「名誉の戦死」を顕彰する意味からも重視された。こういうヤマト式の英霊思想（靖国思想）の支障となるのがユタと洗骨の風習であったわけである。県当局は、警察を動かしてユタ弾圧をおこない、火葬場建設を奨励したのであるが、財政難にあえぐ他町村がおおむね消極的であったのに対し、西原村が率先して県内第一号の火葬場を建設したことは県当局から大いに歓迎され」P320

ついでに私の記憶をたどると、岐阜県で生まれ育った私だが、火葬以前は土葬で、一九五〇年過ぎ、祖父が土葬に付されたことを覚えている。

３６．沖縄・日本・同化教育・・・

国民統合と「異法域」、そして教育　「沖縄県史近代」を読む（２０１１年１１月２１日）

明治期における沖縄統治政策を概括して、次のように記述されている。

「沖縄の統治政策は、教育や徴兵のように国民として統合していく論理と、地方制度のように国内と同一ではない「異法域」の状態が並存・対立している事態をもたらした。このように「異法域」を含んだ制度的「異化」の状態は、固定化されたものではなく、制度の合一を目指す暫定的なものであった。沖縄の特別統治は、固定的なものではなく、完全な「国民国家」の一地域に向けて包摂されていくように段階的な国家統合のモデルとして位置づけることができる。」P170

この指摘に呼応するかのように、一八八〇年の小学校設置において、

「十四小学校のうち十校を数える島尻地区では、「校舎は総て旧下知役詰所を以て之に充て、諸般の設備教授の方法等恰も昔時の寺子屋風にして、教員は悉く他府県人を採用」したという。施設としての連続性の一方で、教員がすべて他府県人となったことには大きな断絶がある。」P191

こうした動きは、明治政府側からの視点でとらえたものであり、地元沖縄の動きを見ながら、明治政府の政策を推進していく動きの特質を示したものである。

では、これを地元沖縄側の視点でとらえていくとどうなるか。地元沖縄といっても多様であるが、この時期にあっては、旧士族（上級、下級、屋取）層、地方役人層、一般農民層、士族外の都市住民層によって対応が大きく異なる。そうした地元沖縄の各層のなかで、政府の政策への対応という形で、たとえば学校に子どもを就学させるかどうか、への対応が異なってくる。そして、そこに一定の利害関係が関わってくる。たとえば、地方役人層は、旧慣温存のなかで地位を維持するために、従来の筆算稽古所を「継ぐ」ものとして小学校をうけとめ、小学校就学を行う。

さらに、日清後の『国民統合』をめぐる状況変化、さらに甘蔗栽培の拡大などともかかわるが金銭経済の浸透、さらに「土地整理」とも結びついた農家の個人経営的性格の拡大などの変化のなかで、学校の受けとめかたに変化が生まれ、ある意味で「主体的判断」で学校就学をとらえる層が拡大する。

そうした動向とからみつつ、地方役人層に加えて、下級士族や屋取り層を中心に、師範学校進学を含んで教員になるものが拡大し、沖縄教育界のなかでの沖縄出身者の比率を拡大していく。彼らは、明治政府の教育施策、それを具体化する他府県出身幹部に従いつつ教育活動を展開するわけだが、それでも「沖縄出身者としての自分なりの判断」が含まれている。その意味では「沖縄おこし」と結びついた「人生おこし」的な色彩が、たとえ薄くても存在している。

そうした動きが蓄積拡大していくなかで、大正期昭和戦前期になると、「独自性」「独自創造」を感じさせるものを生み出していく。そのあたりは、後掲の「方言論争にかかわる照屋信治論文」が解明しようとしている世界で

ある。

さらに、東京の政府による政策が消えたかにみえ、米軍支配下にはいる戦後直後において、沖縄の教育界は、どのような教育活動を展開するのだろうか。まさに戦争直後のエピソードとして、本書３８の石川の初等学校をめぐる動向がある。そして、その後の今日にいたるまでの展開がある。

こうして、百五十年近くを同じ視野に入れて考えると、新たに見えてくる世界、新たに見出さなくてはならない世界があるのではなかろうか。

同化　皇民化　沖縄おこし　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１２月４日）

「同化」は、戦前沖縄史における重要な概念であるが、とくに教育史においてはそうである。私自身も、しばしば使用してきた概念だ。その「同化」について、よく整理された叙述がある（執筆者波平恒男）。いささか長いが紹介しよう。

「なぜ近代の沖縄では「同化」が問題ないし課題となったか。その理由としては、近代日本が新たに版図となった諸地域に対して同化主義=内地延長主義の基本政策をとったという、日本の植民地統治それ自体の特質に関わる要因と、その版図拡大の最初の事例と見なしうる沖縄の「生活様式や思想」が「内地」とは著しく異なっていたという二つの要因を指摘することができる。そしてここでは議論を後者のみに限ると、「内地」と沖縄の相違ないし異質性についても、次の二つの次元を分けて考えることができる。

一つは、「内地」と沖縄との言語や習俗慣習などの「文化の相違」が極めて大きかったことである。この文化の違いという問題は、ある意味では程度問題であり、日本国内（内地）でも明治維新以前は各身分、各地方によって言語や習俗などにかなりの相違があった。しかし、沖縄の場合は、統治上の困難の一つとして「言語不通」が常に挙げられてきたように、言葉をはじめとする文化的差異の大きさが、国内の地方差というより、異民族のそれを想わせるほど著しいものとして感知されたといえる。すなわち、同化というのが「本来異なるものが同じくなること。また同じくすること」（『広辞苑』）を意味するとすれば、沖縄の文化もまた、海外植民地やアイヌ民族の場合に似て、内地（本国・和人）のそれとは「本来異なる」と見なされる程の差異感をもって当時の人々に受け取られたのである。そこに、沖縄で「同化」や「同化政策」なる言葉が、その政策を上から推進した統治者の側だけでなく、政策の対象となった沖縄人の側でも使用された所以があったといえよう。

沖縄で同化が問題になったもう一つの要因としては、日本国家（明治政府）への「忠誠心の不在」が挙げられる。明治国家は徳川幕府から朝廷（天皇）への王権的権力の移行によって成立し、天皇を中心に構成され、皇国イデオロギーによって国民統合をはかったが、そうした草創期の明治国家に「琉球処分」という形で強制的に併合された沖縄では、それまで天皇や天皇制的イデオロギーとは歴史的に縁が無かったことから、天皇とその政府への積極的忠誠心に欠け、天皇に帰一するという価値観や心情は存在しなかった。そのゆえ、沖縄では置県の当初から、皇国イデオロギーの注入による忠誠心の培養という「皇民化」が、日本語（大和口）の教え込みをはじめとした「同化政策」の一環ないしはその本質的部分をなすものとして、為政者や教育関係者などによって追求された。」Ｐ４８６－７

最後の「皇民化」と「同化」との概念関係もよく整理されている。

そして、いくつも注目したい指摘があるが、ここでは三つに絞って紹介しておきたい。

「明治政府が「旧慣」諸制度を据え置く政策を採ったことは、日本本土ではすでに実施されていた諸改革が沖縄県では遅延されたことを意味する。その点で、旧慣存続策は近代における沖縄の「制度的差別」の定置でもあった。明治前半の日本では、諸制度の改革により社会の近代的発展が急速に進んだが、その結果として本土と沖縄との様々な格差もまた拡大することになったからである。

また、この時期の日本では諸改革を経て「国民形成」のための諸条件も広範に作り出されたが、沖縄ではそうした諸条件を欠いたまま、日本への「同化」に定位した教育の普及が要請された。その意味では、旧慣を存置しつつ同化教育には力を入れるという政府や県当局の政策には深い自己矛盾が含まれていた。」Ｐ４９２－３

「軍隊内での差別という体験は、本土での出稼ぎ先や海外移民先での差別体験とともに、それらの差別から脱却の回路として沖縄人が積極的に日本への同化を志向していくという内発的動機づけの効果をその後も長く果たし続けることになった。」Ｐ５０２

「社会移動の機会の拡大によって沖縄人が他府県人の沖縄観を強く意識するようになつていく様も窺うことができる。

こうして、日清戦争後の明治後半期の沖縄では、旧慣諸制度の改革とともに社会移動の条件が作られ、また壮丁教育や風俗改良運動などの沖縄内部から「同化」をめざす動きが大きく胎動する。このいわば「日本化」への沖縄の努力は、もちろん、その後も大正期から昭和前期すなわち沖縄戦に至るまで、加速度を増すことはあれ、止むことなく続けられることになった。

この永久運動のような努力の根底には、最初に述べたように、言語をはじめとした「文化の相違」という要因と、天皇制国家への「忠誠心」をめぐる問題という沖縄特有の事情があった。しかし、「同化」の目標である「日本的なるもの」が本来不定形で、歴史的に変化するものである上に、その目標の達成度を計る者が多数派の日本人でしかない以上、それは際限のない努力の性格を帯びざるをえない。」Ｐ５０４

最後に紹介した構図は、戦前だけでなく、戦後の、そして現代沖縄史にも通じるものを持っている。そして、その構図とは異なるものが登場しなければ、将来にわたって『有効さ』を保ちそうな気配さえある。それとは異なる構図の一つとして、私は「沖縄おこし」という構図を提出したが、いかがだろうか。

同化論　太田朝敷　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１２月１４日）

本書３４で紹介した「エリートたち」は、明治後半期、地元沖縄にあって明確な主張をもって行動する。その代表的人物の太田朝敷について、興味深い分析評価が書かれている（比屋根照夫執筆）。まずは、その要点を紹介しよう。

「「内地人の居留史」とはこのように薩摩支配から明治国家の支配の連続性を強調する太田らしい“被征服史観”の表明であったが、そこに第一回県費留学生として謝花昇らと共に明治初期の日本へ渡り、新しい学問で武装した明治沖縄第一期の言論人、知識人の誇り高い戦闘的な姿勢を見ることが出来よう。同時に、「内地人の居留史」

などと言う斬新な表現、史観の創造はこれまで全く見られなかった事であって、そこに明治日本に言論で立ち向い、自己主張を貫く新しい世代が台頭する様相が描かれている。」Ｐ２８７

「太田の言論人としての当面の課題は以下に列挙するような沖縄の現実的な矛盾の解決であった。曰く「一日も早く内地の各地方と並行せしむる」こと、「被征服者の地位を脱せしむる」こと、「真正の価値を発揮せしむこと」、「国民としての地位を一般に自覚せしむる」こと。言い換えれば、沖縄を内地各地方と並行（同化）させ、被征服者の地位に沈む沖縄の真正の価値（沖縄の誇り）を高く掲げ、日本国民として目覚めさせること、これである。」Ｐ２８８

「太田にとって何よりも重要なことは政治上、実業上（経済上）は言うに及ばず、社会上の「対等」、「同等」の関係を居留人社会、外来勢力、他府県との間で確立する事にあった。「沖縄県民勢力発展主義」とは（中略）、琉球処分以来「被征服者の地位」に転落した沖縄人の主体性（アイデンティティ）を回復し、沖縄人の地位向上を目指すものであった。そして、あの太田特有の同化論の土俵さえ、実はこの沖縄県民勢力発展主義と緊密に結びついて居たと言う事実に注目しなければならない。」Ｐ２９０

「「有形無形を問はず将善悪良否を論ぜず一から十まで内地各府県に化する事なり」と言う太田独特の同化論は、戦後の歴史的文脈でしばしば太田の真意を離れて誤解、曲解されることになったが、その真意はもとより明治日本への全面的な屈服、従属、同化にあったのではない。

むしろ、それは“戦略的同化”とも言うべき議論であって、沖縄の主体的な同化への選択によって全国と同一の地平に立って、琉球処分以降喪われた沖縄の社会的地位の回復、「被征服者の地位」からの離脱を目指す緊張を孕んだ議論であった。沖縄の社会的勢力はそれほどまでに没落した状態にあったのである。」Ｐ２９１

「「食客の立場」とは沖縄県人でありながら沖縄の政治的、社会的な状況に何等発言、行動する力も無く、県官僚、実業家、など外来者の指揮、監督、強制の下で、「食客」として自己の身を庇護される他者依存・主体性剥奪の状態を指す。まさに「食客的生活」、「食客の立場」、「食客の位地」等々―。これが言論人太田朝敷の生涯を貫くフレーズであった。（中略）

近代沖縄の位置を「植民地」とさえ断定している。苦渋の思いを込めて「植民地」と述べた太田のこの認識もまた明治中期以来の一貫した認識であって、太田は明治中期の論文で「……沖縄は決して日本の新領土にあらず、我輩沖縄県人も亦決して爾く思はざるなり、然れども政府は慥かに新領土を以て沖縄に擬せり」とさえ述べている。（中略）

近代沖縄の政治・社会状況を太田は「植民地」的状況とみなし、太田固有の「同化」主義を提唱し、「沖縄県民勢力発展主義」をその思想の中核に置き、「植民地」的状況を克服すべく沖縄の「社会的勢力」の結集を訴えたのである。」Ｐ２０２～３

以上について、私なりにいくつかコメントしよう。

１）近年私が言う「沖縄おこし」にかかわるものであり、そのことへの太田の強い気概を感じる。

「「被征服者の地位」からの離脱を目指す緊張を孕んだ議論」、「「沖縄県民勢力発展主義」をその思想の中核に置き、「植民地」的状況を克服すべく沖縄の「社会的勢力」の結集を訴えた」という個所などがそうである。

２）そのことの実現を図るために、「“戦略的同化”とも言うべき議論であって、沖縄の主体的な同化への選択によって全国と同一の地平に立」とうと呼びかける戦略をとる。

このあたりを読むと、１９７０年代終わりに、私がインタビューした屋良朝苗氏のことを思い出す。彼は、戦前台湾で教育に携わっていたが、戦後沖縄に戻る。そして、子ども・若者が植民地人的な姿勢を抜けだし独立気概をもつものへと育てることを目標に、沖縄教育に取り組んだ、などと語る。と同時に、その文脈の中で、祖国復帰運動を展開するが、それは、沖縄の自立の文脈の中での「日本復帰」なのだ。

※　詳細は、浅野誠「沖縄教育の反省と提案」明治図書 1983 年刊を参照してほしい。

私には、時代は異なるが、太田と屋良の論理構造、行動には類似したものにあるように思われる。

３）太田のこうした「戦略的同化」論は、今風にいうと、「本土・他府県においつけ」とか「全国最下位を抜け出そう」という文脈での同化論とは異なる。にもかかわらず、そうした同化論を排除する論理でもない。

同化論は、日本政府＝沖縄県庁によって推進されるだけでなく、沖縄人によっても推進された。とくに教育界が重要な役割を果たした。それらの主流は、典型的には「標準語強制方言撲滅」に示されるようなものであり、今日では、それは「本土・他府県においつけ」とか「全国最下位を抜け出そう」のような形を取りがちだ。

教育界では、戦前にあっても戦後にあっても、「沖縄おこし」的なもの、沖縄自立的なものが希薄であるが、そのことをどう克服していくのか、という課題が歴史的に存在している。

かくして、「沖縄人による同化論」は、太田以降、複雑な要素がからみあいながら展開していく。そのことを「沖縄おこし」的な視点をもって、私は解明してきたが、まだまだの段階にある。今後さらに探求を続けたい。

伊波月城と沖縄教育界　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１２月１８日）

「沖縄言論人の成立」の節では、太田朝敷とならんで伊波月城が取り上げられている。

一九〇九年の「中頭農学校生徒ストライキ事件」は、「この事件の背景には、学校当局側の生徒に対する「人種問題、排外思想、非文明的所業」があったとされる。おそらくは教師の沖縄人蔑視に端を発したものであり、（中略）学校現場における外来教師優位の現状に「生徒激昂」した結果、一年生から三年生まで全員が「同盟休校」し、「退学願」を学校当局に提出、ストライキ事件に発展したものである。」Ｐ２９５というものであるが、本論では、月城の「ストライキを支持する理由」が注目されている。

「如何となれば彼等は自己の為めよりはむしろ沖縄の為めに憤りを発したからである。沖縄の教育家連が骨のない海月の如き軟体動物の製造に日夜苦心しつゝある今日、是等の悪風潮と奸悪なる行動とに反抗したのは沖縄の為め賀す可きことでなくてはならぬ。快男子邦家の為めに健全なれや。」Ｐ２９６

そして、サボナローラの詩になぞらえて、月城は語っているが、それは「月城はこの詩の中に農学校ストライキ事件の背景にある沖縄教育界の腐敗、あるいは沖縄社会の実態を見ていたからである。」Ｐ２９７と述べられる。

そしてさらに、「月城は高らかに訴える。（中略）今や来らんとする新機運は帝国の津々浦々に漲ってゐる。只醒めないのは沖縄教育界の諸君子であるらしい、然し之を覚醒させるのも吾等青年沖縄党の任務である。」Ｐ３０１というのだ。

当時の沖縄教育界の特質、そして、それに対抗する沖縄知識人のありようを示唆して興味深いものがある。

中央政府の方針に基づき、さらに沖縄人に対する差別意識をも忍び込ませた、当時の沖縄教育界の中核部分は、

その後の沖縄教育界の体質のベースになっていく。沖縄教育界に沖縄人がかなりの比率を占めるようになっても、この体質は大きくは変化しない。ただし、「沖縄人に対する差別意識」が、「沖縄は遅れている、中央に追いつけ」の主張へと転化していく点を除けば、であるが。いずれにしても、沖縄の自立的な「沖縄おこし」がテーマに上らないのが特徴的である。

こうしたものがいつどのように克服されていったのか、克服されないままなのか、という実践課題研究課題が後世に残される。

屋嘉比収『＜近代沖縄＞の知識人　島袋全発の軌跡』を読む

（２０１０年８月４日、６日、８日）

正式タイトルは、屋嘉比収『＜近代沖縄＞の知識人　島袋全発の軌跡』（吉川弘文館 2010 年）である。随分前に『沖縄童謡集』などを読んだし、戦前の教育関係・沖縄文化関係でたびたび登場してくるので知っていた島袋全発（1888 年～1953 年）であるが、詳しく調べることなどはしてこなかった。今回、この本を通して、彼のことを知るだけでなく、同時代沖縄知識人について知るうえで、大変示唆的な本だった。

１）同化思想と沖縄知識人

島袋全発前後の沖縄知識人について、示唆的であり簡潔にまとめられているものをまず引用しよう。

「近代沖縄の歴史の中で、歴史の表層に表れた思想的潮流を考えてみると、その中心にあるのは近代日本国家への同化の思想であった。しかし、近代沖縄史の中にはその同化の思想という潮流を批判し相対化する主張として、少なくとも三つのアイデンティティの主張のあり方が指摘できるように思う。

一つは、沖縄から異郷の地へ移り、その異郷の地で故郷を再想像／創造し、独自のネットワークを構築していくあり方である。（中略）

二つめは、沖縄から海外へ移民し、故郷を離散したディアスポラの視点から移住した地域に根ざし、日本国家を相対化する思想である。（中略）

三つめは、故郷である地域に根ざし直すという視点である。沖縄に生まれ育ちながら、一端沖縄を離れて、再び沖縄の地に戻り、地域に根ざし直し「再定住」するあり方である。それは、本書で論じた島袋全発のパトリオティズムの主張にみられる。

いずれの思想も、近代日本国家へ同化する思想を批判し相対化して、沖縄の多様なアイデンティティを主張するあり方であり、今後その系統的な分析が広く求められることになろう。」Ｐ１９７～８

戦前期の沖縄知識人は、中央政府の「同化」政策に合わせ、それを積極的に推進した人々と、「同化の思想という潮流を批判し相対化する主張」に立つ人々がいた。しかし、前者の人々にしても、「沖縄を捨てる」単純な同化論者ではなく複雑さをはらんでいたが、後者の人にしても、単純な同化批判論者というわけにはいかない。

その複雑な性格について、著者は「二重意識」というキーワードで次のように分析する。

「前述したように全発が感じる二重意識は、全発個人の意識というより、近代日本国家と沖縄との関係から生

じる沖縄人の意識だった。その意味で、全発の主張を含むそれら三つの沖縄のアイデンティティの主張にも、同様にその「二重意識」の問題が内包されている。なぜなら、その二重意識は、近代日本国家と沖縄との植民地主義の関係がもたらしたものであり、被植民者が内包せざるをえない視点であるといえるからだ。さらに、全発の近代沖縄への眼差しを考えることは、近代日本国家と沖縄との関係だけでなく、近代日本と東アジアとの植民地主義の関係がもたらした、被植民地の位置にある人々の二重意識を考えることへとつながっている。」Ｐ１９８～１９９

戦後沖縄においては、戦前における以上のような複雑な構造を対象化して分析し、克服すべき戦前のありようを浮かび上がらせて、戦後構想を構築するという「余裕」は極めて少なかった。そのため、戦前的ありようがそのまま「生存」する構図が有力でもあった。

教育を例にあげよう。たとえば、他府県においては、戦前の軍国主義をいかに批判的に総括し、平和教育民主主義教育を創造していくかがテーマとして浮かび上がる中で、教育界、個々の教師たちの戦争責任の問題が議論されるだけでなく実践的にも追求された。それは不十分であったともいわれるが、それが一つの焦点的課題になったことは確かである。

沖縄にひきつけていうと、このことと、著者のいう「二重意識」そしてその背景にある植民地主義の問題と、この双方をいかにかかわらせて考えるかという課題がある。　（続く）

２）常識的でおだやかな中庸思想

上で述べた課題は、未開拓に近い。とはいえ、たとえば戦争体験記録を掘り出す営みが広がり始めた 30～40 年前からこの問題に取り掛かる動き、例えば、沖縄における戦争加害者責任の追及の動きなどが、芽生え始めたといえよう。

だが、教育界でいうと、大勢としては、戦前教育の総括作業は未開拓状況にある。30 年以上前に、屋良朝苗さんにインタビューする機会をえたが、その時の第一印象は、戦前との断絶よりも戦前との継続関係であった。それは、「日本的なもの」と「沖縄的なもの」とのからみであり、突如現れた「アメリカ的なもの」＝新たな植民地的なものとの対抗とのからみでもあった。

こうした課題は、実は他府県では出会うことがない、あるいは出会っても大変希薄なものにおさえこまれていた課題である。近現代を生き、それをどうとらえるか、そして今後をどう構想するかということは、むしろ沖縄が直面してきたことの方が「典型」だとさえ言えよう。他府県は、それが余りにもナショナリズムの枠内で抑え込まれてきたと言えるかもしれない。

このあたりのことにも関わりがあろう問題にかかわって、本書は次のように述べる。

「全発の戦後の生活は、戦前の否定されるべき沖縄近代史の歴史的結末である沖縄戦の惨劇を反省しながら、それを教訓として新たな日々を生き直す軌跡であったことを銘記しておきたい。その意味を、私はくり返し学びなおしながら考えつづけたいと思っている。

沖縄の郷土史家として生きた島袋全発の思想は、近代沖縄における少なくとも沖縄の生活に根ざした常識的でおだやかな中庸の思想のもつ重要性について、そして戦後にはその近代沖縄史の歴史的帰結である沖縄戦の惨劇を反省しながら、その生を生き直すあり方において、私たちに多くの示唆を投げかけている。」Ｐ２０２

「沖縄の生活に根ざした常識的でおだやかな中庸の思想のもつ重要性」、この表現は実に巧みで、ポイントを適切についている、と思う。だからこそ、著者がいう「私たちに」「投げかけている」「多くの示唆」をどのように受け止めていくのか、その課題は大きい。

３）「日本的なもの」と「沖縄的なもの」の「二重意識」

「日本的なもの」と「沖縄的なもの」をどうとらえるか、ということをめぐっての「二重意識」の分析には示唆的な記述が多い。たとえば、次のように、である。

「総動員体制期の全発には、オモロに代表される「沖縄文化」は「琉球民族」の文化としてではなく、あくまでも「日本民族」の「日本精神」を理解するために、その祖型としての「沖縄文化」を学ぶものとして位置付けられた。しかし、そのような考えは、なにも全発だけの認識枠組みではなかった。それは当時、沖縄研究に主導的役割を果たした日本民俗学の「古日本の鏡としての琉球」という言説の影響、すなわち「沖縄文化」を日本文化の「祖型」や「原型」として位置付ける基本的な枠組みに基づくものであった。」Ｐ１６２～３

「おもろに代表される「沖縄文化」は、戦時下に「日本の心の髄」として位置付けられた。戦時下の沖縄文化に対するその認識は、日本国家における沖縄文化の位置付けとして学問的に正当化されたことで、逆に政治的には大きな陥穽の役割を果たすことになる。」Ｐ１６３～４

「近代日本国家と沖縄との関係のなかで、一貫して沖縄の位置から論じてきた全発の意識には、被植民者の立場に見られる「二重意識」の存在が指摘できる。それは、日本帝国臣民でありながら、同時に近代日本国家の中で抑圧された沖縄人でもあるという、両義的位置からもたらされた二重意識といえるものだ。たとえば、沖縄にとって、近代日本国家との関係の歴史はたえず両義的意味をもっていた。それは、「解放」としての近代と、「抑圧」としての近代とでも称すべき両義性である。いわば、それは「植民地近代」のあらわれだといえよう。」Ｐ１９３～４

これらの指摘は鋭い。そして、パトリアティズムというキーワードを使用して、これらをさらに次のように深める。

「ジョージ・オーウェルのいう「愛国心としてのナショナリズム」とは異なった、「愛郷心としてのパトリオティズム」に対する強い眼差しを想起させる。オーウェルによると、両者は時に重なりあう場合もあるが、決して同じものではなく異った概念だと把握される。両者におけるその「差異」への着目こそが重要である。すなわち全発の中では、パトリオティズムとしての琉球民族意識に対する関心が中心にあり、ナショナリズムとしての近代日本国家や国民意識に対する関心はほとんど乏しかったのだ。」Ｐ１９５

これらの注目すべき論は、さらに次のような論議にもつながるであろう。

それは、「ナショナリズムに彩られた近代日本像を相対化する」ということである。近年、ナショナリズムとは結びつかない、日本という地域、あるいは地域連合を構想する議論に出会うが、そうしたものをどう構想し、その中に沖縄を位置づけるとしたらどうなるのか、という問題である。その中に沖縄を位置づけしないとしたら、どうするのか、という問題である。沖縄自治州論議が広がる中で、この問題は避けて通れないだろう。

また、こうした議論は、沖縄だけの問題ではなく、他府県において、国民国家・ナショナリズムに象徴される「近代」「近代国家」像から、いかに脱け出していくか、という問題とも結び付く点を指摘しておかなくてはなら

ないだろう。

最後になるが、島袋もその身を置いた沖縄教育界にかかわって付言しておこう。

その沖縄教育界の現在は、戦前の「同化の思想」からどれだけの距離を置いているのだろうか、「沖縄の生活に根ざした常識的でおだやかな中庸の思想」である島袋の思想を踏まえているのか、それとも排除しているのか、そうした問いかけも出てくるであろう。

戦前における『郷土研究』　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１２月２１日）

戦前沖縄における「郷土研究」「沖縄研究」の経過の記述を抜き出してみよう。

「琉球処分以降の沖縄では、郷土の歴史や文化に対する関心はほとんど否定されていた。一部では、「亡国の民」として琉球には独自の語るべき歴史はないものと認識されていた。（中略）

そのような明治後期以前の状況に大きな変化をもたらしたのは、日露戦争以後の国家の施策である地方改良運動の影響を受けた郷土の歴史や文化の見直しであった。伊波は資料収集のため、沖縄本島だけでなく言古・八重山まで訪れ、その伊波の影響を受けた地元離島において郷土研究への関心が芽生えていった。（中略）

沖縄の歴史や文化が否定されていた明治中期までとは異なり、明治後期になると郷土の歴史や文化に対する関心が『沖縄教育』など教育関係の機関誌や新聞などで表現され始め、一部の識者や教員層を中心に関心がよせられていく。」Ｐ３０５～６

「「ソテツ地獄」以後の沖縄社会における教育状況や教育環境の変化を受けて、沖縄教育界のなかでとくに重要な課題として取り上げられ、学校教育で力が注がれたのは、「郷土教育」「移民教育」「国語教育」（標準語教育）という三つの分野であった。その背景には、第一次世界大戦以降の政府による国家再編政策としての地方改良運動の動向や大正デモクラシーの時代思潮を受けた自由主義教育の沖縄への影響、「ソテツ地獄」の長期化による県外への多数の移民・出稼ぎ労働者の流出、満州事変以降の徴兵による県外生活体験者の増大などさまざまな要因による沖縄社会の構造的変化があり、その変化の情勢に対して県の教育政策や学校教育の対応がはかられた。」Ｐ３０６

「昭和期に入ると、さらに沖縄県教育会を中心に郷土教育と郷土研究が車の両輪として位置づけられ、沖縄の郷土文化の高揚に中心的役割を果たしていくようになる。その意味で、沖縄の郷土文化を尊重し郷土教育や郷土研究を深めていった要因は、沖縄の内発的な意思もあったが、同時に外発的な要因に負うところも大きかった。」Ｐ３０７

「（ピーター・シュミットの）講演をきっかけとして、一九二七年（昭和二）に沖縄県教育会が提唱し、さきの講演会参加者を中心にして「沖縄郷土研究会」が設立されている。同会は、講演会を契機に半官半民の沖縄県教育会の提唱で設立された点から考えると、有志による学術的な郷土研究の組織とは言いがたい。沖縄県教育会の主導で設立された沖縄郷土研究会は、当時、文部省の指導によって師範学校を中心に開催されていた郷土教育講習会に見られるように、「愛国心のための愛郷心の作興」という官製主導による郷土教育の実際化の一環だったと指摘することができよう。」Ｐ３０７－８

「『沖縄教育』に掲載された郷土史研究や郷土教育に関する論考のほとんどが、官製主導による「愛国心を作興するための郷土教育」という論調に貫かれている点が指摘できる。」Ｐ３１０

沖縄教育界にかかわっては、このように中央政府の政策に即して展開される動向が圧倒的である。にもかかわらず、沖縄のなかでは、郷土研究・郷土教育に、沖縄にとって何かプラスになるきっかけというか、芽というか、そのようなものを感じ取って積極的に動いた人々がいたことを見失ってはならない。と同時に、それらのきっかけ・芽が、どのようなプラスの可能性を秘めており、かつ、その後、特に戦後において発展させられていったのか、いかなかったのか、を問う必要があるようだ。

だが、世界・アジア近隣地域・日本ともつながりながら、沖縄独自のものを発見・創造していく営みは、順調にすすんだわけではない。教育分野では、そうした動きは、むしろ希薄であったと言えるほどである。戦後の小中高校では、地域教材が作られはしたが、その活用は限定的であり、「たなざらし」にされていたものも多い。１９７０年代、そうした当時の状況をめぐって、私は、沖縄素材は『味付け』程度のものであって、教育内容本体に組み込まれることはほぼない状況を指摘した。中央政府の教育内容統制に積極的に応えることが中心であり、各地域各学校で創造的に展開できるものさえ、「たなざらし」状況にあった。ようやく、1990 年代以降、音楽舞踊などで、「沖縄らしい」ものを取りいれる状況が生まれたぐらいであった。

そうしたものは、私がいう「沖縄おこし」につながって意識的に展開されるレベルにまでにはなかったのである。

照屋信治『「沖縄方言論争」と『沖縄教育』誌上の「標準語」教育論――「混用」という可能性――」を読む

（２０１１年１１月１７日～１２月６日）

１）著者から寄贈していただいた論文である。正式タイトルは、照屋信治『「沖縄方言論争」と『沖縄教育』誌上の「標準語」教育論――「混用」という可能性――」であり、日本教育史研究会『日本教育史研究』第３０号２０１１年８月に掲載されたものだ。

第一印象は、充実した論文である。これを機にいろいろと考えさせられた点が多いので、何回かにわたってコメント、さらに、論文から離れて私なりの提案をしていくことになろう。

ところで、私の沖縄教育史研究では、大正期と昭和戦前期は未着手のままである。それを補う学習を始めているというのが率直なところであり、本論文はその時期の一部を対象としており、私が論文の指摘の当否を言いうる段階にはまだ距離があるので、コメントも浅いものになりそうなことを予め承知しておかれたい。

その時期で、当時だけでなく今日に至るまで多くの人の注目を浴びてきたものに「方言論争」がある。本論文は、当時の沖縄教師たちが、その問題にどうかかわっていたかを、「沖縄教育」誌掲載の諸論を素材に検討したものである。そこには、ここ１０年の何人かの研究者の間で展開された研究の成果が反映しているだけでなく、さらに論争的に深められるべき諸問題が提起されている。

この論文には、小国喜弘・戸邉秀明の両氏の『論評』がついている。この『論評』がまた興味津々のものだ。小国さんとは２０年近く以前になるだろうが、当時博士論文作業をすすめていた彼から、沖縄教育史に関して質問をうけるためにお会いしたことを記憶しているが、この「論評」で「再会」したというわけだ。

また、日本教育史研究会について、３０年近く前にその中心的メンバーの方と、別の機会にお会いして、研究会の進め方の特徴についてお話を受けたことがある。私が入会したかどうかは、記憶の外になってしまったが、入会したとしても何もしなかった会員だったろう。

しかし、この会の進め方には強い刺激を受けた。その刺激をもとに、設立準備間近であった日本生活指導学会のありようをめぐって、「研究道場」的なものにしたい、自由研究発表は１～２時間の長時間のものにして、コメンテイターをつけて討論を進めるというアイデアを私は提案した。

その日本教育史研究会とも、今回が間接的な「再会」といえるかもしれない。

２）方言論争前の「沖縄教育」での論議

方言論争前後、特にそれ以前に「沖縄教育」で論じられていたこと。

本論は、方言論争（１９４０年）前後に沖縄教育会機関誌『沖縄教育』に掲載された諸論の検討分析を中心に展開している。当時、展開されていた標準語励行運動について、著者は次のように指摘している。

「標準語励行運動は、沖縄県庁および学務部によって推進されたものであるが、それは、大和人による沖縄人への猜疑心と、その差別の視線から逃れようとする沖縄人指導者層の行動とが相まって、県民運動的な広がりをもったといえよう。そのような行政主導の運動が沖縄人の一定の支持をとりつけることが可能であった背景には、学務部内や教育関係の要職への沖縄人の進出があった。」Ｐ４２～３

こうした標準語励行運動が展開されていたわけだが、徹底的な励行運動一色と言うわけではなく、それに批判的な諸論も、『方言論争』以前の「沖縄教育」には掲載されていた。それらの諸論が、本論文の中心的な素材になっている。

たとえば、１９３５年掲載の佐倉龍治『人気者』を次のように紹介している。

「これは「方言取締り」に関する職員会議を舞台とした創作である。「方言する奴には片つ端から其の罰札をブラ下げてやる」と息巻く体操担当の新垣訓導と、罰礼を「教育的に何等の根拠もない方法」とする国語主任の吉見訓導とを両極に、校長や他の訓導が、「方言取締り」の是非や、高学年の指導の在り方などを論ずる内容である。」Ｐ４５～４６

また、１９３７年６月の『沖縄教育』に掲載された真木滴の論も次のように紹介検討分析されている。

「真木によれば、沖縄人にとって「おおやけ」の言葉たる標準語とは、「内実的な誠意のない」、「よそ行き的なお上品な舌ざわりのいい」という言葉で表現されるものであり、逆に、「わたくし」の言葉たる「方言」とは、「生活語、力強いひびきを持った言葉」、「第一義的な子供の言葉」、「心の声」であり、「生活的真実のひらめきへ」、「たましいのひらめき」という言葉で形容されるものである。そして、「標準語を強制しない」と言い、生徒に対して「方言するなとは子供を殺す言葉としか思われない」と述べるのである。標準語が不要とまでは述べていないまでも、標準語強制に対する明確な批判であるといえよう。このような議論が、教育会の機関誌で堂々と論じられている事実をまず確認すべきであろう。」　Ｐ４６～７

また、１９３６年の『沖縄教育』に掲載された、当時、沖縄の国語教育界に影響力をもっており、教育界では全国的に著名だった芦田恵之助の講演記録を紹介している。

「私は或る程度まで方言をみとめます。（中略）児童のもつてゐる生命語を無視して、レコード等に依る矯正は

戒むべきであります。沖縄ならば沖縄色があって然るべきで、徒らに中央語に近づけようとあせつてはならぬ。地方の生命語を土台として、教師が日々、中央語に導いていくべきであると思ひます」Ｐ４８

こうした諸論を紹介しつつ、照屋さんは次のように指摘する。

「一九三九年段階までの議論において、柳と学務部で交わされた方言論争での論点のほとんどが論じられていた。標準語と方言の「併用」という論点は独自なもののように思われるが、柳以前においても、一九一〇年代に、伊波普猷が標準語教育への言語学的な協力を行いつつ、方言での講演を行っており、その行為は「併用」論的な実践であったともいえる。さらに、「併用」論よりも大胆な宇久本の「混用」論まで提起されていたことを考えると、こと言葉の教育に関しては、方言論争に新しい議論の深まりは確認しえず、沖縄の教師たちにとって目新しい認識が提起されたとはいいがたい。

ただし、方言論争は、標準語励行運動の文脈において重要な事件であった，それは、一九四〇年以降の教育界の論調の変化においてである。」P56

この宇久本の「混用」論に、本論文の焦点が当てられている。

さらに照屋さんは次のように書く。

「方言論争をはさむ『沖縄教育』の標準語励行に関する二つの「特集」の違いは明らかである。後者においては、教育的な議論、学術的な認識が入り込む余地がなく、沖縄の教師たちが『沖縄教育』誌上で積み上げてきた議論がかなぐり捨てられてしまっているのである。それは、それまで教育的・学術的議論を行っていた教師たちが口をつぐまざるを得ない状況になっていたということであろう。」P58

このように、「方言論争」を民芸関係者と県庁学務部とを中心とする論議にではなく、当時の教育現場に近いところにひきつけて検討しているのが、本論の特徴であり、重要な点である。

３）標準語と方言との「混用」を主張する宇久本政元

そうした諸論のなかで、照屋がわけても注目評価し深い分析をした、「標準語と方言との「混用」を主張する宇久本政元の論考」について見ていこう。

「宇久本は、離島の久米島で生まれ、そこで教育に従事していた人物だが、一九三九年九月、首里に近い真和志尋常高等小学校の訓導の時に、「標準語励行の方法に関する―考察―ブロークンで行け」という論考を発表する。その議論はきわめてラディカルな内容であり、注目されたものと思われる。」Ｐ４８

引用された宇久本論の一部を再録しよう。

「私達が聴覚を少しく敏感に働かせると首里人と那覇人との間にさへ言葉全体としての相違を見いだすのだ。八重山、宮古、国頭等々と考へると著しい相違があるのだ。又沖縄出身を一団として見る時、それらの使用する言葉と他県人を一団としての人々の言葉にも相違があるし、更に、その他県人間にも亦、県人相互の相違があるのだ。／そこに気付く時、私達は勇敢に私達個々の人々の有する言葉に関する既有概念に、他の人（これが幼少者でもよい）の言葉を押し込んでいいものか？それに疑問なかるべからずだ。／　（中略）／私の標準語励行の根本方針は、こうである。／読本言葉に、新聞・雑誌・小説等々の文章用語に、沖縄語、何でもよし、自分の語彙を総動員して、自己の思想・感情を表現することである。表現の態度は自由であれ、大胆であれ。／（中略）／方言を使用することが道徳的犯罪であると観念づけることは、教育的に或る意味を見出し得るとは思ふが、標

準語励行の方法のためにそれが、あながち、最上のものであるとは私にはどうしても考へられぬ。」P49

これについて、照屋は次のようにコメントする。

「その内容は、「ブロークンで行け」という副題が示しているように、標準語と沖縄の「方言」の「混用」を許容することで自由に発言させようというものである。いまだ標準語が確立されていない点を強調することによって、方言混用の必然性を述べているのである。これは、「併用」論以上に大胆な主張といえよう。前述の真木滴は、標準語（おおやけ）による方言（わたくし）の犠牲と従属を批判していたのであるが、宇久本は、標準語（おおやけ）と方言（わたくし）という枠組みを認めていないのである。あるいは将来の標準語（おおやけ）と方言（わたくし）を混交しようと試みているのである。」P49

引用された宇久本論を、もう少し紹介しよう。

「多少の方言の混用はあつでも、言葉が大胆に表現さるると言ふことなのだ。そうして居る中に、沖縄の方言が新しい言葉に生まれかはり、古い沖縄の言葉は死んで失せる。即ち沖縄の方言が進化するのだ。そして日本全土の通用語即ち標準語まで発達進化する。がこれは決して外力による方言の抹殺ではないのだ。/（中略）/
現代日本の教育目標は、東亜新建設に間に合う大国民を作り出すことである。国語の統一即ち標準語励行も亦国の究極目標の達成のためになされるのだ。／（中略）／所謂標準語を基礎にしてでもよし、沖縄の方言を基礎にしてでもよし、標準語と沖縄の方言の混用された言葉で、自由なかつ、大胆な表現のできる指導をせよ、かくしてこそ現代日本の要求する大国民の風格をそなへた人が出れるのだ。/（中略）／私は戦地に於いて、他県の兵隊が、出身地の方言を盛に使用するのに、沖縄出身の兵隊が方言混用の為め恥をかきはせぬかと懸念して話ができず言葉に困つたのは残念だつたとの戦地事情をききつつ此の稿の筆を擱く。」Ｐ５０

この時期に疎い私は、この宇久本論は初見だ。戦前沖縄の教育界の大勢のなかで宇久本論に、照屋が注目するのはうなずける。

４）宇久本「混用」論の評価

この宇久本論について、照屋は次のように分析評価する。

「宇久本の「混用」論も、将来的には、沖縄方言の消滅を受け入れるものであり、「沖縄の方言が新しい言葉に生れかはり、古き沖縄の言葉は死んで失せる」としている。方言の消滅を「進化」と認識しているのである。ただし、その論の眼目は、将来の標準語（おおやけ）のなかで方言（わたくし）は活かされることを企図するところにあるといえよう。標準語励行運動が過熱している時期に『沖縄教育』誌上でこの論考を公表することの意味を考えれば、沖縄の方言の「死」「抹殺」よりも「混用」「進化」の方に主張の力点があり、宇久本の意図があるといえよう。

（中略）

宇久本の議論は、標準語励行の方法論を議論しつつも、沖縄の言葉の在り方を論じ、沖縄人の使用している標準語に沖縄的な訛音・誤用があり、方言が混用されている現状を肯定すべきとした議論であり、実際に行われている標準語励行運動への根本的な批判といえる。

（中略）

宇久本の議論には、方言と標準語の二者択一や、「併用」ではない、別の可能性が内包されている点である。標

準語が現状において成立していないとし、将来の標準語を想定することにより、沖縄人の方言の放棄と標準語の習得を、一方的な沖縄の大和への従属ととらえず、双方の変容（進化）ととらえるのである。それにより大和人の占有する標準語への特権を否定し、将来の標準語の内部に沖縄の言葉の居揚所を確保することができるのである。

（中略）標準語＝おほやけ、方言＝わたくし、という枠組みを解体し、方言という生活語の私的、プライベートな領域をそのまま公的な場において承認させようとする点である。それは、方言に象徴される沖縄的なものの復権を意図したものといえる。柳の「併用」論や真木滴の議論は、方言（わたくし）を擁護するものであっても、「わたくし」の言葉が「おおやけ」の場で使用されることを主張するものではない。それに対して、宇久本の議論は、近代学校成立以来、少なくとも教育言説の上では「わたくし」の言葉として生活の場にのみ閉じ込められてきた方言の「おおやけ」性を主張し、その復権を図る意味合いを有するものであった。」Ｐ５０～１

照屋は、論文の最後あたりで、宇久本論を、再度、次のように評価する。

「宇久本政元の示した「混用」論は、標準語が未成立な点を強調することで方言と標準語の「混用」を主張するものであったが、それは沖縄の言葉の生き残る余地を暫定的にでも確保するものであり、「沖縄人」意識の存立の可能性を模索するものでもあった。標準語（おおやけ）と方言（わたくし）という構図を疑問視し、新たな標準語（おおやけ）のなかで、貶められている方言（わたくし）を復権させようとする企てであった。それは文化的次元として論じられる標準語教育論が、公用語や軍隊における使用言語の問題として論じられ、制度や政治の次元での議論へと展開する思想的な可能性を内包するものであった。総力戦体制期におけるぎりぎりの状況で、「日本人」の意識に近づきつつも消滅しない「沖縄人」意識の様態とそこに内在する可能性が確認できたといえよう。」P60

標準語励行運動が圧倒的な沖縄の教育界の状況のなかで、宇久本の主張の意義と可能性をこのように評価した点で、照屋論は注目に値する。

これらの論について、論評者の小国はこう書く。

「照屋論文は、標準語と方言との「混用」論への評価がやや過大に過ぎるのではないだろうか。著者自身も参照しているように、ここでいう「混用」論は、一九四〇年前後に盛んに唱えられるようになる「二重言語主義」に負うている。例えば柳田国男が方言周圏論において、各地の方言を国語の変遷史の中に位置づけ、人々の言葉の自然な選択を通して将来における標準語の成立を展望したように、そこでは「『方言』のなかに『非日本語』を探ることを回避する」姿勢が存在していた。言うなれば、一九四〇年前後の標準語論は、方言の醇化を過して標準語を策定していこうという主張において、列島内部の在地の言語を国語中の一方言と見なし、「国語」という単一のシステムの中に取り込むことをも意味していた。一九三〇年代までの標準語教育論が方言を撲滅・排除の対象としたのに対して、一九四〇年前後から、ゆるやかな矯正の対象とみなすような議論が次第に優勢になっていった。だとしたら、宇久本政元に即して著者が読み取った三つの特徴は、広く当時の内地の標準語教育に共通していた可能性があり、総力戦体制下における新たな言語ナショナリズムの表現なのだと評価することも可能なのではなかろうか。」P65-6

この指摘は、論及されている動向に疎い私には新鮮な指摘である。この時期の教育動向について、思想統制教育統制一色ではない動きがあることを聞いてはいたが、私自身は具体的には追究してはいない。

その点で、この宇久本論及びその周辺・背景などについて、小国・照屋のさらなる研究深化を期待したい。とくにそこに至る動き、そして、その後、特に戦後とのつながりについての解明を期待したい。

５）戦後をも視野に入れた研究を

照屋さんは、宇久本のほかに、この時期の真栄田論・兼城（小学校訓導）論にも注目する。ここで、真栄田論の照屋評価を紹介しておこう。

「県立第二中学校の国漢の教諭であり、戦後に文教局長、沖縄大学教授になる真栄田義見は、「方言が無くなる時は、沖縄的思考感情は止揚せられて、日本的普通の感情と思考の中に抱擁されて行くであらう。従って又他の芸術や文化的方面もその表象をかへて行くであらう。その事は沖縄の持つものがなくなつたという事でなく、其所には高次の段階に進んだ沖縄的のものの発展的な姿が有る筈である」と述べている。ここでは沖縄の方言の消滅した後のイメージが語られている。方言や沖縄文化の消滅の痛みを慰撫するための思想ともいえる。しかしここでも「方言が無くなる」ことは消滅ではなく「進化」だとされ「高次の段階に進んだ沖縄的のものの発展的な姿」が存在していると捉えられているのである。「同化」といえる現象の内部にあっても沖縄人としての主体の存立の余地を確保しようとするのである。伊波は言語の「進歩の面」を指摘していたが、その伊波のいう「進歩」の先に真栄田のような認識が存在するのではないかと思われる。ここで重要なのは、伊波や真栄田の場合、「進歩」の後に待ち受ける「日本的普通の感情と思考」とは現状のそれでないことである。「日本」に関しても「沖縄」に関しても、本質主義的に、不変的なものとして捉えているわけではないのである。」P53-4

これについて、戸邉秀明は、次のように厳しく論評している。

「真栄田義見や兼城静の論説について、著者は「沖縄人としての主体の存立の余地を確保しようとする」ものと評価するが、私には疑問である。これらの論説は、一方で植民地朝鮮において「内鮮一体」が叫ばれ、他方で帝国の論壇を京都学派の「世界史の哲学」が席捲していた一九四〇年の帝国日本の言説空間に、まさに同時代として反応した発言である。たとえば、真栄田が「方言」の消滅を「日本的普通［遍カ］」の抱擁による「沖縄的志向感情」の止揚と捉え、そこに「高次の段階に進んだ沖縄的のものの発展的な姿」を求めるとき、それは朝鮮人知識人による「徹底一体論」に通じている（引用部分の「沖縄」を「朝鮮」に換えて読まれたい）。また兼城の「いとしき沖縄語よ」以下の末尾の絶叫は、田辺元が唱えた「種の論理」の哲学をマイノリティが主体化の梃子として受けとめた、ある種典型的な反応であろう。つまり両論説は、文字通りには主体を確保する表現に見えても、同時代に盛行したテクスト群との関係で見れば、むしろ流行の言辞を模倣した動員に奉仕する論理として機能したと考えられる。もちろん、そこにマイノリティの倒立した主体化のありさまを見ることはできるが、これを著者のように伊波普猷の柳批判に接続する解釈は、冒険にすぎるのではないか。」P71

「宇久本は、当時の東亜協同体論など一連の言説をふまえつつ、それを果敢に流用（中略）することで、狭められた当該期の言説空間への介入に成功したのである。この点では、宇久本と真栄田・兼城の相違は大きい。」P72

さらに、照屋さんは、戦前と戦後の関わり・つながりについて、次のように書く。

「時代を追うごとに、「沖縄人」意識がオルタナティブな社会像を提示するものとして語られる余地は狭まっていったようである。ただし戦後沖縄まで射程に入れるのであれば、沖縄の言葉をめぐる議論や「沖縄人」意識の

ありように新たな思想性が盛り込まれる可能性があると推測する。それらを確認することを今後の課題としたい。」P60

以上の照屋論に対して、小国喜弘は、次のように、掘り下げた論評をしている。

「総力戦下の沖縄における「混用」論の可能性を肯定的に評価することの今日的意義は、どう理解すればいいのだろうか。

すなわち戦後になると、「標準語」に代わって「共通語」という用語が使われるようになる。「共通語」の意味は「国内に方言差があっても、それを越えて異なった地方の人々が意志を通じあうことのできる言語」（『国語学研究事典』）であり、「標準語」と比較して「統制」という意味合いの弱さにその特徴があるとされる。さらに真田真治によれば、「標準語の干渉による方言の変容」としての「ネオ方言」も生まれている。

沖縄もまた例外ではないはずだ。沖縄では戦後も本土復帰闘争の過程で苛烈な標準語教育の取り組みがあった。しかし本土復帰以降は、次第にゆるやかな共通語教育に変化した。今日では、「共通語」を使いつつ、よりインフォーマルな場では「ネオ方言」としての「ウチナーヤマトグチ（沖縄大和口）」を話すような言語状況が生まれている。だとしたら、照屋のいう「日本人か沖縄人かという二者択一ではなく、日本人でありつつ沖縄人でもあるという主体の在り方」は、現在では図らずも実現されてしまったのだとみてよいのだろうか。

もし沖縄の現在の言語状況について肯定的な見方に立つとすれば、戦後の沖縄の、特に復帰以降の共通語教育についても「混用」論にみるのと同じような肯定的な見方は可能なのだろうか。もしくは、一九七〇年代以降の沖縄の共通語教育について照屋が批判的な見方をしているのだとしたら、そこで機能した共通語教育論と一九三〇年代後半の「混用」論とは、教育の論理においてどのように異なっていたのだろうか。

もとより本論は、戦後の標準語教育については今後の課題としており、論究の対象としているわけではないが、戦後の共通語教育を念頭に置いた上で、一九三〇年代後半の「混用」論の評価が語られた方が、読み手にとっては、照屋がいまなぜ改めて一九三〇年代後半の「混用」論に注目するのかがわかりやすかったように思われるのである。

ちなみに私自身は、在地の多様な言葉を「国語」へと回収しようとした総力戦下の「混用」論が基本的に戦後の共通語教育につながっていったのではないかと考えており、結果として戦後の国語教育においても在地の言葉への抑圧が見えにくい形で継続してしまったのではないかと考えている。

いずれにせよ、戦時下の標準語と方言との「二重言語主義」を、戦後の共通語教育とどのような連続・非連続の下に捉えることができるのかは、戦後の国語教育を考える上で、重要な論点となることを改めて感じた。そのような論点は、今日、沖縄のみならず多くの地方で方言話者が高齢化し、若者に継承されていない現状を考えるとき、それを日本各地における固有言語の喪失と見なすべきなのか、あるいは、共通語との積極的「混用」の帰結としてポジティブに捉えていくのか、という問題ともつながっているはずだ。」P66-7

戸邉・小国論評は、ともに、照屋さんのみならず、この分野の研究発展にとって、大変重要な提起を含んでいる。私の沖縄教育論、とくに最近の「沖縄おこし」と教育論に関わっても示唆的なところが大きい。かなり本腰を入れて、受けとめていかなくてはならない。

それは、照屋・小国双方とも言うように、戦前戦後を通して、さらにいえば近世・近代・現代の沖縄教育評価及び今後の沖縄教育構想にかかわる課題を多分に含んでいるからだ。それは標準語・共通語とウチナーグチとい

った言語教育問題に限らず、沖縄教育全体にかかわるからだ。

６）沖縄人・日本人という把握をめぐって

沖縄に住む人々のアイデンティティをどうとらえるかをめぐっては､長い間今日にいたるまで論議されてきた。それと関わって、照屋さんは、次のように指摘する。

「宇久本の議論は、言葉という文化の領域での議論ではあるが、軍隊という、立ち居ふるまいから話し方まで最も厳しく統制される空間すら念頭に置き､「標準語」ではなく､「沖縄語」「方言」を含む「自らの語彙を総動員」して大胆に使用すべきだという。それは、軍隊、ひいては日本という国家を支える政治的な秩序そのものの相対化という契機をはらんでいる。公用語のあり方や軍隊における使用言語にまで論及され、その想念は新たな社会秩序を渇望するものである。

このような宇久本の議論は、当時、全国的に議論されていた「混用」論の流用といえよう。単なる議論の引き写しではなく、沖縄的な状況で「混用」論を語ることにより、「沖縄人」意識の存在余地を確保しようとするものである。将来の標準語という思想的な枠組みのなか、日本人か沖縄人かという二者択一ではなく、日本人でありつつ沖縄人でもあるという客体の在り方が模索されたのである。」P52~3

この叙述をめぐって、小国喜弘さんは、次のように論評する。

「そもそも「日本人」意識自体が近代における創造物であり、さらに小熊英二が『単一民族神話の起源」（新曜社、一九九五年）で明らかにしているように、戦前期において「日本人」は、南方系・北方系など様々な血統の入り交じった雑種、複合民族として定義されることが多く、戦後になって主流となった単一民族というイメージとはかなり隔たっていた。照屋論文では、「沖縄人でありながら『日本人』であるといった、「沖縄人」か「日本人」かという二者択一を超えようとする言説に可能性を見いだしている。しかし「日本人」を複合民族として捉えるのであれば、そこにはすでに「沖縄人」の血統も入っていることになり、そもそも純粋な意味での二者択一は存在していないことになる。だとしたら「沖縄人」でありながら「日本人」であるといった意識の有り様は、どれほど当時において特殊だったのだろうか。」P67

双方とも、重要かつ｢一理ある｣指摘だろう。この議論は、当事者によって、さらに発展されることを願う。と同時に、小国の指摘がありつつも、照屋があえて、このことを書いたことの『言外』の『含み』がさらに発展される必要があろう。その際、次のようなことに留意してほしい。

日本人を［複合民族］ととらえる場合に、日本人と〇〇県人という構図と、日本人と沖縄人という構図の異同の問題。また、近代・近代国家形成とかかわって、論が展開してきた歴史、そして、その近代・近代国家の相対化を含みつつ論じる動向のなかでは、この議論はどうなるのかという問題。また、私のような「沖縄おこし・人生おこしの教育」の文脈のなかではどうなるのか、ということ。

いずれも、戦後沖縄教育の展開と関わる問題である。

付記）　注記での論について、照屋さんの記述について

「宇久本の「混用論」は、生徒から母語を奪い取る抑圧性を伴い進行する沖縄の標準語励行運動に対する明確な拒否を示した点で、まず意義があるものである。そこに内在する思想が、一九三九年の時点で、実現可能であ

ったかどうかは別の問題である。また、宇久本に先行して、青森の綴り方教師の三上斎太郎は方言詩教育を具体的な作品を提示しつつ提唱し、「生活語の復権」を目指したと評価されている（小国喜弘『民俗学運動と学校教育民俗の発見とその国民化』東京大学出版会、二〇〇一年、第四章、参照）が、それに比べて、宇久本のそれは具体的な教育実践として提示されているものとはいえない。

しかし青森と沖縄というそれぞれの状況に立ち向かい、双方とも、新たな秩序を模索したものと理解できるのではなかろうか。」P63~4

この問題は、生活綴方関係者が以前から問題にしていた。以前というのは、1970 年代だが、「日本作文の会」関係者と話す機会に、沖縄には「方言を使用した生活綴方」が、戦前にも見いだせないし、戦後も、その動向が大変希薄だ、という指摘だ。そして、当時の沖縄の関係者もそのことに気づき始めていた。

同じようなことを、1970 年代初頭小川太郎さんに個人的にお会いした際に、言及された記憶が私に残っている。これはわたしの記憶がとてもうっすらしていて、はっきりとはいえないが。

いずれにせよ、これらに刺激を受けて、戦前関係者へのインタビューも含めて、私自身も調べてみたが、沖縄県内の生活綴方を追求する動きのなかで、「方言を使用した生活綴方」を追求する動きは、微弱か皆無であった。そして、1970～80 年代において、これらの指摘を受けとめる基盤・態勢が希薄であった。

これらはなぜか、重要な検討点であろう。

７）沖縄教育史研究と研究者

戦前沖縄では、沖縄の事実を基盤にして創造的に教育を追求する動きは、強い抑圧のもとに置かれてきた。そのなかにあっても、矛盾をはらんでいたとしても新たなものを追求する芽は存在していた。そうしたものを発見し読み解き評価していくことで、今日に至るまでの、さらには今後の沖縄教育の創造に寄与しようとする沖縄教育史研究は不可欠なものである。

その重要な担い手として一人として照屋論を位置づけることができよう。彼の研究は、大成したというよりも、今後の作業に大きな期待を持てる点でも重要な位置にいる。そして、研究視点も、沖縄教育の創造的展開にコミットする姿勢を反映しており、期待するところ大である。

ところで、論評者の戸邉秀明さんは、「今日、研究においても沖縄という主題はブームの観を呈するが、近代史研究への若手の参入は少ない。さらに思想史ともなれば、はっきりと自己の拠点をそこに据えているのは著者くらいではないか。」P69　と評する。

思想史分野について概観できるものを私はもっていないが、沖縄教育史研究ということでいうと、私が多少なりともかかわっていた２０～３０年以上前と比べると、雲泥の差での前進を見ることができる。量的に言うと、「沖縄教育史研究が専門分野です」と言う人が、広くとらえると数人以下の段階から１０数人以上の段階に至っている。質的にいっても、「研究レベル」に達している論文が年に数本も発表されていそうだ。そして、教育史全般ではなくて、特定分野に焦点化した専門的追求も広がっている。

大まかに言うと、１９６０年代までは、真境名、安里、上沼、森田らの先行的研究、そして第一次県史など、量的にも限られていた。いわば開拓時代だった。しかし、第一次県史の各論が、森田俊男氏によって手厳しく批判されたようなレベルにあった。

その後の時期に、私は副業的にではあったが、沖縄教育史の作業を始め、一区切りとして「沖縄県の教育史」（思文閣１９９１年）を書いた。

その後、沖縄教育史研究での、若手研究者が続出し、博士論文にまとめる人もでてきた。それらには、沖縄出身者で沖縄在住者の人とは限らず、沖縄外出身者で沖縄在住者、沖縄出身者で沖縄外在住者、さらに沖縄外出身者で沖縄外在住者と、多様になってきた。

そういう量的増大が、かえって研究者間の研究連携が薄くなってきている状況さえ見られる。たとえば、私自身、照屋さんの存在を知ったのは、今年になってからである。それは、私自身が、日本教育史研究関連学会に参加していないなどのこともあろう。

それにしても、沖縄教育史関係者が相互連携する場が欲しいと思う。数年前、私が提案して、沖縄教育・沖縄教育史メーリングリストを立ち上げたが、「見事、自然消滅」状態に至った。

その点では、若い方々は、何らかの研究連携を持っていそうに感じるので、それらをより広げるような営みをして下さることを期待したい。恒常的な組織を作ることはなかなか大変なので、一回限りの研究発表会を開催するのもいいと思う。１０月９日の研究会は、その一つの足掛かりになろう。若い方々のご尽力に期待したい。

また、沖縄教育史研究文献目録を、どなたかが整理するのも、一つの重要な足掛かりになろう。

最後に一つ。歴史研究は直接的には現代の沖縄教育にはかかわらない。だとしても、その研究は間接的に現代の沖縄教育へのなんらかのメッセージを発していることは確かだ。

その点では、現代の沖縄教育と沖縄教育史研究とどうかかわらせるのか、という討論も大切だろう。

こう書いてくると、沖縄教育史研究について、私自身が今後どうするか、ということにもかかわってくる。

これだけ多くの若手研究者が出てきたのだから、「身の引き時か」とも思ったりもする。１０年前には、大正期・昭和戦前期を含めた通史を書く計画をもっていたが、それをどうするか。何をどこまでやるのか、などと、そろそろ考えなくてはならない時なのだろう。

１９７０～８０年代の私の沖縄教育論を思い出させる照屋諸論

（２０１２年2月１６日、１９日、２３日、２６日、3月１日、５日）

１）　上掲の照屋さんの「方言論争」にかかわる論文についての私のコメント連載後、照屋さんと論文交換したが、送っていただいた照屋さんの諸論をようやく読むことができた。今回は、その中の以下の４編についてコメントしたい。

①　『琉球教育』（一八九五――一九〇六）の史料的位置づけ―皇民化概念のとらえ直しをふまえて――
　　法政論叢　第 40 巻　第１号　二〇〇三年一一月五日発行

②　『琉球教育』（一八九五――一九〇六）にみる沖縄教育の原型――新田義尊の沖縄教育論とそれへの対応――
　　歴史評論№.６８３　２００７年３月号

③　『沖縄教育』にみる「沖縄人」意識の形成　――1910 年代の親泊朝擢の言論に着目して---

歴史学研究　№８７６　２０１１年２月

④　沖縄教育における「文明化」と「大和化」――太田朝敷の「新沖縄」構想を手がかりとしてー

教育学研究第 76 巻　第１号　2009 年３月　日本教育学会

照屋さんは、沖縄教育史、とくに近代沖縄教育思想史の今や第一人者である。私が 20 数年前に「沖縄県の教育史」を執筆する際にはできなかった作業を、これらの論文で丁寧かつ鋭く展開しておられるので、私には示唆を受けるところが大変多い。

今回の 4 つの論文、つまり 20 世紀初めの沖縄教育をめぐる思想的営みの分析検討は、私にとっては、当時の研究というだけでなく、私が 1970～80 年代に沖縄教育にかかわってした仕事の分析評価に、間接的だとはいえ重要な示唆を与えるものだとの印象を強くもった。

そのあたりにも言及しつつ、何回か連載して照屋論のコメントを書いていきたい。

２）照屋さんの研究視点と私の１９７０年代の沖縄教育へのかかわり

照屋さんは、近代沖縄教育史を検討する際に、次のようなことを大切にしている。

「近代沖縄史を振り返るとき、台湾のような統治への武力闘争が皆無であること、また、時代の節目にしばしば登場する沖縄独立論といったものが戦前期には見当たらないこと等を考えるとき、沖縄人の主体性はどこに見いだすことができるであろうか。ひたすら、明治政府による抑圧を甘受するだけの存在であったのであろうか。著者は、自由民権運動・大正デモクラシー・社会主義といった華々しい活動、あるいは反体制的な色彩を帯びた運動よりも、体制への加担とその中でのもがき（自己表現）に多数の沖縄人の主体性は検出されると考える。そう考えると言うよりも、近代沖縄では前者のような運動は少なく、微温な抵抗といったものしか見当たらないので、その中に主体性を読み込むしかない、ということである。彼／彼女らの模索や秩序への違和感の中に、彼／彼女らの情念的な世界を読みとってゆきたい。」①P2

これを読んだ時、１９７２年から沖縄に住み、沖縄の教師たちとともに考え活動を展開し始めた折、しばしの模索の後に、私がとった立脚点を思い起こした。

当時、沖縄の教師たちには、「沖縄の教育は遅れている。本土から学んで、本土の教育に早く追いつけるようにしなければならない」と語る人が多かった。沖縄教師の「共通認識」に近いものであった。そして、「本土」から来た私からも［吸収し学ぼうとする］まなざしを持って接する人が多かった。私は「本土といっても、いろいろあるんだけど」と言いながら、こうした沖縄教師の「共通認識」をどう考えればよいのか、どう対応すればよいのか」を考えていた。

また、「復帰」運動を通して、沖縄教師たちの多くは政治的に本土の革新勢力との連携を強める動向を見せていた。だから、１９７２年１０月（１１月かも？）に開かれた沖教組中央教育研究集会でのスローガンの柱の一つは、『中教審路線反対』であった。そして、それと並んで、新学習指導要領をどう実施するか、というスローガンが掲げられていた。政治的には革新であり文部省批判であったが、教育実践では文部省方針の具体化なのだが、この二つが並んでいることへの矛盾を感じる人は少なかった。全体集会では政治的に文部省批判を展開し、分科会では文部省方針の具体化を研究協議するという形が、むしろ一般的だった。

そんなありようについて、研究集会の講師団まとめ発言を要請された私は、この矛盾をどうしていくかが、重要な課題になっていることを指摘した。

ところで、当時、「本土においつけ」「本土から学ぼう」というのは、教育研究集会だけでなく、文部省に批判的な民間教育研究運動の研究活動においても強く存在した。本土からの講師招聘、あるいは本土の研究集会参加も盛んに行われるようになった。その中で、本土にも色々あることが知られていった。それにしても、「進んだ本土、遅れた沖縄」という構図は強力だった。

その中で、私は、「教育実践は、自らの実践事実から出発し、それが求めている課題を追求することが基本であり、優れたものは参考にはなるが、優れたものをそのまま真似して持ち込んでも、実践の発展にはつながらない。それに沖縄の中にも優れた実践は存在する。沖縄の自主的思考の中で、参考になるものは参考にするという姿勢が重要である」ことを繰り返し主張してきた。それをまとめて、１９７９年に「新沖縄文学」誌に書いたのが、「教育実践の自己展開サイクル」というものだ。

そして、私も編集の中心のいた『民主的な子どもを育てるために』誌（のち「沖縄の教育実践」誌）には、沖縄の教師たちの実践を掲載することに力を注いだ。照屋論文の②③で注目されている親泊朝擢の『沖縄教育』編集と似たことをしていたのだ。当時の私は親泊のことは知らなかったが。そうした沖縄の教師の実践記録は、多くの教師を驚かせたし、自信を持たせていった（と、私は自負しているが、実際はどうだったろうか）。

こうした私の営みは、照屋論文にいう「体制への加担とその中でのもがき（自己表現）」を見据え、「彼／彼女らの模索や秩序への違和感の中に、彼／彼女らの情念的な世界を読みと」る作業でもあったといえるかもしれない。時代は、７０年近くも異なるが。

３）植民地研究　教員の「もがき」「秩序への違和感」

前回紹介したものと似た論が、別の論文にも見られる。紹介・コメントしよう。

「近代沖縄史研究・教育史研究の基礎が築かれたのは、一九七二年の本土復帰を前にした時代状況においてであった。新たな「大和世」を前に、戦前の沖縄県時代を批判的に検討する気運があった。そのような歴史研究の方向性は、一定の成果を残すと同時に、それ故の陥穽を有していた。まず近代沖縄史を国内の問題としてとらえるあまり、植民地研究との関係を深めることができなかったことである。」②P74

ここで注目したいのは、植民地研究との関係で、沖縄教育史を検討するという視点についてである。これは、ここで照屋さんが指摘するような研究ということだけでなく、教育それ自体に関わってである。

たとえば、今日の教育にかかわっては、植民地という言い方はできないとしても、発展途上国的な視点が強くありはしないか、という問いかけが出来そうだ。このことが「本土への遅れをなんとかする」という根強い表現のなかに投影してはいないか、と検討してみる必要があろう。

もう一つ別の視点、というか対極的かもしれないものがある。それは代表的には、屋良朝苗さんが戦前台湾教育に携わった経験をもとにして、戦後、沖縄で教育活動を展開する時に、『独立の気概を失ってはならない』ということを重視したということである。これは米軍支配への対処という文脈で登場する。

この二つが並存するところに、一つの特徴を見いだすことができるかもしれない。

上の引用に続く次の指摘にも注目したい。

「「受難」「抵抗」といった形で描かれる沖縄像においては、沖縄人の主体的営為は「抵抗」という側面でしか捉えづらいということである。多数の民衆は、もっと別の形で自己を表現していたのではないか。つまり体制への「加担」とその中での「もがき」にも、民衆の主体的営為を読みとる必要があるのではないか。（中略）

沖縄社会では比較的高学歴者が集う教育界が分析対象として魅力的である。つまり教員とは絶えず民衆の情念的世界と接点をたもった存在であり、国民統合という国家的要請を担った存在でもあり、新たな思想に触れ得る能力を有した存在でもある。国家権力と民衆との狭間で双方の側に身を置きつつ未来像を模索し得た存在といえる。無論、教員はイコール民衆ではありえない。中等教育を受けた教員は、中間層として国家による民衆統治を支える存在である。しかし、それだけでなく民衆運動の担い手になり得る存在でもある。すなわち時代状況により、国家と民衆との狭間で、多様な側面を見せる存在といえる。」②P74－５

「従来、明治政府による「同化」「皇民化」を盲従的に押し進めた側面のみが強調されてきた教員たちの中にも「秩序への違和感」や何らかの未来構想があったであろう。」②P75

ここでいう「もがき」「秩序への違和感」への注目が、注目される。前回述べた私自身の 1970 年代に出会った沖縄教師たちに感じたものと類似するものを感じるからである。

その「もがき」「秩序への違和感」に対して、私は「沖縄の中にある実践事実に立脚して、沖縄教育を創造すること」「沖縄教師が自信を持つこと」を重視して、沖縄教育に関わってきた。

その時期の沖縄教育のありようは、私自身の営みを含めて、すでに歴史研究の対象になることだ。それらは、試行錯誤・模索的ではあるが、重要な営みであり、今日なお追求すべき課題だと言ってもよいと考えている。だからこそ、私は「沖縄おこし・人生おこしの教育」を書いたのだ。

４）「支配的言説」を「読み替え・ズラ」す「主体的営為」

各論文について、注目点を紹介しつつ、コメントしていこう。

まず、②の「『琉球教育』（一八九五――一九〇六）にみる沖縄教育の原型――新田義尊の沖縄教育論とそれへの対応――」（歴史評論№.６８３　２００７年３月号）だ。

『琉球教育』創刊時期の編集の中心にあった新田義尊の沖縄教育論に関わって論じられる。新田は、沖縄と琉球=台湾とを区別して次のように書く。

「「勤勉・清潔・文明」イメージを国粋を徴する「沖縄」像に付与し、「怠惰・不潔・未開」イメージを「琉球」とし「台湾」に転嫁したのである。このような理念的な操作が沖縄人の大和への文化的同一化を促す思考の枠組を作りあげた。

しかし、当然ながら「琉球」「沖縄」という弁別は抽象的な論としては可能でも、現実の教育実践では困難である。生徒の話す沖縄の言葉のどれが「国粋を徴する」ものか否かを指摘し、保存・改良するということは不可能である。実際は丸ごと否定するしかなかった。新田の論は抽象的な論や歴史論を理解しえる沖縄人教員層に対して、沖縄文化を擁護するような姿勢を示しつつ、現実に行われている大和への文化的同一化を目指す教育への了解を取り付けるためのものであり、思考の枠組を提供するものであった。（中略）

新田が示した沖縄教育の原型とは「日琉同祖論」を根拠とした日本人への文化的同一化を目指す教育であり、それを円滑に進めるための知的な地ならしといえた。沖縄と台湾との間に線を引き、沖縄を日本人の側に位置づ

けるというものであった。それは、当然、沖縄文化の剥奪と大和への劣等感の助長とを伴う。」②P81

照屋さんは、こうした新田論を「読み替える」沖縄教師たちの論に注目して、次のように書く。

「士族（＝琉球、支那名、支那根性）、平民（＝沖縄、国粋を表す名、大和魂）という構図を、新田の論に読み込むことができよう。首里士族の存在は、日本人教員にとっても敵対すべき存在であったが、沖縄の平民の多くにとっても、同様であった。そういう平民層が、新田の沖縄論を首里士族への批判として読みとり、あるいは「読み替え」、大和への文化的同一化に同調してゆくことは自然なことであろう。新田の論を、新田の意図とは別の、沖縄社会の前近代的秩序打破の論理として機能させることになる。（中略）

「風俗改良」の論理を身分制打破の論理に「読み替え」ているのが確認できよう。これは普通服だけでなく普通語励行にも内在する論理である。沖縄人教員の積極的な普通語励行運動にはこのような願望が読み取れる。沖縄近代史の中に沖縄民衆の主体的営為を見いだそうとするとき、このような体制への加担と論理の「読み替え」を発見することができる。」②P82-3

この「読み替え」とならんで、「ずらし」が行われたことに、照屋さんは注目する。親泊朝擢の「初学年の修身教授」論文に関わって、次のように指摘する。

「親泊の論は、具体的になじみやすい「本県在来の昔話」を持ち出す方が「修身科の効果を全ふする」とし、新田ら、大多数の論者が否定するべきとした「過去の沖縄」の擁護を計るのである。（中略）政治的要請から教育を論じる者（新田ら）に対して、生徒の発達から教育を論じることで間接的に反論しているのである。歴史論の次元で新田への反論は、政治的にも学問的にも難しい。それで議論を生徒の認識・発達という次元に「ズラシ」て反論するのである。親泊の批判の矛先は新版の修身教科書内容へ向けられているが、実質的には「忠孝仁義を説くべき講義録」（『琉球教育』）への批判であるのは明白である。』②P85-６

以上の指摘をまとめて、照屋さんは次のように書く。

「大和出身者による支配的言説への違和感を抱えながら、日常的な「読み替え」を行い「ズラシ」ていくという主体的営為に着目する必要を本稿では提示した。もとより、このような意味での「主体性」は、結果的には大和への文化的同一化を「下から」支えるものとなるのでは、という批判もありえる。しかし重要なことは性急な一般化に陥ることなく、個々の論考の意味合いを丁寧に読み解いていくことである。「同化」「皇民化」という用語で受動的存在として描かれてきた教員達の中に主体的営為を探ることが本稿の課題であった。」②Ｐ８８

「支配的言説」を「読み替え」「ズラ」す、こうした注目すべき「主体的営為」がありながらも、「支配的言説」は、沖縄教育界のなかに深く浸透していく。そして、他の照屋論文、とくに昨秋紹介した論文のなかで書かれている、昭和戦前期の「主体的営為」例が存在しているにもかかわらず、「支配的言説」を「主体的営為」の形をとって表現する動きさえ生まれてくる。

とくに、戦後は、米軍支配とのからみで、戦前における「支配的言説」を「主体的営為」として押しだす例さえ登場してくる。そのなかで、『本土においつけ』が『支配的言説』にさえなって、今日に至る。

こうした歴史的流れについての分析研究が、現代的課題として存在している。その意味で、照屋さんの今後の研究展開が注目されよう。

５）沖縄社会の発展に尽くす人間を育てようとした親泊朝擢

今回は、③の論文の注目点だ。

今から約 100 年前の時期に『琉球教育』の編集にあたっていた親泊朝擢だが、「親泊編集期に，沖縄人執筆者が増大し，小学校教員が活躍し，沖縄関連事項を論ずる者が増えたことが，確認できよう。」③P11　とのことだ。

そのことには、親泊の次のような考えが存在したと指摘される。

「「本県の位置をして他府県と比肩」させるにとどまらず「一躍再躍して其上を越すべき覚悟が必要である」と，「本県教育者」に訴えている。ここで表現されているのは，地域的アイデンティティに解消されるものではないし，単に「他府県並み」を目標としているわけでもない。親泊は，この文章に続けて，教育の普及により「本県民族の救済を計られたい」と結論づけている。」③P12

「親泊は「民族的自覚を促し延いて知徳の開発に努力せしむる」ために沖縄の歴史や地誌を学ぶ必要を説き，「本県固有の事物とさへ云へば,一も二も皆抹殺或は遺却せんとする」動向に反発したが,それは「方言撲滅」は否定するものの,普通語励行と矛盾するものではない。結論的に言えば，親泊は，近代沖縄の学校において，普通語をも巧みに操り，大和人と対等以上に渡り合う能力を有し，また沖縄の歴史・地誌に明るく，「沖縄人」意識を持ち、沖縄社会の発展に尽くす人間を育てようとしていたといえる。それが親泊にとっての近代的な沖縄人のイメージであった。」③P16

これらを読んでいて、先にも書いたことだが、「民主的な子どもを育てるために」「沖縄の教育実践」の編集にあたっていた１９７０年代の私自身の課題意識、そして「沖縄おこし・人生おこしの教育」を書いた現在の私自身と対比せざるを得なくなった。

１００年という時代間隔はあるが、共通するものを強く感じるからである。

１００年前の親泊の時代は、当時の沖縄教育界を「支配」していた大和人教育者に対抗して、本県教育者の自覚と行動を求めるものであったが、今日では、その図式はやや形を変えて、『遅れた沖縄は、本土に追いつかなければならない』という思考様式に深く囚われた沖縄教育界自身の脱皮が求められている。

そしてまた、地球的視野を持ちつつ、沖縄自身の発展に寄与する教育とはどのようなものかを問い探求する教育界をつくっていかなくてはならないだろう。

にもかかわらず、こうしたことが論議になること自体が余りにも少ないことが、私は気になる。

６）沖縄教育における「文明化」と「大和化」　太田朝敷

④論文のタイトルは、「沖縄教育における「文明化」と「大和化」」で、太田朝敷の諸論を検討している。

まず、私が注目した 2 か所を引用しておこう。

「本稿が、これらの研究から学びたい点は、「日本化」の枠内での「文明化」を相対化しうる別の近代化の回路（西洋志向的性格）を発見することの重要性と、それが「抵抗」としての意味を持つことである。この場合の「抵抗」とは独立や自治を求める狭義の政治的抵抗とは異質である，だが、そうした政治的抵抗の火種となるような文化的対立や摩擦を含んでいる。台湾・朝鮮の人々比べれば、さしたる「抵抗」もなく日本への「同化」が進んだように見える沖縄においても、同様な意味での「抵抗」の契機が存在したのではないか。

こうした観点から「クシャミ発言」により徹底した「同化」論者とみなされる一方で、「沖縄ナショナリスト」として規定される太田朝敷の役割を再検討する必要がある。」④P2

「太田の認識は、『琉球教育』誌上で安藤が、女服改良に関して、「大和化」を目指すべきだと述べ、その目的を「風俗統一」であるとした発想とは全く異なる。沖縄人にとって「大和化」が文明化の唯一の回路であるなら、沖縄人はひたすら大和を模倣し従属的に後追いするしかない。「一足飛びに西洋風に改良する」という別の回路を用意することで太田は大和を相対化しえたのである。」④P7

この引用にもあるように、「「クシャミ発言」により徹底した「同化」論者とみなされ」てきた太田に対する異なる評価を提出している。優れた指摘の連続であり、教えられる所が多い。

それらのこと以上に、私が注目した点は、前回までの親泊朝擢の場合にもそうした面がみられたが、太田の主張のありように、私自身の１９７０年代、さらには現在の論の立て方と共通するものを見出したことだ。

時代条件が異なるので、主張が同じであるわけはないが、「沖縄人はひたすら大和を模倣し従属的に後追いするしかない。「一足飛びに西洋風に改良する」という別の回路を用意する」などには、私が、「学力最下位脱出といって、本土を追いかけようとする動向にたいして、より広く世界的歴史的視野で、沖縄の教育改革を提起している論法と共通のものを感じてしまうのだ。まだ、沖縄教育を外在的に批判するというよりも、沖縄内部の事実・ちからを基盤にして、世界的視野とつながりつつ、沖縄教育の発展を提起する個所なども共通する点が大きい。

それだけに、改めて私自身の論の深化発展が求められるといえるかもしれない。その点で、照屋さんが、私の論をどう分析評価するのか、いつかうかがってみたいことである。

南島研究と沖縄学　方言論争　「沖縄県史近代」を読む　（２０１１年１２月２４日）

沖縄を支配対象として見ての沖縄研究は、早くから展開されるが、「沖縄おこし」つまりは沖縄の自主的発展を沖縄自身の視点から展開する研究のスタート確立には時間がかかった。そして、そのスタートの一部が、民俗学・民族学的研究によって担われたことに、一つの特徴を見ることができる。

その点にかかわって、柳田国男らの南島研究と、伊波普猷らの沖縄学との微妙な関係についての叙述が注目される。（屋嘉比収執筆）

「柳田の一国民俗学の確立により、それまでの伊波普猷たちの沖縄学は、日本研究において、より古い日本の姿を映し出す「南島研究」として再編されることになった。（中略）しかし、そこには、柳田による沖縄学の一方的な包摂だけがあったのではない。それまで見向きもされなかった沖縄研究が、柳田によって南島研究としてすくい上げられ再認識され、日本研究の一環として位置づけられたことを歓迎する沖縄側の意向も存在した。その意味で、不均衡な力関係にある両者の合作であり、それをどうとらえるかで評価が問われることになろう。しかし、伊波の沖縄学の言説と沖縄を日本の南島研究として位置づける柳田の言説には明らかな違いがあり、沖縄研究が南島研究として新たに再編成されたことは、その後の沖縄研究にとって両義的な意味をもったことは否定できない。」Ｐ３１３

「柳田のいう日本の南島研究としての科学的な地域研究が進展する一方で、伊波普猷以来の沖縄研究における「沖縄とは何か」という沖縄のアイデンティティを追究する自己認識の学としての性格が後景化していった側面も否定できない。」Ｐ３１９

「琉球史における「日支文明の交叉点」や「中継所」という論点には、「我が本土の古文明を忠実に保存する倉庫」として琉球を日本の古代を映す鏡として位置づけ、「一国民俗学」の枠組みで琉球文化をとらえる柳田の認識枠組みとは異なった、沖縄の郷土史家たちの琉球史をふまえた認識と視角が存在している。そのような論点も視野に入れた真境名や島袋全発の考えに代表される沖縄の南島研究会は、柳田の南島研究に大きな影響を受けつつも、それとは異なる視点を模索しながら〈歴史〉の観点から郷土沖縄の研究をとらえていたといえよう。」Ｐ３２１

戦前のこうした研究は、民俗学・民族学に加えて、言語学や歴史学などの分野を中心にしていた。戦後では、それらの発展を中心にしたもの、あるいは米軍支配などともからんで政治学研究など、あるいはユニークな自然環境を素材にした自然科学研究などで、発展を見ることができよう。

しかし、必ずしも沖縄の必要、「沖縄おこし」とつながった研究が満足な展開をしているわけではない。とくに教育学関係でいうと、おさびしい限りの状況に長く置かれてきた。近年にいたって、その点でのかなりの前進がみられるとはいえ、まだまだの状況が見られる。その意味で、「沖縄おこし」と研究ということの検討も必要であろう。

上に紹介した叙述に付された方言論争についてのコラム（戸邉秀明執筆）も、とくに教育にかかわっての検討評価の点で興味深い。

「東京からやってきた柳たちが沖縄語を擁護するのは、「正しい標準語の樹立の為」の資料として「保護」すべきだからであり、沖縄文化の総体も「悉く日本的なもの」として「国民精神の高揚」の資源になるからだった。いわば戦時の日本文化か発展するために必要な限りでの沖縄文化であり、それは日常生活と切り離された、あたかも民芸品のようなものでしかない。（中略）県民にとって言語をめぐる議論は、柳たちが想定する文化の問題ではなく、なによりも個々人の生活、ひいては人権の問題に直結していた。こうした両者の意識の大きな落差も、この論争が多くの面ですれ違いに終わった原因だろう。（中略）

当時の沖縄では、官民あげて観光開発への期待が高まっていた。戦時下にもかかわらず、軍需景気や健民運動によって日本全体で大衆的な観光ブームが起こり、植民地まで足を運ぶ観光客も珍しくなかった。沖縄も「わが国唯一の観光処女地」とうたわれるイメージを元手に「観光立県」をめざし、ソテツ地獄以来の不況から脱出をはかった。そこで沖縄を売り出す起爆剤にと県が柳を招待したことが、民芸運動の沖縄文化「発見」につながった。民芸協会と沖縄側のあいだには、当初は利益の一致が見られ、それは一種の蜜月関係といってよいほどだった。（中略）

せっかく招いたはずの彼らの発言は、日本本土の人々から差別の徴とされる沖縄語や伝統的な習俗を、今度はその同じ人々のために観光資源として正しく保存せよとの身勝手な議論に聞えただろう。県庁の官僚で柳批判の論陣を張った吉田嗣延が、沖縄を「観賞用植物若くは愛玩用動物」と見なすのかと不満を爆発させたのは、こうした背景があったからだ。」P328-9

重要な指摘である。

ところで、私が１９７０年代にのべたことであるが、当時の沖縄教育にあって、わずかにせよ沖縄素材を使った教材が存在したが、実際の使用ということでいうと、平和教育以外では「味付け」程度のものであり、ここでいわれる、沖縄を「観賞用植物若くは愛玩用動物」と見なす流れの枠内に収まりそうな程度であった。「沖縄おこ

し」とは距離があったのだ。残念ながら、「観賞用植物若くは愛玩用動物」ではない沖縄を教えること、「沖縄おこし」につながる教育の発見創造の課題は、今日なお未開拓に近い状況にあるといえよう。

３７．移民

移民の原因・背景　人口過剰と経済　「沖縄県史近代」を読む

（２０１２年1月１３日）

「第５部　沖縄移民の諸相」についてだ。

まずは、大規模な移民を生み出した原因というか、背景についての記述に焦点化しよう。

これにかかわって、第５部最後の第５章で、沖縄での移民研究をリードしてきた石川友紀さんが、以下のようにまとめている。

「筆者は沖縄県における出移民の要因として、①人口過剰からくる経済的要因、②移民啓蒙家など先駆者の出現、③共同体規制の崩壊、④社会組織、⑤徴兵忌避の五つを挙げた。そのほか出移民の要因に地割制の廃止による土地整理法の施行、移民会社・周旋人の存在、雄飛の精神、個人的動機などもあり、複合的要因説をとった。」P473

また、石川さんが、移民研究の視野を広げるために、次のような提言を行っている点も注目される。

「移民研究と他の沖縄学研究分野との学際的研究も同時に行えば、より一層近代沖縄研究の進展が見られるであろう。例えば、當山久三や謝花昇等の自由民権運動と移民問題との関係、移民と地割制度及びその廃止による影響、移民と教育、徴兵忌避と移民との関係などが、大きなテーマとして浮かび上がってこよう。」P474

これらの叙述も示すように、移民は戦前沖縄社会についての研究と深くかかわるし、戦後史にとっても重要な意味を持つ。石川さんの指摘にも学びつつ、上記引用にでてくるいくつかの点に焦点を合わせて考えてみたい。

１）まず「人口過剰からくる経済的要因」にかかわってである。この「人口過剰」ということだが、なぜ人口過剰が生まれたか、ということの研究や叙述には余りお目にかからない。いわゆる多産多死からの多産少死への移行が明治期に沖縄でも行われ、人口爆発がそれ以降、さらに昭和戦前期、またさらには１９６０年代まで続き、人口２０~３０万レベルから１００万以上レベルまでへの人口の爆発的増加が、わずか１００年で生まれたことが、「人口過剰」の背景にある。

このあたりの研究の深化が求められる。

２）上で述べた「経済的要因」だが、それとかかわって、よく「ソテツ地獄」に象徴される貧困が、移民の背景にあるといわれるが、そうでない要素もある。つまり、貧困によって「迫られて」移民という要素だけでなく、移民で「稼いで」、沖縄への「送金」で家族を援助するという要素、なかには「儲ける」という動機もみられそうで、この二つの要素があり、両者が混じり合っていることも多い。

次のような例も見られる。

「１９３０年代には名護の三高女出身者が二〇余名も花嫁として移民し（中略）。かなりの高学歴者が移民していたことが分かる。ペルー移民は南米移民社会では戦前期に母国訪問を頻繁に行っている。中には相当の蓄財をなして帰国した移民がいた。財源の乏しい戦前の沖縄県経済において移民の送金は大きな貢献を行った。特に一

九二九年の県歳出の実に６６．４パーセントが各地の移民からの送金によるものであった」P377

貧困だから移民した、という把握は単純化過ぎることが分かる。石川さんもいうように「複合的」なのだ。経済的要因にしても複合的なのだ。

移民と出稼ぎ　「沖縄県史近代」を読む

（２０１２年1月１７日）

（上記事の続き）

２)「稼いでくる」という場合、出稼ぎという用語が使われることもあり、移民と出稼ぎとが微妙に重なったり、使い分けたりしている。とくに南洋群島の場合そのようだ。

「南洋群島への移民の聞き取り調査をした際に、彼らが移民と出稼ぎをはっきり区別して使っていることに気付いた。南洋興発の募集で出かけた人たちは移民であったが、自主的に渡航した人たちは移民でないということであった。日本の統治下になった南洋諸島へは、パスポートは不必要だったし、行きたい時にいつでも行けたので移民という感覚はなかったようである。」P343

「県内や内地に出稼ぎに出て、引き続き南洋に渡った者もいた。彼らのなかには南洋への渡航費用を稼ぐために出稼ぎをしていた者、あるいは出稼ぎ先で儲かると聞いて南洋に向かう、など国内での稼ぎの延長線上に南洋行きがあった。「出稼ぎ」という表現は、（中略）沖縄では県内の都市や大東島などへの開拓、本土に働きにゆく際に使用される傾向があるが、「南洋出稼ぎ」は（中略）ウチナーンチュの南洋認識や国内出稼ぎとの関係が反映していた。」P349

その「国内出稼ぎ」について、次のような記述がある。

「関西への出稼ぎは一九一〇年代にはじまり、その多くは製糸・紡績工場に雇用された女性であった。一九二〇年から三〇年にかけては、年間約二万人の人が関西に職を求めた。那覇と大阪を結ぶ航路も一九一〇年代は月十便、二〇年代には月十八便に増えている。一九二三年（大正十二）、上京の途中大阪て下船した大里康永は「大阪へ出稼ぎにいく連中と一緒の船に乗ったんです。女は紡績に、男はどこかの鉄工所へ行くんだという話を聞きましたがね。あのころの船の中は大へんでした。着くまでは三味線で踊り狂ったような日々でした。」（中略）と回想している。」P480

出稼ぎとは少し異なるが、戦後の集団就職についても書かれている。

「一九二〇年代と同様、一九五七年からはじまった本土への集団就職もまた、県内に雇用機会の少ない沖縄から多くの若者を関西へと送りだした。本土就職の第一陣である一二二人の若者を乗せた白雲丸が神戸港に着いたのは一九五七年十二月二四日。その後、高度経済成長期に働き手を必要とした本土への集団就職者は増え続けた。彼／彼女たちは、沖縄人がいて、沖縄の言葉で語り合うことができ、沖縄の料理を食べることができ、三線の音が聴こえる町を求めた。それは、一九二〇年代から三〇年代に形成された沖縄人のコミュニティだった。大正区では、集団就職で関西へ来た青年たちが中心となって一九七五年からはじまったエイサー祭りが現在も続いている。」P481

こうした移民と出稼ぎは、沖縄との関係を深く持ちつつ行われた点に特質がある。また、経済的必要を軸に行

われるが、移民・出稼ぎ先地域との連携交流の促進と同時に、沖縄文化・沖縄アイデンティティの形成にもかかわることに注目したい。

移民　海外雄飛　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年1月２０日）

先の記事で、石川友紀さんが「出移民の要因」の２番目として「移民啓蒙家など先駆者の出現」をあげていることを紹介した。それに関わる記述として、以下のものがある。

「當山久三は東京滞在中に移民に関心を寄せるようになったというが、それ以前の明治二七、八年頃から、弟たちに外国の話をしており、移民についての情報を得ていたようだ。東京滞在中に移民に関心を寄せるようになったのは、既に外国についての情報を得ていたためであったと思う。また、特の衆議院議員田中正造からハワイ移民が有望であるという話を聞き、刺激を受けたという。」　P334

また、「いざゆかん、我らの家は五大州、誠一つの金武世界石」という詩について、

「當山がハワイへ旅立つ時に故郷金武村で「沖縄人」の発展を図ろうという思いを詠んだ詩である。ここに移民が単なる出稼ぎの手段だった日本本土出身者とは異なる「沖縄系移民」の特徴がある。湧川清栄はその特徴を捉え「思想移民」、「『赤』の烙印を押された人々の民族愛の所産」と表現した。そこには差別からの脱却、「ヤマト」と同等の社会的地位の獲得、という思いがあった。沖縄民権運動の活動家であった當山は、自由が失われた沖縄にとどまるより、海外に雄飛して自由の新天地を建設することが大切であると、海外移民に関心を向けていった。」P386 と記述されている。

こうした心意気は、現在の「世界のウチナーンチュ大会」にもあらわれている。また、それを私がいう「沖縄おこし」とかかわらせていうと、「沖縄脱出」「沖縄を見捨てる」というのではなく、「沖縄おこし」の流れの中でのものとして「海外雄飛」が登場しているのだ。

當山より少し時代がくだって盛んになる南洋群島での活躍をめぐって、次のような記述もある。

「移往した日本人人口が現地住民人口を凌駕する点て、樺太と並ぶ例外的な地域で、日本人の約六割、島によっては八割が本籍を沖縄県にもつ人たちであったことは南洋群島だけの特徴であった。人口面でマジョリティであったウチナーンチュは植民地社会を構成し、支える原動力であり、様々な分野の仕事で経験を積み、一つの島内を、あるいは南洋群島の島々を、さらには外南洋まで仕事を求めて移動した。」　P350-1

こう紹介してきたが、移民をすべて『海外雄飛』でくくることはできない。そうした色彩をもつ移民が存在したというべきであろう。「沖縄おこし」とつながるわけではものも多分に存在したのである。

今後、過去の移民、そしてその現代的系譜を検討する中で、「沖縄おこし」的性格をどう評価していくのか、一つの研究課題であろう。

移民　土地整理　徴兵忌避など　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年1月２３日）

今回は、石川友紀さんが「出移民の要因」の３，４番目としてあげた「共同体規制の崩壊」「社会組織」に関係が深い「土地整理」、5 番目に挙げた「徴兵忌避」にかかわる記述をみていこう。

まず徴兵忌避である。

「徴兵検査前になると、親が移民として長男を送り出した。長男は家を継承する者であり、家の存続を考えて送ったことになる。徴兵忌避者での移民がどのくらいの数にのぼったのか、数量的把握は難しいが、西原文雄によれば、官のためにただ奉公するよりは、海外に出て自分のために苦労した方がよい、と言って移民したと語っている移民帰りの人々もいるということである。」P345

次に「土地整理」に関わってである。

「移民研究者の石川友紀は、土地整理事業と移民、人々の移動について次のように述べている。

村人を規制していた地割制度が廃止され、新しい土地制度が確立されるとともに、個人に出る意志さえあれば、自由に出られる条件が社会的には作りだされた。

（略）土地整理事業以後は、納税の義務としての金納制も実施され、貨幣経済が村々に浸透し、それまで自給自足の生活に甘んじていた沖縄の農村社会が、近代化へと大きく発展していった。その後現金収入を必要とする社会になるにつれ、村から多くの出稼ぎがおこなわれるようになった。

（略）土地を抵当にして親戚や村の金持層、或は高利貸や銀行などから金をかりることもできた。

南米などの遠い国々に移民する者にとって旅費は大きな負担であった。行きたくても旅費の準備が出来ないと諦めざるを得なかった。移民と旅費の関係を、移民を送り出していた地域の人々は次のように今でも話している。

「金のある人は南米に行けたが、少しの金しかない人たちはフィリピンに渡航した。金のない人たちは内地に出稼ぎした」。

移民と出稼ぎ、移民先に対する認識の相違がうかがわれる話である。」P346

以上、「出移民の要因」の叙述についてみてきた。

これらには、当然ことながら、移民した人々と移民先での状況だけでなく、送り出した側の地域・人間関係の事情が深く関わっている。その構図は、現代において、出身地から出ていく若者たちの事情とも共通することが見られる。

こうした社会移動が、当人たちだけでなく送りだした地域のありようにどのようなものをもたらすのか。それは私がいう「沖縄おこし」とからむことである。『出稼ぎ型』ではなく、移動先も沖縄自身も、そして当事者自身も、その後をどのように展開していくのか。世界的なつながりを育むだけでなく、出身地域と『残された人々』をも充実するありようを模索する課題が現代も継続する。

戦前の移民　西原町史

（２０１１年１２月２２日）

移民が盛んであった西原である。たとえば、１９３５年では、西原村における海外在留者数・植民地在留者数・県外在留者数の合計は３４９０人で、国勢調査による西原人口１０４２７人に対して、３３．５％で、県内平均１５．６％を大きく上回り、県内第２位であったとのことだ。ⅡのＰ３３１

移民は貧困打開として理解されがちだが、当然その面が強いにしても、次のような面があったことを見落としてはならないだろう。１９０７年の新聞記事だ。

「出稼者の多いところでは、多少労働者に欠乏を来たしている。従って小作料なども幾分か安くなり、大地主はやや打撃を受けつつあるように思う。しかしながら、出稼者の成績は概して良好である。一人で一年二四〇円位送金する者もある。全く送金せざる者は、百分の一ぐらいあるかないかである。

その結果、出稼者の多いことにより、その地方が蒙る農業労働上の損失は、彼らの外国における好成績で、十分に償って余りあることと思う。」ⅡＰ３３３

さらに、次のような１９１１年の西原についての新聞記事も注目されている。

「中等校出身者は、十八名である。すなわち、師範校十名、中学八名である。目下、中学在校者はわずか五名、師範校の在校生はいない。四、五年前までは中、師範校に四、五名の通学者があったが、海外出稼ぎの熱に駆られて、続々半途退学し、所謂一獲千金を夢みつつ、米国やハワイ国に渡航する者多く、そのため、中等学生は漸次減少の傾向があるのは憂うべきに似たれども、遠征思想の勃興かといえば、いささか慰むるに足るべきか。」ⅡＰ３３６

戦前において、各地域の「地域おこし」、そして「沖縄おこし」がどうなっていたのか、また、地域指導層になると目されていた人々の一面を示していて興味深い。

移民　土地整理　徴兵忌避など　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年1月２３日）

移民先社会では、「日本人」との差別事態が見られ、その対処策として同化教育がすすめられた。南洋群島社会については、次のように書かれている。

「南洋群島社会には、「一等国民日本人、二等国民沖縄人／朝鮮人、三等国民島民」という暗黙の差別があったことも看過することはできない。貧しさゆえに充分な教育を受けられなかった親たちは、自分たちの苦労を繰り返させたくはない、と無理をしてでも子供たちに教育を受けさせた者が少なくない。」P352

ハワイでも同じような状況があった。

「(アルフレッド・トッツアの研究は――浅野補足) 他府県人二世の間から「オキナワケンケン、ブタカウカウ」といったような蔑称が生まれ、二世間にも差異感は引き継がれていたことを示した。トッツアは両者の亀裂が生活細部に浸透していたことを指摘した。例えば互いの医者などの専門家、社交クラブ、商店の利用を拒み、それは宗教、すなわち信者となる教会・寺にまで及んでいた。

こうして琉球処分以降形成された「ヤマト」と沖縄の関係は移民先ハワイにも持ち込まれ再現されたといえよう。ここで一つ述べておくと、実際には戦前の沖縄系移民社会は出身の市町村別に細分化された結束が中心で、それらは互いに排他的で独立性が強かった。ちなみに「オキナワ」全体の組織ができるのは戦後まで待たなくてはならない。」P389～３９０

この後段の記述にも注目しておきたい。

同化教育については、次のように記述されている。

「移民先の他府県人による沖縄県移民に対する差別や偏見に対し、沖縄では「大日本帝国臣民」となることを奨励し、移民先での差別の原因は移民側にあるとして渡航前に教育が行われ、一九二四年（大正十三）には「移民地における沖縄的なものを排除する」ことを目的に沖縄県海外協会が設立された。次々に移民先に支部が置かれ、一九二六年には布哇沖縄海外協会が設立された。このように、沖縄系移民の間でも差別への解決策として他府県人への同化が進んだ。」P390

「海外協会の方針は沖縄的な生活習慣、伝統文化を捨て、「日本的なもの」を身につけることであった。（中略）

米本土の沖縄系一世も他府県人による否定的な態度について語った。「私はしばしば沖縄人が、侮蔑的なトーンで『りゆうきゆう、りゆうきゆう』と呼ばれるのを聞いた」。

こうした差別の原因を多くの沖縄系移民は沖縄文化の「後進性」と「野蛮な」生活態度に見出したのだった。海外協会の同化の観念は沖縄系移民社会のリーダーたちによって積極的に共有され、メンバーは日本人らしくふるまうことが奨励され、受け入れられた。例えば、夏のピクニックでも、沖縄の踊りや音楽ではなく、日本舞踊が披露された。メンバーの一世は海外協会の同化の方針を「沖縄」＝「恥」と理解した。他方、指導者たちの「同化」思想の背景には社会的上昇志向と階級主義があった。ゆえに指導者たちは日本人らしく振舞い、他府県人との親交を深めた。指導者とメンバーの沖縄系移民の溝について次のような指摘がある。「彼等は少しばかりお高くふるまっていた。すべての沖縄系移民は下にみえるらしかった。だから彼らはヤマトウンチューとだけ仲良くした」。

このように、海外協会で採られた同化の方針は琉球処分以後、ヤマトによる同化政策の延長線上にあった。その構造が、海外移民社会で再現されたのだった。ゆえに海外協会の方針は移民社会でも極めて当然と受け入れられた。この海外協会は当時の沖縄系移民社会を代表する組織であり、その協会方針をメンバーの沖縄県移民は共有していたわけだが、まもなく協会に対抗する存在が出現した。在米沖縄青年会であった。」P395-396

同化教育・同化施策が沖縄内だけでなく、移民先でも行われたことは注目されるが、むしろ移民先経験が沖縄内での同化教育を、県人自身が追求する契機にもなったのだ。そうした中で、同化政策への批判対抗は注目すべきことだ。次回以降見ていくことにする。

移民先での社会運動とアイデンティティ追求　「沖縄県史近代」を読む

（２０１２年1月２９日）

移民社会のなかで社会運動が展開されたという点で、ハワイ移民は注目される。

「沖縄系移民社会に啓蒙運動が起こり、沖縄系移民の差別、低い社会的地位からの脱却という願望は多くの若者達に共有された。例えば学生による昭和学友会や、「球陽倶楽部」など沖縄人啓蒙を目的とした団体が組織された。（中略）

またプランテーション社会の資本主義の矛盾に反応し、沖縄系移民はデモ活動や労働争議に積極的に参加し、日本人労働者による大規模な労働争議の際に指導者に名を連ねた。さらに労働者のための新聞『洋園時報』を発行した。湧川清栄は多くの沖縄系移民が資本主義の矛盾に開眼し、労働争議に参加し、社会主義に傾倒していっ

た理由を、他府県人による差別・偏見に対する反発が噴出した形と捉えた。また沖縄の苦渋の歴史に直面した當山久三の自由思想の発展であると述べた。」P390～１

戦後にあっても、次のような指摘があることに注目しておきたい。

「一見華々しいハワイの沖縄系移民の戦後史であるが、その背後に戦後、「赤」とレッテルを張られながらも米国の権力の暴走を批判し、対沖縄政策を批判した沖縄系移民がいたことを指摘しておくのは重要であろう。」P393

沖縄移民は、移民先社会・アメリカ国家と日本・沖縄との間での対立矛盾の狭間にも立たされが、その難局を切り開き乗り切る営みが、たとえば次のように記述される。

「日系二世たちは米国への忠誠を示す証しとして、積極的に入隊していった。沖縄県移民もまた同様である。戦時下に忠誠を示したからこそ戦後の日系人の社会的地位の上昇があった。同様に沖縄系移民も専門職や政界への進出、事業の盛況などがあり、それは数々の記録に残されている。特にレストラン業界は「沖縄系の独占事業」とまで言われ、戦後の沖縄系移民は「日系アメリカ人」として「成功」の道を歩み始めた。」p392

こうした問題は、北米移民においても出てくる。アメリカ、日本、沖縄のからみのなかで、自らのアイデンティティをどうとらえるか、という問題が登場する。そのなかで、前回紹介した日本への同化教育を推進する沖縄県海外協会に対して異なる方向を提示したのは、在米沖縄県人会と名称変更する在米沖縄青年会であった。

「彼らは沖縄県移民のアイデンティティの問題に対して新しい立場をとった。第一に、彼らは郷里沖縄から独立した組織としての立場をとった。第二に、海外協会の同化主義に反対し、エスニック・プライド、すなわち、「沖縄の誇り」を提唱し、積極的に沖縄の独自性を内外にアピールするようになり、沖縄文化は県人会内部で意識的に奨励された。会創立後まもなく、機関紙『会報』を創刊したが、一九三六年の第三号からは『琉球』と誌名を改めた。意味するところは「我々は琉球人であり、それを誇りに思う」。またピクニックでは沖縄のダンスや音楽、沖縄料理を積極的に楽しんだ。このように［沖縄」＝「恥」とする海外協会の方針と対抗した。

彼らは自分たちの存在意義として、移民した立場から、郷里沖縄とは異なった、現実としての移民社会の必要を明らかにした。ゆえに彼らは「海外協会支部は・・・現実の移民社会の立場を覆い隠してしまっている。そのことは移民コミュニティの福祉や利益を促進するには十分ではない」と主張する一方で、移民社会と故郷との分離を提唱し、県人会と故郷沖縄との関係について再定義したのだった。

このように狭い日本人社会内のみでの承認を目的とした海外協会の同化主義に対抗し、在米沖縄県人会は自分たち沖縄系移民の文化的アイデンティティをアメリカ社会における資本主義、人種主義や差別に対抗する手段として積極的に主張すべきことを提唱した。すなわち、「沖縄」＝「恥」をエスニックの誇りに変えていくことは、移民がアメリカ社会という文脈のなかでどう生き残っていくかという問題を突き付けることであった。」P399～400

かくして、直接的には沖縄・日本・アメリカの三つを視野に入れ、それらのからみ合いの中で、自らのアイデンティティを鍛え上げていき、今でいえば、「世界のウチナーンチュ」を形づくる基盤となっていくのだろう。

沖縄の外に出ることで、広い視野をもって沖縄を見つめ直し、沖縄発展の方途を探ることができる、ということはよく聞く言葉だが、移民がそうしたことの先鞭を切ったといえるかもしれない。

シマ共同体と市民社会組織　コンパニー　「沖縄県史近代」を読む

（２０１２年２月１日）

前の記事で、ハワイ移民についての記述を紹介したが、私は次の記述にも関心をもつ。

「実際には戦前の沖縄系移民社会は出身の市町村別に細分化された結束が中心で、それらは互いに排他的で独立性が強かった。ちなみに「オキナワ」全体の組織ができるのは戦後を待たなくてはならない。」P390

移民先で、人々がどのような社会組織をつくっていくかは、重要な研究問題である。出身の戦前沖縄ではシマ共同体が中心であったし、一定人口の同一シマ出身者が集まって移民生活を送ったとすれば、それは当然のなりゆきであった。移民先でも、都市地域に住むとか、沖縄内外の他地域出身者、現地住民たち、他の海外出身者たちが混住する地域なら、事情は異なってこよう。

その点では、ハワイ移民と北米移民とは事情が異なってこよう。前回紹介した叙述にも、それが反映していそうだ。

では、シマ共同体以外にはどんな社会組織があるのか。参考になる調査はありそうだが、それについてのまとまった分析叙述にはまだ出会っていない。いずれ出会えるようにと期待している。

それは多様な形での市民社会的組織なのだろう。といっても、シマ共同体それ自体を否定的に見る必要ななかろう。シマ共同体的なものを「きっかけ」にして、人間関係を広げ、新たな社会組織をつくることがあってもよいからだ。

こうしたことを考えるうえで、南洋群島からの引揚者にかかわる次の叙述は注目される。

「当面の生活に追われながらも、引揚げ者の一部は一九四八年に初めて南洋関係者の慰霊祭を行ない、南洋群島帰還者会を結成、同会は米軍政府への「南洋再移民」要請を中心に活動を始めた。この活動は、南洋で県人会や行政、企業で重職を担った人びとを幹部に、青年世代が「実動部隊」となって組織的に取り組まれた。一方、日々の暮らしのなかでは、南洋時代の仲間を探しあて、あるいは見知らぬ者同士でも「南洋標準語」を聞き分け、仕事の斡旋や食糧の融通、情報交換をして生活の糧を得た。「コンパニー」とは南洋群島の現地住民が仲間、友人を呼ぶときに用いた呼称であり、親しみある日本人にも使った。南洋移民たちの沖縄での戦後は、沖縄戦で生き残った親類縁者を探し出し、荒廃したふるさとに住居をみつけ、食べてゆくことから出発した。南洋での仕事や生活の経験、人的なつながりが「財産」であった。「帰還者」の名のもと、組織的に協力しあう機会に結集した人々がいた一方で、日々の生活では、「南洋帰り」同士が「コンパニー」と呼びあえる関係をたぐりよせ、あるいは新たな関係に紡ぎなおしていった。こうしたいとなみが、沖縄の戦後の「復興」を担ってゆくこととなった。」P369

シマ共同体的な要素と市民社会的な要素がからみあっている「コンパニー」というものを、どう位置付けたらよいだろうか。これに類することは、戦後、そして今日に至るまで、様々なところで見られように思われる。「ウチナーンチュ」つながりの特性を示すものかもしれない。分析検討を深めたいことである。

小林茂子「『国民国家』日本と移民の軌跡―沖縄・フィリピン移民教育史―」を読む

（２０１１年8月２３日～１０月４日）

１）本の正式タイトルは、小林茂子「『国民国家』日本と移民の軌跡―沖縄・フィリピン移民教育史―」（学文社２０１０年）だ。店頭で偶然見つけた博士論文の本である。小林さんはまったく存じあげない。機会があれば、意見交換したいと思う。

ここ２０年近く、沖縄教育を素材にした博士論文が続出している。だが、それにしては、それら相互間の交流討論が少ない。数年前、私が呼び掛けて、メーリングリストを作り、意見交流を図ったが、投稿数が少なすぎて、「開店休業」状態になり、「閉店」に至った。何らかの形での交流討論の機会が増えれば、と願う。

話がずれてしまったが、沖縄教育史も一応研究分野にしている私にとって、本書の研究対象はほぼ未着手のものなので、新鮮な感覚をもって、読まさせていただいた。というのは、拙著「沖縄県の教育史」（思文閣１９９１年）は、出版企画が近世までのものを、私が強引に依頼して、明治末まで書かさせていただいたので、移民については、ほんのわずかしか触れていない。また、戦前だけでなく戦後も、沖縄教育にとって「移民」問題は、「国内出稼ぎ」を含めて、重要な位置を占めるという予感をもっていたのだが、移民教育については、全くの未着手状態にあった。ということで、本書は、学ぶところ大であった。

ところで、沖縄の最近の市町村史や字誌には、戦争体験と並んで移民体験の聞き取りなどを掲載することが多い。玉城でも多い。この二つの体験が、どのようなものにせよ、人生の記憶のなかで、今なお重要な位置を占めている人は多い。私の字でもそうだ。

この小林さんの書籍でも、金武を中心にそうした史料が駆使されている。それが、研究書でありながら、読者に強いリアリティを与えている。そして、それがひいては、現在・今後の人々の生き方への示唆になることも多いだろう。

２）沖縄内外の人との出会いと交流

沖縄住民が、沖縄外の人と出会い交流することを、歴史研究の課題とすることは重要な課題・視点である。それを近代国家体制の中に組み込まれた「琉球処分」以降、沖縄戦までに区切った場合には、教育分野に限ると、たとえば次のようなことを視野に入れる必要がある。

沖縄外から沖縄内に来た人と住民との関係

沖縄支配者・統治関係者

商人など

教育文化関係者　宗教者研究者などを含む

日本軍

沖縄住民が沖縄外に出る場合

徴兵など軍隊との関係

移民・出稼ぎ（国外・国内）

進学・就職など個人として出る

これらがどのように行われ、そこでの出会い交流がどのように行われ、それらを通して、「沖縄」がどのように変化発展したかの検討は重要な問題である。世界のどの地域における歴史を考える場合も、この視点を欠かすわ

けにはいかない。しかし、近代国民国家の時代においては、自己完結的な把握が蔓延してきた。「うち」と「そと」という区分さえ、その思考様式の影響があるだろう。

それにしても、沖縄史を考える際には、この問題はきわめて重要である。そして、この「うち」と「そと」との出会い・交流の大半が、非対称的に行われ、支配関係を伴っていたことにも注目したい。そのなかにあっても、対等関係の出会い・交流が存在したことも発見・認知することは欠かせない。

こうした「沖縄史」研究は、いろいろと開拓されつつあるが、いまだ発展途上にある。その点で、小林さんの研究は、重要な布石となろう。

この「出会い交流」のなかで展開する様々な事態を、次のようなことに焦点化して論じるのが本書である。

「本研究は、沖縄での移民教育を受けた移民らが、沖縄人ゆえの差別に対して「追従」し、あるいは「対抗」しつつ現地での適応をめざす過程を，沖縄の移民教育の実践と渡航地フィリピン・ダバオでの移民としての自己意識の形成という２つの局面から，とらえようとするものである。」P4

これは、「沖縄人のアイデンティティ」問題という形でも、多様に論じられてきたが、それに本書は、新たな提起をしていると言えよう。それについては、連載のなかで論じていく。

ここでは、まず、本書の時代区分と、各時期の概観を紹介しておこう。

「本時期区分を示すと次のようになる。

第一期（萌芽期）　1901～1919 年
第二期（推進期）前期　1920～1925 年
後期　1926～1935 年
第三期（変質期）　1936～1945 年

まず，移民教育の嚆矢を「移民の父」當山久三が始めた 1901 年の救貧夜学校の設立とし，1919 年までの時期を移民教育の萌芽段階とした。この時期は，第一回目の沖縄からのブラジル移民渡航禁止施策が含まれており，新聞記事や知事の談話などに，移民教育の必要性を訴える内容は認められるものの，県の具体的な動きはまだみられない。

1919 年にブラジル募集制限，1920 年に再び募集禁止が出されるようになると，県は積極的に移民教育対策に乗り出すようになる。中心的な施策を取り上げてみると，沖縄県海外協会の設立（1924 年）は第二期前期に，条件付解除後の第二期後期は，沖縄県初等教育研究会による『島の教育』の作成（1928 年），開洋会館の建設（1934 年）などがそれぞれ位置づけられる。この第二期後期は，1931 年の満洲事変以後の国の植民政策により，国家主義的思想が沖縄にも急速に広まってくるが，沖縄の移民教育が国の植民政策から直接影響をうけ変容するのは，「国策ノ基準」（1936 年）が採択されてからである。

外務省から沖縄人に対する渡航解禁を 1936 年に獲得したものの，1934 年にブラジル本国では「移民制限法」が制定されており，日本人の入国は厳しく制限されていた。植民政策として満洲開拓が推進されるいっぽう，いわゆる「南進」政策として南方地域への開拓が検討されるようになると，沖縄からの南方開拓移民送出が強調され，奨励されるようになる。第三期は，沖縄の移民教育が国の植民政策に吸収される時期に相当する。変質期としたのはこのためである。」P22

こうした時期区分は、当然のことながら、移民教育論に限定されない沖縄教育史論の時期区分の影響を与えていくだろうが、ここでは深入りせず、紹介に留める。

３）誇りとしての移民

「移民県」といわれる県によっては、「移民＝棄民の考えがある」P319 なかで、沖縄ではむしろ「誇り」として、移民をとらえる発想が存在する。それに関わって、次のように書かれる。

「わずかではあるが沖縄移民の差別や非難に対抗し，沖縄移民としての誇り＝人間性の回復といった志向性を有する事象を，移民教育のなかに見いだすことができる。たとえばそれは，沖縄県初等教育研究会編『島の教育』（1928 年）という研究原案のなかの一側面に認めることができるのではないかと思われる。」P14

その『島の教育』についての分析は、本書の重要部分の一つをなしており、以下のように書かれる。

「「沖縄人の進取性］といったものに目を向けさせせようとしていることが読み取れる。さらに，「沖縄人としての長所」を喚起するために，正規の「国史」授業のなかに「琉球外交史」の内容を組み込み，文部省の厳しい統制のなか独自のカリキュラムを工夫作成し，生徒たちに伝えようと努力したことがうかがわれる。」P14

「国史教育のなかに琉球外交史を巧みに位置づけ，沖縄人が海外で活躍した歴史を知らせようとした。これは，学校教育において琉球史を取り入れた系統的なカリキュラムとみなし得るものであろう。」P114

「『島の教育』の「海外発展」の目的は，国家や民族の膨張主義ではなく「永住的移民」にあり，県民が現地の生活にいかに適応するかをめざしていた，と解釈できる。こうした目的は，国際協調をめざす「国際性」への志向性と相いれる面があった。」P115

「『島の教育』には「国際教育」的視野も含まれており，「国際性」をめざす志向性が確かに存在していた。」P115

このように、『島の教育』を高く評価するわけだが、それだけではなく、複雑なものをかかえている点を指摘する。

４）『島の教育』のもう一つの性格

『島の教育』には、次のようにもう一つの性格があると指摘する。

「『島の教育』には天皇制イデオロギーに基づいた移民の精神養成も志向しており，このように天皇制イデオロギー思想と「国際性」の側面とが矛盾することなく併記されている点が，『島の教育』のもつ特徴的な視点なのである。それは「従来の恥辱を挽回し帝国々民として或は世界文化人として何等遜色なき県民の養成に努めることは本県の急務である」という記述に端的に表れている。」P116

このように、二つの性格が『併記』されている点を特徴とみて、さらに次のように指摘する。

「『島の教育』にみる移民教育には，自由教育的な影響のもと，「国際性」への志向性が指摘できるが，同時に言語風俗習慣の「改善」や天皇制イデオロギーの養成を媒介として，そうした「国際性」への志向性が日本の対外進出や膨張の方向に容易に連動していく契機をも内在していたといえるのではないだろうか。」P117

また、『島の教育』を分析した近藤健一郎の先行研究をとりあげ、次のように指摘する。

「近藤論文は『島の教育』について，強制的な側面が強い「大和化」を中心にした一面的な把握にとどまって

おり，沖縄人の進取性や近代化の側面，あるいは「国際性」への契機といった点などについて一切ふれられておらず，多面的側面をもつ『島の教育』の全体像を十分にとらえきれているとはいえないのではないか。そこで本論文では，『島の教育』を分析する方法として，「大和化」の内容を①言語風俗習慣の「改良」，②天皇制イデオロギーの養成に分類し，それに対する多面性の視点として（ｉ）近代化への志向性，（ⅱ）「沖縄人としてのアイデンティティ」の形成（=文化的異化の志向性）を対峙させ，さらに（ⅲ）「国際性」への契機という点も加味して，多面的側面を浮き彫りにしつつ，かつ，それらが「大正自由教育」の影響のもとに相互に関連しながら多面性を構成していることを，具体的な教育内容に即して明らかにする。」p104

『島の教育』についての研究に未着手の私としては、コメントを加えずに、紹介するにとどめよう。

５）自由移民と「国策」移民（植民）

これまで紹介した『島の教育』の二つの性格の「併記」は、沖縄における移民教育論の構図を反映しているのだが、それについて、次のように述べられる。

「この時期の沖縄における「移民教育論」には，沖縄人の海外渡航を「生存権の拡張」ととらえ，そのため沖縄の言語風俗習慣を「改善」し，必要性として日本人への「同化」を受け入れつつも，中央でみられるほぼ同時期の「移民教育論」に比べ，植民的思想は薄く，移民先の異民族とも共生をめざす考えが存在していた，といえる。」p96

しかし、時代が下ると、この「併記」構図に変化があらわれる。

「戦時体制に入り，自由意志の移民を中止し，南方へ「国策」移民として沖縄人を送出するとき，そこにはどうしても沖縄移民としての「誇り」を意図的に醸成する必要があった。つまりそうした「誇り」が，渡航した南方地域では，他民族に対する「指導民族日本人」として作用するよう，天皇制イデオロギーの浸透と民族的一体感を強化した同化施策が同時に必要だったのである。このようにみると，「国策」移民のための教育（植民教育）とは，強力なる同化施策を伴う国家主義的教育であると同時に，沖縄移民としての「誇り」を意図的に再生し称揚することをねらいとしたものでもあったといえよう。このねらいが最も効果的に作用するのは，いうまでもなく多数の移民を排出している地域である。

冨山一郎は，沖縄において，自由移民と「国策」移民（植民）が交差する状況について，「成功を求める人々の夢と帝国主義的侵略は，このように，ズレを生みながらも癒着していた。そうであるがゆえに，生活改善は官製の運動というより沖縄の人々自身の運動として展開したのである」と説明する。ここでいう「ズレ」とは自由意志による移民と「国策」移民（植民）の「生活改善」を受け入れる方向性の違いである。つまり，成功を求めて自ら出かける移民は，必要性として「生活改善」を受け入れたが，「国策」移民は国家の植民政策にそって，自ら進んで積極的に「生活改善」を受け入れたのである。そこには，上述したごとく，醸成された沖縄移民としての「誇り」が大きく作用していた。移民教育と「国策」移民のための教育（植民教育）の違いもまさにこうした点にあったといえる。それは「必要的同化」から「積極的同化」への転換ともいえるものであった。」P170~1

ここに登場する「必要的同化」「積極的同化」は、本書の重要キーワードだが、次回以降に触れる。

「植民政策として国の要請で「国策」移民を送出しなければならなくなったとき，移民の成功したいという要望を否定しても，「日本人」としての同化政策を受け入れ，かつ国のために奉仕する移民をどう養成すべきかを考え

なければならない。ここに沖縄移民としての「誇り」を意図的につくり上げる必要があった。それが海洋民としての沖縄移民の再評価であり，過去における沖縄移民の活躍の称揚であった。つまり，「国策」移民のための教育（植民教育）は，強烈な天皇制イデオロギーを伴った同化教育をほどこしたが，同時に沖縄から多数の移民を送出しているという歴史的事実を示し，そこに沖縄移民の「誇り」を付与することを企図したのである。」P178

このように、沖縄の移民、移民教育には複雑な性格・構図を見ることができる。それをさらに複雑にしてしまいそうだが、私なりに考えたいいくつかのことを書き加えよう。

（1）「自由意志の移民」「自由移民」には、個人的性格が強いものと、共同体とのつながりが強いものとがある。後者が多く、本書でも、それを中心に書かれるわけだが、数は少ないとしても、前者的なものも無視できないのではないか。無論、二つのものが入り混じり、後者が優勢なものが多いことはたしかであろうが。

（2)本書が扱うフィリピン移民だけでなく、関西などへの出稼ぎを含めて多様な地域への移民、ないしは移民に類するもの、および移民などからの帰還をも視野に入れて考えたい。

（3）その一つとして、台湾にでかけ、教職に就いた教員たちがいる。それは、「他民族に対する「指導民族日本人」」的性格が濃厚である。

（4）移民だけでなく「戻り」に私が注目するのは、移民などが沖縄教育にもたらしたものは何であるのか、という問いを私がもっているからだ。

沖縄生活で日常的に話題になるのは、「本土」生活体験である。また、台湾での教職経験者が、戦後沖縄教育界に与えたものは大きい。典型的には屋良朝苗氏である。これについては、様々なところで再三書いたので、ここでの再論は避ける。

（5）本書が明らかにしているように、沖縄史における「海外雄飛」の「実績」をもとに、アジテイトするありようは、本書が示す戦前だけでなく、戦後もしばしば登場する。「万国津梁の鐘」、世界のウチナーンチュ大会などもそうだし、私の新刊「沖縄おこし　人生おこしの教育」も、それにつらなるものを持つ。だが、それをどのように提起するかは、重要な検討点を持っている。

それについては、別途論じたいと思う。

６）「移民科」　沖縄独自の追求

先にも紹介したように、「島の教育」には、琉球史を教えようという独自性が見られる。そうした試みは、次のような事例にも見ることができる。

「『沖縄教育』(第 177 号)では実業補習学校振興特集をくみ，それに先立って「本県実業補習教育振興の具体方案」についての懸賞論文を公募している。当選した論文のなかに，実業補習学校を「出稼移民的訓練の徹底」の場としてとらえるものがみられる。それによると，沖縄県の特殊的立場から「移民科」の設置を構想しており，そこでは「地理的材料」「作法的材料」「移民心得」を徹底させるための科目をもつことを提案している。こうした考えがどの程度具体化されたかは不明だが，少なくとも，「移民科」設置の件については，実際に県議会において高等小学校と実業補習学校に特設するよう要望がだされており，1937 年に糸満小学校においてそれが実現している。」P93~4

このように、教育の国家統制が厳重な戦前においても、沖縄独自の教育が追求された点には注目しておきたい。

その点にかかわることだが、今日の沖縄教育においては、沖縄の独自性を教える動向が、依然としてというべきか、むしろ逆行してというべきか、弱い。その点について、私は、近著「沖縄おこし・人生おこしの教育」で大きく話題にした。このあたりの検討を各界の方々にお願いしたいと思う。

７）移民の中心は青年層

移民する人々の年齢について、次のような記述がある。

「どのような年齢層から県外への人口流出が生じたかを分析した年齢別人口流出率によれば，ほぼ戦前期を通じて男子は 15 歳前後をピークに 25 歳前後までに，女子は 12～13 歳をピークに 20 歳までに県外海外への人口流出が顕著であることが指摘されている。」P91

「フィリピン生まれ（16 人）を除いた 84 人の渡比年齢については，男性が平均 20.0 歳，女性が平均 20.5 歳となっている。とくに男性の場合は，徴兵についての意識が背後にあるものと思われる。」P199

県外出稼ぎと海外移民など、渡航先の差異が、多少の年齢差異を生み出しただろうが、１０代後半、せいぜい２０代前半が中心であったようだ。そのため、次のような指摘が生まれる。

「これらの事例から青年団等の活動のなかには，言語や沖縄独自の風俗習慣の「改良」についての取り組みが含まれていたことがわかる。これは主として壮丁検査のための準備教育といった面があると思われるが，その取り組みは移民のための教育と重なるところが多かった。」P91

移民と徴兵検査・徴兵忌避の関係は興味深い問題だ。また、働き口確保の問題とも連なっているようだ。

これらのことは、私自身も今後検討していきたい問題だ。

８）移民送り出しの村・階層の分析

本書は、以下のように、移民送り出しの村・階層の分析に触れていて、こうしたことに関心を持ち続けてきた私には、興味深い。

「１９３５年１２月現在, 移民渡航地, 植民地, 日本本土への人口流出者数は, 羽地村 5031 人（流出率:44.72%，以下，同様），本部村 6256 人（28.48%），大里村 2855 人（20.98%），浦添村 1776 人（15.62%），美里村 3795 人（22.79%），名護町 3106 人（22.32%），知念村 881 人（17.17%）となっている。これは人口流出による農業生産力の低下を食い止めるために，つまり，矛盾的な政策を少しでも緩和するために，とくに人口流出の大きい村を「生活改善指導字」や「模範的実例」に指定し，各村の農民たちが積極的に農業に励むよう促すという当局側の意図が含まれていたと考えられる。」P137

こうした村において、どの層が移民となってでかけたであろうか。

「1920 年代の農民層分解は，耕地面積５反以上１町未満の層へ集中化する傾向があり，1920 年代後半は，これらの人たちが自作化に転じる傾向があった。この層は絶えず没落の危機に晒されており，小作であれ自作であれなんらかの追加的所得が期待されないと自家労働力の再生産もおぼつかない基盤の弱い小農経営であった。この条件下での追加的所得とは，移民・出稼ぎ人からの送金であったと考えられる。 1930 年代前半は，新品種の普及や肥料増施による土地生産力の発展が５反以上１町未満の層を中心にみられ，総体として人口流出傾向は弱まっていった。しかし, 1930 年代後半, 配合肥料価格が上昇し, 一方糖相場が下落すると最下層に離農化か進み,

農民層分解が全体的に落層化傾向を示すようになり，若年労働力の流出が再び強めざるを得なくなる，と向井は説明する。」P141~2

このように、移民送り出し階層の農家として、耕地面積５反以上１町未満の層と最下層の二つが想定されている。

両者を比較していえば、前者は、一定の所得・生活水準にあるが、よりましなレベルへと「上昇」願望を持ってのものであり、後者では、ぎりぎりの生活確保の比重が高くなる。

本書の中心的フィールドとなる金武村については、次のように述べられる。

「金武村では，有識者によって伝えられた情報により，1920 年代後半，とくに中層（５反以上１町未満の層）を中心にフィリピンへの渡航を促し，そのなかの成功者が示した村での可視化した事象は，1930 年後半，下層（５反未満の層）を含めた広範囲の農民層にフィリピン渡航の動機を刺激し，「移民熱」を膨らませることになり，フィリピン移民を増大させた，ということがいえるであろう。」Ｐ１４２～３

最初のころの移民は、前者の性格が強く、村の指導者的な人も含まれており、次のように書かれる。

「初期のフィリピン移民には，大城孝蔵というダバオ開拓の指導者をはじめ，当山順吉，安次富善徳，伊芸萬栄，仲間福三，伊芸新助，奥間清盛らの金武村出身の有識者たちが多かった。これらの人たちはダバオでの成功者だが，帰郷後，沖縄でも要職につき活躍した者がいた。たとえば，当山順吉は村長に，安次富善徳は町村会議員に，医師である奥間清盛は県会議員にそれぞれなっている。こうした有力者らがフィリピンでの大城孝蔵の活躍ぶりや，ダバオの有力会社太田興業の規模や場所，将来の見通し等を村に具体的に伝えていった。このような状況において，多くの村民らが有識者からの実際の体験談として，これらの話に熱心に耳を傾けたであろうことは想像に難くない。」P139

「移民成功者は移民で稼いだ資金を，土地家屋や墓など個人的な財産に使っただけでない。多くの移民が寄付という行為をとおして，移民成功の事実を示している。たとえば，「帰朝者はさすがに金使ひが綺麗だ。共同井戸，宇事務所設置，学校改築などの企てがあると惜しげもなく万余の金をぽんと投げ出す」（同上記事）と，書かれているように，社会的資源へもその金を還元している。とくに金武村では，1922 年に全焼した金武小学校の改築総工費の約 20%が，海外在留者の募金でまかなわれ，それによって県最初の鉄筋コンクリート二階建て校舎を完成させたことを，移民の業績として語り伝えられている。」P141

こうした層は、村の中の相対的に豊かな層であり、階層上昇要求をもつ、もてる位置にあったといえよう。それには、明治期に関わって私などが分析した旧地方役人層も含まれるであろう。

そうした層は、地方政治や教育でも活躍するわけだが、かつての當山久三を除けば、教育関係者が出てこない。調査をさらに進行させれば出てくるかもしれない。そうした関係者が、移民体験を、県内の教育そのものにどのように反映させていったのか、行かなかったのか、という点にも、私は関心をもつ。

だが、戦時体制に近づくにつれ、二つの層の区分ができない事態になり、移民促進と抑制の政策的ジレンマが生まれてくる。

「沖縄における南方「国策」移民は，国の「南進」政策に基づいて日本軍占領地へその要請のままに，なしくずし的に送出されていった。いっぽう，農村では労働力不足が深刻化しつつあり，県当局は労働力確保のために，「県外自由出稼抑制策」を実施しなければならないほどであった。つまり，沖縄県からの「国策」移民は，県内

の労働人口を喪失しつつも強引ともいうべきかたちで行われていったのである。」P174

そしてまた、戦後移民出稼ぎには、戦前構図を引き継ぐものと、新たに見られる特質とが見られるだろう。そのあたりの研究も必要とされるだろう。

９）沖縄移民が作る郷友会的社会

ダバオなど移民先で、沖縄移民は郷友会的社会をつくり、それを基盤にして暮らすことに関わって、次のように書かれる。

「沖縄移民の場合，字を中心とした沖縄特有の郷友会的社会が各地でつくられ，他府県の日本人に比べ強力なネットワークがつくられていった。沖縄では，村から出ていったものでも村を離れたからと故郷の村から排除されたり切り離されたりせず、自らをたえず故郷の村の延長線上に位置づけて考える。そのために故郷の村に残っているものとの連帯意識も深い。つまり,「郷友会のメンバーたちは母村に祀られている祖先によって自分たちは護られているのだという意識を強くもち,その結果自らの故郷をかけがえのないものだと考えているし,しかも,村を出たものも村に残っているものと一体感を強くいだいているので，郷友会のメンバーたちのふるさと意識はきわめて強力なものとなる」といわれている。この「ふるさと意識」をもっとも強く感じるのが字での結びつきなのである。そのため同郷の出身者同士の助け合いや，故郷の集落（字あるいは村）から出てくるものへの働き口の面倒などがスムーズに行われた。」P208

海外にしても国内にしても、こうした傾向は強かった。無論、郷友会的社会とはつながりが薄い「個人」としての移住者が存在する。都市への移住者にはその傾向が見られるが、かれらも、しばしば郷友会的社会とのつながりをもつ例は多い。

対照的に、ダバオの場合のように、農村への移住者の場合は、郷友会的社会とのつながりをもつのが大半であろう。

こういう記述もある。

「沖縄の移民体験者は,「戦争がなければ，ダバオでずっと暮したかった」という証言を多く残している。この「永住意識」は,「フィリピンの日本人社会に永住する」ということを意味しているのではないだろうか。少なくともフィリピン社会で生活する，あるいは「フィリピン人」として現地社会で暮らす，という意味は含まれていないのではないかと思われる。」P221

この場合に、沖縄からの移民者の場合は、日本人社会ということと沖縄人社会とがダブることが多い。また、「フィリピン社会」で生活する道を選択する可能性が、それなりに存在していた点にも注目しておきたい。

こうした郷友会的社会を形成して移民が行われたことについてどう分析評価すればよいのだろうか。共同体としての生活が「すべて」ないしは、「ほとんど」であった当時の沖縄農村に人たちにとって、移民という「それまでの縁が乏しい社会」での生活を進めるには、不可欠のものであったろう。だが、沖縄人が形成する郷友会的社会が閉鎖的であったとみるべきではないだろう。

むしろ、周りの新しい多様なものと関わりを深めていく傾向が強い、というのが、私の体験的感覚だ。そうした開かれたものがありながら、それを閉鎖的なものと感じ、壁を作るのは、むしろ「外」からの人たちであろう。本書を読むと、ダバオの日本人社会においても、その傾向が見られたことが分かる。「標準語下手」で「沖縄語」を

話すということが、口実であったというべきだろう。同様なことは、戦前戦後の日本社会に広く見られてきたことだ。

さて、こうした郷友会的社会が、20 世紀末から劇的変貌を遂げ始めており、今後、10 年、20 年とたつと、どういう変化をしているのだろうか。それは、新たに論じるべき別の課題だろう。

１０）必要的同化

本書は、中島智子が在日朝鮮人に関わって使用した分析枠組み「文化的同化」と「構造的同化」を応用して論を展開する。

まず本書が紹介している中島智子の論を再掲載しよう。

「文化的同化とはマイノリティが支配的文化を受容して固有の文化を喪失すること，構造的同化とは支配集団の社会内のさまざまな集団や組織へマイノリティの参加が認められることとしておこう。この枠組からいえば，日本社会は在日朝鮮人の文化的同化を要求しながら，構造的同化については拒絶してきたといえる。」

「朝鮮人教育実践のめざすべき方向性を「文化的異化と構造的同化の結合作業の試み」と名づけ，この作業は，「文化的同化を前提としない市民的権利としての構造的同化の要求であり，むしろ文化的には奪われてきた朝鮮人性の回復（=文化的異化）を伴いつつ日本社会への構造的参加をはかる」ものである」P12

この論を参照しつつ、本書は次のように述べる。

「沖縄の移民教育においては，「構造的同化」は二次的なもので強い志向性は出てこず，本研究では視点とはなりえない。むしろ中心的な視点は，差別や非難を軽減し多くの移民を送り出すために，日本への「文化的同化」をめざしたものであるといえる。移民側もこれを移民成功に導く社会的誘因として必要上受け入れたのである。つまり，ここでいう「同化」概念は，植民地教育史の領域で使う「帝国主義的な異民族支配」といううえからの支配装置としての含意だけでなく，それを受容する側からもとらえる視点を留保する余地があり，異民族に対する植民地教育史研究などとは異なる「同化」概念を有しているといえる。すなわち，沖縄の移民教育においては，強制力や抑圧など外圧的な意味合いが強い，従来の「同化」概念では説明しきれない面が含まれており、したがって本研究では，沖縄移民が必要にかられて自ら求めた内発的な側面を含んだ「文化的同化」をあえて「必要的同化」として抽出してとらえることにする。」P13

検討に値する興味深いアプローチだ。

ここで、一点コメントしよう。「必要的同化」も注目すべきキーワードだが、その主語は、引用の末尾の文章では、「沖縄移民」だ。これに対して、「移民教育」の主語は、移民教育従事者だろう。移民の要求と、移民教育者の営みとは別のレベルなので、両者の関係を改めて分析説明する必要があろう。

そして、移民教育には、移民教育従事者が、自ら進んで、あるいは沖縄移民からの「必要とする同化」要求を受けて、「必要的同化」をする性格があったことが本書では書かれる。とすると、「強制力や抑圧など外圧的な意味合いが強い，従来の「同化」概念」で「説明」されるものと、この「必要的同化」とが、移民教育、移民教育従事者においてはどういう関係になっていたのかの検討が求められてこよう。

１１）必要的同化と文化的異化

本書は、前回の「必要的同化」に加えて、「文化的異化」の概念を使って、こうも述べる。

「沖縄移民の場合，差別に対抗するために，自らのアイデンティティ形成に郷友会的社会での沖縄人相互のつながりが重要であったと考えられる。つまりここから，「文化的異化」の志向性をもった，沖縄的生活を伝承した郷友会的社会での行動が，「沖縄人としてのアイデンティティ」形成に深く影響を与える基盤としてあったと解釈することができよう。」P18

「沖縄での移民教育の実践においては，言語風俗習慣の「改良」による日本への「必要的同化」を施しつつ追従し，基層部分には「文化的異化」の部分を保持して対抗し，また，ダバオの沖縄移民の自己意識の形成過程では，適応のため「日本人意識」をもちつつ追従するが，基層部分では対抗として「沖縄人としてのアイデンティティ」を，郷友会的社会をとおして形成していた。しかし，基層部分に保持していた，教育実践にみられる「文化的異化」や自己意識のなかの「沖縄人としてのアイデンティティ」の部分は，戦争による国家の強力な日本人化＝同化政策の前に対抗の姿勢はもはや見られず、むしろより明確に追従の姿勢を自ら進んで、「積極的同化」を顕在化させた。つまり、戦争遂行の前には、沖縄の移民教育は容易に植民教育にすりかわり、移民たちの意識は積極的に日本人化し戦争協力の姿勢を示したのであった。それは、差別された者が生き抜くための現実的な場面での、１つの選択であったといえる。結局、沖縄の移民教育は、実践においても自己意識形成においても、差別に対し現地にうまく適応し移民を成功させるという実利的側面が強かったため、日本への強力な同化の前には、抵抗の立場を築くなどということはなかった。」P312~3

この文章の前半では、前回述べたように、移民と移民教育との区別が鮮明ではない。後半に入ると、「戦争遂行の前には、沖縄の移民教育は容易に植民教育にすりかわり」と評価されているが、その場合、「移民たちの意識」と「移民教育」とを区別して論じると、どうなるであろうか。両者は混然一体としたものなのだろうか。

この引用文に対して、次のような異論が出てくるかもしれない。

「すりかわりではなく、移民教育は、もともとそうした性格を持っていて、表面に出る性格が移動しただけではないか」という異論である。それに対して、どうこたえるか、さらに研究を深化発展させなくてはならない課題が存在する。

その点については、移民と移民教育・移民教育従事者との関係だけでなく、移民教育・移民教育従事者と沖縄の教育界の全体動向との関係も問うていかなくてはならない。

ダバオでの郷友会的生活の場での展開を含めて、沖縄移民者が『必要的同化』という実際的対応を展開したことは理解できる。だが、沖縄教育界が、全体としてそうしたことを展開したかどうかについては、別の検討課題である。戦時体制に入って、変化したというとらえ方でいいのかどうか、という異論が出されたら、どう答えたらよいであろうか。

こうした問題にかかわって、著者の研究の一層の深化発展が期待される。

さらに付けたしコメントをしよう。

沖縄住民が、学校教育を中心的場とする「標準語奨励運動」などが展開されたにもかかわらず、標準語使用は、学校、「公的」な場、出稼ぎ・移民先で沖縄以外の人と出会う場に限定されていた。

その事態に大きな変化が生じるのは、1960 年代、1970 年代である。日常生活の場でも、若い世代を中心に「標準語」使用が優勢になる。それらを反映し、現在の 60 代以上(1950 年以前生まれ)は、話す聞くともにウチナーグ

チが使え、40 代 50 代（1950 年代、60 年代生まれ）は、聞くことはできるが、話せない、30 代（70 年代生まれ）は、聞くこともおぼつかない、という事情に至る。

これらの原因には、経済的文化的事情、標準語使用者との生活レベルでの接触頻度などの事情に加えて、教育がある。戦後では「同化教育」という言葉は消えたに等しいが、教育界の体質や構造は、戦前の歴史的なものを継いできている。

そうした際に、「必要的同化」というアプローチは魅力的であるとしても、さらに発展深化させた分析へと進む必要があろう。

１２）沖縄人としてのアイデンティティ

次の文は、いろいろな考えをふくらませ発展させる可能性をはらんでいる。

「沖縄移民のもつ「文化的異化」に基づく「沖縄人としてのアイデンティティ」は，その基層部分の重要性において,「沖縄系移民」として移民社会での新たなアイデンティティを生み出す可能性を示唆しているとも考えられるのである。しかしながら，戦前のフィリピン・ダバオ社会では，そうした可能性は「日本人意識」へと包摂され，潰されていったといえるのではないか。数的にはマジョリティであっても沖縄移民に対する承認を得ることはついにできなかったからである。（中略）

フィリピン・ダバオの沖縄移民は「２度の戦争」によって３度の非日常の体験を余儀なくされたといわれている。つまり，最初は戦争開始直後のフィリピン軍による強制収容，監禁であり，２度目は終戦末期の日本軍とともに行動した過酷な逃避行と捕虜になった収容所での生活，そして，３度目は本土に引き揚げてきてから，マラリア等の病気や食糧不足などの不安をかかえ,沖縄に戻るまでの慣れない土地での生活を強いられたことである。（中略）

山室信一は川村湊との対談のなかで，敗戦後多くの日本人が満洲から日本へ引き揚げてきた体験について次のように述べている。すなわち「敗戦とともにいっせいに引き揚げてしまった結果，日本人の植民者が過去にどのように世界を発見し参加していったかという自画像が描けなくなってしまった。敗戦で断絶してしまって，それまでの歴史は全部なくなり，戦前の話とまた違う戦後の新しい物語が始まる」。P314～5

考えをふくらませ発展させる可能性として、たとえば、以下のようなものがある。

（1）沖縄県外で、実際に「沖縄人社会」をつくったところがかなりある。そうしたところとそうでないところとを対照させての研究

（2）近年、そういう「沖縄人社会」の希薄化が進行しているといわれるところがある。そのことの分析研究を成立期と対比させての研究。

（3）「３度の非日常の体験」が、「日本人意識」と「沖縄人意識」の形成変容にもたらしたものの検討

（4）「敗戦で断絶」についての検討。

１３）沖縄移民と「他民族」とのかかわり

本書の中には、ダバオ近くのバゴボ族など「他民族」とのかかわりについての叙述があり、注目される。

「沖縄移民は,「他県民との接触交際自ら疎に却て外国人其他土人等との交際を喜ぶの状態なるを以て他県移民

に比し当国語を修得すること遥に速にして勢ひ凡ての日常生活上多大の便宜と利益とを得」るという面もみられた。ここからは，他府県人よりはるかに，異文化のなかに深く入っていけるという柔軟な適応力を沖縄移民が有していたことがわかる。」P86

「沖縄移民は奥地に入り，バゴボ族など現地人と接触する機会は多かった。そのため，他府県の日本人移民よりフィリピン人やその文化をもっと深く理解し，それを子どもにも伝えられる可能性があったといえる。しかし，軍政期に入り日本への「積極的同化」により，強い「日本人意識」をもつことによって，沖縄移民自身がもともともっていた異文化理解に対する可能性を自ら切り捨ててしまったともまたいえるのであった。」P299

それは、「他民族に対する指導者意識」に関わり、さらには、差別の被害者だけでなく加害者でもあったことについて、本書は次のような指摘を紹介している。

「天皇制イデオロギーを基底にすえた「大東亜共栄圏」構想では，他民族に対する指導者意識も強調されており，その意味でも，現地人と接触する沖縄移民には「立派な」日本語が使えることを要求したのではないかと考えられる。」P161

「冨山一郎は，南洋諸島における沖縄人の位置は，「一つは支配される「南洋人」としての「沖縄人であり，いま一つは支配する「日本人」としての「沖縄人」である」とし、沖縄人自身が植民地では他者を排除する面をもっていたことを指摘する。」P19

「又吉盛清は，「およそ沖縄人に対する差別や偏見に起因する様々な『沖縄人被害』は数限りないわけですが，やっぱりアジア民衆に向かう時は，加害者としての立場を明確にしなければいけないでしょうね」と，沖縄人のもつ加害的行為についての再認識を促す。」P３１５

このように他民族支配に連なった事の指摘は重要だし、今日なお、それをどう受け止めていくか、という課題が継続して存在しているというべきだろう。

１４）ダバオ育ちの二世の意識

本書では、ダバオで育った二世の生活・教育、意識にまで言及している。

「学校では，沖縄移民二世の子どもらは標準語を話し，とくに強く差別されることなく，他府県の子どもらとまったく同じ教育を受けていたといえよう。フィリピンでの沖縄移民二世の自己意識は，「沖縄人としてのアイデンティティ」を家庭や郷友会的社会の交わりのなかで，沖縄文化に自然となじむかたちで醸成され，また学校では臣民教育に基づいた「日本人意識」を，必要性というよりはむしろ，すんなりと受け入れそれに同化していったものと考えられる。」P288

こうした生活・教育のなかで、次のような発言が生まれる。

「あまり沖縄人という意識もないし，また，ウチナー二世ということで、嫌な思いをうけた覚えもありませんでした。」

「フィリピンでは差別はなかった。沖縄人という意識も強くなかった。沖縄人に対する差別を感じたのは，引き揚げのとき本土に帰ってからだ。」P289

本書は、こうした状況についての分析研究を紹介している。

「小島勝は，戦前の在外子弟教育を分析する際の視点の１つに，「『文化程度』の高低観」をあげている。戦前

期海外に移住する場合，その移住先の「文化の程度」によって，一般的に現地社会への同化の程度が違ってくると考えられていた。（中略）
住江金之がいうように「南方方面の如く，低級な民族の居る処に移民した日本人としては，その民族的プライドからしても，自分の子供が土着民族に同化して行くのを見るのは，耐へ難い苦痛である。それで，先方の政府の好むと好まざるとに拘らず，第二世は日本人として教育しなければならぬといふ事は，彼等居留民一移民－の論議を超越した確乎たる信念となって居る」ということである。（中略）
フィリピンは「文化程度の低い国」であるという認識が日本人小学校の教員にもあり，それは生徒へも伝えられ，「家庭に於ても比人は皆一様に土人といつてゐる。それで日本人の子供には一種の誇りがあり，良いことではないが，英語教員は『土人の先生』と呼ばれるのである」という状況があった。」P297~8
　こうした構図は、海外では今なお見られるようであり、今日なお重要な問題指摘であるように思われる。

１５）二重意識
　本書には、次のような叙述がある。
　「『島の教育』も「日本人として」の立場という枠組みは堅持されているが，そうしたなかでも沖縄人としての「長所」や進取性を盛り込み，それを「沖縄人としてのアイデンティティ」の基盤に据えようとする志向性が指摘できる。それはなぜかというと，やはり他府県移民にはない，沖縄移民に対する差別や非難が存在するからであり，それへの追従として「日本人」への同化を強制するいっぽう，その対抗として「沖縄人としてのアイデンティティ」をも表明するのである。つまり，沖縄の移民教育は二層の自己意識を常に志向し教育したともいえる。実際の教育現場では，日本（人）への同化の指導が優勢的に強かったであろうし，また，移民にとっても成功のための必要性として，そうした同化教育を受け入れざるを得ない面があった。しかし，渡航先各地の沖縄移民の生活をみれば，沖縄文化はさまざまなかたちで継承されており，「沖縄人としてのアイデンティティ」は消えることなく渡航先でも生きつづけていた。」P118
　私の近著で紹介した、屋嘉比収論　比屋根照夫論は、こうした「二重意識」についてかなりつっこんだ分析をしている。こうした論と本書との交流があるかどうかはわからないが、こうした議論のなかで、本書著者が、どういう発言をしていくか、興味がもたれる。とくに、島袋全発をどう評価するか、関心がもたれる。
　また、二重意識は、移民の場合、国内出稼ぎの場合、知識人の場合、教育者の場合、あるいは、その人の置かれた位置によっての差異があるだろう。さらにまた、その二重意識の構図を、どう把握し、さらにどう展開させていこうとするのか、それに関わる論議も興味深いことである。
　次の記述は、それを、葛藤・矛盾ではなく、並存と把握されている。
　「沖縄的な文化を郷友会的社会のなかで互いに確認し，継承しつつ，「日本人意識」もごく自然と保持していたものと解釈できる。したがって，「日記」のなかには「沖縄人としてのアイデンティティ」と「日本人意識」について，葛藤する場面や矛盾を感じたりする場面は出てこない。この時期のダバオの沖縄移民の意識としては，「沖縄人としてのアイデンティティ」と「日本人意識」は対立することなく，ごく調和的に並存していたものと考えられる。」P262
　「麻山で仕事をするとき沖縄人同士は方言で話していたが，周囲に日本人がいるときは家に入り「たいてい戸

を閉め切って部屋の中で話す」，というような行動がみられた。」P262

しかし、次のような記述も存在する。

「軍政期には「沖縄人としてのアイデンティティ」を形成する契機はもはやなくなったといえよう。そうしたなか有無をいわせぬ国家の強制力を前に，沖縄移民はその状況に適応するため，「日本人意識」をはっきりともち「立派な日本人移民」になるべく，自ら進んで戦争協力に邁進した。」P219

こうすっきりいいうるかどうか、微妙さが残ると私は思う。

長くなった本連載も、今回で終わる。著者が、この研究を契機にして、今後どんな展開をしていくのか、期待をもって見つめていきたい。

教育　台湾移民　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年2月１日）

戦前の台湾在住の知人があちこちにいる。戦後の人もいる。そうでありながら、台湾と沖縄とのかかわりについて、私は知らな過ぎ状態できたので、この章を読んで学べたことは多い。

「沖縄からの台湾視察や移住は、一八九五年（明治二八）五月の領有直後から早くも始まっていた。」P402 のだが、「沖縄人にとって日本の領土になる台湾の植民地支配は、新しい就職市場と出稼ぎ先が開拓されたことを意味した。また明治政府にとっては、台湾に隣接する沖縄と沖縄人を植民地支配の地均しと、その人的要員として動員し活用することであった。」P402　と指摘されている。

当時、沖縄から台湾に出かけた人々には、まずは巡査、そして「兵舎、道路、鉄道、港湾、病院、学校、官公庁、住宅等の建設に従事する土木人夫、工員、潜水夫など」、さらに「行商して物品を販売する「行商婦人」と呼ばれた女性と、日本軍と民間人などを相手に、「水商売」を始めたと思われる「琉球女」四、五人も渡台している。在台日本人の増加によって、台湾は沖縄商品の有力な移出市場となり、琉球漆器、反布、砂糖、鰹節、泡盛、松材、豚などを販売する女性が、渡台するようになった。」P403 とのことである。

さらに、「台湾総督府の官吏から会社員、専門的な分野の弁護士、医師や議会議員もいた。大学や師範学校、専門学校などに進学した学生、日本人官史や会社員の家庭で働く「家内使用人」（女中）も多かった。そして自由移住による漁民は、早くから東部台湾を中心に台湾全島に沖縄人集落を形成していた。」P404 と書かれるほどまでに至る。

こうした台湾移住・移民・植民・出稼ぎの背景には、窮乏などの経済的理由だけでなく、「厭世的な脱出志向の雰囲気が全島を覆い、活路を海外に求める動き」P404 もあったという。

そして、

「見逃す事が出来ない大きな要因として、日本政府の国策的ともいえる台湾重視と、沖縄軽視の位置付けがあった。日本国の台湾植民地支配は、これまで沖縄を「南門の防波堤」としてきた国防線が、沖縄から台湾に移ることであった。このことは、沖縄の地位と重要性が、台湾と比較して相対的に低下することを意味したのである。

日本政府は、沖縄の「振興策」に熱心ではなく、台湾の「振興策」を重視するようになる。こうして沖縄は道路、学校、社会施設、生活や産業基盤などのインフラの整備が遅れ、台湾との格差は広がる一方であった。この

ような日本政府の台湾重視の中で、レベルが高くなった台湾に、沖縄人も流れていったのである。」P405

という指摘も重要だろう。

そうした流れのなかで、次の事が紹介される。

「台湾に一八九九年（明治三二）初めて八重山高等小学校の二八人が修学旅行を敢行した。当時沖縄は飢僅などで疲弊しており台湾はいまだ抗日ゲリラが出没するなど治安は不安定であった。そのような状況下での修学旅行は、これからの沖縄と台湾の関わりを強化し、台湾進出と沖縄の「振興策」を計る狙いがあった。沖縄教育界は、その後、台湾との関連性を強調して、沖縄の「振興策」を計ることを、教育実践の一つにするようになる。その理由に、人口の多い沖縄と比べ、面積も広く人口も少なく、気候、風土もよく似ている台湾で産業を興して、莫大な利益をあげる、というものであった。」P405

「沖縄の「振興策」を計ることを、教育実践の一つにする」という指摘は重要だ。そうしたことは、渡台する沖縄人教員の増大につながっていく。

「漢民族系台湾人の「抗日ゲリラ」が一九〇二年（明治三五）頃に弱体化し、やがて治安も安定するようになると、今度は多くの沖縄人教員が渡台した。台湾植民地支配五十年を通して、沖縄人教員は、台湾人と原住民族の日本人化を進める同化と、皇民化教育に積極的な役割を果たすようになる。」P403

「明治政府は（中略）日本国家の体制下で、沖縄人教員をいち早く養成して、沖縄人教員による、沖縄人の日本人化を進める皇民化教育の実践が蓄積されていた。今度はこれらの沖縄人教員が、沖縄での日本人化教育のノウハウを台湾教育に実践したのである。」P403~4

私が知っている台湾在住経験者にも、親が教員だったので、台湾で育ったという方がおられる。30 年以上前にインタビューした屋良朝苗さんも、戦前台湾で教職に就いていたこと、その時の体験を基盤の一つにして、戦後沖縄の教育復興に取り組んだことを話されていた。

本書の以上の記述は、戦前の沖縄教育をどう総括評価するかにかかわって重大な問題提起を含んでいる。よく話題にされる「被害者性」「加害者性」の問題にもつながるからである。

職種と沖縄人集落　台湾移民　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年２月８日）

沖縄からの早期の移民の状況、職種について、次のように記述されている。

「一般の沖縄人が渡台に大きく動き出しだのは、前記のとおり明治三〇年代の飢饉時の経済的な疲弊からである。那覇港に出稼ぎ者が押しかけ、我先にと乗船していた。このような現象は、当時「台湾熱」と呼ばれた。今で言えば、一種の「台湾ブーム」が起こったのである。台北には、これらの出稼ぎ者や土木人夫、工員、行商人、失業者が集中して、沖縄人集落も形成された。」P406

「内台定期航路の就航によって、本格的な沖縄台湾間のルートが出来ると、沖縄は、台湾領有と台湾植民地支配の中継基地の役割も果たすようになる。その一つが今まで述べてきた「人的供給源」としての台湾植民（移住）である。」P408

「沖縄人の渡台者の職種である。失業者（無職者）が最も多く、次いで水産業、商業、公務員、自由業、その

他の有業者になっている。この時期、台湾への渡帰航者の二割から四割は、失業者が占めていたのである。

この失業者の群れに対して、沖縄人に対する偏見と差別が見られた。」P409

こうした「人的供給源」要求に対応して、「失業者（無職者）」を多分にふくんだ「台湾ブーム」的な移民のほかに、台湾総督府による官営移民があった。それにかかわって、次のような叙述がある。

「沖縄からの応募者が少なかったのは、その条件の厳しさにあった。模範農家で、しかも日本人の体面を保つものということになれば、沖縄人はまだ言語や生活習慣などに問題があるといわれたり、「日本の蕃人」と、軽蔑の目で見られたりしている時に、模範移民にすることは、問題が多過ぎたのである。

こうして東部台湾に入植した官営移民の出身地は、福岡、徳島、熊本、香川、山口、佐賀などが多かった。沖縄人は、ほとんどが漁民など私的な自由移住として、別の沖縄人集落を形成したのである。」P411

こうした移住した人々は、沖縄人集落を形成することが多かったが、その様子について、主として漁民について、次のように記述されている。

「そこに共通して見られたのは、相互扶助をモツトーとした沖縄人社会の再生であった。それは沖縄現地のある集落を、そっくりそのまま移植したかのような社会、文化の諸相と人々の暮らし向きである。

基隆の社寮島沖縄人集落は、基隆港口の東側に立地していた。沖縄人はここに“ミニ沖縄社会”を形成し、年始めの旧正月から、清明祭、ハーリー、村芝居などの年中行事を催し、集落の安泰を祈願した。」P411~2

次は、台北に形成された集落である。

「台北市の三つの沖縄人集落は、いずれも台湾人街に形成されていた。下奎府町の集落は、明治三〇年代になると、土木人夫、行商人、失業者が定着し始めた。沖縄人が、台北城内やその周辺の「日本人街」に集落を作らなかったのは、下層労働者と貧困層で占められていた沖縄人にとって、日本人官吏や会社員、商人などの住む「日本人街」より、台湾人街のほうがより身近に感じられていたからであろう。集落では、昼間から三線をかき鳴らし、琉球民謡が歌われた。台北には、人夫募集に応じて多くの沖縄人が集まった。中には仕事もなく街頭をさまよい歩くのもいて、社会問題になることもあった。集落は、これらの失業者をよく迎え入れた。ここには経済的弱者が、力を合わせて生きていく、沖縄人同志の相互扶助の姿が見られたのである。」P413

こうした集落形成は、ウチナーンチュ移民の一つの強みといえよう。その検討研究は重要な課題となろう。そのあたりの研究書に触れたいものだ。

満州移民　「沖縄県史近代」を読む

（２０１２年2月１１日）

沖縄からの満州移民については、初めて読むもので、私には驚きのことが多い。

本文のなかにある、「沖縄県は当初、多くの県民が南洋諸島に渡っていたことや、「南国育ちの沖縄県民は寒い満州には適さない」という理由から、満州への農業移民募集の対象からはずされていた。」ということに、多くの人が「そうだろうな」と思わずにはいられないだろう。

しかし、満州移民は、国策として展開され、県や市町村の行政自体が強く推進し、それに学校教員も深くかかわるという重大な性格を帯びたものだった。

一九三六年のことだ。

「同年五月、関東軍司令部が独自に「満州農業移民百万戸移住計画」を策定し、一九三七年（昭和十二）以降二〇年間に約百万戸、一戸平均五人家族五〇〇万人の入植を進めるという計画の原案を、満州国政府、日本政府に認めさせた。こうして、満州移民事業は第一次から第四次までの試験移民を経て、広田弘毅内閣により、本格的な国策としてスタートするのである。」P449~450

この国策を受けて、「一九三七年（昭和十二）の第一次近衛内閣で拓務省参与官に就任した沖縄県選出の衆議院議員・北谷村出身の伊禮肇の働きかけによって、沖縄県民の満州移民が実現することになる。拓務省は、満州開拓事業を管轄しており、伊禮は満州や南洋諸島の視察に出かけては帰県後新聞紙上で満州開拓、南方移住の必要性を精力的に訴えたのである。」P450

こうした動きを受けて、満州移住がすすめられる。展開の概要を追ってみよう。

まず一九三八年、

「同年八月、沖縄県は満州移住計画を立案し、経済更生事業で実績のあがった南風原、豊見城、兼城、羽地、恩納村に対して分村計画を立てさせることにした。農家から希望者を大量に送り出すことが目的だが、さらに農耕地の狭い他の市町村からも集団移民の募集を行うことを示唆した内容だった。」P453

「第一陣の出発からまもなく、沖縄県は「豊見城村、兼城村、小禄村、恩納村および他四ケ町村を指定して、二男、三男、および新分家者を選んで三万戸約十五万人を満洲へ移住させ沖縄分村を建設」するという、男性のみならず家族を含めた移民の具体的な構想を打ち出した。すでに前月から県内の村長や村会議員らによって満州視察が行われており、当時の新聞は「続けて一月間視察団を送って、帰県後は大々的な分村計画を実施するはずである」と報じている。」P454

この「分村」という形が注目される。

他地域への移民にもそうした性格を帯びるものがあったろうが、満州移民は、行政的にもシマ共同体的にも、まさに組織的な印象を受けるが、それをどう受け止めたらいいのだろうか。

「一九四〇年（昭和十五）五月、「分村計画による初の／満洲開拓農民先遣隊／働き盛りの青壮年六十八名」が十二日に渡満することが報じられている。南風原村十八人、恩納村二四人、今帰仁村二六人による、龍江省龍江県臥牛吐崗子屯への入植であった。この三村は、同一村民だけによるいわゆる「分村」だった。」P455

一九四三年

「同年十二月、県は「十ケ年五万戸の分村計画」を打ち出し、満州へ三万戸、工場方面への労務供出二万戸の送り出しを決定した。沖縄の「土地と人口の不調和による貧困さは戦争経済に貢献するところ少く、また県民は文化の低調さになれ明るい希望を欠いてゐる」として、「明るい希望と誇りを持たせ」「本県経済を根本的に建直す」という理由によるものだった。つまり、県民のためというより、日本の敗戦が立て込み泥沼化した情勢の下で、県民が貧困では戦時経済に悪影響を及ぼすため、貧困者の“棄民”と国策への貢献という「一石二鳥」をねらったものと考えられる。沖縄県は、初年度（昭和十九年）の八四〇戸を皮切りに、一九五三年（昭和二八）までに三万四八〇戸の送り出しを計画した。」P457

最後の引用の「県民のためというより、日本の敗戦が立て込み泥沼化した情勢の下で、県民が貧困では戦時経済に悪影響を及ぼすため、貧困者の“棄民”と国策への貢献という「一石二鳥」をねらったもの」という個所が

注目される。

これらの計画が推進される少し前に、「沖縄県振興計画」が出されるが、次のように、それも満州移民と関わらされている。

「「沖縄県振興計画」は、経済更生計画との抱き合わせで実施されることになり、一九三三年（昭和八）から一九四七年（昭和二二）までの十五年計画として七〇〇〇万円近い経費が承認された。そして後述するように、経済更生計画の一環として、沖縄では満州農業移民の計画が持ち上がるのである。しかしながら「沖縄県振興計画」は、「対中国侵略の路線に沿って立案された」もので、「『ソテツ地獄』にあえぐ勤労大衆の生活向上の問題は、けっしてかえりみられることがな」く、実施率も二〇パーセントだったといわれている。」P448

戦後の沖縄振興開発計画が基地と深くかかわっていることと類似していると思わざるを得ない。

満州移民　教育界・教育の関与　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年2月１４日）

満州移民促進には、教育界・教員の積極的関与があったことが注目される。

「県民への満州移民の啓発活動を積極的に行ったのは、学校教員や沖縄県庁の関係課職員、町村職員、それに「大陸の花嫁」養成を目的とした女教員等であった。」P450

「送り出しに最も尽力したのが、学校教師だった。当時の新聞には、「先生に鼓舞されて／敢然大陸へ！義勇軍志願の動機」とあり、教育者の熱意が児童に及ぼす影響は大きいとして、義勇軍への志願者を増やすためにも「教師の理解と熱意を昂めることが緊要」と強い論調で述べられている。そして小学校・青年学校の教師が内原訓練所や満州に派遣され、帰県後は青少年への義勇軍応募を積極的に勧める役割を担った。」P459

通常なら行政職員が中心だろうが、このように教育界・教員のかかわりの大きさをどう評価するか。それは教員の個人的なものというより、教育界全体として展開したようだが、その教育界内部ではどんな展開・議論があったのだろうか。上司からの指示命令が大きいと思われるが、それだけにとどまらないものがあったろう。

こうしたことを、戦後においてどう総括していったのだろうか。行政機関・教員組織などの教育界レベルで、あるいは個人のレベルで。

戦後の構造的変化のなかで、教育界としての総括を行える態勢を作りにくかったのだろうが、いずれは行わなくてなくてはならないことだ。調べて欲しいことだ。

なお、この満州移民については、「沖縄女性史を考える会」の近年の追究によって解明されているようだ。このことの意義と意味も考えたいことだ。

３８．軍事・戦争

徴兵忌避と沖縄戦以外は、軍事記述が少ない　「沖縄県史近代」を読む

（２０１１年１１月２４日）

沖縄史関連書を読んでいて、軍事に関わる話に出会うことは少ない。戦争・基地で甚大な受難だったことと対照的ですらある。

政治的上層部にいるごく限られた人々以外は、軍事上どういう状況にあるかについて、まったく無知というよりは、事実と相反する認識を植え付けられていた。

少なくとも薩摩の琉球侵略以降、沖縄の人々は、軍事的には受動的立場に置かれてきた。そして、軍事的無知・誤認識の中に置かれる一方で、「上」からの指示命令に従う「思想」形成は、強力に行われてきた。そうしたことが、１９４５年の命に関わる事態において、悲劇を大量に出現させた。

ここで重要なことは、軍国主義は、軍事的無知を伴うということである。竹槍訓練がその象徴だ。この指摘に私が初めて出会ったのは１９７０年代であり、城丸章夫さんの指摘が最初だった。本県史も、例外ではない。徴兵忌避と沖縄戦を除くと、軍事関係叙述が登場することは稀である。皇民化教育や戦争動員を含め、命令に従順になることや戦争推進思想をもつことにかかわる叙述が多いのと対照的ですらある。

この無知・誤認識の問題だけでなく、軍事そのものについて、沖縄をめぐってどう展開していたのか、ということの研究は、歴史研究として不可欠である。戦後、この問題について少しずつ取り組まれ、戦前ほどの「無知・誤認識」でないかもしれないが、まだこころもとない。むしろ、軍事について多少の知識があると、「好戦的」でないかと思われはしないか、と心配されるほどだ。

発見される不発弾は、どんなものか。身近にある基地がどんな装備をもっていて、どんな機能を果たしているのか。海兵隊はどんなことをする軍隊なのか。飛んでいる飛行機は、軍事的にどんな機能を果たしているのか。戦争下における人権にかかわる国際的取り決めはどうなっているのか、対戦国・「仮想敵国」とされる国の人々はどうしているのか。・・・などについての知識をどれほどの人が持っているのだろうか。最近のことでいうと、「サイバー攻撃」と言うものが、軍事的にどんな役割を果たしているのか、といったことの初歩的な知識ぐらいは持つ必要があろう。そうした知識が欠落しているところに戦争をあおる思想、戦争を受け入れる思想が入り込みやすい。

こうした視点からの沖縄史研究の展開は不可欠だろう。

※　実は、以上の記述は、本書の前半を読了したところでのものだ。本書の「第７部国家総動員体制の確立」には、軍事にかかわる記述が多そうだが、これから目を通すところだ。従って、今回の記述にかかわることが、その第７部でどう書かれているのか、を楽しみにしている。それを読んだ後で、今回の議論を再論することになるかもしれない

「近代沖縄の軍備―軍事施設を中心に」　「沖縄県史近代」を読む

（２０１２年2月２８日）

沖縄でのこの分野の研究論考は私には初見である。本文でも「先行研究もほとんどない状況である」と書かれており、本章がおそらく開拓的研究であり、今後のさらなる発展が期待される。

本章では、明治期から昭和戦前期に沖縄に存在した軍事施設のいくつかの概要が記述されている。その一つは、安里村の射的場である。

「一八九五年（明治二八）には、一八九六年度（明治二九）用射撃演習用の弾薬、村田歩兵銃の実包一万二六九二〇発・空包六八〇〇発・狭窄射撃実包七二〇〇発が支給されている。このことでも分かるように、射的場では毎年のように実弾を使っての射撃演習が行われていた。一九二八年（昭和三年）九月十日付『沖縄昭和新聞』に「賑つた射的大会」の記事がある。記事には安里射的場で演習部隊主催の射的大会が行われ、県知事列席の下、現役軍人、在郷軍人、男子中学生、女子師範学校生徒が参加したことが記されている。」P576

軍事施設を使った、このような宣伝例は、次の事例にも見られる。

「一九一〇年（明治四三）二月三日に寄港した第一艦隊の寄港・上陸行軍、そして官民あげての歓迎行事（中略）

このような行軍を小学校は遠足を計画し見学。一例を紹介すると、「中頭郡中城村喜舎場校にては第一艦隊寄港し陸戦隊上陸の際其の行軍の壮観を見んとて尋常科第四学年以上の男児総員百二十五名及び教員三名は首里那覇方面に旅行を」行った。また、帝国海軍の威光を見せるため、艦隊が寄港するたびに県や団体の幹部、新聞記者、それに小学生を含む一般県民の乗船見学も積極的に実施していた。こうして県民は、威風堂々たる帝国海軍艦船の雄姿、さらに行軍する帝国海軍兵を目前にしたのだ。」P578

以上の他に軍事施設として、「海軍は一八九六年（明治二九）、佐敷間切津波古・新里の民有地を海軍用地として取得し中城湾需品支庫を建設した」P578~9 ことが紹介されている。

さらに軍事施設設置にかかわって、「一九三一年（昭和六）、沖縄県議会議員二一名の連署による意見書が県議会に提出された。意見書には、「我カ沖縄県に限り連隊区アリテ何等部隊ヲ有セス」とし、「常備部隊」の設置を要請している。」ことが紹介されている。P583

また、「一九三四年（昭和九）には、在郷軍人会県支部総会で「沖縄県は太平洋と南支那海の間に障壁をなす重要地点にありながら全く無防備であるので、県民自力による防備が必要」と述べ、そのためには「義勇隊設置が必要である」と決議された。」こと、「義勇隊の組織化と実践は間を置かずに実施された」ことが記述されている。P585

以上のことの踏み込んだ分析評価は、今後の課題となろう。さらに戦前におけるこうしたことと、戦後の米軍・自衛隊の配備との関わりの研究も求められよう。現在の私には、それ以上にコメントするものをもっていないのが率直なところだ。

中城湾臨時要塞・船浮臨時要塞　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年2月２８日）

前回も紹介した「近代沖縄の軍備―軍事施設を中心に―」の章の最後に、二つの臨時要塞建設が書かれている。1941 年に建設が発令された二つの要塞は、司令部・重砲連隊・陸軍病院からなるものだ。

与那原に建設された中城湾臨時要塞については、次のように記述されている。

「連隊本部の建物を囲むように営庭があり、整列・行進・駆け足・体操などの訓練や軍隊教育が行われていた。与那原の町に突然、大規模な軍事施設である兵営が建設され、およそ五〇〇～六〇〇人の兵隊が常駐した。沖縄近代史上初めて外敵防衛の常備車が駐屯したのだ。憲兵隊も与那原に派遣され、憲兵隊詰所が設けられた。与那原は「軍都」化したのである。」P589

与那原は南城市の隣町であり、この施設は、今の小学校があるあたりだ。

本章の「おわりに」では、こう記されている。

「「軍馬一頭」と揶揄された割には多くの軍事基地があったことも確認できた。軍事基地建設にあたっては住民生活と意識に　著しい影響を与えた。これらの影響については充分な研究成果が少なく、今後の課題である。

軍事基地は戦時を予想して建設される。平時における軍備は戦時に繋がるということである。と言うことは近代沖縄の軍備は沖縄戦に繋がったことになるである。軍備は連続性があることを強調しておきたい。」P591

指摘の通りだろう。この指摘は、現在の沖縄の米軍や自衛隊についても言えるだろう。基地の「抑止力」がいわれるが、逆に「攻撃をよびこむ」こともあるのだ。最近のニュースで、中国ミサイルの射程距離内の沖縄から、距離外へと米軍の一部を移す検討をする米軍のことが報道されていた。

そうした基地や軍事についてのリアルな認識が、軍隊関係者以外も一定程度持つ必要があろう。

「惨劇」を準備した日本軍作戦　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年2月２８日）

本書の最終部分は、沖縄戦にかかわる叙述だ。沖縄戦にむけての日本軍の作戦展開について詳しく述べているが、いくつかの個所を紹介しよう。

「米軍の潜水艦攻撃に為す術もなかった日本は、一九四三年（昭和十八）九月十五日に大本営が「絶対国防圏」を策定し、同月三〇日の「今後採ルヘキ戦争指導ノ大綱」の決定とともに発動、それまで日本軍の強固な軍事基地が建設されていなかった南西諸島地域に、陸海航空基地を建設することを決定した。」P616

「日本軍は沖縄戦前夜まで、「不沈空母」という役割を担った航空基地建設のため、兵士はもとより住民をも強制徴用し、荷馬車も最大動員し、全力を傾倒していった。」P617

「当初の第三二軍の編成は（中略）、元々南西諸島に配備されていたわずかな人数の要塞部隊に新たに配置された飛行場大隊で航空基地を建設することが主要任務だった。したがって地上兵力で南西諸島を本格的に防御する

目的ではなかったので、兵力をほとんど保有していなかった。」P619

「沖縄の日本軍は沖縄の地形を利用して縦深陣地、複廓陣地を張りめぐらせていった。戦力としては圧倒的に優勢な米軍を相手に戦闘するにあたって、いわば、日本車はゲリラ戦を混じえた陣地戦を展開することにしたのである。事実、日本軍のその戦法は、米軍の延べ五四万八〇〇〇余の兵員と一四〇〇隻以上の艦船を三カ月余も沖縄に釘付けにするという成果を生むことになった。」P621

こうした日本軍は、沖縄住民との直接的関わりでは、次のような方針をもっていた。

「師団長が牛島軍司令官の訓示として将兵に伝達する際の講話に、「捕虜トナリタル場合ハ必ズ死ヌコト」という項目もある。

この牛島軍司令官の訓示は、日米最後の地上戦闘となった沖縄戦における兵士の戦闘指針・心得を示すとともに、官吏と住民をも根こそぎ動員すべきことを明示している。と同時に、住民の家屋敷の使用はもとより食糧供出や徴用、徴発などが極限的に実行されていったのは、この訓示における「一本一草ト雖モ之ヲ戦力化」「現地自活ニ徴スヘシ」という訓示が、忠実に実行されていったからに他ならない。」P623

「住民を巻き込んだ地上戦闘を展開するにあたって「軍官民共生共死の一体化」こそが、軍にとっても最も優先すべき県民指導方針となった。その第三二軍の方針によって、沖縄住民は兵士同様に敵への投降が絶対に許されず、県民はスパイ視され、日本軍の指導・誘導・説得・強制・命令などによって住民同士での殺し合いの形となった「集団死」につながる、沖縄戦最大の悲劇をもたらすことになった。

日本軍の編成・動向や陣地構築は、軍隊にとって極秘の軍事機密である。にもかかわらず、信用できない一般住民に知られざるを得なかった。つまり第三二軍としては、極秘の軍事機密を知られてしまった住民と地上戦闘を展開せざるを得なくなったということを前提にして「県民指導」の方針を打ち出すことになったのである。

かくて沖縄戦前夜に、沖縄の歴史上未曾有の惨劇がすでに準備されていた。」P633

紹介の最後の行が示す「惨劇」は「準備」されたものだという指摘は重大だ。それは「本土防衛」の「捨石」・利用物としての沖縄という発想が引き起こしたものでもある。沖縄をそのようなものとしてみる発想は、いまなお存在しているといえるかもしれない。

以上のような事実を広めるのか隠し抑え込むのかは今なおせめぎ合い状況にある。また、これらの事実から何を学びどういう行動をとるのかをめぐってもせめぎ合い状況がある。

「沖縄住民不信の日本軍部」　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年2月２８日）

タイトルと同名の節で、次のような事例が示されている。まず、１９１０年度の「沖縄警備隊区徴募概況」について。

「沖縄では、日本語（普通語）が通じないので、検査官には通訳をつける必要があり、徴兵忌避観念が強い地域では、普通語を知らないふりをして徴兵逃れをしようとするものが多いことをまず報告している。「軍事思想」については、沖縄県人は全般的に軍事思想が不充分である。（中略）軍事思想や国家意識が不充分で徴兵忌避をするというのは、沖縄県人は歴史的に勇気が欠如しているからである、と分析している。」P625

また、１９３４年の沖縄連隊区司令官による文書についてである。

「この沖縄連隊区司令官にとって、沖縄県人は「満州事変」から三年も経過して緊迫した情勢であるにもかかわらず、「帝国日本国家」の運命はまったく眼中にないということは疑わざるを得ないということである。したがって、日本が不利な状況になって、一時的にでも沖縄が日本の統治から離れたらどういう事態になるか、おおよその見当がつくとしている。つまり、沖縄戦で米軍が沖縄を占領するや何の抵抗もなくごく自然に米軍の軍政下におかれた状況の予測を的中させている。」P626~7

これらは、いずれも日本軍側からの視点であり、沖縄側、住民側からの視点とは逆で、沖縄、住民を守るのではなく、沖縄、住民をいかに自らに従わせるか、というものなのだ。天皇の軍隊だから当然のことだが。

それは、日本軍のなかに一貫する視点なのだが、今日なお、そうしたものが、いろいろな場で再登場していることに注意を払う必要があろう。

そうした視点は、沖縄内部で、軍の視点に添うものを評価賛美するものでもある。たとえば、次の事例が紹介されている。

「こうした流れの中で、「沖縄独自」のものとアピールされた日の丸共同作業。冒頭の記事によると、県下で日の丸共同作業が組織的に行われている模範部落は島尻郡玉城村の當山部落（現在の南城市玉城字當山）で、一九三七年に出征軍人を送り出し農村の労力が減ったため、婦人たちが共同作業を始めたのが起源だという。県当局は、當山部落の“軍国妻女部隊”が沖縄の日の丸共同作業の生みの親であり、これこそ第一線の将兵に知らせたい銃後女性の手本であるとして、紙芝居の作成を計画している」P635

當山は、私が住む玉城字中山の隣の字である。

本県史は、歴史研究として本格的で高度な水準を持ちつつ、人々の暮らしのレベルに密着した記述も多く、研究者や専門家だけでなく、一般県民にとっても親しみやすいものとなっている。多くの方が読まれるよう、お薦めしたい。

軍と沖縄県民　西原町史

（２０１１年１２月１６日）

「第二章　西原の歴史　第四節　沖縄戦」（大城将保執筆）のなかに、西原に限定したものではなく、沖縄全体にかかわってのものであるが、次のような叙述がある。

「軍関係の機関として徴兵事務を取り扱う沖縄警備隊（のち沖縄連隊区司令部）という役所が置かれていた。同警備隊の報告によると、徴兵忌避の風潮が強いのは県民の民度が低く、「軍事思想及び国家思想の薄弱」に最大の原因があると分析している。

沖縄県民の伝統的な軍隊嫌い、戦争嫌いは日中戦争さなかの戦時期に至るも払拭されず、海外移民の激増という現象にも反映していた。」Ｐ３３２

「県民意識を劣等視する軍部の沖縄観は、近代を通じて一貫していた。たとえば、「皇室国体に関する観念徹底しあらず」（「大正十二年度沖縄連隊区司令部報告書」）、「国家の興敗全く眼中になし」（「沖縄防備対策」昭和元年）といった県民像ができあがり、沖縄県に地元出身兵で編成される郷土部隊が設置されない理由の一つになってい

た。県出身の現役兵は、遠く第六師団管轄の鹿児島、長崎、熊本などの連隊に入営しなければならなかった。」Ｐ３３３

「一九四四年（昭和十九）春に沖縄守備軍（第三二軍）が配備されるまで「沖縄県の戦備は軍馬一頭」と揶揄されるほど軍事の空白地帯でありつづけた。ただし、徴兵事務や在郷軍人の定期訓練などの事務を管掌する沖縄連隊区司令部は那覇市内におかれていたので、「軍馬一頭」とは沖縄連隊区司令部の司令官の乗馬のことである。」Ｐ３３３

これらの叙述は、日本軍の側からの沖縄県民認識を反映している。と同時に、沖縄県民の側からの日本軍像を反映している。「軍部(日本軍)―沖縄県民」という構図になっているのだ。他府県においては、「軍部―国民」というものになるなかで、こうした構図は特徴的である。この構図では、「軍部」を「国家」とか「政府」に置き換えることもできよう。「日本国家（政府）―沖縄県民」といった構図である。

これは、「軍部(日本軍)」、「沖縄県民」各々が、タテマエは別にして、実質的には相互を外在的なものとして認識する傾向を持っていたことを反映している。

この問題は、米軍との関係もからみつつ、戦後にもつながっていく。その点とかかわって、「沖縄県民の伝統的な軍隊嫌い、戦争嫌い」という表現は、「軍隊」「戦争」というものに、どの程度一般化できるのかできないのか、という問題の検討ともつながっていくだろう。「日本」「アメリカ」「琉球王国」のなかのいずれか、という特定の軍についていえるのか、それとも「軍隊」「戦争」一般についていえるのか、という問題である。考えるべき問題が含まれている。

沖縄・沖縄県民を道具化する日本軍と米軍　西原町史　（２０１１年１２月２０日）

戦時もさらに戦後も、日本軍にしても米軍にしても、沖縄・沖縄住民を尊厳溢れる価値あるものとして守るという姿勢は薄弱で、軍の目的のために使用する「道具」として扱っていたことが、以下の叙述で明らかになる。しかも、それには軍事作戦の変化の中で、揺れるものであり、揺れの問題性は沖縄・沖縄住民に押し付けられる。

まず、疎開から見ていこう。

「政府はサイパン陥落が確実となった一九四四年（昭和十九）七月七日、緊急に閣議をひらいて南西諸島からの老幼婦女子の引揚げ計画を決定し、ただちに沖縄県知事と鹿児島県知事に命令電報を打った。内容は、沖縄県から本土（九州）へ八万人、台湾へ二万人、合計十万人を七月中に引き揚げさせよ、というものだった。（中略）突然の疎開命令に県民は動揺した。海上の不安がまず先に立った。県民になじみのあった湖南丸、嘉義丸、富山丸などが沖縄近海に出没する敵潜水艦の魚雷攻撃をうけて撃沈されていたからである。情報はきびしい報道管制にもかかわらず、巷で公然の秘密になっていた。さらに追い打ちをかけるように、今回の疎開計画によって送り出された学童疎開団をのせた対馬丸が八月二十二日の夜、トカラ列島沖で撃沈されて七五八人の学童の命が失われた事件は県民心理に水をさすことになった。

県外疎開を阻害したもう一つの要因は、駐屯部隊による有形無形の圧力だった。七月以降、実戦部隊の配備によって地上戦闘にそなえた陣地構築が急がれ、足腰の立つ者はことごとく労務動員された。食料（主にイモや野

菜）や建築資材の供出もひっきりなしに割りあてられてきた。だから現地部隊としては婦女子といえども協力できるものは県外へ流出させたくなかった。」Ｐ３４６～７

「戦場化が必至といわれる孤島から児童生徒を安全地帯に疎開させることは、一族の血統を絶やさないためにも必要なことだと認識されていた。また、学校としても「聖戦遂行」のために足手まといになる学童を疎開させる政府や県当局の方針を尊重しないわけにはいかなかった。西原国民学校の教職員も役場職員と連携して学童疎開の勧誘に家庭訪問をおこない、ようやく一定数の希望者を集めることができた。」Ｐ３４８

次に軍事作戦についての叙述をみてみよう。

「米軍は、日本本土に上陸・占領しなければ日本は降伏しないと判断していた。その第一着手として、アイスバーグ作戦（沖縄攻略・一九四五年四月～十月）を策定し、第二段階としてオリンピック作戦（南九州上陸・一九四五年十一月～一九四六年二月）、最後にコロネット作戦（関東平野上陸・一九四六年三月）を想定していた。米軍にとって、沖縄を占領する意義は絶大であった。

タイムズは次のように報道している。

「沖縄を占領すれば、台湾、中国沿岸、日本本土のすべてが、B29 爆撃機はもちろんのこと、中距離及び重爆撃機の攻撃範囲に入り、日本占領に王手がかかることになる。琉球は日本にとって海に浮かぶ最後の砦なのだ。」

つまり、米軍は台湾、中国沿岸、日本などを視野に、本土攻撃に向け沖縄本島中南部を飛行場として整備するため、一見、計画性のないかのようにみえる大がかりな住民移動をさせていたのである。」Ｐ３７８

「一九四五年（昭和二十）三月二十三日、アイスバーグ作戦が発動された。同日、米機動部隊による沖縄全域への空襲をもって戦端は切られ、翌二十四目から沖縄本島南部方面への艦砲射撃が加えられた。

一方、沖縄守備軍（第三二軍）の作戦方針はいくたびか変更された。当初は、サイパンなどの絶対国防圏を後方から支援する航空作戦基地として南西諸島全域を「不沈空母」化する計画であったが、軍民一体の突貫作業で建設した各地の飛行場は特攻機の不足のために無用の長物と化し、米軍来襲の直前に自らの手で破壊した。」Ｐ３５５

「沖縄攻略作戦（アイスバーグ作戦）は、太平洋方面司令官のニミッツ提督を総司令官とする陸・海軍の混成部隊によっておこなわれた。当時の沖縄の軍政は、軍政府長官が上陸後わずか半年の開に陸軍→海軍→陸軍→海軍とめまぐるしく変わって、その責任の所在が著しく混乱し、とくに、いわゆる海軍軍政府時代（一九四五年九月二十一目～一九四六年六月三十一日）にピークを迎えたという。この軍政府の混乱が先にみた米兵やフィリピン兵の風紀の乱れの要因の一部になっていると思われる。それ以上に沖縄占領後、日本本土進攻のための部隊および物資が沖縄に集結されていたため、その戦後処理が当時の米軍にとっては緊急課題であったようだ。これが戦後の急速な動員解除にともなう米軍再編となって表れ、終戦直後、沖縄に駐屯していた将校の五〇％が本土に転属させられたという。

一九四六年（昭和二十一）七月一日以後、琉球は日本の一種の「シベリア前哨基地」とみなされた。その結果、一般に能力のない者が沖縄に派遣され、日本占領を特徴づけた厳格な規律が沖縄にはみられず、沖縄の統治は恣意的となり、一九四八年（昭和二十三）にアメリカの政策が（沖縄重視へと）転換するまで沖縄は「忘れられた島」となったと、宮里は述べている。ＪＰ３８７

これらのことは、当時、沖縄住民には、何も知らされないままだった。というよりも、虚偽を教えることによ

って、軍に忠実に働くことが求められたのだ。そして、戦後数十年たっても、人々の多くは、こうした事実を知らないままに過ぎてきた。その意味では、こうした事実を歴史として書き、人々の目に触れるようにする営みは重要なことだといえよう。

石原昌家「沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕」集英社２０００年を読む

（２００７年2月３日）

この十数年間、いろいろな分野で沖縄研究は進んでいる。その一つは沖縄戦、平和教育にかかわることであろう。１９８０年代までもかなり鋭い問題提起や実証的研究が展開されていたが、それが広汎な人々の参加によりさらに深く広く展開されてきたようだ。たとえば、タイトルの本は、石原さんのゼミの学生たちの２０年を越える活動の成果が反映している。また、当事者の証言も、人間存在を賭けてのものという印象を受ける。

アブチラガマは、我が家から車で５～６分ほどのところにあり、玉城に移住する直前に、一人で入ったことがある。案内所では、安全のため、２本の懐中電灯を貸してくれた。他には数名の１グループがいただけだった。気が小さい私は、こうしたことはこわくてなかなかできないのだが、意を決して入った。しかし、予備知識はほとんどないために、まずはガマの雰囲気を感じとるだけで精一杯であった。

２回目は去る１１月知人の訪沖の際、案内したときだった。私は案内するほどのことはできず、訪問者のそばについていっただけであった。訪問者は「恐怖」を感じて早足になっておられた。

知識が低レベルのままではまずいので、学びたいと思っていたときに、この本にであったのである。ガマをめぐる当時の様相についてきわめてリアリティに満ちた内容を、当事者の証言を綴りあわせる形で書かれている。さらに、ガマの外、つまりは、このあたりの戦争時の状況にも触れている。我が家のすぐ近くに特攻艇基地があっことも知った。

私の沖縄戦学習にとても有意義な本であった。これからも、この近辺の戦時の様子を示すものについて学んでいこうと思う。

３９．戦後

石川での戦争直後の学校つくり　石川市史を読む　（２０１１年１１月１１日）

旧美里村のなかの北部地域であるこの石川地域が、戦争の結果、激動に叩き込まれ、それへの対応という事態と、その後の人口減に象徴される展開という、歴史には興味あることが多い。

今回は、戦争直後の学校づくりの動向について、この石川市史が描いているところをいくらか紹介しておきたい。山内繁茂たちの石川学園をめぐっての活動である。（本文のままである）

「自分たちの子供は自分たちで守る外はないではないか。」こう言って彼は、ますます非行集団化し、しかも日一日その数を増していく石川難民収容所の子供たちのことに手をつけた。

これが石川学園の第一歩であった。（中略）空襲による焼跡を利用した。山内氏はカンパン（捕虜収容所）から、毎日二、三〇名の労働者を借り出して、焼跡の片付け、整地をした。その時の男性唯一の帽子であった手製の戦闘帽をかぶり、一人でも逃亡されてはかなわぬので、整列、人員点呼を号令をかけてやっていた。その指揮ぶりに米軍ＭＰが目をつけたらしくしつこく山内氏の身元を洗い出した。案じたアーレン大尉は「それでは危険だ、これをかぶれ」と、後々まで山内氏が愛用したヘルメットを贈った。

当時島人がかぶるとしては目立ったヘルメット、山内氏を守り、ひいては沖縄教育の再建を守ってくれたこのヘルメットが、一方では「あれはアメリカ側だ」といわれるつまらない原因になったのかも知れない。その頃はとかく何かとむつかしい時代であった。

ついこの間まで、軍国の国策に沿って、鬼畜米兵と子供たちに教えてきた素朴な教師たちは、ＭＰが彼らを探索しているという噂に恐怖して、必至になって前歴をかくし、時には焼残った民家の天井裏に身をひそめるものもいた。或は「生きて虜囚の辱しめを受けるな」と事ある毎にといた某校長は、住民の目をおそれて、難民小屋の片隅に息を殺していた。又何か工合の悪いことがあれば、住民をスパイ扱いにして斬殺したりなどしていた日本兵の報復を恐れて、このいわゆるアメリカ学校に手を借す教師などは出てこなかった。結局山内氏は一人で、いや、同じく教師であった春夫人と、中学生で甥の津波古宏君だけを手助けにして、やり出さなければならなかった。

「子供たちを事故から守ろう」「子供たちの不良化を防ごう」という開園の趣旨が、各班長を通じて難民の家族に伝えられた。皇軍が奮戦している時、敵の学校などに子供をやれるかと、律義な国民もいた。しかしアメリカ軍の命令だからではない。たとえどんな状況の中でも、自分たちの子供を守るのが私たちの義務ではないか。それよりも第一、子供達が喜んだ。」P333~4

「米軍を恐れてかくれていた女教師には、二世軍人をつれていって、彼の口から「あなたの生命は絶対保障する」と言って説いて、やっと天井裏からつれ出した。日本軍の報復を恐れていた男教師には、「アメリカの子供を教育しようというのではない。自分たち沖縄の子供を守ろうというのだ。もし私たちのやることがアメリカの利益になるということなら、その責任は私たち家族―この前後からは山内氏夫妻、甥の外にも教師であった長女の

姉さんが加わっていた―が取ろう。あなたはただ私に頼まれたと言えばいいではないか」と言った。当時身内の者が日本兵に斬殺されて、脅えきっていたその人は「あの時の、家族ぐるみの命をかけた山内校長の言葉には、私はもはや固辞できなかった」と述懐した。」P335

「山内氏が半分自発的な形でやめたことが二つある。一つは御製の朗誦をやめたこと。その頃は日本の敗戦はもちろん天皇制の廃止論など考えることもできなかったし、またその歌の意味が、えてして暗くなりがちな人間を救うのにむいていると考えて、山内氏は毎朝子供たちに、明治天皇の御製「浅みどり澄み渡りたる大空の広きを己が心ともがな」を朗誦させていた。始めは祈りの文句位にでも考えていたのだろうが、だんだんおかしいと思ったらしく、二世がいろいろきく。結局「御製とは何だ」というのをその時は口をにごしてしまったが、どこかで調べてきて「あれは困る」といったので「それではやめよう」といって御製の朗誦はやめた。それでも１ケ月位は続いた。

もう一つは団体訓練のとりやめである。新敷地に移って職員の陣容も揃ってくると、体育主任格の教師も出て、全校の集合、解散などにも大きな号令をかけて子供をしつけた。例の通訳兼務の二世が「まずいなまずいな」というのを、茶飲み話でも聞いているような態度で聞き流していた。それでもその号令教師はいや気がさして他の作業場に行ってしまった。やがて伊波城址の附近にあるＭＰキャンプからやって来て、「団体訓練は困る。何も一々号令なんぞかけずとも各自で自為で集まったり、解散したりすればよかろう」といったので止めた。これは一ケ月以上続いたが、その間ＭＰは双眼鏡で山の上から見張っていたのだろうという。」P339

また、城前と宮森の２つの小学校の校名について、山内繁茂自身が、こう書いている。

「学校の名称については、私の進言が採用されましたが、実を言うと皇居の宮城の頭文字を取り入れたもので、皇国民を教育するという忠誠がその下心でした。」P393

これらは、戦争下の教育体制、日本軍、米軍のはざまのなかでの動きであるが、注目・検討したいことも多いが、ここでは紹介だけにとどめておこう。

戦後沖縄教育の歩みと「伊波常雄教育資料」展

（２０１１年８月２３日、２７日）

２０１１年８月２３日から９月２５日まで、石川歴史民俗資料館にて開催された。戦後の教育の具体的な様子を示す貴重な資料を展示。旧具志川市出身の研究者齋木喜美子さんが代表を務める科学研究費のグループが主催。

９月３日１時からは、シンポジウム『戦後沖縄の教育の歩み～石川の記憶を語る~』が開かれ、戦争直後、教師を務めた方々による語りが聞ける。

私は、２６日に訪問。

この資料館は、デザイン性があり、なかなか立派な建物だ。１９９２年建築。下の写真は、アプローチ付近。

常設展示は、戦後住民収容所や政府機関などが置かれただけあって、戦後資料が立派だ。「伊波常雄教育資料」も、戦後間もない時期の貴重な資料が、生で保管されている。今後、じっくり検討させていただきたい。

戦後資料は、ほとんどが残っていない戦前資料と比べれば、大量に残っている。しかし、その意味・価値などがはっきりしないまま、当事者が減少していく中で、資料も急減の憂き目にあっているようだ。また、近年の自治体などの財政難のため、そうした資料を管理保存活用する体制が未熟なままで、推移している。

重要なのは、人々の生活や教育の具体的な営みに即した戦後史研究が未熟であるために、史料資料保存の基準が明確にされていないことである。大量に存在している資料をすべて残すわけにはいかないだろう。それだけに、そうした基準設定が追求されなくてはならないだろう。

戦後移民　沖縄おこし　西原町史

（２０１１年１２月２７日）

１９４８年の沖縄人口５５５，６２３人のうち１７６，０００人が引揚者だと書かれている。ＩのＰ３９３

そして、そのことが、次の事態を引き起こしたとも書かれる。

「「四〇数年間に亘って築きあげられた膨大な数の移民者たちを一挙に沖縄に強制送還させたこと、戦中・戦後にまたがり基地建設に伴う際の軍用地接収に代表される米軍の沖縄統治、ここに沖縄の戦後移民と八重山移住が創出される」（中略）、言葉を変えれば戦後の民族移動がおこなわれる背景があった。」ＩのＰ３９４

「明治後半から昭和戦前期まで、四十数年間にわたって形成されてきた膨大な数の移民者たちが、敗戦を機に、一斉に沖縄へ強制送還されたこと、米軍が戦中・戦後を通し、その戦略の遂行上、県民の家屋を焼失し、唯一の生産手段ともいえる、部落をも含む貴重な土地を滑走路や弾薬庫、住宅などの基地やその関連施設として収用したこと、ここに沖縄県民が戦後、①海外移民、②八重山への県内移住、そして③都市部やコザ市に代表される基地のまちへの移動、つまり戦後沖縄の民族移動三態の大きな要因があった。そして、わが西原村民もその例外ではなかったのである。」ＩのＰ３９８

他府県における「帰還者」数とは比べ物にならない。比べられるとすれば、1950 年代末から 1960 年代にかけての産業構造変化に伴う国内移動であろう。だが、沖縄における『民族移動』はそれとはまったく異なり、「強制された移動」そして生活再建・沖縄再建であった。にもかかわらず、そこに「沖縄おこし」につながりうるエネル

ギーの発揮があったことは見ておかなくてはならない。

1970～80 年代における産業構造に伴う転換が、沖縄でもあったわけだが、それには経済的『依存体質』が色濃く見られ、移動するとしても、県内都市地域に加えて、他府県への大量移動があったことをみなければならない。それは、「沖縄おこし・人生おこしの教育」で書いたように、「出稼ぎ型」のものであり、「沖縄おこし」にはつながるものではなかった。その意味で、自主的本格的な「沖縄おこし」の課題追求は、極めて限定的なものにされ、引き延ばされてきたのである。

ここで、西原町史全体を見渡しての印象を少し書こう。まず、執筆者会議の折りに、『中学生も読める』やさしい文章ということがいわれたが、そうなっている文章もあるが、中学生には無理だな、という文の方が多いだろう。

また、研究的水準に達している個所も多いが、研究への基礎資料提供段階のものも多い。教育に関する記述もそういうものが多い。研究的な発展を期待したい。

また、そうした研究的なものと、現実の西原での営みをつなぐ作業が求められる。そんな意味では、多くの方が読まれ、内容をさらに深め、これからの「西原おこし」につなげていかれることを期待したい。

古波蔵剛さんの琉米文化会館論文を読む　（２０１１年１１月２６日）

正式タイトルは、古波蔵剛「占領地における米国の社会教育施設――住民の語りの中に見る琉米文化会館の受容――」であり、著者から贈呈していただいた修士論文だ。

「復帰」直前に沖縄に赴任した私の記憶には、琉米文化会館というと、与儀公園にあり、「復帰」後は那覇市立図書館・公民館となった建物としてのイメージが残っている。恵美子は、宮古島で高校生時代によく利用したという記憶を持っている。

米軍が建築し運営した施設だが、「復帰」前に消滅・移管されたもので、いまでは５０代以上でないと、記憶には残っていないだろう。

その意味では、歴史研究の対象となっている。しかし、資料的には急速に失われていきそうになっているようだ。当時の職員など、証言を語りうる当事者も高齢化が進んでいる。

こうした時期に、本論文は、精力的に収集・インタビューした資料・証言が大量に掲載されている点で、価値のあるものといえよう。無論、社会教育分野・図書館分野には専門外である私には、よくわからないところが多いが。

また、とくに八重山の琉米文化会館については、分厚いインタビューが掲載されており、興味深い個所も多い。

いくつか注目点を並べておこう。

１）設置者である米軍関係者の意図と、現場職員の現場活動とを区分して分析する中で、両者のからみあい・ずれなどを浮かびあげていること。

２）会館は沖縄伝統文化の振興に関わったが、とくに現場職員のそれへの『思い入れ』は強いものがある。戦後早期に全島エイサー大会を開催したなどは、その一つだろう。

３）子ども・学生が、利用者のかなりを占めていたこと

４）戦前の沖縄県立図書館とのからみも興味深い

５）住民自治としての社会教育施設とみると、その性格とはかなりの距離があること。

こうした貴重な資料的なものを大量にもっている論文なので、歴史分析としていかに発展させられるか、注目して見ていきたい。

数十年前の沖縄のシマの暮らしの再現――「聞き書き」を読む　（２０１０年８月２２日）

本のタイトルは、当山昌直・安渓遊地編『聞き書き・島の生活誌①　野山がコンビニ――沖縄島のくらし』（ボーダーインク２００９年刊）である。

大変読みやすい本だ。

「文理融合から聞き手と話し手の協働をめざして」（「おわりに」のサブタイトル）作られた、研究者たちの仕事の報告である。次のシマが登場する

国頭村楚洲の奥の廃村ユッパー

名護市城

名護市底仁屋

読谷村楚辺

南城市仲村渠

最後の仲村渠は、我が家から近い。かつて稲作が盛んで、私が住む中山と同じだ。

また、私自身も 1960 年代前半まで、岐阜県の兼業農家で育ったので、子どもながらに稲作作業にかかわった。その点で親近感を覚える。私が生まれ育った地帯は「輪中」という広い低地だが、ここは棚田なので、異なる面も多いのだが。

このなかで、ジャーガルにも、シルチチジャーガルとクルチチジャーガルがあるという一節がある。初めて知った。我が畑もジャーガルなのだが、どちらだろうか。

内容は、おおよそ１９４０年代から５０年代、一部１９３０年代、６０年代の農林漁業生産を中心にした暮らしについての聞き書きだ。この時期のものの大半は、ここ１０年ぐらいのうちに記録にとどめないと、証言が聞けなくなる心配がある。

また、この時期の直後に大変化が生まれ、ある種の「断絶」がある。この時期と、この時期以前とのつながりは強く、場合によっては、１９世紀以前の暮らしを推理できる要素も含んでいる。その意味で、この時期の聞き書きを今のうちに行うことが重要なのだ。

と同時に、１９５０年代から６０年代にかけて生じた農林漁業生産を中心にした暮らしと、その後との「断絶」的状況を、当事者たちが、これにどう対処していったのか、という問いが連続して生じてくる。

これらの「断絶」に近い状況は、他府県でも発生した。それは、高度経済成長、貨幣経済への依存比率の急上昇、転職、移住、学校教育への依存の急上昇と並行していた。そして、それは私の言う『１９６０年代型生き方』、

ないしは『企業社会型生き方』への移行を意味した。さらに、少し時代は下がるが「ストレーター型生き方」の広がりにもなっていく。

沖縄でも、類似の状況はありながらも、いくつかの点で大きな差異がみられる。その差異をどう分析するか。たとえば、つい先ごろこのブログ記事でも紹介した宮城弘岩さんの「非産業革命」という視点もあろう。

これらは、社会変化としては巨大だが、このあたりの研究は意外と未着手だ。教育の世界では、中内敏夫さんたちの『教育の社会史』研究グループが多少着手している段階にある。

私自身も、できればこうした課題の仕事をいつかしたいと思っている。

戦後史構築の基礎作業　「伊江村史」拝見　（２０１０年7月１６日）

６月に伊江島訪問した際に、拙著贈呈もあってか、分厚い２冊の近刊の「伊江村史２」をいただいた。

正式タイトルはとても長いが、こうだ。

伊江村史２編さん委員会編　「伊江村史２　回顧録・概説・論稿編　伊江島近現代史の諸相～「伊江島史」再構築のために～」（伊江村役場２００８年発行）

伊江村史２編さん委員会編　「伊江村史２　年表編　世紀転換期における伊江島の諸相　１９７２年～２００８年」（伊江村役場２００８年発行）

おのおの４００ページ近い巨大版の本であり、とても細部までは読み切れないので、「拝見」にとどめさせていただいた。とはいえ、貴重なものを多分に含んでいるので、今後あらためて読ませていただくことになりそうな資料・論稿が多い。

沖縄地方史のなかで、戦後史はまだ新しい分野だ。現役で活躍中の当事者も多いし、論議を巻き起こしかねない話題も多いので、歴史として書くのは、身近な話題だけに難しい面が多いのだろう。

しかし、それだけに、現役の方が元気なうちに、「回顧」「証言」を記録していくことは重要になる。とくに１９７０年以前は、今のうちに作業をすすめておかなくてはならない。

と同時に、どのような課題意識・視点をもって編集するのか、という点では、個人としてではなく村という組織として書くのはなかなか難しい。

実際、この本でも、多様な立場・視点が併存している。資料的にはそれでいいとは思われるが。

しかし、１９６０年代、１９５０年代に関しては、そろそろ、どのような課題意識・視点をもって書くべきかが問われるべきだろう。

教育史においても、そういう時期になっている。ただたんに、学校が再建され、教育活動が本格化されてきました、あるいは、「日本の教育を守りぬく」努力は並々でないものがありました、といったことにとどまらない、踏み込んだ分析に至る必要があろう。

そうした作業に私も参加すべき時期が来ているのかもしれない。

「米軍支配と大衆運動のダイナミズム」　与那国暹著書を読む１（２０１０年４月８日）

書店で見つけた本で、与那国暹『戦後沖縄の社会変動と近代化――米軍支配と大衆運動のダイナミズム――』（沖縄タイムス社２００１年）というタイトルだ。戦後、「復帰」までの時期の、経済的産業的視点からの社会動向についての、私の勉強不足を補うために読んだ。その点について、多くの学ぶことがあった。

著者は社会学研究者であり、本書は『近代化』についての社会学アプローチからの研究書だ。サブタイトルも示すように､「米軍支配と大衆運動のダイナミズムのなかに実質的な近代的諸価値の漸進的な実現の過程をみようとする」（Ｐ１９）ものだ。注目点をいくつか紹介しよう。

「沖縄の産業化・近代化が本格的な展開過程にはいるのは（中略）戦後であるとみる。異民族による、しかも軍政支配という不幸な境遇のなかで基地経済に巻きこまれながら、人々は経済上の変革にとどまらず、自由と人権、平和の尊さなど意識の変革をともなう、たしかな近代化への道を歩みはじめたとみるのである。」Ｐ３０８

本書も指摘しているように、１９世紀後半の「琉球処分」から近代化の過程は始まるのだが、本格的には、戦後であり、しかも米軍支配、そして基地経済とからんで進行したという特異性があるのだ。

そして、その過程は、次のような形で進行するのだ。

「こうした米軍による、沖縄占領にはじまる広大な軍用地接収の過程は、ちょうど近代初期、イギリスにおける本源的蓄積期に、領主らが土地の囲い込み（エンクロージャー）によって農民が土地を追われ、無産の賃金労働者に転化していく過程に酷似する一面をもっていた。土地を軍用地に接収された農民たちは貧困と失業にあえぎながら基地労働者になり、あるいは基地関連の建築・サービス業等に従事、それでも吸収しきれない余剰人口は他地域へ移住するか国外移民するほかなかった。他方、米軍・基地関係の事業を請け負ったのをきっかけに、莫大な利益をあげた新興資本家群が頭角を現すのもこの時期であり、戦後沖縄の職業社会は急速に流動化し、都市的職業編成へのきざしを見せはじめる。」Ｐ７０

こうした激変は、職業訓練を含む教育にも強い変化をもたらす。住民にとって、職業を獲得・遂行するために、教育が必需品になっていくのだ。戦前においては､『上からの』強制的色彩が強かった就学とは異なった構図が生まれたのだ。

そして「復帰」後、新たな産業経済構造が生まれ、学校教育要求がさらに強まり､『教育家族』が一般化していくことについては、タイムス連載で私が書いたことだ。そして、経済構造の世界的変動、そして基地・補助金依存構造の変化が進行する今、戦後第三回目の教育をめぐる変動が始まっているようにも見える。

近代学校には、産業経済構造に対応する能力養成機能とは別に､『国民統合』機能が付与されてきた。それは、主として､「上から」の強制として進められる。戦前沖縄はその典型だ。また、複雑な要素をはらむが､「復帰前」の沖縄における「国民教育」は､「上から」だけでなく､「下から」的要素も含む。そして､「復帰後」においては､『日の丸・君が代』に象徴される角度だけでなく､『学力全国最下位』キャンペーンが象徴する『学力問題』という形で、それが推進される点に著しい特徴を見ることができる。

このように産業経済構造に適応するという性格からだけで「近代化」が進行していると見るのではなく､『国民統合』の視点からも事態を検討してみることが求められる。この点について、本書は触れていないので、今後の研究の進行に期待したい。

沖縄における近代化をめぐって――与那国暹著書を読む２

（２０１０年４月１０日）

本書のモチーフは、沖縄における近代化の検討である。その近代化を歴史的に当然のものという前提で、かつ西欧における近代化を理論的前提というか、モデルにして論じている。そしてそれを、「米軍支配と大衆運動のダイナミズム」に焦点化してすすめているところに本書の特質がある。

私としては、そのことをさらに、前回書いたが『国民統合』という視点、あるいは近年しきりに言われる「沖縄の自立」といったこととからんで分析が深められることを期待したい。

もう一つ。私の関心事の一つは、社会変動と人間関係の変化にある。それについては、「旧ムラ秩序の衰退」として、次のように書かれる。

「戦後沖縄の社会変動をとりあげるにあたって、伝統的諸集団や共同体的諸慣行の崩壊ないし衰退の傾向を見落とすわけにいかないだろう。沖縄の村落共同体は、戦前、近代的な土地所有制度と租税制度が確立した時点で、すでに存立の基盤を失い解体に向かいつつあったが、実際はその後も「共同体的」な集団や協同組織、たとえばユイマール（共同組織）、模合、砂糖組などが存続したことは周知のとおりである。戦後、これらの旧慣のなかには、その内容を大きく変容させながらも、農村地域でなお機能しつづけていたものも少なくない。しかし、戦災による集落の破壊、占領軍による住民の居住地以外への収容、農地の接収、集落の強制移動、その後の基地建設の過程で、人口集中地区の発生と郡部の過疎化が急速に進行し、ムラ社会における「共同体的」なものは大きく衰退した。」Ｐ２８４～５

では、「旧ムラ秩序の衰退」に代わって、どのようなものが出現しただろうか、あるいはどのようなものが創出される可能性があったのか、創出すべきだったのか、という検討を期待したい。それには、「復帰」前沖縄において重要な役割をはたした『大衆運動』が、そのことにどうかかわったのか、という分析も必要だろう。あるいは、その後、今日に至るまで、人間関係そのものの衰退ともいうべき状況が広がっているが、そのことの検討も期待したい。

「近代化」は、私の理解では、宿命的なもの――著者のいう「旧ムラ秩序」はその代表的なもの――に代わって、人々が自ら作りだし、あるいは選んでいく関係・集団へと移行していく過程を伴う。それが、本書でいう政治的近代化と深く結び付く。そのあたりのことについてのさらなる追求が期待される。

その際、日本本土にあっては、「旧ムラ秩序」が、『日本的経営』として、「会社社会」の中に生かされてきたことが注目されてきた。それに似ているのかどうか、判断は慎重にしなければならないが、郷友会、門中組織などが、「旧ムラ秩序の衰退」以降も活発であり、沖縄の人間関係について論じるとき、今日なお視野にいれなくてはならない。

この問題についての検討も必要だろう。

４０．民俗―沖縄の精神・神々―

神々・自然との対し方、アイヌ・沖縄人・古代日本人　（２００３年１２月２８日）

人々の神々ならびに自然との対し方・接し方（の歴史）は興味深い。沖縄教育史を書いた折、確か外間守善さんの書籍だったと記憶しているが、そこからタテ型（垂直）の神とヨコ型（水平）の神について、大きな示唆をうけた。そのことを、アイヌの踊りについて考えるなかで思い起こした。この随想の前に書いたことだが、輪になって踊ることのなかには、アイヌでは、人々のなかに神々も同時にいることをも含んでいるとのことだ。それはアイヌに限らず､かつての時代にはどこでもそうであっただろう｡そのことが忘れ去られているだけのことだ。

この神々への対し方・接し方で、歴史を読み直してみると興味深いことになりそうだ。沖縄史でいえば、オモロの時代（それも「英雄」があらわれる以前と以後にわけられよう）、１８世紀の朱子学原理による治世の展開以前以後、明治の日本政府支配以前以後、そして戦後の産業主義の浸透の以前以後などに注目しなくてはならない。それらは、神々のことだけでなく、自然観ともかかわる。自然を征服する対象としてとらえるかどうか、ということは大きなポイントだ。

ことのついでに印象深いことをもう一つ、アトゥイ「俺は魂をデザインする」（北海道新聞社２００２年）のなかで、「人間らしくある人間になるんだよ」とばあちゃんにいわれ、「どうしたら、そのような人間になれるの？」と尋ねたら、「自分の心や魂を、自分で揺らせ」「アイヌはな、頭でも考えるけど、心も魂も揺らすのさ。二つの方法で考えたら、おもしろいべ」といわれたという一節がある。興味深いことだ。この本には、私が日頃から考えている多文化、混血としての日本人、縄文文化（アイヌ文化）といった問題にも触れている。アイヌ・沖縄人・古代日本人（縄文系と弥生系）における共有性・異質性などの問題をたんに日本人のルーツをたどるという意味だけでなく、現代においてどう考えていくのか、といった興味深い問題がある。

沖縄と神々　（２００４年1月１９日）

私たちがこれから住もうとする知念半島は、琉球王朝の神々との関係が深いところである。その象徴的存在が久高島であり、その久高島を遥拝する斎場御嶽（セーファーウタキ　ユネスコの世界遺産の一つ）である。

私たちの仮の沖縄滞在場のすぐ近くの海岸にも、その久高島を遥拝する龍宮神という場所がある。サンゴの岩の上で、数メートル先の海にいかにも龍宮のようなきのこ型の岩がある。その方向から太陽が上がり、久高島がみえる。いかにも神々しいところである。沖縄にいるときは、毎日のようにそこにいく。できるだけ日の出時間にいく。そして、そこからラグーン（礁湖）沿いの岩場を散策する。ゴツゴツしているので、おおいに足の体操になる。そして、アーサがいっぱいあり、それをとる人もいる。すぐ近くに、観光客向けのグラスボートが何隻

も浮かんでいる。モズク栽培場もある。魚もいっぱいいるし、それをついばむ鳥も多い。土日になると磯釣りする人もいる。朝散策する人もいる。私たちの散歩の終点地点は、初心者ダイバーたち向けのトレーニング場所であり、またシーカヤックの出発点でもある。

私たちが新たに家を作ろうとしているのは、ここから歩いて１５分くらいである。そこからさらに１５分くらい歩いていくと新原ビーチ・百名ビーチがあるが、そのビーチの端には受水走水（ウキンジュハインジュ）という、沖縄での稲作発祥の地とされる、湧き水がでる場所がある。そこもいかにも神々しいところである。

沖縄の神々は、人々の住んでいる近くに「住んでいる」。そうした神々と王家の神々との距離はそれほど遠くない。こうした沖縄の神々のことについては、外間守善さんの著書などからおおいに学び、私の「沖縄県の教育史」のなかでもいろいろと触れた。このあたりの研究もこれから１０年の間に再開したいものだ。

南島地名研究センター「地名を歩く　増補改訂　奄美・沖縄の人・神・自然」ボーダーインク２００６年を読む

（２００７年1月２８日）

興味があって読む。沖縄の地名は基本的には、サブタイトルにあるように、人・神・自然とのかかわりが反映したものである。そしてそれらは、時代の文化・自然・政治状況が関与して変化してきた。縄文時代、１０世紀前後の大量移住の時代、中国文化、近世・近代における日本文化の影響（標準語強制とのかかわりも含む）、近年の状況変化の影響などが幾重にも重なって、今日の地名にいたっていることが、この本のあちこちで示されている。

地名をみれば、その意味するところがよくわかる状況が失われつつある。たとえば坂田などはよくなじんだ地名だが、もともとハンタから由来したものだが、戦後坂田と呼ばれるようになり、その由来が大多数の人にはわからなくなっている。とくにヤマト風にいいかえたものは、そのルーツがわかりにくい。こうした事例は、地名に漢字をあてはめて表記した場合に生じやすい。またそれを、もともとの発音にではなく、あてはめた漢字に即して発音を改めるという流れをつくりだし、しかもそれをヤマト風に発音させるという流れがつくりだされ、元の発音どころか意味を失ってしまうということになる。我が集落の中山ももともとはナケーマであり、それに仲栄真という漢字をあて、おそらくヤマト風ということで、さらに中山の漢字をあて、いまでは「ナカヤマ」と発音することのほうが多くなっている。

グスクにも似た事情がある。城という漢字をあてたことによって、グスクではなく、シロとかキとかいう発問が広がり、そして、意味もヤマトの「お城」をイメージする人を増やしてしまった。そのため、沖縄の城は「ヤマトの城とは異なって」という説明の仕方を強いられる事態となる。

グスクの語源については、いろいろと説はあるようだが、同書では、「囲われた祖先の葬地」という説が主張されている。実際、グスクと名のつくところは、御嶽（ウタキ）・墓地が圧倒的に多い。ヤマト風の「お城」は、ほんのわずかである。

渡邊欣雄『世界のなかの沖縄文化』（沖縄タイムス社）を読む（２００８年１１月２１日）

１９９３年初刊で、２００７年第四刷だ。ずいぶん広く長く読まれているようだ。私が沖縄外にいる時にでたもので、この本のことは知らなかったので、私にとって空白期間を「埋める」意味もあろう。

タイトルにあるように、沖縄文化を世界的視野のなかで見ている点で、注目される。

２０年以上前、私が『沖縄県の教育史』を執筆している時、教育、とくに人々の子育てにかかわる史料が大変みつけにくい状況のなかで、人類学民族学民俗学の書籍を濫読し、教育にかかわるものをみつけ、教育学の立場から再構成しようとつとめていた。そのなかに、著者の著作もふくまれていたが、この分野の素人である私にとって理解困難なことが多かった。その点で、この書籍は大変理解しやすく、初刊の１９９３年の数年前に発刊されていれば、参考にさせていただくことが多かったのに、と思ういまごろである。

と同時に、これらの分野の書籍のなかには、沖縄のさまざまな習俗が長く続く固定的な習俗であるかのように述べる傾向が強くみられるものがあり、そこでの指摘が沖縄のなかで歴史的にどのように形成されてきたのか、また海外との文化交流のなかでどのように位置づくのかなどが読みとりにくいものが多かった。そこで、それらが述べていることを私なりの解釈で再構成させていただくことがしばしばであった。

そうした点にかかわって、著者が、この本のなかで以下のように述べている点に、私は共感する点が多い。と同時に、「あー、そうだったのか」と気づかされることが多かった。

この著書の全体を貫く視点として、最終章などで以下のように述べられている。

「わたくしが本書各章を通じて言いたかったこと、それは『沖縄文化を人類文化の一つとして考えるべきだ』ということに一点につきている。」

「これまで『沖縄文化の固有性』について語られてきたのは、主として大和文化との比較においてであった。しかし世界を見渡してみると、たとえばノロ（女祭司）が『沖縄にしかいない存在』であり、その神事が『沖縄文化の固有性』を証明するものだとはいえないことを、本書で知っていただきたいのだ。」

「沖縄文化は、その構成要素がすべて外来文化に求められるような、そんな＜つぎはぎ＞だらけの文化なのではない。逆に近隣文化から輸入され、影響されたであろう文化は、みごとに＜沖縄化＞しているのではないか。門中しかり、位牌しかり、風水しかり、ハーリーしかり、・・・・」

こうした視点にもとづいて、たとえば、

（綱引きにかかわって）「沖縄文化内部だけで沖縄文化を考える傾向を、わたくしは＜土着主義＞と呼んでいる。土着主義では、もはや、沖縄文化はわからないと思う。すでに沖縄文化の特徴は、このように世界に通じていることが分かっているからだ」

（ハーリーにかかわって）「ハーリーは、沖縄の人びとの生活目的にそってアレンジされた、独自の行事だと理解すべきだ。」

「沖縄では、神郷からの神幸のためという理由が一般的で、目的は五穀豊饒や防疫のためであることが多い。競舟文化は、どこどこの文化の模倣だと考える必要はまったくない。文化を輸入しても、外来文化はその民族の生活体系のなかでアレンジされ、新たな文化に作り替えられてしまう。創造された文化の世界的類似性。それこそが人類文化の遺産として、最もすべき遺産なのだ。」

（仮面仮装文化にかかわって）「世の学者たちは、遠く隔たった双方の文化に酷似する習俗を発見すると、双方の類似性を究めんがために、太古の『民族移動』を想定して、壮大な＜文化伝播論＞を説こうとする。しかし人類文化の創造力は、この理論が考えるほど、『単一起源』に属するものだとはいえない。」

（カイダー文字にかかわって）「文化変容とは、異なる文化の接触により、一方または双方の文化が変化することをいうが、東アジアの文化変容研究は、ともすると＜影響する側＞からの研究に陥りがちになる。この視点は、『常に支配者側から文化変容をみてきた』という、従来研究への批判と反省とを軽視する傾向に走りやすい。だからこの視点からは、沖縄の漢文化受容の主体性がみえなくなることを、わたくしはつとめて憂うのである。」

（地割制にかかわって）　「沖縄文化は、すべて近隣文化の模倣で成り立っていたのかどうか？　中国の『井田法』も薩摩の『門割制』も、そしてまた沖縄の『地割制』も、みな土地に対する人類の分配精神を表わしたにすぎないものではなかろうか。」

大変参考になる指摘がつらなっている。無論、これらの指摘に対して、特定の文化の影響や外からの強力な支配の結果だというような批判説も存在しよう。いずれにしても、世界的な共通性と文化影響・支配の存在、そして沖縄の独自の発展といったこと全体を視野に入れて、検討を深めていくことが必要であろう。単純に、どこかの文化の影響・支配の結果というだけで解釈することの危険性に対する強い警告的示唆を行っている本といえよう。

いずれにしても、私がもし沖縄教育史の作業を再開するならば、この著書で示された問題提起を大いに視野に入れていくことが最低限必要だと思う。

外間守善「海を渡る神々」（１９９９年角川書店）を読む　（２００９年９月８日）

私の「沖縄県の教育史」（1991 年思文閣）では、外間守善「沖縄の歴史と文化」（中公新書 1986 年）の「神々」の記述から学んだことを活用している。とくに、ニライカナイという水平神とオボツカグラという垂直神との争いをめぐってである。なぜかというと、首里王府が支配秩序確立のために、垂直神による神々の統合をはかり、それに基づいて、宗教的思想的支配秩序を作り上げ、そのことが、「教育」の強力な前提となったからである。

今回の本でも、そのことがより詳しく述べられている。

たとえば、こうである。

「宮廷祭祀の儀礼歌として編纂された『おもろさうし』巻１には、特にオボツ・カグラの神が強調され、首里を中心とした中央においてオボツ・カグラの信仰が色濃くみられることである。全体的には中央を離れた村々・島々においてはニライ・カナイの信仰が分布する。『おもろさうし』ではオボツ・カグラの天上の神と地上の権力者である国王の王権を結ぶという意図を読み取ることができる。尚真王の頃の中央集権化・王権強化の時代を反映した神観念であると思われる。」Ｐ２２

そして、ニライカナイ信仰が世界的規模でつながる「原郷信仰」と「洞窟」（ガマ）についての研究、また来訪神アラ神についての記述など、興味深い論が展開されている。

外間守善本２　伊江島　ポリネシア　ノロとユタ　海神と稲作　（２００９年9月１０日）

前の記事で書いたことのほかに、私が学んだことをいくつか並べておこう。

１）伊江島への注目。たとえば、つぎのように書かれている。

「島渡りをして漂白した渡来者たちが、稲作、鉄文化を伴なって先住民と交わりながら歴史を拓いていくようす、文化英雄的な渡来者たちの人格がいつしらず神格化されて神になっていくようす、アラ神、アマミク神とよばれる神が海からあがってくる神（海神）、天から降りてくる神（天神）にもなり、島の聖域セイ杜で習合して祖先神になっていくようす、その折りに、海辺の洞窟が生活空間、墓所、聖空間になり、生と死と再生の場として活用されていること、・・・・・」Ｐ１０～１１

「先住民と新渡来人との勢力争いと和合という歴史的事実があったということである。それが神話に投影されたものに、後世的に若干の変容が起こった」Ｐ５０

２）ポリネシアと沖縄との関係は興味津々だが、文献資料上はまだはっきりしていない。そのなかで、ポリネシアや沖縄への移住をめぐって、次の記述はインパクトがある。

「ポリネシア空間への民族移動、各島々の歴史の拓かれ方と、九州から沖縄の島々へ移り渡ってきた人たちの歴史の拓き方は、環太平洋地域に学ぶ人たちにとって、今後の重要な研究課題になっていくことだろう。

島渡りをしてきた人たちは、ポリネシアの各島々に安住し、定住したそれぞれの先祖になるわけであるが、後の世の人たちは、彼らへの尊崇の気持ちを高めて人格を神格化させ、ついには祖先神として斎き、子孫の繁栄と幸福を神々に託する、という信仰をはぐくんでいった」Ｐ１１９～１２０

３）ノロとユタ　　琉球列島の人々の精神生活と王朝支配との関係以後を考える上で重要な問題だ。

「ノロやツカサから後世的にユタが生まれたのではなく、その逆であろう。」Ｐ１７５

４）海神と稲作　　かねてから、農業行事に、なぜ漁業など海にかかわるものが登場してくるのか、疑問だったが、次の引用周辺の記述でわかった。

「南島の神祭りシヌグ、ウンジャミ（豊漁・豊穣予祝祭）などや、日本列島各地の田植祭にみられる海神と稲作のかかわりは、弥生時代以降における日本人の、生活背景を作り上げる古代信仰、古代習俗としてかなり重要な意味を持たされていたのではないだろうか。それはまた、祖神の源流とも深くかかわっているはずである。」Ｐ１９８

外間守善本３　竜宮　斎場御嶽　アラ神　（２００９年9月１１日）

１）「竜宮」という呼称について。

「海の彼方にある神々の原郷、という原理はニライも竜宮も同じである。ニライ・カナイを後世の人が竜宮とよび変えたものと思う」Ｐ５７

私たちも、奥武島など、近くにある竜宮にしばしばいくが、それがニライ・カナイに通じるということだ。なるほどと思う。

２）斎場御嶽についての次の指摘は以前より知っていたことではあるが、再確認しておこう。だから、王朝支配以前の久高を含めた知念半島の神々について、改めて追求することが重要なのだ。

「斎場御嶽が特殊な形で聖域化されるようになったのは、アマミク時代よりもっと後世の琉球王朝時代のことであろう。王国の理念の中にある信仰体系の正当化のために、ニライ信仰、太陽神信仰を重ね合わせることのできる格好の地として斎場御嶽が聖域されたのではないだろうか」Ｐ２０４

３）沖縄のあちこちにあるという、アラ神、についての問題意識は、これまでもっていなかったので、おおいに勉強になった。

「アラ神（荒神・新神）と呼ばれる神の素性は、海人族もしくは海を渡ってきた遠来の人たちであり、しかも彼らは、南島から北上していったのではなく、九州の方から島伝いに渡って来た人たちである。」Ｐ２０９

神々をめぐる、支配の争い　「神々の琉球処分」　（２００９年8月１９日）

「別冊『環』６　琉球文化圏とは何か」（藤原書店２００３年）のなかの後田多敦「神々の琉球処分」は、明治期の天皇制政府によって、沖縄の神々がどう「処分」されたかをテーマにしている。

政治支配は、その支配地域における、宗教支配、神々の支配と結びついて展開することが多い。このことで、私が強い示唆を受けたのは、外間守善さんであった。私が「沖縄県の教育史」を執筆していたころ、首里王朝が、各地にあるこうしたものを支配していく体制を整備し、ニライカナイ、オボツカグラの神々の体系をも管理支配していったことについて、いろいろと教わった。

だから、久高島のイザイホウについて、「沖縄の先祖の原型」を今に残していると、単純に「賛美する」発言に出会ったとき、私は、首里王府によって支配整備されたという面を指摘したりもしてきた。いまでも、首里王府によって管理統制される前の、久高の神々、御嶽・拝み所を掘り起こす必要があると語る人に出会って、心を強くしている。

また、アマテラスを軸に列島全体に共通する神々がいて、沖縄の神々もその下部にあることを説く人にさえ出会ったことがある。その時は、勉強し直してきてほしい、強く要請した。

無論、各地域の神々に関連性があることは多い。しかし、政治支配をするものは、それを正統化するために、自分たちが依る神々を、最高の位置に置き、他の神々を従える構図を作り、人々にそれを押しつける。

琉球処分の際にそれがどう展開したかを扱ったのが、この小文だ。それは、以下のようにまとめて述べている。

「併合過程で琉球の国家祭祀は公的性を失っていくが、それでも日本の「公の祭祀」へ再編されないまま、「私の祭祀」へと追いやられる方向で進んでいる。再編への意図が強く現れることもあったが、結果的に再編ではなく祭祀の「私」化という方向に動いてきた。そして、「私の祭祀」となった琉球の祭祀はそれでも生き続けている。」

さらに正確にいえば、首里王朝によって管理統制された『「私の祭祀」となった琉球の祭祀』だけでなく、人々

によって支えられてきたそれ以外の祭祀も、それでも生き続けている、というべきだろう。

オー　アーマン

（２００９年１１月２日）

高梨修ほか『沖縄文化はどこから来たか』（２００９年森話社）の中に、「あふ（おー）の海」は、「青色の海」ではなく、「聖なる海」と解くのがいいという外間守善の引用が紹介されている。

これは以前に聞いたことがある。「おー」地名はいくつかあるが、我が家のすぐ近くにも奥武島（オージマ）がある。とくに、その南端には、竜宮があり、このブログでも何度か紹介した。ニライカナイを祈る場でもある。聖地、セジダカイ場である。セジダカイ方々は強く感じ、あるいは畏れる場でもある。感じすぎて、島への橋を渡れない人もいるという話を最近聞いた。

もう一つ、「アーマン」「アマン」についての記述だ。この言葉は、「神話的な過去」と「やどかり」の二つの意味があり、ヤドカリが宇宙開闢と関わるようだ。しかも南島系神話らしい。

私たちが、日常たくさん出会うやどかり。そして、このあたりでは、大型ヤドカリでオカヤドカリという名のものをアーマンと呼びならわしている。我が家でも時々みかける。

以前のホームページ記事で、３匹のアーマンの宿奪い合い合戦について書いたことがある。

そのころは、これが天然記念物であることを知って驚いていたが、今回は宇宙開闢とかかわると知って、またまた驚いている。

中山史へのヒント――仲松弥秀「神と村」（梟社１９９０年）

（２０１０年3月２８日）

以前から名前を知っていた本だが、書店で見つけた。

「神と村」にかかわって、歴史的なものが比較的残っていると思う、玉城の中山に住んで６年近くなり、沖縄の「神と村」についてより詳しく知りたいという動機もあって、購入した。

著者には、琉球大学での勤務期間が少しだけ重なったこともあり、１９７０年代、何かの機会に一度お会いした記憶がある。穏やかでやさしいなかに、強いエネルギーを感じさせる方だ、という印象だった。

仲松著作は、『古層の村』を読んだ記憶が残っていた。そこで改めて本を我が家の図書室でチェックしてみた。すると、単行本の『古層の村』ではなく、叢書「わが沖縄」第４巻谷川健一編「村落共同体」（木耳者１９７１年）の冒頭論文として、「古層の村」が出てきた。３０年以上前に読んだものだからすっかり忘れていた。

驚いたことに、「古層の村」には、中山のことが地図付きで出てきた。「神と村」にも、数行出てきて驚いたが、なおの驚きだ。

数十年前までの中山のこと、さらにはそれ以前の中山が推理されて興味深い。

かつて、御嶽など村の聖なる場所の近くに村落もあったわけだが、それが下方に移住していく例にかかわって、

「神と村」には、「今から四、五〇年前までは（中略）、中山には御嶽近くに数戸が（中略）あったが、現在一戸のみが村の高所に居残っているだけである。」Ｐ２６２と書かれている。

さらに「古層の村」には、地図付きで２ページにわたって、中山の聖所である「殿」から下方への移住が詳しく書かれている。私も知っている屋号の家々だ。

中山の歴史を描こうするなら、貴重な資料となろう。

中山以外にも、たくさんの例が登場してくるが、本書は、先島から奄美まで、各地の村を何度も踏査して書かれている。

示唆を受ける点が多いので、何回か書きたい。

ところで、沖縄、とりわけ南城市あたりには、神々への関心、癒しへの関心をもって、来訪される方が多い。しかし、沖縄の神々がどのようなものか、を知らずにくる方が結構多い。なかには、天皇家に代表される大和政権の神々の枠の中でとらえる人さえいて驚いたことがある。アマテラスで、日本列島のすべての神々が理解できるわけではない。アマテラス系統で、日本列島のすべての神々を統率しようというイデオロギーがあるが、それはまさにイデオロギーなのだ。この列島には、実に沢山の神々のとらえ方が併存しているのだ。

と同時に、沖縄内にあっても、首里王府の神構造で理解しようというものもいる。地域によって、大きく異なるだけでなく、社会的位置歴史的位置によって、神は異なってくる。そうしたなかで、神々をどうとらえ、どう付き合うかにも大きなバリエーションがある。だから、少なくとも、その地域の神々をめぐる歴史について学び、それを尊重する姿勢だけは持ってほしいものである。

オソイとクサテ「神と村」本２

（２０１０年３月３０日）

本書の中心に流れるのは、「オソイとクサテの思想」である。それは、次のように書かれている。

「村の守護神は、歴史的に、村落民と血のつながりのある祖霊神であることによって、自己の子孫である村落民を抱きしめ、その幸福と繁栄をはからってくれる。オソイとは、このような神の機能を表わした語ということになる。

村落民は、自己のこの神を何一つ疑うことなく、この神に抱かれ守られ、自己の幸福と繁栄を得るように努力をする。そういう気持ちが自然に生まれ出るのである。このようなありかたを表わす村落民の語がクサテである。いねば骨肉で結ばれている守護神と村落民の関係であり、双方の間にオソイとクサテの心的な世界が成り立つことになる。」Ｐ２４６

しかし、この思想は、次に紹介するように、揺るがされていく。

「首里王府の圧力がしだいに浸潤する中でも、クサテ神の統制は強く続いてきた。しかしそれが近代的といわれる社会体制に編入される過程において、いままでの村を単位としてした生活はしだいにくずれはじめてきた。とくに人々の生活基盤をなしてした土地が私有化されてしまった一九五〇年代からは、少なくとも「村即村人」であった村落は、たんなる個人の集合体と化してしまった。村人の意識も、当然のことながら村単位であったものが自己単位に変化してくる。その結果、村落内の階層分化はいよいよ促進され、村の宗家と村民、親元と分家

のオソイとクサテの関係は消滅するところとなり、信仰による秩序が政治と金による秩序へと変化するようになった。村の祭祀は、たんに区長や少数の神女によってささやかに支えられてしるのみで、生活に追われている村人はさほどの関心をはらわない。後を継ぐ神女も個人の自由をたてに拒否する。その反面でユタが盛行しているのが沖縄の現状である。」Ｐ２６８

これは、２０年以上前に書かれたものだ。この事態は、いまではさらに進行しており、私が住む中山でも、「少数の神女」はいず、区長をふくむ三役で祭祀が継承されている。ただ四年に一回のジーハンタという行事で、祭祀が凝縮されて行われている。四年前、私はビデオ記録係として参加した。今年がその年にあたるが、どんな形になるだろうか。

著者は、本書の末尾で、こうした事態にかかわって、「神は遠くへ！」と嘆き叫び、こう書く。

「明治の社会となり、西洋文明は沖縄の社会をも浸潤するところとなった。真先に西洋的教育と中央崇拝的教育が津波のごとく襲ってきた。おそいと腰当（クサテの漢字）は遠くへ流されて行った。そして、義務と服従の強制と、権利の主張が村落や人々をおおいつくしたかに見える。」Ｐ２７０

この叙述の「気持」はわからないでもないが、生産と生活の変化、またそれにともなう人々の地理的移動の増大、そしてそれらにともなう人間関係の作り方の激変は、「西洋文明」とか「西洋的教育と中央崇拝的教育」だけでは片づけられない背景をもっている。

そしてまた、「オソイとクサテの思想」を表現するのは、キリストが言ったような『愛』ではなくて、『かなし』という言葉だという。

「かなしは可愛いであり、長者に対しは、尊敬を含めた信頼の意がふくまれている。すなわちおそう側からは可愛いであり、腰当側からは尊敬と信頼の「かなし」であった。いうなれば、愛の中に人間がいた。そうなれば「愛」という言葉が生まれ出る余地はないのであった。

そのような沖縄社会に、いつの間にか支配なるものが生まれ、服従が生まれ出てきた。」Ｐ２７２と嘆き叫ぶ。

ここに著者の強いモチーフを感じる。むろん、現代の社会に、「オソイとクサテの思想」のそのままの復活を求めるわけにはいかないだろう。だが、この歴史的に蓄積されてきたものを、現代の生産・生活・人間関係のなかで、どのような形で「継承」再構成していくのか、という課題は残る。とりわけ「オソイとクサテの思想」が外的な力によって崩壊においこまれたのであって、内部の自主的主体的な営みとして崩壊したのではないから、なおのこと、そうである。

首里王府支配と「神と村」――「神と村」本３

（２０１０年４月１日）

２でも少しふれたが、外的な力による「神と村」の変容を解明することが、本書のモチーフの一つになっている。そこで、「神と村」の歴史的分析があちこちに登場する。もっとも古い時代としては、次の記述がある。

「御嶽に祖霊神が祀られるようになったのは、定住集団共同体社会において、いわば農耕に重点がおかれるようになった時代からと考えられる。このことから、祖霊神信仰より以前に、こライ・カナイに対する信仰が先行していたことは明らかである。

太古の時代から、人々は海の彼方、ボーッとかすんだ肉眼では見えないところに憧れつづけ、やがてそこをニライ・カナイ、あるいはテルコ・ナルコと称し、青の世界とも想念したのである。」Ｐ１４７

沖縄史を交流と移動のなかでとらえる動向が、近年かつてなく強くなっているようだ。とすると、島の外から移動して、定住した人々が持ち込んできた「神と村」と先住者の「神と村」との関係が重要な関心事になる。太平洋諸島、台湾、中国本土、奄美、九州、朝鮮半島からの移住、ないしは交流が、「神と村」に関わって、何をもたらしたのか。

明治期以前、ないしは薩摩支配以前は、大和政権とはかなり異なる、ないしは対抗的ものが、沖縄の「神と村」で展開したことは言うまでもなかろうが、その内実はいかなるものだろうか、研究上は、鮮明な事が言えるような段階ではないようだ。

また、移住者にとっては、移動してきた元の方向としての『海の彼方』への信仰をどうとらえるか、という問題があるかもしれない。

こうした問題にかかわって、本書は次のような指摘をしている。

「外部からのものを歓迎する思想は、祖霊神による愛の思想と、ニライ信仰がその根底にあったからであろう。その信仰は、有形・無形のよき文化をもたらす外来者に対して、それをニライからの来訪者と見るようになり、尊敬しまた歓迎をするようになったのである。

しかし、古代沖縄において民衆からの支特のもとに豪族化した者たち、たとえばこのような文化・技能をもった来訪者子孫ののしあがった者もそうであるが、地元出自の豪族などの場合でも、多くの村々の上に立つうちに、次第に自己のオソイ神と縁遠くなり、やがてはこれを失うようになる。

そこで彼らはオソイ神を他に求めることになった。琉球世之主（中国からは琉球王）は、これを天にもとめ、さらにはニライの神を加えることによって民衆を引きつけるべく、宗教政策によってある程度の成果をおさめたようである。」Ｐ２４４

「豪族の争いは貿易独占を目指したものであり、これを実現したのが首里王であった。このようなことから王発生後も長い期間にわたって、村落に対して王権を強く侵入させる必要がなかったことから、少なくとも村落社会においては長期間にわたって祭政一致社会が続いたと思える。」Ｐ２４

村落におけるノロ家について「このような配置から見るならば、ノロという神官が、その村落自体からおのずから生まれたものではなく、外部の力、ここでは首里王府の政策によって生まれたものであると考えることが可能であろう。」Ｐ３３

これらは、16 世紀に入るころの尚真王以前の話だろう。ところが、17 世紀の薩摩支配以後、事態は変化する。

「島津の琉球征伐（慶長十四年、一六〇九年）前までの沖縄では、血縁的共同体をなしていた集団の村、これを沖縄本島並びにその周辺の島々ではマキョと呼び、八重山諸島ではハカと呼んでいたのであるが、これらの小集落が数多くあちこちに散在していたと考えられる。

散在しているこれらの血縁的小集落に対して、首里王国が島津配下に帰した際に行なわれた慶長検地において、離れているものはそのままの姿で、おのおの近接しているものは、その二、三を併合せしめて、従来よりも大きい村落に仕上げる政策を推進させてきたようである。

なお、この検地を境にして、従来のマキョ、ハカの呼称を捨てさせ、新しく「村」という名称に改めさせた。

このことは、当時の検地帳から初めて「村」という語が使われていることによって明らかであろう。」Ｐ２２７

そして、『村』の生産力を上げるための『村』施策がおしすすめられ、それに伴って「神」政策も進められる。

「沖縄の村落には二回、三回とその場所をかえているもの、なかには移動のすえにもとの村跡に帰ったものなどもあり、とにかく多くの村落が移動の経験をしている。

移動の理由としては、村敷地の狭隘、不健康地、交通の不使などといろいろな理由があげられている。村民による自主的移動もあるが、多くの場合は首里王府による貢租増収策からであると考えられる。しかしそれがたとえ王府政策からのものであったにしても、移動については決して強圧的手段をえらばずに、あくまでも村民自体が自然に移動せざるを得ないように仕向けている。その方法として用いられたのが中国から伝来した風水地理学である。」Ｐ２５９

「この風水地理学を、王府政策に沿うように委曲解釈することによって、つとめて現村落地の風水が悪相なることを説き、そのかわりに某地が善相であることを強調し、村民をして移動せざるを得ないように仕向けるのである。」Ｐ２６０

私は、こうした施策、特に 18 世紀前半の蔡温を中心とする施策が、その後の「神と村」の基本パターンになっていると推理している。

私が住む中山も、こうした施策のなかで、今では隣字になっている玉城から分離独立したのだ。

太陽・テダ・オボツカグラ――「神と村」本４　（２０１０年４月３日）

私は、『沖縄県の教育史』（1991 年思文閣）のなかで、外間守善を参照しながら、地上におけるせめぎ合いが、神々信仰をめぐるせめぎ合いの形をとって展開されることがあることを書いた。

著者も、たとえば以下のように、水平神・ニライカナイの立場にたって、垂直神を批判していく。

「オボツ・カグラは天神ではなく、まさしく、海ノ神、ニライカナイ・カナイの神ということがはっきりする」Ｐ１３１

「琉球王府はもちろん、島々村落に至るまで、天から来臨する神は見当たらない。海の彼方からの神か、常住神しか見出せないのである」Ｐ１３２

「南島琉球弧における太陽なるものは何かということになるが、要するに、それは熱帯的な国々と同様、物体としてのテダではあるが、神としてのテダではない。しかし、東海の彼方からのぼってくる太陽、それは短時間にすぎない太陽ではあるが、その短い時間の太陽は神とされた。

そして、その太陽と、同じく東海はるか彼方から、豊饒・幸福を与えるべく来訪されるニライ大主なる神との双方が、一つに結ばれたのが琉球弧の島々における信仰上のテダであると考えたいのである。」Ｐ１３７～８

「琉球方言のテダなる語には、異なった二つの意味があったのではなかろうか、とはすでに述べた。一つには物体的な太陽をさし、もう一つには信仰上の神を意味したのである。信仰上のテダなるものは、慈悲深い神、人に恵みを与える神であり、たとえば神と成っている祖先、あるいは早朝はるかなる東海からわれわれの世界に姿を現わす曙の日である。これを人々は太陽とは見なさずに、ニライ・カナイの神としてとらえていた。

このニライ・カナイの神なるテダが、東海ははるかなる神の門と想念したテダガーナ（テダの穴）から姿を現わされ、金波銀波の足跡は、やがて東海にかき消えていく。その後はギラギラと人を寄せつけない光を放射する太陽としてのテダとなってしまう。夕方になるとまた神は西方の海に現われ、やがてわれわれの世界からテダガーナを通って神の世界に入っていかれる。筆者の幼い頃、老姥たちが浜辺で、慈悲深い赤い夕日に合掌する姿を幾度も見かけたことを思い出すのである。

このテダガーナから出現され、テダガーナを通って神の世界に戻られるテダなる神は、われわれと同一水平の世界（東と西の違いはあっても）の場に現われる。この水平的場に現われる神なるテダを、天上の太陽なるテダに結びつけ、そして自己の地位に結びつけようとしたのが「首里の世之主」だったということになる。」Ｐ２４４～５

これまで、太陽神が出てくると、支配的権威と結びつける発想につながっていると考えていた私には、太陽と神についてこの一連の叙述は、初めて出会う大変新鮮のものだ。

それに多少からむが、タマグスクに見られるようなアーチ型門について、「そうした形状の門は、神の世とこの世をつなぐ、いわゆるテダが穴をあらわしていると受け取られるものであろう。」Ｐ１５１、「アーチ型門は神の出入り門」Ｐ１４８という記述も興味がひかれた。

いつのごろからは知らないが、近年、タマグスクのアーチ型門には、夏至の日の出、冬至の日の入りに祈りをささげることが、各地からたくさんの人を集めている。

殿　神アシャゲ――「神と村」本５

（２０１０年４月５日）

私が住む中山にもある殿（トゥン）についても、例えば、次のように書かれていて、参考になった。

「それはたんなる祭祀場所を指す一つの名称なのである。」Ｐ１７１

「殿で祭祀の行なわれる際には、まず御嶽の神を招請する遥拝がある。神女たちがある決まった方向へ手を合わせて拝するのであるが、その方向に御嶽が存在することになる。目的の御嶽が少しく遠距離の場合には、その御嶽付近に拝井泉が存在するのが普通である。したがって、その昔はその御嶽や拝泉のところに村落が位置していたと見ることができる。」Ｐ１７２

年２回の字共同作業の折、中山の殿には何度かいったが、昨秋は、殿より奥の森の中の拝井泉の清掃もした。付近には巨大ガジュマルが何本もあった。昨秋の、このブログ記事でも紹介したガジュマルだ。

また、殿と神アシアゲの関係について、よくわからなかったが、次の説明で理解することができた。

両者は、「同質異名のものに過ぎないようである。祭祀の場としての見地からの名称が殿、これを神の所在から見るとミヤー、歓待するすなわちアシーを差上げるという見地からの名称として神アシアゲというものとなったと考えられる。」Ｐ１８６

また、神アシアゲの異表現として、神アサギ、神サギ（カンサギ）、神アシャゲ（Ｐ１７８）があると書かれているが、中山では、カンサギといい、漢字では、神舎下という字を使っている。そして、中山の４年に一回開く大行事をジーハンタ（会場の場所名でもある）といい、屋号カンサギの方が中心の役をとっておられる。

「祭礼は直接神の鎮座している場所で行われるのが本来のあり方である。すなわち御嶽・グスク・テラで行われるべきなのである。（中略）一々遠い場所の、またたとえ遠くなくても嶮岨な場所に位置しているのが一般的であるため、そういうところの御嶽にまで行くわずらわしさの軽減を考えたのが、そもそもの殿発生起源であろう。

ところが、距離的なわずらわしさは殿によって解決できるとしても、殿ごとに一々同じ祭礼を繰り返すのも面倒であり、殿形成以後に移動した行は旧村跡に殿が居残るということもありうる。そうであれば、祭礼ごとに遠距離を往復しなければならない。これを克服したのが神アシアゲである。」Ｐ１８７～８

この記述は、中山の祭事を参照すると、なるほどと思う。

門中と村落　火の神――「神と村」本６

（２０１０年４月７日）

以上のほかに、注目した２つを紹介しておこう。

一つは、『村』と門中だ。

「首里士族階級の門中制度（近世に発生した男系門族制度）が田舎に流れ入ってきて、首里近傍から次第に遠隔地へと波及しつつあり、祭政一致的に団結していた村落共同体社会が瓦解したあとに新しい精神的よりどころとなってきたと言えるのである。

御嶽の神に対する祭祀は、直接には御嶽、間接的には殿や神アサギで、村の行事として衰微しているとはいっても神女や字区長、有志によって行なわれてはいる。だが、村の宗家に対しては、その家が村の宗家であるということは知っていても、門中制度の波及している村落では、村の宗家として崇敬されていると見るよりも、むしろ村を構成している有力な門中の宗家としての意で崇敬されているというふうに変化してきている。」Ｐ４１

私の住む中山にもいくつかの門中がある。これらの門中に加わっていないのは、我が家も含めて数軒しかなく、近年移住してきたことがわかる。村の行事と門中の行事との『比重』がどうなっているかは、私にはまだよくわからない。戦前、全戸が當山姓だったが、戦後門中ごとに姓を変えた。當山姓だけは複数の門中が名乗っているようだが。

次は、最近、恵美子が熱心になっている火の神だ。

「本来の火神の性格は、縦・横につながる血縁関係の表現とは無関係のものである」Ｐ１５６

「各家庭における火神信仰は、仏壇よりも、また床の間に神祀るようになったのよりも先であったと考えられる。祖先祭りを除いた家庭行事には、たとえば出産、葬礼、幸福祈願、婚礼などがあるが、その場合には、必ず火神を拝するのを先にして、その後に神や仏前を拝する順序となっている。神は祀ってなくとも火神は必ず祀っていたのである。

火神の本体を、太陽の化身とする説がある。しかし、そうではなくて、むしろ、食物はニライ・カナイの神による恵みとする信仰と、それに火の霊力が加わることによって初めて食物は人間が食べられるようになるとの信仰から、その両方を一つに融合せしめた、いわば「火食の神」ではながるうかと思われる。」Ｐ２５０

宮古に生まれ育った恵美子にとっては、小さい時からの生活習慣のようなものだ。私はそれを眺めている感じだ。

藪薩御嶽と「ヤブサ」

（２０１０年5月２２日）

私の家の近くに、藪薩御嶽があるが、それは九州各地の「ヤブサ」とつながるものだろう、との提起が、谷川健一編『日琉交易の黎明』（２００８年森話社）の江口司「南島交易とヤブサ」論文で行われている。

そのヤブサは、「古墓」「祖霊のいるところ」「寄り憑く霊魂」といったこととかかわるという説を紹介している。

これらの指摘は、神々、祈りの問題も、歴史的な交流交易、移動移住のなかで、とらえなくてならないことを示している。

藪薩御嶽の下にある、アマミキヨ上陸場所としての浜川御嶽とヤハラヅカサ、そして、その先のサンゴ礁の切れ目の水路を考えると、ますますその必要が浮き上がってくる。

私たちはどのような神々を継承し、どのような神々を作り出していくのだろうか。それを考える上で、示唆に富んでいる。

母たちの神――比嘉康雄展

（２０１１年1月７日）

７日、久しぶりに県立博物館・美術館に赴く。

比嘉康雄さんは、久高島イザイホーの写真で著名な方だが、今回の展示は、それ以外の各地の写真も多い。

スピリチュアリティの世界、カミンチュであり母である女性たちの世界、神々≒自然と人々との世界、などが描かれる。

二つのことを思った。

モノクロ写真が示す『荘厳さ』だが、もしカラーだったら、ということ。カラーだったら、白黒に加えて、青≒深緑の色がつくだろう。モノクロがもつ荘厳さと同時に「重々しさ」に、青≒深緑の色がついたらどうなるのだろう。

神の世界は、荘厳さ・「重々しさ」にふさわしいともいえようが、海・森を中心にした自然の清らさ・暖かさなどが加わるとどうなるか。母の世界についても同じような推理をしていくとどうなるか。

二つ目。被写体の世界は、歴史的蓄積が深い共同体の世界でもある。そうした共同体の崩壊の進行の中で、こうした「記録写真」の意味が深いというだけのことではない。こうした世界を求める動きの広がりもある。

そうした動きには、歴史的な共同体とは切れた個人の世界として存在する例が多い。個人として、こうした神々との共存・交流の世界とかかわろうとする人は、共同体との関係、神々との交流における人間相互の関係をどうとらえるのだろうか。

もしかすると、これは被写体の「母」たちにも、すでに存在しているのかもしれない。共同体の祭りであると同時に、そこには個人がすでに浮かび上がっている光景がかいまみられる。

ユタ史研究への期待　浜崎盛康編著「ユタとスピリチュアルケア――沖縄の民間信仰とスピリチュアルな現実をめぐって――」ボーダーインク 2011 年

（２０１２年3月１４日）

ユタが発信するものについての分析研究が必要である。スピリチュアルケアの形を取りながらも、非自覚的だろうが、その時代のなかのあるものを反映し、それにもとづいて発信している。

たとえば１５世紀の国家統一・宗教支配整備の時代、１８世紀の王府支配整備の時代、１９世紀の支配のありようの変動の時代、さらに２０世紀の戦争に向かう時代、ユタは、それぞれの時代背景にもとづいて異なるものを発信し、異なる役割を発しているはずだ。権力によるユタ抑圧が古くからしばしば行われてきたが、それは何を意味するか。あるいは、権力のよって間接的だとしても支援されたことはないのだろうか。
現代ではそうしたものは、どうなっているのだろうか。

いずれにしても、超歴史的・超社会的なメッセージを発しているわけではない。

ユタになる前の生活、ユタになってからの現在の生活、ユタの先輩からの教えられたことが、ユタの「はんじ」には投影しているはずだ。そして、ユタとハンジを受ける人との間の共有する世界があるはずだ。だから、有効なのだ。近年では、ここ数十年来のユタとは異なって、現代社会を反映した人が、ユタを名乗らないで、その役割を果たしている例もある。

そう言う意味で、ユタの社会的分析、歴史的分析が必要だろう。また、ユタを支持する社会的動向にはどのようなものがあるのかをも見据える必要があろう。たとえば、家系をめぐっての禁忌を強調するユタは、何を意味するのだろうか。

本書では、この問題に直接的には触れていない。しかし、ユタがかかわる仏教の守護神の歴史についての次のような記述がある。

「按司時代、諸按司によって自らの地域を守護してもらうための祖先神（霊）信仰は、尚真王による国家守護のための守護神（仏）信仰へと変遷し、さらに、近代になると、その守護神（仏）信仰が民衆化するという変遷を遂げ、現代におけるユタの十二ケ所巡りに見られるような守護神（仏）信仰へと変遷したと考えることができるのではないでしょうか。」P216-7

「十二支寺の１つであるＤ寺では、ユタを自らの寺の信徒として受け入れていると言われています。

「沖縄の仏教受容とシャーマン的職能者」（稲福みき子）における調査報告によると、一時期は約４００人ものユタが花園会というＤ寺も属する信徒組織の会員として受け入れられていたようです。

しかし、その後,（１９９７年時点）は、２００人ほどと減少したそうですが、その７割がユタであるようです。

このことは、従来のユタ理解という観点と比較すると、重要な意味をもつと言えます。つまり、従来、ユタはシャーマニズムに属し、体系化された教義や組織化された集団を持たない存在と理解されてきました。しかし、上に見た現象が起こっているということは、もはや、ユタに関する従来の考え方では、十分ではないことを示しています。」P114

こうしたユタと仏教とのかかわりは留意すべきことだろう。こうした研究を含め、本格的なユタ社会史の研究展開を期待したい。

風俗改良運動　ユタ　洗骨　改姓　「沖縄県史近代」を読む　（２０１２年3月１１日）

明治後半期に盛んに行われた「風俗改良運動」は、昭和戦前期には、次のようにより強力に行われた。

「風俗改良のやり玉にあげられたのは、ユタ、墓、沖縄芝居、モアシビー（毛遊び）、姓名、豚便所など数多くあった。」Ｐ６０２

具体例として、三つの記述を紹介しておこう。

「一九三八年（昭和十三）の『月刊沖縄』には特高課長の話として、ユタ一人に賞金二円の懸賞をかけて密告を奨励し、時には一挙に二百数十名を検挙するなどの弾圧がおこなわれた、とある。

しかし、そのような強権をもってしても夫や息子を失った女性たちの心の中まで取り締まることは不可能である。戦争末期まで県当局に隠れてユタを買う習慣は続いて、遺家族のカウンセラーの役割をはたした。建前では英霊顕彰の公的儀式に従いながら、本音ではユタに頼らざるを得ないところに精動運動の限界があった。このようにユタが“暗躍”したことは、沖縄民衆のささやかな抵抗というべきであろう。」P603

「具体的には、洗骨の風習を廃止して本土のように埋葬にあらためること、新規に墓を建てるときは地域を指定して、墓標式のものは大きさを一坪以内に制限すること、などと改善事項を通達した。

墓地改良の真のねらいは、物資不足のもとでの経済的側面と、精動運動の一環としての敬神思想の発揚という両面があった。当時、県は皇紀二六〇〇年記念事業として護国神社を創建し、市町村にも一村一社運動を奨励していた。神社や鳥居に象徴される国家神道の普及は、国民の精神統合の面からも、戦没兵士の「名誉の戦死」を顕彰する意味からも重視された。このような「ヤマト式」の英霊思想（靖国思想）に反するものがユタと洗骨の風習であったわけで、県当局は警察を動かしてユタ弾圧を行い、巨大墓の撤去を強行しようとしたのである。」P604

「本土からみて難解で珍奇な姓をもつがゆえに、最も不便を感じるのは軍隊や移民や出稼ぎに行った本人たちであって、これは精動運動などのように国策として上から通達される以前から、沖縄内部からの要求として改姓運動の動きがあった。一九三六年（昭和十一）三月に開催された沖縄県初等教育研究会で、「難解な姓名呼称を統一すること」を沖縄県教育会へ建議する件が決議されたという新聞記事がみえる。」p604-5

これら全体を総括して、次のように評価されている。

「標準語励行運動も風俗改良運動、姓名改正運動も本来は明治以来の同化政策・皇民化教育の流れをくむものであったが、「挙国一致・一億一心」のスローガンのもとで進められた戦争協力への国策運動としてより強制力をもって推進されたのである。」Ｐ６０５

いずれも、沖縄文化に歴史的に深くかかわるものであり、それらの否定抑圧は、沖縄人アイデンティティに「劣等意識」「被差別意識」をもたらした。

そして、外からの否定抑圧だけでなく、内側の呼応する動きのなかで、それらが体質化するにまで及ぶ様相を

見せ、長期にわたって蓄積残存させられた。

それゆえに、それらを肯定的に受けとめ、多様な文化の共存協同へと転化させていく課題は困難を極め、非常に長い時間をかけるものとなった。現在なお大きな課題となっているものも多い。

無論、それらは、歴史が進行している以上、「風俗改良運動」以前のものへと戻れ、というわけにはいかない面を持っている。沖縄的なものにはいいものがあるのだ、という視点にたって、新たに創造するというありようを強く持つものにならざるを得ないだろう。

そして、それらの芽が、すでにこの風俗改良運動の最中にも存在していたことを見落としてはならないだろう。

門中　家　ユタ　儒教　「沖縄法律事情」を読む　（２０１２年2月２９日）

著者のお一人から贈呈された本で、正式タイトルは、新城将孝・仲地博・小西吉呂・春田吉備彦編「法学　沖縄法律事情 PartⅢ」琉球新報社 2011 年、である。

沖縄大学の法学担当教員たちが共同で執筆し、学生向けの教科書にも使われている本だ。とはいえ、沖縄のナマの問題を各執筆者の専門的アプローチからわかりやすく扱っているので、門外漢の私にも有益な章が多い。

注目したいくつかの章について紹介・コメントしていこう。

まず、「第 2 講　沖純―無縁社会と家族―」だ。

「門中とは、始祖を共通にする父系の親族集団であり、単系的な血縁関係を重視するものとされます。そして、この門中は家譜成立以降、男系血禄による家の継承が進められてきたようです。具体的に、特に、王府の終焉後においては、ユタ（巫女）による教条化、硬直した家系継承が肥大化したようです。そして、４つのタブーは犯してはならないものとされるようになってきたようです。農村では、地割制が行われていましたが、地割制の下では、百姓は百姓地を耕作し、村の土地（共有地）に縛られていました。婚姻は一般的に村内、間切に限られ、親族関係は村落共同体とほぼ重なっていたといわれます。親族関係と労働における協力関係とは不可分にあり、祭祀共同体でもあり、親族関係や親戚付き合いも共同体生活と一体であったといわれます。地割制は明治政府の土地整備事業（1899（明治 32）年～1903（明治 36）年）により廃止され、沖縄でも、近代的土地制度としての土地の私有化が進められました。これは、家産が戸主のものとなることを意味します。そして、門中制度の地方農村までの浸透は極めて新しく、明治以降のことのようです。」Ｐ３６～７

士族における門中と結びついた『家』制度の整備は、近世期の家譜成立期までさかのぼることができようが、地方農村の農民たちにあっては、土地整理によって、土地が『家』所有となる明治後期以降に本格化することになる。地方役人層の場合は、それよりやや早くなるといえよう。

ここで、「王府の終焉後」、王府が果たしてきた「家の継承」のありようの判断を、なぜユタが行うようになったのか、という問いが成立する。しかも、旧士族だけでなく、一般民衆をも対象にして、である。かつ、王府時代、ユタはしばしば王府によって抑圧されてきたにもかかわらず、にである。では、王府時代、ユタはどういう役割を果たしていたのか。このあたりのことについて知りたいものだ。

これらは、王府の公認イデオロギーとなる朱子学を中心とする儒教の浸透ともかかわるが、その点にかかわっ

ては、波平エリ子の次の指摘が紹介されている。

「結婚・離婚・再婚の問題にしろ、嫡子出生の責務にしろ、封建的近世のイメージからすれば、沖縄は随分とルーズである。否、儒教の倫理観の希薄な世界、封建道徳の希薄な世界なのである。 17 世紀末～18 世紀初頭、程順則や蔡温がやっきとなって儒教を宣伝したせいで、家系継承など、前代以上に長子＝嫡子の存在が強固となる」P36

その儒教も、まずは士族、そして、近世末期に徐々に地方役人層へと浸透するが、儒教思想が確固たる中心位置を占めたといえるだろうか。それまで継承してきた思想に、薩摩および中国とのかかわりで輸入されてきた朱子学を軸とする儒教が合わさって、ないしは並存する形で、士族に受けとめられていったのだろうか。地方役人層は、その士族を追いかけていったようだ。

一般民衆における儒教とのかかわりは、近世期では希薄であり、明治期、しかも小学校が普及一般化し、「修身」思想が本格的に注入されて以降といえよう。だが、実際にはどれほど浸透したのだろうか。人々の精神生活を「主導」したかどうかというと、大変限定的なものであろう。

この問題を子ども・親子関係についていえば、朱子学と連なる「修身」思想、祖先崇拝や自然崇拝を軸とする長い歴史を持つもの、また、アリエスが「子どもの発見」として描いた近代子ども像とが、どうからんできたのだろうか、という問いにも結び付く。

※　最後のものは、てぃんさぐぬ花の歌詞「わん生ちぇる親やわんどぅ目当て」にもあらわれている。詳細は、拙著「沖縄県の教育史」P101 思文閣 1991 年を参照していただきたい。